

堀之内学園

東京立正の100年

The 100th Anniversary of TOKYO RISSHO



東京立正百周年2026

堀之内学園

東京立正の100年

The 100th Anniversary of TOKYO RISSHO



4 学校法人堀之内学園教育綱領

6 東京立正中学高等学校校歌

8 東京立正短期大学校歌

11 はじめに

12 理事長あいさつ

14 常務理事あいさつ

16 短期大学学長あいさつ

18 中学・高等学校校長あいさつ

20 保育園園長あいさつ

23 I 創立の時代

24 近代女子教育のあゆみ

27 堀之内学園・東京立正の設置者
堀之内妙法寺の歴史と教育

31 立正高女設立準備の胎動

45 「創立十五年の回想」

50 「創立十五年の秘話」

57 II 東京立正中学・高等学校の誕生とあゆみ

58 東京立正中学・高等学校100年のあゆみ

69 現在の諸活動について

107 III 東京立正短期大学の誕生とあゆみ

108 東京立正短期大学の誕生

114 短期大学の改組と現代コミュニケーション学科

129 IV 東京立正保育園の誕生とあゆみ

130 子ども達の輝く明日の為に

135 V 建学の精神

- 136 建学の精神と校名「立正」
- 140 教育理念としての「生命の尊重、慈悲・平和」と教育目的
- 142 教育目標と保育目標
- 143 建学の精神に基づく学園行事

145 VI 堀之内の思い出

- 146 東京立正短期大学のみなさん
- 152 東京立正中学・高等学校のみなさん
 - (1) 歴代校長先生
 - (2) お世話になった先生
 - (3) 諸団体の方々
- 184 東京立正保育園のみなさん
 - (1) 保護者のみなさん
 - (2) 職員のみなさん

191 VII 資料編

- 192 堀之内学園史・日本と世界の動き
- 210 歴代理事長・歴代学長
- 211 歴代校長・歴代園長
- 212 中学・高等学校教職員一覧
- 218 短期大学教職員一覧
- 220 学生生徒数グラフ

224 編集後記

225 「堀之内学園 東京立正の100年」編集委員会



東京立正百周年2026

学校法人堀之内学園 教育綱領

1. 建学の精神

本学園の創立者である堀之内妙法寺第三十世岡田日歸上人は、日蓮聖人六百五十遠忌にあたり、境内に五重塔を建てようという話が持ち上がったとき、五重塔を建てるよりも「人の心のうちに塔を建てよう」と提唱され、次代をになう青少年を育てる母親を育成するために立正高等女学校を設立された。こうした経緯から、本学園では「人の心のうちに塔を建てよう」を建学の精神とする。

2. 教育目的

本学園は、法華經の精神に基礎をおく「生命の尊重、慈悲・平和」を教育・保育理念とする。さらには日本国憲法、教育基本法および児童福祉法を柱として全人格教育を行い、現代に有為な人間を育成することを目的とする。

3. 教育組織

本学園の教育は、中学校、高等学校、短期大学、保育園を設置してこれを行う。

4. 学生および生徒の教育指導

本学園の教育指導は、社会の平安と人間の幸福を樹立する「立正安国」の精神に基礎を置く。学生生徒は真理を探究し、正義を愛し、心身ともに健康で個性豊かな人格の形成をはかり、さらに平和な世界の建設に貢献し得る教養と技能とを身につけることを目標とする。

5. 学生および生徒の生活指導

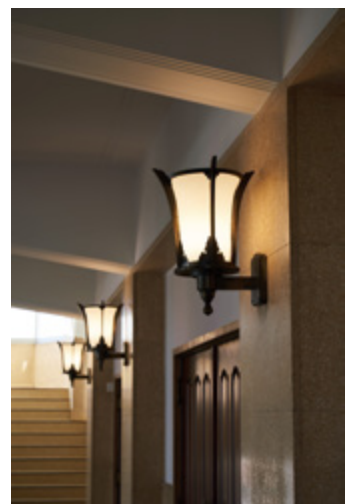
本学園の生活指導は、報恩感謝のこころをはぐくみ、いかなる困難にもくじけることなく目標の実現に向かって志をつらぬき、明るく、淨く、前向きに生き、人格の向上に努めることに基礎を置く。学生・生徒の指導にあたっては、人間相互の敬愛と感謝の心を養い、協力と奉仕による行動の実践をはかる。これによって、現代に有為な人間としての好ましい基本態度と行動様式を身につけることを目標とする。この目標の達成に向けて、次に掲げる「三つの誓い」を提唱し、これにもとづいて指導していく。

三つの誓い（努力目標）

- 一、どんな困難にもくじけず、自分を高め、心をみがき、個性を伸ばすために、すすんで勉学の道に励みます。
- 一、喜びも悩みも分かちあい、学びあい、助け合い、信じあい、明るく楽しい学園生活をおくるよう努めます。
- 一、命を尊び、自然の恵みに感謝し、すべての人の幸せと安らかで平和な社会の実現に尽くします。

6. 保育園の保育目標

本学園の保育園は、「生命の尊重、慈悲・平和」の理念の下、“命の大切さを知り、からだを育て気力の充実した子ども”、“生活する力を育て、自己コントロールができる子ども”、“体験を言葉に換える創造力、表現力が豊かな子ども”の育成を保育目標とし、その達成のために保護者とともに支援する。





Photo©吉村昌也

校歌

東京立正中学高等学校

♩ = 120

1. あ お げ ば た か し ふ ー じ の ー や ま
2. あ お げ ば た か し ふ ー じ の ー や ま

の ぞ め ば ひ ろ し ゐ ー さ し の の
の ぞ め ば ひ ろ し ゐ ー さ し の の

し ぜ ん の め ぐ み し ー の な ー さ け
か お り ゆ か し き た ー ち ば ー な の

ま な ぶ り も た の あ し は ー た ー う れ っ
ひ な ぶ り も た の あ し は ー た ー う れ っ

ひ る き こ こ ろ を や し な い ー て
と も と こ こ ろ を や し な い ー て

1. た か き り そ ー に す ー す ま な ん
す す び わ ら ー の さ ー ち お お ん
2. し

作詞：高島平三郎

作曲：小松清

(1) 仰げば高し 富士の山
望めば広し 武蔵の野
自然のめぐみ 師の情け
学ぶも楽し はたうれし
広き心を 養いて
高き理想に 進まん

(2) 仰げば高し 富士の山
望めば広し 武蔵の野
香りゆかしき 橘の
聖の御跡 したいつつ
友と手を取り 諸共に
進む我等の 幸多し

校歌

東京立正短期大学

Andante

mf

mf

mf

mf

f

ff

poco rit

poco rit

作詞：谷川俊太郎

作曲：服部克久

- (1) ゴータマの静かな顔が
藤色の空気にゆらぐ
せめぎあう歴史つらぬき
真実の言葉はくり返し甦える
この都市のざわめきのうちにも

- (2) ロータスのさやかな白が
幻の川面にひらく
ほゝえみの韌さ信じて
限らない未来を
ともどもに夢見よう
この今日の混沌のうちにも
ああ東京立正短期大学



東京立正百周年2026

堀之内学園
東京立正の100年



次代を担う若者を育成して100年

学校法人堀之内学園 理事長

山田 教周

立正高等女学校は昭和元（1926）年12月28日文部省より設立
が許可され翌昭和2（1927）年4月28日、日蓮聖人が法華經御
題目を掲げ世に広めようとされた立教開宗の日を期し、本学園
の創立記念日とし開校式が挙行されております。その日より本
年創立100周年を迎え、今では短期大学・中学高等学校そして
保育園を有し女子教育の場から共学への道を辿って参りました。

創立された昭和の始め日蓮宗門では日蓮大聖人の御入滅650
遠忌の御正當をひかえ、堀之内妙法寺ではその記念事業として
五重塔を建立しようとする計画があったようです。しかし当時
の山主であられた岡田日歸上人は日蓮聖人が法華經を釈尊の真
のみ教ととらえ身命をも惜しまず広めようとされたその法華經
の精神を更に当時の社会に伝える為にと考えられ、教育に着目
をされました。

「今最も必要なことは、社会を担う人材の教育であり、次代
を支える子供等を生み育てるのは母親であるから、母となる女
子の教育が大切である。五重塔を建てる事も大事だが教育によ
り心の内に塔を建てお釈迦さまの精神を宿して欲しい」と願わ
れたのです。このお考えに基づき堀之内学園が設立されました。

創立当時は関東大震災の被災復興、その影響が色濃く残った
時代でありました。又わが国の時勢は風雲急を告げ次第に戦争
への道を歩んでゆきます。先の大戦では全土焦土と化しましたが
奇跡的にわが国は復興を遂げる事が出来ました。学園もこの
様な時代を経て幾度もの困難があったと思いますが、多くのご
縁ある方々のご支援・御協力を得て今日を迎える事が出来たと
感謝の念が絶えません。

戦後80年となりますが日本は平和国家を取り戻し 学園も教
育を再会して「人の内に塔を建てよう」の建学の精神「生命の
尊重・慈悲・平和」の教育理念を掲げ、法華經精神のもと多く
の若者に教育を授け、次社会へと送り出して参りました。

只世界の状況に目を向けますと気候変動などによる深刻な自
然災害が地球各地で頻発する中、人類が自ら人々を苦しめ悲し

ませる事柄が多く、多くの国々で見られます。法華經に登場する常不輕菩薩はこの世に生をうけた者は皆仏になる仏種を宿した尊い人であるとあらゆる人々に合掌し続けられました。その尊い生命を授けられた人々の多くはいつの時代でも皆平和で幸福そして穏やかに暮し、その生活を全うしたいと願っているものと思います。その様な生活を適えるにはやはり次代を担う若者の教育が大切になります。わが国では少子化が進み深刻な社会問題になりつつありますが、人々が起こすあらゆる事態を克服して行くには智恵を養う必要があります。殊に教育の現場では学力の向上と共に情操を養い心豊かな立派な行いが出来る若者を育て行く事が大切であると感じます。

本学園では「生命の尊重・慈悲・平和」を建学理念とし、女子教育に始まり、若者の育成に携わって参りました。此の度創立100周年を迎える運びとなり、その学園の歩みを記念事業の一つとし「堀之内学園創立100周年記念誌」を編纂いたし皆様にご高覧頂きたく存じます。今日に至る学園の歩みをご理解下さりたく、又、学園ではこの歴史を踏まえて心を新たに更により教育・保育を施す事が出来る学舎にと努めて行きたく存じます。皆様におかれましては何卒ご支援賜り、堀之内学園を末長くお見守り下されば幸甚でございます。



岡田日歸上人のご尽力と堀之内学園

学校法人堀之内学園 常務理事

北川 前肇

鎌倉時代の日蓮聖人（1222－82）が、今日の大田区池上の地において、その生涯を閉じられたことを追慕し、鴻恩に感謝する記念事業が、750遠忌を迎える今日まで営まれてきました。

堀之内学園の創始者である岡田日歸上人（1864－1931）は、幕末の元治元（1864）年6月に港区芝白金の地に誕生され、6歳のとき、大田区洗足池の御松庵（妙福寺）の住職であった樋口教實上人を師範として出家されました。その後、当時の日蓮宗の教育機関である日蓮宗大檀林の中教院（池上本門寺開設）に学び、日蓮宗の教師として資格を得られ、明治14（1881）年2月、18歳のとき、世田谷区大蔵の妙法寺の住職に就任されることになります。

明治14年は、日蓮聖人御入滅600遠忌に当たり、日蓮宗総本山身延山久遠寺では、明治8（1875）年の大火後、法主吉川日鑑上人等の御尽力のもと棲神閣（祖師堂）が落慶し、遠忌法要が営まれました。また身近かな堀之内妙法寺で記念法要が執行され、日歸上人御出家の御松庵においても、妙法寺第28世村松日澄上人を導師として法要が厳修されたのです。若き日歸上人も、山主上人に随行されました。

その後、48歳を迎えられた日歸上人は、武見日恕上人の跡を受けて、明治44（1911）年7月、妙法寺30世の住職とされます。日蓮宗の教育機関も、明治初期の学問所（飯高檀林等）は閉所となり、近代化に対応すべく、港区二本榎に小教院から大教院、さらに日蓮宗大檀林、日蓮宗大学林、日蓮宗大学へと改変し、校地も品川区大崎へと移転し、大正時代を迎えることになります。

大正7（1918）年12月、日本政府は「大学令」を發布し、日本の私立大学の改革を求めることになります。宗門の日蓮宗大学林も変革すべく対応し、日歸上人は大正12年4月4日、日蓮宗宗務総監に着任され、日蓮宗大学設立基金壱百万人会の理事長として、その改革に当たられたのです。

大正13（1924）年5月17日、「日蓮宗大学」は「立正大学」

と改称し出発することになります。同年6月15日には、創立の記念式典が挙行され、一昨年、創立100周年を迎えました。創立時の立正大学学長は、風間随学先生、文学部長は清水龍山先生、予科部長は馬田行啓先生、そして中学部教頭が浅井要麟先生です。文学部の1学部に5学科と予科と中学部が併設されたのです。

日歸上人は、大正14（1925）年10月5日、宗務総監を退かれるとともに、日蓮聖人650遠忌の記念事業として、女子高等教育機関設立を目指され、ついに、昭和元（1926）年12月28日、文部省から立正高等女学校設置の許可が下されたのです。そして、高等女学校の最初の卒業生を送られたのち、昭和6（1931）年3月8日、日歸上人は身延山第82世に晋山され、身延山において、春季（4月7日～13日）、夏季（5月1日～15日）、秋季（10月6日～15日）の3回にわたる日蓮聖人650遠忌の大導師を勤められたのです。

このように、日歸上人のご功績は堀之内学園の創立にとどまるだけでなく、立正大学創立にも深く寄与され、身延山法主として、日蓮聖人御遠忌法要をつとめられていることを知るのです。

いま、堀之内学園は、日歸上人の御尽力のもと、創立100周年を迎えるのです。



建学の精神を守って

東京立正短期大学 学長

清水 海隆

学校法人堀之内学園創立100周年を迎えるにあたり、東京立正短期大学を代表して、一言ご挨拶申し上げます。

ご案内の通り、堀之内学園は「やくよけ祖師」として有名な東都の名刹日圓山妙法寺（堀之内妙法寺）の第30代住職岡田日歸上人の発願にはじまり、大正15（1926）年12月に国より「立正高等女学校」の設立認可を受け、翌年昭和2（1927）年4月28日に創立記念式典を挙げて、その輝かしい歴史の幕を開けました。爾来100年、昭和初期から15年にわたる戦乱の時期、さらにそれに引き続く終戦直後の混乱を極めた時期に代表される激動の昭和史の中であって、「人の心の中に塔を建てよう」という創立者岡田日歸上人の思いを継承して今日に至ることができたことは、時代時代の学園関係者のご努力と、学園を取り巻くステークホルダーの皆様のご支援なくしては達成できなかったことと、先人各位に篤く感謝申し上げる次第です。

そのような先人のご努力の中、私ども東京立正短期大学は、堀之内学園創設より40年ののち、昭和41（1966）年1月に東京立正女子短期大学として設立認可を受けました。当初は英米語学科として秘書・教職・教養の3コースを設置する女子短期大学としてスタートしました。まさに高度経済成長の真ただ中の誕生であり、女子の短大進学率が上昇する中での東京立正女子短期大学の創立であったのです。それから60年、東京立正短期大学は学校法人堀之内学園創立100周年と同時に、短大創立60周年を迎えることができました。この間、初代学長藤井教詮先生、第2代岩本経丸先生、第3代庄司寿完先生、第4代石川教統先生、第5代藤田教忠先生、第6代藤井教正先生、第7代坂輪宣教先生、第8代工藤教和先生、第9代北川前肇先生の歴代学長先生には、本学の先頭に立ってご指導いただきました。その間、本学では、学科内に観光コースを増設し、また教養コースを英米文化コースに、秘書コースをビジネス・情報コースに、さらには学科名称を英語コミュニケーション学科に改称する等の時代に応じた短大改善策を取りつつ、男女共学の東京立

正短期大学現代コミュニケーション学科（現代コミュニケーション専攻・幼児教育専攻、専攻科幼児教育専攻）へ改組し、創立60周年の今を迎えております。ひとえに歴代学長先生のご指導のおかげと感謝いたしております。

さて、現在は高等教育の厳冬期・氷河期とされ、特に修学期間2か年の短期大学を取り巻く状況は実に厳しいものがあります。その一方で、私どもは学園においては100年間にわたり創立者岡田日歸先生の建学の精神を保ってまいりました。この建学の精神を引き続きしっかりと守りつつ、今後の短期大学教育を担ってまいりたいと存じます。関係各位の一層のご支援をお願いする次第です。

学校法人堀之内学園創立100周年を寿ぎ、ご挨拶とさせていただきます。



創立の志を忘れず、次の100年に向けて

東京立正中学高等学校 校長
梅沢 辰也

創立100周年を迎えるにあたり、創立者である堀之内妙法寺30世山主岡田日歸上人をはじめ、学園経営に携われた歴代の理事長先生、そして学園設立の志を達成すべく教育の充実と発展に全精力を注いでこられた歴代の校長先生及び教職員の皆様に敬意と感謝の誠をささげます。また本学園をご支援ご後援いただいている関係者の皆様と共にこの日を迎えられましたこと心よりお喜び申し上げます。

第一次世界大戦後、大正デモクラシーの時代は女性の進学希望が強くなり、女子教育の展開・女子高等女学校の新設と振興の気運が高まっていました。この時代の要望も背景にあり、日蓮聖人第650遠忌の記念事業として「五重塔を建てるよりも、学校をつくって人間の塔を建てよう」と決意して女子校の設立を目指すこととなりました。そして、昭和元（1926）年に文科省より設立許可を得て、翌年に立正高等女学校として開校いたしました。初代校長には高島平三郎先生をお迎えしました。高島先生は心理学者、教育者として知られていました。更に、法華経と日蓮聖人の教えにも造詣の深い信仰者でもありました。高島先生が提唱した教育方針は以下の3つでした。1.宗教心の養成に努める。2.人格教育をめざす。3.体育と知育教育を大事にする。教育視察で海外にも行かれ、校長室では毎日英字新聞を読んでいらっしゃるような校長先生だったと伺っています。

昭和初期には、満州事変・国際連盟脱退・2.26事件・日中戦争があり昭和16年には太平洋戦争に突入しました。昭和20年には東京大空襲、広島・長崎への原爆投下を受け8月10日に終戦を迎えましたが、東京大空襲の際には岡田日歸記念講堂を唯一残し、一夜のうちに学校は灰となってしまいました。生きていくのが精一杯という時に、学校を復活させるということにどれほどのご苦労があったかは想像もできません。当時の関係者の皆様の教育にかける情熱と献身は今日まで受け継がれ、創立100周年を迎えることができたのです。

平成14（2002）年には中高の男女共学を開始し現在に至って

います。長年女子教育を実践してきた学校ですから、共学化に踏み切るにはそれ相当の思いや覚悟があったことと想像できます。生徒数に関してもベビーブームの影響もあっての増加や少子化に伴う生徒獲得の困難など、その度に私学らしく独自の取り組みで乗り越えてきたのです。今まであるものを尊重しつつも、共学化や高校イノベーションコースの新設、先陣を切ってICTを教育の場に取り入れたり、英語教育の充実と海外研修の拡充等をしてきました。新しいことを始めるには相当のエネルギーを要しますが、教職員の総力で対応してきたのです。

現在の本校は、激変する日本と世界という状況を踏まえて、日本のことを自分事と考えることのできる若者の育成に注力しています。そのためにも海外に出ていく機会を更に増やし、他県の学校との連携を始めたり、政治家とのディスカッションの場を設ける等を実践しています。また地元との交流を学校全体で後押しし、学外の方々との接点からの学びを構築しています。自分だけが幸せになろうとするのではなく、社会全体の幸せの中に個の幸せを作っていくような人となってほしいのです。

SNSの進化や時代の変化などを背景とし教育現場の課題は新たな局面を迎えています。しかしながら、設立時の志を忘れることなく、生徒一人一人に向き合っていく教育をこれからも本校の宝とし、次の百年に向けてバトンを繋いでいけるよう心より祈念しております。



こどもを真ん中に保育者と共に育つ

東京立正保育園 園長

西 貴子

この度、学校法人堀之内学園が創立100周年という輝かしい節目を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。百年という長い年月にわたり、教育の場を通じて多くの人材を育成され、地域社会に多大なる貢献をなさってこられた学園の歴史に、心からの敬意と感謝を申し上げます。

私ども、東京立正保育園は、学園の一員として平成30（2018）年に開園し本年で8年目を迎え、まだまだ若い園ではございます。しかし学園内の短期大学や中学校・高等学校の皆様、そして母体である妙法寺様に支えられ、あたたかく見守られながら、「こどもを真ん中に、保護者と共に育つ保育園でありたい」との思いを胸に、日々の保育に努め、一步一步着実に歩んできたことができました。この8年間の歩みの中で、本当に多くの方々にあたたかいご理解とご協力をいただいていたことに、改めて深く御礼申し上げます。

近年は、時代の変化や保護者のニーズに応えるべく、園のICT化にも取り組んでいます。具体的には、連絡帳やお知らせの電子化により、保護者との円滑なコミュニケーションを実現し、日々の保育の質の向上に繋げています。また、サブスクリプションサービスの導入や、園内の安全性を高めるための見守りカメラの設置など、子どもたちの安心・安全を第一に考えた環境づくりにも力を入れております。

保育内容においても、子どもたちの心と体の健やかな成長を願い、恵まれた自然環境を生かした保育、リズム運動、造形活動など様々な経験を通して、子どもたちの可能性を存分に伸ばし、友達と協力する意味や素晴らしさを育んでいます。「食育」には力を入れ、食を通して命の大切さを学び、感謝の気持ちを育てることは、まさに本学園の理念「生命の尊重・慈悲・平和」と深く結びつくものであり、今後も大切にしていきたいと考えております。

また、地域子育て支援の一環として、様々な取り組みも行っています。地域の皆様との繋がりを大切にし、「地域向けの通

信の発行」や、妙法寺様の一室をお借りしての「出前保育」、老人ホームを訪問して「ご高齢者の方々との交流」さらには小中高生による「保育園体験」の受け入れなど、多世代との関わりを通して、地域全体で子どもたちを育てていく環境づくりに努めております。保育園が「地域の子育ての拠点」としての役割を果たすことの大切さを、日々の活動の中で強く実感しております。

子どもたちのあふれる笑顔、友達を思いやる優しさ、何事にも前向きに取り組む姿勢、そして日々見せてくれる成長の一つひとは、私たち職員にとって何よりの励みであり、希望そのものです。その小さな成長の積み重ねが、やがて未来を担う大きな力になることを信じ、これからも保護者や地域の皆様と心をひとつにして、保育に取り組んでまいります。

創立100周年という節目にあたり、このようにして同じ学園の一員として立ち会えることを、心より光栄に思いますとともに、これからも堀之内学園が、教育の分野でさらに発展し、輝かしい未来へと歩みを進めていかれますことを、心よりお祈り申し上げます。



理事会



評議員会

I 創立の時代

堀之内学園
東京立正の100年

The 100th Anniversary of TOKYO RISSHO

①女子教育の幕開け

わが国の本格的な女子教育は、明治維新から始まった。政府は、文明開化をとなえ、欧米諸国を手本に、新しい国づくりをめざした。国づくりのためには、人材の養成が大事であった。人材の養成は、教育の力による。子弟の教育には、女子教育を必要とした。

「子弟の教育は、母親の賢愚によって決まる。女子教育こそ、一切の教育の基礎である」

政府は、この方針にもとづき、「良妻賢母」の育成をめざす女子教育を進めた。明治4（1871）年、津田梅子ら5名の少女が、初の女子留学生としてアメリカに渡ったのは、女子教育への第一歩であった。

翌5（1872）年、政府は「学制」を發布した。この「学制」によって教育は国民一般に開放された。女子も、男子と同じように教育を受け学問を修められるようになった。

この動きに応じて、明治8（1875）年に、東京女子師範学校が開校し、女子教員の養成をはかった。同12（1879）年には、男女別学制がしかれ、私立女学校が次々に設立された。

巖本善治の明治女学校、津田梅子の女子英学塾、吉岡弥生の



東京女医学校、横井久子・佐藤志津の女子美術学校、成瀬仁蔵の日本女子大学校などである。

これらの私立女学校は“賢い女性”の教育をめざしたが、他方では、女子には読み書き、算術、裁縫など家事に必要な実用教育が必要だとの声も強かった。

明治時代の女子教育には、良妻賢母の養成か女子の人格、能力の向上か、二つの流れがあった。

しかし、日清戦争、日露戦争があり、富国強兵政策が展開されるプロセスの中で、女子の人格教育は次第に後退し、良妻賢母型教育が主流を占めた。

高等女学校では、家事、裁縫、手芸の学科を設け、実用科目が重んじられた。英語、音楽、図画などは、随意科（選択）とされた。

②高まる女子教育

第1次世界大戦後、大正デモクラシーの時代がおとづれた。平塚らいてうを中心とする「青鞥」は、女性の才能の発揮と男女平等にもとづく自由な女子教育の促進、良妻賢母型教育の否定をかかげた。

婦人運動が高まり、婦人参政権の獲得と共に「女子に対する高等教育の開放」が訴えられ、普通教育よりも実業教育を重視すべきだとの声も高まった。

さらに、女子の知・情・意の向上をはかり、女性がその地位を自覚するよう善導することが女子教育の目的だ、という主張もなされた。

この時勢を背景に、長野県の新教育運動がうまれた。また、初のミッション系女子大学の東京女子大学、自由主義教育を目標とする羽仁もと子の自由学園、芸術教育運動を進める西村伊作の文化学院などが設立された。

女子の進学熱は、急速に高まった。明治36（1903）年には女学校卒業者は2,600名だったのに、大正4（1915）年には126,000名、同15（＝昭和元、1926）年には299,000名に達した。

③女学校の新設と振興

女子が数多く進学するにつれて、「より高い普通教育の機会を女子に与えるべきだ」という動きも次第に強まった。

当時の「高等女学校令」では、高等科は女子の高等普通教育の実施を目的としたが、大学の入学資格や職能資格には無関係であった。このため、文部省は大正9（1920）年に、高等普通教育を行うため、高等女学校に商業科・専攻科を設けた。

さらに、「女子にすべての高等教育機関を開放せよ」「男女の教育の機会均等を」という声を受けて、大正14（1925）年、衆議院は「女子高等学校教育振興に関する建議」を採択した。

これは、



1. 女子が官公立、私立大学および各種学校に入学出来るようにすること
2. 女子高等女学校、各種専門学校を新設して、女子の高等教育を振興すること

を求めたものであった。

こうした良妻賢母教育と人格情操教育が並行して行われる女子教育の展開、女子高等学校の新設と振興の気運を背景に、大正15（1926）年、堀之内妙法寺30世・岡田日歸上人は、女学校の設立を発願したのである。

これにもとづき、堀之内妙法寺ならびに藤井教詮、馬田即貞両先生はじめ日蓮宗関係有志は、女子の高等教育機関としての女学校の設立構想の具体化をはかり、日蓮宗系の京都明德、大阪明浄両女学校の設立規則なども参考にしながら、文部省に設立認可を要請した。さらに、仏教精神による女子教育の実施趣旨、維持基金の設置、校地の選定、校舎の建設にとりくみ、昭和元年（1926）12月28日、文部省より立正高等女学校の設立認可を受けたのである。

堀之内学園・東京立正の設置者 堀之内妙法寺の歴史と教育

① 妙法寺の開基は女性

堀之内妙法寺は、堀之内学園・東京立正の設置者である。

堀之内妙法寺は、はじめ、真言宗の庵であったという。元和4（1618）年頃、ときの妙仙院日圓尼は、日蓮宗を信仰し、江戸碑文谷の法華寺僧に帰依した。やがて、子の学仙院日逕上人は、母の志をうけついで寺院を建立し、法華寺の末寺とし、日蓮宗の寺院となった。母を開基とし、自らは開山となり、母の名をとって山号を日圓山とした。寺号は、妙法寺と称した。

日蓮宗のよりどころとする経典は、『妙法蓮華経』（法華経）である。この法華経をひろめたのが、鎌倉時代に出現した代表的な仏教者である日蓮聖人（お祖師さま）である。『妙法蓮華経』は、あらゆるものの救いを説いているが、特に“女性の救い”を強調した。

日蓮聖人は、さまざまな苦難に屈することなく、あらゆる人々と社会の救いのために身をささげた。同時に、「法華経をひろめて、母に恩がえしをしよう、すべての女性を救おう、いっさいの女性を救うことによって、母を助けよう」と誓ったのである。

この日蓮聖人の心にふれて、日圓尼と日逕上人母子は、妙法寺と名づけたのである。

② 厄除けのお祖師さま

元禄時代、碑文谷法華寺が幕府によって天台宗に改宗させられる事件がおこった。

この時、妙法寺は、法華寺に奉安されていた日蓮聖人の像（厄除けの祖師）を迎え入れて安置した。元禄11（1698）年のことである。

この日蓮聖人像は、厄除けの祖師といわれる。これには、次のような由来がある。日蓮聖人は、数え39歳の時、ときの幕府に向って「立正安国」（正しい教えによって国を平安にする）をこの世にうち立てるよういさめた。ところが、幕府は日蓮聖人の言葉を聞き入れず、かえって伊豆の伊東に流罪した。弘長元（1261）年、40歳の日蓮聖人は小舟に乘せられ、鎌倉由比ヶ浜から伊東に向った。

その時、弟子の日朗上人が馳せつけて小舟に乗ろうとした。幕府の武士は、その日朗上人を櫂で打ちすえ、沖に小舟を漕ぎ出して行った。その後、日朗上人は名残り忘れがたく、朝夕由比ヶ浜で伊東の方角を伏し拝んだ。ある夜、波間に輝やきながら流れる浮木を手に入れ、自ら師日蓮聖人の尊像を彫刻した。日朗上人は、この尊像をまるで師が目の前にいるように拝みつづけた。



堀之内妙法寺 祖師堂

やがて、弘長3（1263）年2月22日、日蓮聖人は数え42歳の時、伊豆流罪から赦免されて鎌倉に戻った。日蓮聖人は、日朗上人の真心を聞き「この像に、そなたの魂が入っていたからか、伊豆の配所で日朗の夢をしばしば見たのだ」と語り、この尊像を開眼供養した。

師日蓮聖人は、数え42歳、男の厄歳の時に赦免されて厄を除いたところから、この尊像は「除厄の日蓮大菩薩」「厄除けのお祖師さま」と呼ばれるようになったのである。

3 伽藍の伝統美

「厄除けのお祖師さま」は、妙法寺境内の正面にある祖師堂に安置されている。

祖師堂は、明和8（1771）年4月に改築され、ついで文化9（1812）年に現在の祖師堂が建立された。また、明治16（1883）年に屋根が銅版に葺き変えられた。間口は9間4尺（約17.4メートル）、奥行14間4尺（約26.4メートル）。祖師堂の正面には、「感応法閣」（吉川日鑑上人筆）の金字大額がかかげられ、祖師堂内部の欄間には孔雀、迦陵頻迦（美しい声で鳴く仏の浄土にいる鳥）、格天井には花鳥、正面破風には飛龍の彫刻がなされている。

さらに、天明7（1787）年に造られた仁王門があり、書院には徳川将軍が参詣の折に休息した「御成りの間」がある。また、仏教の祖お釈迦さまを安置する本堂をはじめ、学問成就、眼病守護を祈る日朝堂、健康と福德を授ける浄行堂、二十三夜堂などがある。

明治11（1878）年に建造された鉄門は、日本近代建築界の恩師といわれるイギリス人のコンドル博士が設計したもの。和洋折衷の意匠をこらし、他に類がなく、国の重要文化財に指定されている。

4 庶民信仰の寺

「厄除けのお祖師さま」は、多くの庶民の信仰をあつめた。人々は、妙法寺にお参りして、厄除け、災難除け、病氣平癒、家内安全などを祈願した。また、江戸の庶民は講中を組織し、妙法寺が年中行事として営む5月の伊豆法難会、お祖師さまの命日10月13日に営む御会式や多数の僧侶が法華経を読誦する千部会などにお参りし、さらに初詣や月参りをする人も多く、3の日には境内に縁日がひらかれた。当時の模様は、「たくさんの信徒が遠近から自他宗の別なく参詣し、浅草寺の賑わいにも劣らない」といわれた。

元禄の頃、榎本（宝井）其角は、妙法寺の御会式に詣でて、
 <妙なりや法の蓮の華経（たえなりや のりのはちすの はな
 いかだ）>の一句を詠み、「参詣する人は稲麻のように多い。
 御宝前には供物などが山のようだ」と書いている。

文化・文政の頃には、寺子屋の教科書に「堀之内もうで」が
 とり上げられた。また、葛飾北斎、十返舎一九、太田蜀山人、
 安藤広重なども参詣した。一九は、<願へたゝ黄金の釜を堀の
 内、口に孝行したきゆえには><堀の内といへど水さア見えな
 いが、お堂の中はだゞぶだぶだぶ>と詠み、蜀人は<参詣の歩
 みも疾しやおそし様、かしらも土にほりの内かな>と詠んだ。
 初代広重は、「妙法寺境内」「堀の内千部詣」の錦絵を描き、ほ
 かにも歌川豊春、一勇斎国芳、二代広重、北斎の弟子<魚屋（と
 とや）>北溪などの筆になる絵馬の大額が、境内にある額堂に
 かかげられている。

妙法寺は、歌舞伎、人情本、洒落本、狂歌、落語などにも登
 場し、「厄除けのお祖師さま」「堀の内」の名は庶民の間に大い
 に親しまれている。

⑤ 妙法寺の教育・育英事業

妙法寺は、江戸末期より僧風教育を起こし、明治時代から現
 在に至るまで、一貫して教育・育英事業にとりくんできた。

その主要なものは、(1)堀之内施檀林の開設、(2)日宗十万人団
 結報恩会の結成、(3)茗谷学園の設置、(4)立正高等女学校（東京
 立正）の設立と経営、(5)堀之内夜間中学の経営、である。

堀之内施檀林は、明治15（1882）年、第28世松村日澄上人の
 時、日蓮宗の宗学林の一つとして設けられた。山主（住職）が
 林長を務め、多くの講師を招き、妙法寺山内のみならず、全国
 より集まる若い人材を收容し、子弟教育を目的に取り組んだ。

日宗十万人団結報恩会は、明治29（1896）年、第29世武見日
 恕上人が設立した財団である。日蓮宗の布教、学問の振興、公
 益事業の実施を目的とした。その主要な内容は、日蓮宗子弟の
 寄宿舎、教育機関として茗谷学園を経営すること、奨学金を給
 与して人材の養成に努めること、仏教書籍の発行などであった。

茗谷学園は、明治36（1903）年、東京小石川茗荷谷に設立さ
 れた。日蓮宗の子弟が寄宿舎生活をし、自治、自主、自律の精
 神を養うこと、帝大、早大、日蓮宗大（立正大）、東洋大、日
 本医学、外国語学、一高など各大学、高等学校、専門学校に学
 ぶことが出来ること、社会の各分野で活動し、宗教的人格を備
 える人材を育成することを目的にした画期的な教育機関であつ
 た。ここから、石橋湛山（のち首相）など、言論、実業、医学、
 文芸、教育、宗教界に、150名余の人材を送り出している。



堀之内施檀林の授業(昭和12年)

茗谷学園は当初の敷地300坪が手狭となり、また僧侶子弟だけでなく一般の子弟教育をめざすとの方針から、昭和3（1928）年4月、東京府多摩郡杉並町大字高円寺中小沢（現、高円寺南）の約800坪の敷地に移転した。

さらに、昭和47（1972）年、第32世小林日誓上人の時に、妙法寺山内に「堀之内旃檀学寮」が建てられ、ここに移されて、現在堀之内旃檀林として僧侶子弟の教育がなされている。

第30世岡田日歸上人が、大正15（1926）年より女学校の設立をめざし、昭和元（＝大正15、1926）年12月28日に、立正高等女学校を設立したのは、こうした妙法寺の教育、育英事業をうけつぎ、発展させたものであった。

第31世堀日上人は、教育の対象を男子にひろげ、昭和16（1941）年に堀之内中学校を開設した。翌17年8月、物資の乏しい中にもかかわらず、校地1,500坪に270坪の校舎を竣工した。堀日正上人は、「真に尊きものは教育、強きものは教育」とのべ、僧侶子弟だけでなく広く一般男子を対象とする夜間中学を開校した。堀之内中学校は、戦火と戦後の苦境を経て、昭和30（1955）年まで続き、632名の卒業生を出した。さらに、昭和41（1966）年第32世大塚日大上人の時には、学園創立40周年記念として東京立正女子短期大学を設立している。



明治初期の妙法寺

①人間の心に塔をたてよう

堀之内学園・東京立正は、立正高等女学校として発足した。立正高等女学校（立正高女）は、昭和元（1926）年12月28日に、文部省より設立が認可され、昭和2（1927）年4月6日に始業式を行った。ついで、4月28日、日蓮聖人がはじめて法華経をひろめて日蓮宗を開いた日を期して、この日を立正高女の創立記念日とし開校式を挙行了した。

立正高女は、日蓮聖人第650遠忌の報恩記念事業として設立された。昭和6（1931）年は、日蓮聖人が弘安5（1282）年10月13日に61歳の生涯を終えた命日より数えて、650年目にあたっていた。

当時の堀之内妙法寺30世の岡田日歸上人は、日蓮聖人650遠忌の記念事業として何をなすべきか、仏陀釈尊と日蓮聖人の教えを広く社会にひろめる上で、今最も大事なことは家庭の主体である女子のための教育ではないか、と思慮し、女学校の設立をめざした。この折、岡田日歸上人は、「五重塔を建てるよりも、女学校をつくって人間の塔を建てよう」と語った。この誓願と決意から、女子の人格、情操教育を行う立正高女が誕生したのである。

②設立に向けて準備に着手する

岡田日歸上人は、藤井教詮、馬田即貞両先生をはじめとする日蓮宗僧侶有志の参画を得て設立に向けて準備をかさねた。

大正15（1926）年4月20日、第1回発起人会が開かれた。ここで、次の点が決められた。

- ①文部省の高等女学校令にもとづき、女学校を設立する。
- ②妙法寺における日蓮聖人650遠忌事業として女学校を設立する。
- ③創立委員10名を選び、設立委員会により準備に着手する。

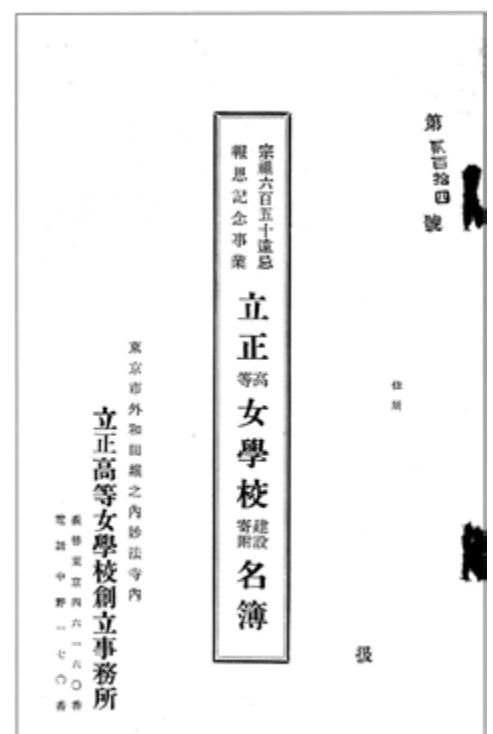
設立事務所は、堀之内妙法寺内に置く。

なお、委員会は委員長岡田日歸、委員は柴田一能、岡教邃、木内瑞光、武見可質、山田潮進、寺尾與三、高瀬教闡および藤井教詮、馬田即貞の各師で構成された。

③校地を選定する

女学校設立の準備は、校地の選定から始められた。地の利の良い敷地を選ぼうとして、さまざまな土地が検討された。審議をかさねた結果、最終的に、妙法寺所有の和田堀之内谷中337、338番地、4,320坪を校地とする旨を決定した。この校地は、

立正高女 設立準備の胎動



立正高等女学校建設寄附名簿



設立時の校舎本館

妙法寺より無償貸与されることも決められた。

校地を選定すると、ただちに全国の日蓮宗寺院、檀信徒に向けて、女学校設立趣意書を送り、設立寄附の勧募を呼びかけた。のちには、「立正高等女学校建設寄附名簿」を作成して各方面に配布した。

④校舎を建設する

校舎は、4期に分けて施工する建築計画をたてた。校庭は、1,500坪余とし、校舎の総建坪は、2,600坪とした。このうち、本館は木造3階建、特別館木造2階建、別館木造2階建、体育館木造平屋建であった。これ以降、新館2階建、講堂鉄筋4階建が建設されるが、当初の校舎建設費は最低でも約10万円を必要とした。

建設費は、当面妙法寺が負担することになった。岡田日歸上人が4万余円の私財を寄金したので、総額15万円を建築予算に計上した。

建築は、秋山子之松工務店が請負い、第1期工事として本館建設を着工、昭和2（1927）年3月10日、木造3階建の本館が完成した。

⑤校名を定める

校名は、学校のシンボルである。学校を設立するポリシーと目的が、校名に結晶されていることが大事であった。

「立正」の校名が決定したのは、大正15（1926）年7月3日であった。「立正」は、日蓮聖人の唱えた「立正安国」にもとづいて選定された。

立正安国とは、仏陀釈迦牟尼世尊の説いた真実の正しい仏教である法華経の正義をうち立て、国家社会の平和と人間の幸福を実現する精神と実践を指している。混迷する社会に平和をもたらし、苦しみ悩む人々のまことの幸福をなしとげよう、仏の限らない広大な慈悲の心を身につけ苦しみを取り除き喜び、安らぎを与える生き方をめざそう—これが、立正安国の誓願である。

「立正」の校名は、このような法華経と日蓮聖人の精神と誓願を結晶するものとして定められた。

⑥ 校長を招請する

教育は人材の育成にある。人材育成のためには、確固とした教育方針と豊かな教育経験を持つ指導者を迎えることが必要である。

校長は、教育界にその人ありといわれた高島平三郎先生に懇請し、昭和元（1926）年12月28日に校長就任が内定した。

翌昭和2（1927）年当初、岡田日歸上人と高島平三郎先生とはく物資面のみあって精神面が忘れられている日本の現状をただすことが大切である。そのためには、堂塔伽藍のごとき物質的方面よりも、祖師日蓮聖人の精神面、特に立正安国の精神をもって、将来家庭において国民教育の基礎を作るべきである。これを女子に伝え、日本及び世界にその感化を及ぼすという高遠な理想を現代に実現するために女学校をつくって教育することが重要である旨、完全に意見が一致した。

また、教育方針などについては校長に一任することに同意し、高島平三郎先生の教育理念と方針にもとづいて女子教育が行われることになった。



妙法寺境内の立正高等女学校設立事務所

⑦ 教育の方針を打ち出す

初代校長高島平三郎先生の提唱した教育方針は、およそ次のような内容であった。

① 宗教心の養成に努める

宗教や信仰は、強制したり命令すべきものではない。素直な心、尊敬する心、信頼する心、感謝する心など、人として持つべき涵養、発達せしめることが宗教教育の真精神である。本校における人格教育の基礎は、入学の初めより、この精神を授業に養わしめる点にある。本校の種々な行事も、この宗教教育のために行う。

日蓮聖人は、国家社会を救い国民道義の乱れをただすため「我れ日本の柱とならん。我れ日本の眼目とならん。我れ日本の大船とならん」と誓った。そこで、毎月曜日に全校一同これを朗唱することとする。

② 人格教育をめざす

本校は、立正主義にもとづき、各自の人格を出来る限り向上せしめることを目的とする。試験教育、記憶教育、点取教育の弊害におち入ってはならない。人格の充実には、知識技能を身につける必要がある。日常生活に役立ち、表現する「行」によって、知識技能は真に人格の内容となり得る。学んだ事を自ら

の生活に運用し、学んだ事は実行するという「学」と「行」の一致に重きを置く。

③体育と知育教育を大事にする

人格を円満ならしめるためには、まず肉体の強健を期さねばならない。本校は、特に体育を重視する。少数の選手を作るより、一般生徒の健康増進を主眼とする。また、知識技能は人格の形成と充実に必要である。道德、礼儀は、人格修養の上に大切である。人格教育の目的を遂げるため、本校では、身体、知識、技能、道德、芸術を教課とし、これを適切に配分する。

8 生徒募集を行う

大正15（1926）年10月10日、生徒募集の要項が次のように定められた。

本科	第1学年	100名
	第2学年	50名
	第3学年	50名

入学資格と考査については、次のような募集要項を発表した。

- ①尋常小学校6年を卒業した女子であれば、無試験にて第1学年の入学を許可する。
- ②第2学年は、入学試験を実施した上で入学を許可する。
- ③学期末試験制度は採用しない。平素の採点による学力考査法にもとづき考査する。

願書は、昭和2年3月末日を締切日とする。申込所は、堀之内妙法寺内、立正高等女学校設立事務所である。

生徒募集には、心を砕いたが、入学者は93名、翌昭和2（1927）年4月8日の始業式に登校した生徒は、本科1年1・2組54名、2年1組13名、技芸科1年1組3名、計70名であった。一方で、立正高等女学校に対して、「新しく建てられた校舎は、武蔵野の平野に屹然と俗塵をはらうように立ち、しかも日蓮主義教育を本領とする女学校だけあって、東京近郊の宗教的教育の女学校として覇をなすのも近き将来と信ずる」との期待も寄せられた。

9 創立者岡田日歸上人

堀之内学園、立正高等女学校を創立したのは、堀之内妙法寺30世・岡田日歸上人（元治元～昭和6〈1864～1931〉年）である。

岡田日歸上人は、江戸芝白金に生れた。14歳の時、堀之内妙法寺27世・樋口日淨山主について得度、教篤と称して僧侶の道を踏んだ。

明治25（1892）年、東京専門学校（現早稲田大学）行政科を卒業、歴史・経済・財政学を修めた。

僧侶としては、東京府大蔵の妙法寺、富山県水見の蓮乗寺、東京府南千住の真養寺住職を経て、明治44（1911）年48歳より昭和5（1930）年67歳まで堀之内妙法寺住職を勤めた。この間、教育、社会事業に意を注ぎ、日蓮宗大檀支林助教授、堀之内宗学林教師となった。また、堀之内妙法寺29世・武見日怨山主を助けて茗谷学園の経営に当った。

大正時代には、主として日蓮宗の行政運営にとりくみ、大正12（1923）年、60歳の時より2年間は宗務総監に任ぜられて日蓮宗全体の行政を統理した。この頃、堀之内妙法寺の境内に五重塔を建てる計画があった。

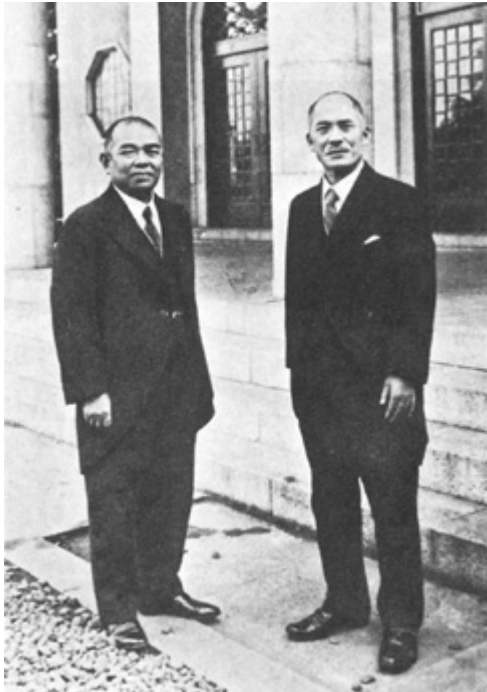
「これからは、社会を担う人材の教育こそ必要である。次代を育てるのは、女子の力による。母となる女子のための教育が大切である。五重塔を建てることも大事だが、人間の心の中に塔を建てることのほうが、もっと大事である」と岡田上人が語ったのは、この頃のことであり、この考えにもとづいて、女学校の設立を発起したのであった。

さらに、昭和6（1931）年が日蓮宗の宗祖日蓮聖人の650遠忌（650回目の命日）に当る所から、この記念すべき時の一大事業として女学校の創立を実現しようと誓願し、昭和元（1926）年12月28日に、立正高等女学校の設立認可を受け、岡田日歸上人は校主となったのである。

岡田日歸上人は、昭和6（1931）年1月30日、身延山久遠寺82世の法主となり、日蓮聖人650遠忌を盛大に挙行し、「立正」の勅額を身延山に拝載したのち、同年11月15日、68歳にて世を去った。慈厚院日歸と号されている。



岡田日歸上人肖像



馬田即貞先生(左)と藤井教詮先生(右)

10 設立に尽くした二人の幹事

■藤井教詮先生

藤井教詮先生（明治21～昭和58〈1888～1983〉年）は、東京大田区洗足・妙福寺に生れ、大正9（1920）年には、千葉県八日市場市・飯高寺住職となった。

早くから、女子教育の大切さを語り、「女子行学々舎」を東京巢鴨に設けた。大正10（1921）年、日蓮聖人降誕700年を期して、「女子行学々舎」を拡げ、組織的な女子教育機関の設立をめざした。この女子教育機関は、男子と同様に、国家社会の地位、価値を有する女子に、精神的、道徳的な教育指導を行うことを目的としたものであった。賛同者の中には、岡田日歸（堀之内妙法寺住職）、高島平三郎（日蓮宗大学講師）、望月日謙（日蓮宗大学学監・茗谷学園卒業生）の各講師がいた。

やがて、藤井教詮先生は、岡田日歸上人発願の女学校設立の企画に参加し、馬田即貞先生と共に、積極的に設立準備を進め、校地の選定、校舎の建設、建設資金の調達などに奔走した。昭和2（1927）年、立正高等女学校の開校にともない、馬田先生と一緒に幹事に就任し、学校施設の拡充、経理の統轄など主として経営、財務を担当し、あわせて修身科の授業にも携わった。

やがて、昭和10（1935）年財団法人立正高等女学校の設立にともない財団理事となり、ひき続き財務会計を担当、大講堂の建設など施設の拡充に努めた。

ついで、昭和18（1943）年に財団法人堀之内学園の常務理事となり、翌19（1944）年からは堀之内中学校長に就任した。さらに、戦災により講堂を残して灰燼に帰した校舎の再建など施設の復興に努めた。

昭和26（1951）年3月4日、学校法人堀之内学園が設立されると、常務理事に就任して、堀之内学園の経営にとりくみ、創立40年記念事業として東京立正女子短大の設置を実現して、短大の初代学長に就任するなど、その一生を堀之内学園の創立と発展につくした。

■馬田即貞先生

馬田即貞先生（明治20～昭和40〈1887～1965〉年）は、福井県武生市に生れた。大正8（1919）年、日蓮宗大学（立正大学）を卒業後、東京三田・蓮乗寺住職となった。

また、日蓮宗宗務院の主事、庶務部長を経て、昭和19（1944）年より同21（1946）年、宗務総監、管長代務者を務めた。太平洋戦争末期から終戦直後の混乱期にあって、日蓮宗の行政責任

者として、その維持・復興に尽力し、真言宗智山派に属していた千葉県清澄寺の日蓮宗への帰宗、千葉県中山法華経寺の復帰問題、身延山法主公選制問題に奔走した。

馬田即貞先生は、岡田日歸上人発願の立正高等女学校の設立について、藤井教詮先生と共に当初から中心的役割を果たした。

女学校の設立を早くから念願とし、日蓮宗青年協会の有志とはかつて、東京池上、蓮沼付近にバラック建でも女学校を設立したいと基金を集めようとした矢先、岡田日歸上人が女学校設立を企画しているのを聞き、大正15（1926）年当初岡田日歸上人へ女学校設立を進言し、発起人の中心となって、校地の選定、校舎の建築、校名の決定、生徒募集などの設立準備に取り組んだ。

さらに、昭和2（1927）年4月8日、藤井教詮先生と一緒に、立正高等女学校の幹事となり、高島平三郎校長を助けて校務、経営に努め、特別館、新館、大講堂の建築など学校施設の充実、拡張をはかった。

馬田即貞先生は、昭和20（1945）年5月の大空襲後の学校施設の復興に傾注した。昭和22（1947）年第3代校長として新生立正中学校長となり、翌23（1948）年4月からは東京立正高等学校校長に就任した。さらに、昭和31（1956）年以降も校舎、体育館など施設の拡大をはかり、校長として教育内容の充実に尽くした。

「社会の基礎は家庭にある、家庭の善悪は主婦によって定まる。だから、自分は四海帰妙（法華経信仰を世界にひろめること）の第一歩として、教育に専念したいと思う」

つねづね、先生はこのような女子教育への熱意を語り、意志堅固に東京立正の教育に献身した。



設立当時の門柱の笠石



初代校長 高島平三郎先生

11 初代校長 高島平三郎先生

立正高等女学校の初代校長に就任したのは、高島平三郎先生（慶応元～昭和21〈1865～1946〉年）である。

高島平三郎先生は、心理学者、教育者として知られた。また、法華経と日蓮聖人の教えにも造詣の深い信仰者であった。

高島先生は、江戸本郷に生れた。広島県福山で育ち、漢文学を学び、ついで、東京英語学校で英文学を修めた。さらに、元良勇次郎氏の指導を受け、哲学、倫理学、心理学を研究、『心理綱要』『児童心理学』『日本教育史』などを著わした。

教育面では、東京高等師範学校附属小学校教授掛補、学習院助教授、日本体育会体操学校長、日本女子大教授などを歴任した。明治39（1906）年には、日蓮宗大学（現・立正大学）教育学教授、東洋大学心理学教授となった。

そして、昭和元（1926）年12月28日、立正高等女学校の初代校長に就任したのであった。これ以後、昭和20（1945）年3月に退職するまで、18年間にわたり校長の任にあって、法華経精神にもとづく女子教育の向上と充実に献身した。

この間には、帝国教育会、日本弘道会、大日本少年団連盟などの事業にも協力、指導した。

信仰面では、日蓮聖人の書きのこした文章を読んで感激して以来、その人格と精神、主張を文筆、講演を通じて明らかにした。

明治42（1909）年には、日蓮聖人の教えと事蹟を世の人々に伝えることを目的に結成された天晴会に、姉崎正治、柴田一能、山田一英の各氏と共に参画した。

さらに、大正3（1914）年に、法華経の精神文化を文筆と言論で普及するために創立された法華会の設立発起者の一人となった。この時の発起者には、辰野金吾、江川英武、山田三良、小林一郎、姉崎正治、金原明善各氏が名を列ね、会員には、石橋湛山、加藤高明、五島昇、新村出、諸橋輒次、土光敏夫、加治時次郎などの人たちがいた。

また、同年4月、『心理学上より観たる日蓮上人』（洛陽堂）を出版、日蓮聖人の人格を模範とする人間形成と教育の必要性を指摘した。

日蓮聖人の人格にもとづく女子教育、家庭教育については、『家庭及び家庭教育』『心理百話』『女の心、附録嫁と姑』などの著作がある。

先生の人格は、温顔静かに微笑をたたえ、人に接するに春のごとく、子女敬愛の的であった。

12 開校

大正15（1926）年12月25日、大正天皇が崩御、元号は「昭和」に改められた。昭和元（1926）年は、12月26日から31日までの7日間であった。

その昭和元（1926）年12月28日、立正高等女学校（立正高女）は、文部省より設立認可を受けた。

あけて昭和2（1927）年。この年は、大正天皇の服喪の中で迎えた。3月には、未曾有の金融恐慌がおこった。

立正高女は、時代の暗い予感をふき払うかのように、4月8日、釈尊降誕の日（花まつり）を期して、高島平三郎校長を迎え、初の教職員会が開かれた。そして、高島校長より教職員辞令が交附され、教育方針の徹底が確認された。

当時の顔ぶれは、藤井教詮、馬田即貞、木内瑞光（打魚）、岡教遼、渡邊光徳、藤田みつゑ、金光季子、宮川翠、平田貞子、大槻徳子、原きみゑ、飯田かつ子、山田哲丸、中橋教徹の各先生であった。

ついで、始業式が新校舎で行われた。応募者は123名であったが、入学者数は1年54名、2年13名、技芸科1年3名、の計70名が第1回始業式に出席した。

4月28日、この日は、日蓮聖人が故郷安房（千葉県南部）の清澄山頂で、初めて暁天より旭が昇るまでお題目を唱え法華經による社会と人間の救済を宣言した記念すべき日に当たっていた。立正高女は、これを記念して、この日を創立記念日と定めた。開校式は、仮講堂で盛大に挙行された。山田潮進師の開式宣言、岡田校主、高島校長より設立の理由と本学の教育方針が語られ、文部大臣、東京府知事、日蓮宗管長、立正大学長、日本女子大学長などが臨席して祝辞をのべた。

創立者の岡田日歸校主は、しずかに壇上に立って、本校設立の意義について語った。

「仏陀の慈光を仰いで、凜とした気質の中に、自ら和雅なる情操を持つ女子、しっかりした信念のある女性を育てあげ、世界のあらゆる新知識を、日常生活の家政に応用するよう教え導き、知識と信仰と、慈愛とに充ち満ちた婦人を養成し、大乘の仏教でいう所の円満なる徳性開発を、女子教育の真髄となし、もって我らが女学校の根本精神といたしたい」

ついで、初代校長の高島平三郎先生は、岡田日歸校主から校長就任を懇請され、快く受諾した経緯と理由をのべ、長い間教育に従事してきた豊富な経験から、「知識偏重を矯正し、真の日本婦人を養成することをめざして、宗教心を養う宗教教育、学と行の一致に基づく人格教育を柱としたい」と、立正高女の教育方針について力説した。



立正高等女学校創立記念文鎮(昭和貳年四月)



第2代校主 堀日正上人

13 立正技芸専修女学校の独立

立正高女の附属として設けられた技芸科は、昭和3（1928）年4月に各種学校令により東京府知事の認可を受けた。

その後、普通科との格差が見られるため、昭和6（1931）年3月、独立した技芸学校に改善した。「立正技芸専修女学校」という。職業指導を主眼とし、社会に働く女性になるための教育内容の充実にとりくんだ。後に、立正第一女学校と改称した。

14 日蓮聖人650遠忌法要と初の卒業式

昭和6（1931）年は、日蓮聖人が入滅してより650年目にあたっていた。本校は、日蓮聖人650遠忌記念の教育・育英事業として創立された縁がある。日蓮聖人650遠忌の昭和6年までに、650名の生徒を数える学校にし、第1回目の卒業生を送り出そうという計画も立てていた。

この目標は、昭和5（1930）年に達成された。これを受けて、昭和5年10月17日、「立正大師（日蓮聖人）650遠忌稚児音楽法要」が、岡田校主の式長のもとで営まれた。

この翌18日には、運動会が挙行された。陸軍戸山学校軍楽隊も出場し、盛大な運動会であった。

また、これに伴い、日蓮聖人の教えと人格を研究して作文にまとめ、「立正大師鑽仰録」を刊行した。

さらに、昭和6（1931）年3月24日、第1回卒業式が厳粛のうちにも華やかに挙行された。

15 第2代校主・堀日正上人

初代校主・岡田日歸上人は、昭和6（1931）年1月、身延山久遠寺82世法主となり、3月に入山式が営まれた。これに伴い、堀之内妙法寺31世住職に入山した堀日正上人が、第2代校主に就任した。これは、妙法寺住職をもって校主（理事長）とする規則にもとづくものであった。

16 慰霊祭の挙行

初代校主、岡田日歸上人は、昭和6（1931）年11月15日、68歳にて遷化された。本校では、1周忌にあたる昭和7（1932）年11月15日より、この日をもって慰霊祭を営む月日と定め、故岡田校主並びに亡くなられた教職員、生徒、父母などに回向を捧げることにした。また、毎年10月15日を、岡田日歸上人の墓参日とし、生徒は清掃、洗水、香華、合掌の順で墓参した。

17 記念講堂の建設

昭和6（1931）年12月8日、身延山にて岡田日歸上人の本葬儀が営まれた。この時、立正高女生徒代表、大塚操さんは霊前に弔辞を捧げ、「御恩の一にも報いたてまつるため、六百の生徒が語りあい、①記念講堂の建設、②岡田校主胸像の建立、③記念出版、④建碑、⑤御命日を記念日にすること、の五カ条を誓願します」とのべた。

本校は、翌7（1932）年、教職員、生徒、父母、同窓生一致協力のもと、「岡田日歸上人記念講堂建設」の実現に着手した。

建設事業の一步は、10月15日に繰上げて営んだ慰霊祭と、翌16日の秋季運動会にあわせて行った、「建設資金調達バザー」より始まった。生徒は、1人2品を持ち寄り、学校の出資による作品を一つ製作した。教職員は、裁縫手芸品を作った。生花の販売、岡田日歸上人作和歌2首の記された茶布巾もバザーに出された。食堂も開設した。バザーの純収益金は、1,514円7銭にのぼった。しかし、その後、社会情勢の悪化もあり、建設資金は充分に集まらず、建設計画は遅々として進まなかった。だが、生徒数は1,250名に達し、講堂として使用してきた本館校舎の芙蓉と堇2教室40坪、特別館の蘭・桐2教室40坪、新館2階66坪では狭く、本格的な講堂建設は急務となった。

昭和10（1935）年7月、馬田即貞幹事は、本館校舎の設計者であった松岡誠一氏に、模範的講堂の設計を依頼、11月に設計図が完成した。さまざまな検討を経て、成案を得たのは翌11（1936）年1月であった。やがて、藤井教諭幹事を中心に、建設申請、工事監督者、海軍技師本田保次郎氏、請負工事者小寺組への依頼、選定と資金調達がなされた。

講堂の建坪は、263坪809、延坪は811坪618、構造は鉄骨鉄筋コンクリート4階建、工事費の予算は20万円を計上した。

同11年5月、堀日正校主の式長にて、記念講堂建設地鎮式が行われた。

建設資金については、堀之内妙法寺、日宗十万人団結報恩会、立正母の会、紫友会および校主、校長、教職員などから寄せられた。特に、卒業生、紫友会は、同年2月16日、明治神宮外苑青山会館で「立正音楽映画の集い」を主催し、2,000余名の入場者による純益を、講堂用ピアノ購入資金として寄附した。

昭和12（1937）年4月には、立正母の会が「講堂内部諸設備資金」として、1万2,000円の寄附を決定した。

記念講堂の開堂式は、昭和12（1937）年4月28日、盛大に挙行された。第1期工事の講堂ステージ、2階ギャラリー、3階貴賓室、音楽室が完成した。第2期工事は、昭和14（1939）年より着工した。翌15（1940）年3月特別教室（理科、家事）、



現在と変わらぬ姿の記念講堂玄関



記念講堂

普通教室、理科準備室、博物標本室、染色、洗濯室など8室が完成した。816坪に及ぶ大講堂である。総工費は、30万円であった。

講堂は、耐震、耐火、防音、闇幕、照明装置などが整えられ、写真室の設備もある。ステージには、大型グランドピアノが異彩を放っていた。

講堂は、花まつり、降誕会、御会式、講堂修身、講演、映画、劇などに使用された。また、一般にも開放され、講演、音楽、舞踊、映画、落語、演劇が行われた。さらに、各小学校同窓会・唱歌会や各種団体にも利用された。

近代建築の粋を集めた講堂は、城西一といわれた。その後、戦災にも焼失することなく、今日も堂々とした姿を誇っている。なお、令和4（2022）年10月31日付にて国の登録有形文化財（建造物）（登録番号13-0466）に登録されている。

18 創立25周年記念

昭和25（1950）年、本校は創立25周年を迎えた。

この時にあたり、本校では「創立25周年記念誌」の刊行を定め、長亮明、酒見充、粕谷きせ、橋本、岩村満の各先生を中心に編集作業にとりくみ、11月1日に発刊した。

「記念誌」には、戦災によって全校舎が焼失する一大打撃をのりこえ、本校は一致団結して復興を成しとげ、国家の再建と世界平和を望むこと切なるものがあると、学園理事長の堀日正上人は「光輝ある廿五周年を迎ふ辞」に記した。

また、同誌には、極東国際アメリカ奉仕団H・L・ジェンウェイ理事長、杉並区長など多方面からの祝辞が寄せられ、新旧教職員の寄稿が掲載されている。

さらに、創立以来、本校の発展に尽くしてきた木内瑞光先生は、「手をたたいて／足をふみしめて／この金字塔への讃美を／おゝ 東京立正／おゝ 東京立正／永遠に聖らかに歩いてくれ」と詩を寄せている。

翌26（1951）年11月2日、創立25周年記念祝賀式典が本校講堂にて挙行された。

19 創立40周年記念

昭和40（1965）年3月1日、馬田校長が遷化され、4月1日に岩本経丸先生が第4代校長に就任した。10月29日、学園は「東京立正創立四十周年・東京立正女子短期大学開学記念式」を講堂にて挙行了。この式典には、文部大臣代理、清水成之文部審議官、東京都知事代理、下村久幸学事部第一課長、各界代表・日本医師会武見太郎会長（堀之内妙法寺檀徒総代）、私立学校振興会岡田孝平理事長、東京都短期大学協会の佐瀬恒会長、日本私立中高校連合会の棚橋勝太郎会長、全国普通科高校長会の園田軍平事務局長が来賓挨拶した。

学園理事長小林教明上人は、式辞において、「人間塔の建立こそ大事である」との抱負をもって創立して以来の沿革をのべ、戦災で焼失後の復興事業にとりくみ、教育内容の刷新、向上と施設の整備、拡充を実現したと語った。

また、藤井教詮短大学長、岩本経丸中・高校長がそれぞれ学務報告を行った。さらに、本校吹奏楽団、合唱団（指揮者 井上謹次先生）による中高校歌が演奏された。

学園は、この時を期して『東京立正創立四十周年記念誌』の編集をはかり、翌41年（1966）10月25日に、記念文集と研修要録第3号より成る記念誌を刊行した。

20 堀之内中学校のあゆみ

堀之内妙法寺の歴代住職は教育に熱意を持ち、幾多の教育機関を設立した。武見日恕上人の茗谷学園、岡田日歸上人の堀之内学園、堀日正上人の堀之内夜間中学がそれである。

堀日正上人は、岡田上人が立正女学校を設立したことをうけて、男子校の創設という願いをもっていた。妙法寺山内で法類寺院の子弟を集め、宗門公認の施檀林を経営していたが、教育制度の変遷に伴い、山内の教育組織も改組し、時代即応の体制をつくる必要性を感じ、鋭意考慮中の所、時あたかも昭和15（1940）年が皇紀2600年に相当しており、各地に記念事業の計画のあることを知り、この千載一遇の好機に際し、仏教者として、記念事業を興さなくてはと決意した。

これが堀之内中学が呱呱の声をあげた縁由である。堀校主は、この時の心境を「終年不織領三衣 一日無耕迎古稀 聖代享生真可謝 中学設立報恩威」とよみ、報恩事業であったことを宣言した、時に太平洋戦争開始の昭和16（1941）年であった。最初、教室は妙法寺山内にあり、のち聖教文庫という図書館に移り、妙法寺の東隣の地に新校舎が落成したのは、昭和17（1942）年8月17日であった。



堀之内中学校校舎

規模は小さかったが、初代校長は女学校校長の高島平三郎先生であり、のちに女学校幹事の藤井教詮先生が2代校長に就任、女学校と合併後は馬田即貞先生が校長となった。

昭和20年（1945）度旧制夜間中学の第1回の卒業生12名が感激をもって世に送られた。昭和24年度（1949）、25年度（1950）、新制中学卒業生153名を数えたが、これが最盛期であり、昭和26年度（1951）には中学卒業生はなく、昼間、夜間共に生徒が減少し、昭和29年度（1954）夜間部高等学校生徒24名の卒業をもって、卒業生合計632名を送り出した堀之内中学校の歴史の幕は閉じられた。

（※本節は『堀之内学園 東京立正の70年』より抜粋したものに加筆・修正したものである）

校長 高島 平三郎

1

昔から宗教の祖師を記念するために、行わるる事柄は、その数一にして足らぬ。しかし、その多くは、堂塔伽藍等を建立して、これを後世に残すのが慣例となって居るようである。これは、固よりこれに由りて、その宗門の精神を世間に伝え且つ拡むるを目的とするのであろうが、動もすれば、物質的輪奐の美のみが在して、その大切な精神方面が、何時の間にか、忘れられたるが如き観を呈するものも少くない様に思われる。

然るに、我が立正女学校は、祖師立正大師日蓮上人の示寂後六百五十年の報恩記念事業として、計画せられたもので、初めより、堂塔伽藍の如き物質的方面に、重きを置かず、実に祖師の精神而かも対立的狭義の教義を主とせず、祖師自ら「日蓮は何れの宗の祖師にもあらず」と述べられたように、広く立正安国の精神を、将来家庭において、国民教育の基地を作るべき女子に伝え、我が国は勿論、遠く一天四海に、その感化を及ぼさんとするのであるから、その理想の高遠にして、しかも現代に適切なることは言うを待たぬ。

余は、大正十五年の夏少年団を代表して、欧米に出発せんとするに際し、本校創立者の代表より、校長たらんことを懇望されて之を快諾し、翌昭和二年の初、帰朝してより、本校創立主唱者にして、責任者たる、岡田日歸上人と屢々会談し、その教育上の意見の、全く一致し、その教育上の主義方針等は、校長に一任するの同意を得たるを以って、余はますます本校に多大の関心を寄せ、余が教育界における、最後の御奉公として、尽さんことを決心するに至った。

かかる事は、当然の事であって、特に記す必要はない様であるが、世間によくある例で、校長は、単に名を貸すのみにて、その学校の内容には殆んど無関係のものさえ少からぬ状態故、ここに此の事の特記する所以である。しかし、学校の経営に関する経済的方面等の事は、初より余自ら正直に申し出でて、その衝に当ることを辞退したのである。しかしながら、校長は、学校一切の責任に任ずべきものなれば、公に対しては、当然国家の規定に従って、全般の任に当たっている。

余は、当時既に五十余年の学校教育の体験を有し、集団教育の利弊をも知悉していたので、国家所定の規外に、逸脱せぬ限り、自己の主義信念に基づいて、教育を施すこととした。幸にも、本校教師には、かつて余の教育した人が多くしからざる人々も、よく余の精神を理解し、共鳴して、尽して呉れられ、学校は、全く一家族の如く、何時も和気藹々の中に、会議し、談笑



高島平三郎先生

※本稿は、『創立15周年記念誌』に収録された文章である。当時の時代背景を考慮して原文のまま掲載した。なお、一部現代かな・新字体としている。



女学生に囲まれて

し、余は立正女学校に出校するのを楽しみにしていた程であった。

2

それで、余が初めに、教師諸君や、父兄諸君に諒解を求めた事は、宗教教育の真精神であった。明治時代には、学校と宗教とは、断然区別し、国家が命令して、学校においては、一切の宗教を説く可らず、又儀式を行う可らずという事になっていた。是れは、当然の事で、今日と雖も、小学・中学・高女その他の一般教育を施す学校において、ある種の宗教宗派の教義を教えることは、禁ぜられているであろう。しかし、宗教教育といえは、直ぐ一宗一派に依り、ある種の経文を読ましめるものと断ずるのは、偏見である。普通学校においては、かかる特殊の教義よりも、その宗教の基地たる宗教心の養成に努めねばならぬ。

余は、多年宗教心理を講じているので、その研究に基づき、立正女学校の生徒に、まず宗教心の要素たるべき精神を知らず識らずの間に、涵養せしめ卒業するまで、五年間に、自ら選んで、何れかの宗教に帰依するやうに誘導することとした。それで本校においては、往々他で誤解せるが如き、日蓮宗の信仰を強制するが如き事は、断じてない。勿論、校長を初め、多数の教師は、立正主義を信奉し、中には、その宗門に入り、強い信仰を有する人もある事故、生徒が何時となく、感化せられて、卒業の頃には、信仰に入る者も少くないが、これは決して、強いて勧めたり、命令したりしたものでは無い。発生心理学上、丁度回心の時期に到着して、ここに至ったのである。

余の所謂、宗教心の要素とは、(一) 不思議に思う心 (二) 畏ろしく思う心 (三) すなおに従う心 (四) 尊敬する心 (五) 信賴する心 (六) 感謝する心等である。つまり人には、皆こういう心があるのであるが、その教養啓発の法が、誤っていると、これら大切な心が、芽をも出さずに、枯れてしまうか、あるいは一つに偏して、一種の変人になったりするるのである。家庭においても、学校においても、児童生徒が、父母兄弟や、先生朋友から感化影響されて、これらの心がだんだん発達し、それがあつた一つの対象にまとまれば、それが宗教的信仰となるのである。余の本校における、人格教育の基礎は、入学の初より、これらの精神を、あらゆる学科技芸の教授中に養わしめるにあるので、これが即ち、宗教教育である。本校における種々の行事は、何れもこれらの宗教々育のために行うのである。

明治以来、日本教育の癌とされた、試験教育、記憶教育、点取教育は、余が最初より、教師諸君に告げて、呉々もその弊に陥らぬ様に要望し、それよりも、学びし事を、自己の生活に応用し、唯、問われて答うるのみならず、その学びしことを、実

行することに、最も重きを置く可きことを主調したのである。近頃に至り、一般社会、特に文部の当局においても「行」に重きを置く可きことを説くに至ったが、本校においては、十五年前より、之を主唱し、実行し来ったのである。しかし、種々の事情のため、余の理想が完全に実現されぬのは、遺憾でもあるが、また止むを得ぬことでもある。

3

余は、初めより、立正女学校は、所謂立正主義に基づき、各自の人格を、出来る限り向上せしむることを、目的とした。人格を円満ならしめるには、まず肉体の強健を期せねばならぬ。病弱なる者は、すべての目的に進むことが難い。されば、本校は、初めより、特に体育に重きを置き、少数の選手を作るよりは、一般生徒の、健康増進を主眼とした。又人格の内容を、充実せしめるに、知識技能が必要である。学科術科は、この目的のためであるが、唯之を覚え、これを記憶し得たりとて、その目的を遂げたものではない。これら知識技能が、皆「行」として、生徒各自の日常生活に役立ち、表現するに至らしめねばならぬ。これが、現在の当路者も、漸く目覚めて、主張するに至った最も重要な教育刷新の目標である。かくしてこそ、知識技能が、真に人格の内容となり得るのである。

さて、何のために、身体を強健にし、知識技能を修得せしめるかといえ、人格を出来得るだけ、完成せしむるにあることは、前にも述べた通りであるが、その人格修養に、最も重き役目をなすものは、即ち修身であり、訓練である。つまり、道徳を重んじ、礼儀を厚くすることが、それである。然るに、これらの事は、その原理原則としては、世界共通であるが、その応用となり、具体的各部の表現となると、民族と国家と、文化の程度等に依って、それぞれ非常に異なるのである。

されば、日本国民としての道徳、日本人としての人格完成には、欧米とも、支那印度とも、異なる点がなければならず、又現実には、之が存在しているのである。我が立正大師は、六百余年の昔、我が国民道義の、最も乱れたる時に、世に出で、生命を賭して、忠君愛国の至情を、世界最高の哲理に基づき、自己の信念の上に立ちて絶叫された。「我れ日本の柱とならん。我れ日本の眼目とならん。我れ日本の大船とならん」とは、古往今来日本国民のすべてが、持たねばならぬ決心でなくてはならぬ。されば、本校では、毎週月曜日の講堂訓話の初めに、全校教員生徒一同で、これを朗誦することとしている。

4

要するに、日本国民の人格完成は、我が立正大師の三大誓願の如き、活きた魂が入らねばならぬのである。如何に優秀な知識を有すとも、共産主義者の如く、恐れ多くも、皇室を呪詛し奉るようなものとなり、国家を否定するが如き者となるような事があるならば、学校教育は、非人格の人間を作ることとなる。満州支那事変以来、忠愛の精神、皇道の教育、教行一致などが叫ばれるようになったが、我が立正大師は、六百余年前に、盛んにこれを唱え、且自ら実行して、世を警め、本校は十五年前創立の当初より、これを高調し、実行せしむることを期して来たのである。これ即ち、本校が、立正主義を以て、教育の方針となす所以である。

人の理智は、万人共通に、承認せしめ得る真理の前には、皆一致する。しかし、感情は、必ず一致するとは限らぬ。特に、強制して一致せしめんとすれば、却って摩擦し分裂する。主義は、理智を主とする最善の方法であり、針路である。然るに、信仰は感情を主とする憧れである。これをすべてに強制することは出来ぬ。故に、本校においては、宗教教育を施すも、決して信仰を強要せぬ。これは、生徒各自の自由である。しかしながら、主義即ち理智の方面においては、立正大師の説き、且つ自ら進まれた進路を、一般に進ましめることにしている。即ち、前述の三大誓願の如きは、いやしくも日本皇国の臣民ならば、その宗教的信仰の如何に拘わらず、何人も之を守り此の進路に依らねばならぬ。

此の目的を遂げるために要する、身体・知識・技能・道徳・芸術は、本校の教課として、適当に配分せられ、一様にその教授鍛練に努めているのである。ただに、国家の規定に従う教科のみならず、本校においては、時と処とを利用し以上の目的を助く可き、精細の注意を払っている。例えば、各学級の組の命名の如き、一二三・甲乙丙・ABC等を以って分つを、一般としていたが、本校においては、創立の当初より、女性らしき優美、或は毅然たる精神を連想すべき草木の名を用ひている。松の組、梅の組、あるいはすみれ組、蓮組の類である。又一定の日時を定めて、国家のために身を棄てし勇士の墓参をなして香花を供え、供養文を墓前に読ましむること、又本校に関係ある故人のために、日を定めて回向し、供養すること、又創立者岡田日歸上人の示寂以来、毎月その命日には、順番を定め生徒をして、墓地を清掃し、香花を供養せしむるの類である。勤労奉仕の如きも、最近の流行の如くになっているが、本校においては、創立当初より、実行している。例えば、運動会の後の客席に狼藉せる種々の屑物の如き、七十有余の頽齡の校長が、率先

して自ら箒を執り、教職員生徒共に、力を協せてこれを実行する故、数分もしくは十数分にして、全く観を異にする清浄を回復して、師弟挙って、爽快を感じて分散するを常としている。

5

かくの如く、本校は、時代に率先して、皇室国家中心、人格中心の教育のために拮据十五年を経たが、幸にして、次第に、一般に認められ、創立の際には、一年二年合して九十三名に過ぎざりし生徒数が、今日は、千五百人に垂んとするに至った。学校の盛衰や、良否は、生徒数に依るものでないことは、分り切ったことであるが、之を経営するものより見れば、入学志願者の年々増加して、入れ切れぬようにまでなる事は、決して快くないことではない。固より器械・器具の設備とか、図書の蒐集とか、衛生の設備とか、暖房の装置とか、なお改善せねばならぬ、幾多の不完全の点もあるだろうが、何れにしても、十五年間の進歩発達には、著しいもののあることは、本校関係者の自画自賛ではなく、一般に認める所である。

余は、初より本校に専任として尽すことが出来ず、わずかに一週二日の出校に過ぎぬ。余の出校せぬ日は、藤井・馬田の両幹事が代って、その任に当り、教職員よく心を協せて、本校教育のために尽されたのである。されば、本校今日の隆盛は、実に外部よりは、維持員諸子、内部よりは、前述の教職員の献身的努力に依ることである。余は、この短からざる十五年を回想するごとに、是等諸君の衷心より本校のために尽されし功勞に対して、感謝を禁じ得ざる次第である。

劈頭にも述べた如く、本校は実に、立正大師即ち日蓮上人六百五十年遠忌報恩記念の精神的高塔である。物質の塔は朽ちて再び発展せぬが、精神的塔は、所謂「日に新して、又日々に新なり」といふように、ますます向上発展させねばならず、又するのが、精神の特質である。本校に、深き関係ある内外の諸君、今後本校の永遠に発展向上して創立者の祈願の満足と共に、我が祖師精神の、皇国日本はいうに及ばず、近くは、東亜より、延いて全世界に及ぼす基礎たらしめるよう、遠大の理想と、眼前現実の施設とに就いて、一層の力を貸し給はらんことを切望して、長き追憶の筆を擱くこととする。



高島先生19歳の作「満庭涼露の碑」

創立十五年の秘話



馬田即貞先生

幹事 馬田即貞

1 本校の濫觴

日蓮宗青年協会は、今から三十年位前に発会せられ、其会員たらんとするものは、幹事の前で自己の信仰を告白しパスしたものが会員になれると云う、すこぶるヤカマシイ会であった。大正十四年の秋と記憶しているが、僕が其頃会の幹事で宗務院に勤務している関係から例会を宗務院楼上に催した。集ったものは十人余りであったが、談たまたま昭和六年日蓮上人六百五十遠忌記念事業の話となった。曰く大阪、京都には既に女学校があるのに、東京にないのは残念である、故に記念事業として女学校を設立しようと、そして其資金は、同志十人を募り、各自が金千円ずつ提供する事を発言したら皆賛成なので、早速池上蓮沼附近の土地を物色し、バラック建にして明年四月から開校する事にまとまった。処で翌朝熱心なる同志の一人が来訪して曰く、昨日、宅へ帰って相談したら一千円の大金は少し荷が重すぎると、家族の反対に会ったとの事で早や一角が崩れたため、一時この案を見合わせる事にした。

その後柴田先生より妙法寺の岡田上人がつとに女学校設立の計画ありと聞いたから、岡田上人にお目にかかり、本案を進言することとなり、大正十五年の春、妙法寺に親しく岡田上人を訪い献策した。上人は即座に手を打って快諾せられたので、これからどしどし具体的に進捗した。

四月二十日、発起人会を開催して、左の案件を決定した。

- 一、 文部省高等女学校令ニヨリ、女学校ヲ設立スルコト。
- 一、 妙法寺ノ御遠忌記念事業トスルコト。
- 一、 創立委員トシテ左ノ十名ヲ決定ス。

委員長	岡田日歸
委員	柴田一能
委員	岡 教遼
同	藤井教詮
同	馬田即貞
同	木内瑞光
同	武見可質
同	山田潮進
同	寺尾與三
同	高瀬教闡

以上

※本稿は、『創立15周年記念誌』に収録された文章である。当時の時代背景を考慮して原文のまま掲載した。なお、一部現代かな・新字体としている。

②敷地の選定

委員一同は、生徒募集上、地の利に就いて相当考慮した。第一次は蚕糸試験所右隣五百坪余りの妙法寺所有畑地に定め、運動場は隣地某氏所有の荒蕪地を使用することとした。その後色々相談の上、校地五百坪位では、余りに規模小さしとの意見出で、第二次として、同年四月二十七日妙法寺西隣千百八十八坪を買収した。此処ならば妙法寺の管理の上にも都合よしとて確定した。しかして校舎は鉄筋コンクリート3階建にする設計を命じ、初めて「高等女学校建設敷地」と墨痕鮮かな標柱は建った。

直ちに全国の寺院、信徒方面に設立紀要、設計図、写真学則等を発送して、天下に公示した。その後宗門内外知名の士を会して、女学校建設の趣旨を述べ、意見を徴したら、郊外の女学校としては敷地狭隘なりとの意見出で、ここに第三次として現地五千坪に決定し、大根三四十本を引き抜き、標柱を建てたのは、実到大正十五年九月十二日龍口御法難の聖日であった。

③校名撰択

名は実の實なりと云うから名前をつけることは、なかなか六ヶ敷い。種類も色々出た。

立正、梅檀、浄徳、和雅、豊多摩、堀之内

委員間で各自固守して譲らない、数回会議に附されて最後の七月三日には、柴田先生と謀って、今日は、何としても「立正」で押しまろうと腹を決めて会議に臨み、到頭「立正」に決定したのであった。

④生徒募集

十月十日、委員会において技芸科併置の件と、初年度募集生徒数を左の如く決定した。

第一学年 百 名

第二学年 五十名

技 芸 科 五十名

しかし如何にして、募集するかには、実に心胆を砕いたものだ。ポスター、新聞広告、立看板、標柱、新聞折込広告、床や、浴場等あらゆることを、やったが一向に応募者がいない。三月に入っても、三十人あまりなので気がもめること夥しい。三月十日頃に府立第五の入学試験があるを知って、此の日の不合格者に入学案内を渡そうと考え、イヤガル妻を説得して千余の入学案内を持って第五の門前に立った。サテ風呂敷から出して両手



設立許可証と名誉賛助員名簿



創立当初の教職員

に持ったが、生れて初めての広告屋だ、何となく恥かしい。勇気を出して、門の両側で一枚ずつ渡し初めた、処が門衛に注意されて道路で渡すことになった。一礼をして渡すと一寸見てスグ道路に捨てるもの、見ながら帰るもの、コノ学校は、何処にありますかと聞くもの、色々であった。翌日から様子如何と見ていると五六日たってからポツリポツリと一人、二人ずつタマに来る位。どうも何をしていてもあまり効がない。気はアセル計りだ。其処で新聞折込広告をやろうと思って、木版を作って一万枚印刷した。それを大風呂敷で負い、ゴム長靴のいでたちで、雪降り朝のドロドロの中を、まづ淀橋附近の朝日新聞直配所へ千枚の折込を委託して、其手数料は一円であった。次から次へと聞いて十ヶ所に依頼した。その頃は地理も不明であったが今思うと、最後の新聞屋は高円寺通りであったらしい。今にして思えば乗物も利用せず、重い物を背負いながら根気よく歩いたものだ。

かくまでにして応募者は、僅に、百二十三名であったが、更に驚いたのは4月8日始業式の日に登校したものはタツタ

一年 両組 五十四名

二年 一組 十三名

専一年一組 三名

であった。両幹事は全く途方にくれ、心身共に疲れ切った。けれども岡田校主の真摯なる激励に対する僕等の責任感と、誠意とを以って事に当たったら何とかなるであろうとの信念を以て更に進んだ。

⑤開校式

大正十五年、十二月七日堀日正師（現校主）導師の下に、厳肅なる地鎮祭は行われた。秋山工務店は熱心に工事に従事し、極めて順調に進捗した。三月十日本館が竣工し引渡を受けた。四月二十八日文部大臣を初め朝野の名士を迎えて、午前十時より今の二年芙蓉、堇の二教室通した仮講堂で開校式を上げた。山田潮進氏の開式宣言について生徒一同の君が代斉唱を聞いた時、僕は万感胸に迫り、全身に水をかけられた様になり、暫し熱涙は頬を流れた。これが本当の嬉し涙であらう。胸中秘かに本校の発展を御仏に祈った事だった。岡田校主は静に壇上に立って、本校設立の所以を滔々数万言力説せられた、アノお姿は今尚僕の眼前に残っている。次で高島校長は校主から校長就任懇請を受諾せられた理由と、数十年教育に従事せられた経験から、智識偏重を矯正し真の日本婦人を養成する教育方針とを徹底的に述べられた。

6 寄宿舍問題

昭和二年十月九日の委員会は、ある建築物を寄宿舍として購入の件であつた。一枚の青写真により岡田校主初め各委員はヨイ掘出物だとして非常に乗気になり、特に学校なら安くするとの事であるとして、殆ど買う事に意見の一致を見た。しかし只一人僕は反対をした。と云ふのは青写真を見るに、モト料理屋にすべく、切り込んだもので、採光通風に極めてマズイのである。それに他にも思う事があつたので、僕は孤立無援であつたが頑として譲らなかった。終に岡田校主は、非常に激昂せられ、ヨシ学校の方にいないなら、茗谷園に（妙法寺経営の寄宿舍）買うとの仰せ。イヤ茗谷園になら僕は発言権はありませんからと云う事で一座ヘンな事になって解散した。

翌朝何かの用向で何うと、岡田校主は、突然僕に、アノ青写真に就いて、那須三郎技師に調査させてくれとの御言葉だったので早速宗務院で那須氏に調査を依頼した。ところがこの報告に依れば、何等現物がなく、全くのイカ物であつた事が判明して、その報告を申し上げると、そうかとの一言、軽くお笑になった。僕はあの時の失礼を謝し、単なる頑迷でなかった事を分って頂けたように思った。

7 岡田校主と甘酒

ある寒い日の夕方、学校事務上の事に関して何うと上人は笑顔をされて、今夜はワシが御馳走するからとの仰せ、ハテどんな御馳走かと待っていると、侍者に命じて小鍋と、酒の粕を取り寄せられ爐に鍋をかけ鉄瓶の湯を流し込み、ややあつて酒の粕を少しづつチギって入れ、箸でカキ廻し御手づから椀に盛って、ドーダ食べないかうマイよ、ワシが近頃発明した甘酒だ、とおっしゃる。僕はハイと答えたきりでなかなか手が出なかった。実は僕は酒と名のつくものは一切やらないのであつたが、余りおすすめるになるので、漸く一杯頂戴した。御自分は二三杯も召し上り、ドーダこんなウマイものが嫌いかと、にこやかに仰せられたことも、今はお懐しい思い出である。岡田校主の日常の御生活は、極めて簡素なものであつた。そして、イザと云う場合には、実に驚くばかりの巨財を出されて、色々な方面の事業を援助なされた事はかなり多い。本校の生れたのも実にそのおかげなのである。

8 ストーブ購入

生徒が多くなると、教室が増す、冬になれば毎年ストーブを

買入れねばならぬ。ある時、ストーブ購入の件で伺った。僕は持参したカタログや、ストーブ屋の店頭で見た雑駁な知識で色々巨細聞き訊されるのに、適当に答えた、話はだんだん石炭の燃え工合、ハテは煙突などに対する質問の射撃に僕も答弁に窮し、シドロ、モドロになった。するとやをら右脇の文庫からストーブの新聞広告の切り抜き七、八枚を僕の前に列べられ、ドレがよいかとの仰せなのだ。僕はすっかり閉口して、お人がお悪いと笑った事であったが、既にストーブについては充分な研究調査がされており、校主の用意周到と広博なる智識には実に驚き入った事であった。

⑨岡田校主と御遷化

大正十五年四月二十日第一回の委員会から昭和二年末に至る迄に、正式委員会開会前後三十六回、小数の会合を加へたら恐らく百回にも及ぶであろう。その間いつも岡田校主が中心であった、校主はいつも明論を吐かれ、又一面委員等の意見も、十分傾聴せられた。年に二三回学校にお見えになり、生徒にはいつも日蓮上人の孝について御訓話があった。

昭和六年三月、一宗の輿望を負って総本山身延山八十二世の法燈を継承せられ、同月八日堀之内より身延山に御入山となり、僕も東京から身延山まで御共を申し上げた。信徒は臨時列車二本三千余人で、近代稀に見る盛大な晋山式であった。同年十月一日には、畏くも、今上陛下より「立正」の勅額を身延山へ降賜の恩命に浴し、時の管長酒井日愼猷下と共に宮中に参内、親しく勅額を拝載、西山宗務局長、山梨県知事を初め多数の式員を従えて坂下門より退下せられ、シヅシヅと二重橋に進み、宮城前広場に参列待機せる数万の信徒等と共に、宮城に向い君が代の奏楽に一同斉唱し、次で最敬礼をなし高大なる君恩に感謝し奉った。アノ状況は、正に宗門空前の盛儀であった。爾来岡田法主は勅額法主と申し上げる様になった。本校生徒も参列其光榮に浴したのであった。

訃報

同年十一月十日、岡田法主は日蓮宗管長に進まれる事となったので同十五日僕は宗務院において、全国寺院に選挙発令の事務に努力し、午後四時頃完了した。そこで係員慰労の準備を賄方に命じて事務室に入るや、まもなく給仕より電話ですとの事、急ぎ受話機を取ると、宅より岡田法主が田中先生の申孝園で突然倒れられたとの知らせに、余は気も遠くなるばかりに驚いた。直ちに自動車をかって申孝園に走らせた。あの時位自動車の遅

いと感じたことはない。室に入れば、香煙既に四方に薫じて急に悲しさを誘った。室には望月日謙上人（現身延山法主、管長猊下）宇都宮日綱上人（現中山法華寺貫首）のお二方と、北川侍者のみであった。望月法主は僕の顔を見らるや「万事窮す」との御言葉のみ、既に西枕の岡田法主のみ霊いづれのところにか!! 僕は一言も発し得ず只々落涙するばかりであった。

学校は此の生みの親を失い、前途頗る暗澹たるものであったが、職員生徒一同は、更に強い信念を以って現堀校主を戴いて、進むことに決定した。師徒一同は上人の本葬儀に列し、大講堂を建設して御厚恩に報いんことを誓った。

10 大講堂建設

イ、仮講堂の三選

本校が講堂として使用した最初のもは今の本館二年の芙蓉と堇の二教室を通した、四十坪であつた。この処は昭和二年四月二十八日開校式を上げた記念すべき場所である。

第二は特別館の蘭、桐の二教室四十四坪であつた、爾来校運隆々として益々狭隘をつげたので、更に新館を増築することとなった。

第三は今の新館二階六十六坪を宛て壇上には少し飾を施した半永久的なもので、定員五百名の講堂としては十分ではないが、まづ辛抱出来る位であった。

ロ、大講堂設計着手

本校も遂に生徒千二百五十名女学校としては最高定員となったので、日歸上人報恩記念講堂建設はいよいよ焦眉の急となった。

僕は素人ながら、暇を見ては全館の原図を書いた。大体の腹案も立ったので、昭和十年七月、専断にも本館設計者であった松岡技師の来寺を求めて、僕の原図を示し模範的講堂設計を依頼した。氏は用意周到にもある一家を借り受け、同僚数人と研究し、近代建築界の粹と、百年後の進歩変化を予想し、しかも東洋建築の美を加味せんと非常な意気込みを以って快諾してくれた。

しかし、其当時は学校当局も、外部関係者側も、二三万円程度の木造講堂説が絶対多数であつたから、僕の計画も中止になる懸念は十分にあった。そうなると、数千円の設計料は僕が自腹を切った上に無駄なものとなるかも知れぬのであった。同年十一月設計図完成し数十枚の青写真は自坊に持ち込まれた。

ある日それを学校に持参し藤井幹事に青写真を示した 氏は、



記念講堂

只茫然、僕の顔を見つめ軽く青写真を見ただけであった、僕は一寸意気消沈の態であった。

要は資金問題だ。僕にはある程度の資金調達に確信があった。折にふれては、遠慮しながら藤井幹事の木造固守転向を計った。あらゆる角度から説いた。氏は容易にウンと云わなかった。

しかし藤井幹事も、松岡技師を呼んで調査と研究に当たっているのを時々見た。昭和十年十月応接室において米澤執事、藤井幹事、僕の三人会合。青写真を山と積んで鳩首熟議したが、藤井幹事はアク迄大事を取り、始終、僕の鉄骨説をナダメたり押へたりして木造説を固守した。仍て遂に短気な僕は憤慨した。曰く、僕は鉄骨説を撤回して君の木造説に賛成する、然し木造講堂には僕は一言も云わないから君が自由にやり給えと。

仲に入つた米澤執事はソウ怒るなよ、ドーだ借金しても返金の方法さえ確立していれば別に心配はなかろう、一旦木造でやると再び立て直すと云ふことは困難だからと調停した。サスガの藤井幹事も、和戦両様の腹でいたものか、ソレでは鉄骨でやろうと云った。僕はヤレヤレと安心、本当に安堵の胸を撫でおろした。

藤井幹事は、学校の全会計を預っているから、前後左右を考えねばならぬから、僕の思うが如く簡単には行かなかったのであろう。又妙法寺其他外部の声も聞かねばならぬ立場にあるから、苦境にある氏の胸中は十分に察したが、百年の計となつては僕も譲るわけにはいかない、都合に依っては断の一字も考えねばならないと思った。

いよいよ大方針は確立した。それからの藤井幹事の苦労は並大抵ではない。工事出願、監督、資金調達、など気の毒な位に心配したものだ。今や其功空しからず、東洋第一の、日歸上人報恩記念大講堂、続いて昨年中第二期工事であつた最新式特別教室、理科準備室、博物標本室計八室は完成した。全館八百十六坪、城西に誇る大殿堂である。聊か以って、岡田法主の大恩に報いることが出来た事と信ずる。

以上創立十五年間の大事の裏面を一部述べましたが本校の現状生徒一千五百名、職員四十三名、建物総坪数二千五百坪、敷地六千坪、財団資金七十万円を数える時、僕等の力ではなく、全く仏天の加護と校主、校長の指導よろしきと大方有縁各位の絶大なる御援助に依るものと深く深く感銘措く能はざる次第である。

Ⅱ 東京立正中学・高等学校の誕生とあゆみ

堀之内学園
東京立正の100年

The 100th Anniversary of TOKYO RISSHO

東京立正中学・高等学校 100年のあゆみ



初代校長 高島平三郎先生

① 創立の時代

堀之内学園・東京立正は立正高等女学校として発足した。

立正高等女学校は、日蓮聖人第650遠忌の報恩記念事業として設立された。昭和6（1931）年は、日蓮聖人が弘安5（1282）年10月13日に61歳の生涯を終えた命日より数えて650年目にあたっていた。当時の堀之内妙法寺30世の岡田日歸上人は、日蓮聖人650遠忌の記念事業として何をなすべきか、仏陀釈尊と日蓮聖人の教えを広く社会にひろめる上で、今最も大事なことは家庭の主体である女子の教育ではないか、と思慮し、女学校の設立をめざした。この折、岡田日歸上人は、「五重塔を建てるよりも、女学校を作って人間の塔を建てよう」と語った。わが国の本格的な女子教育は、明治維新から始まった。女子の進学熱は、急速に高まった。良妻賢母教育と人格情操教育が並行して行われる女子教育の展開、女子高等学校の新設と振興の気運を背景に、大正15（1926）年、岡田日歸上人は、女学校の設立を發願した。さらに、仏教精神による女子教育の実施趣旨、維持基金の設置、校地の選定、校舎の建設にとりくみ、立正高等女学校（立正高女）は、昭和元（1926）年12月28日に、文部省より設置認可を受けた。校名は、学校のシンボルである。学校を設立するポリシーと目的が、校名に結晶されていることが大事であった。「立正」は日蓮聖人の唱えた「立正安国」にもとづいて選定された。「立正」の校名は、法華経と日蓮聖人の精神と誓願を結晶するものとして定めた。

② 歴代校長時代のあゆみ

初代校長 高島 平三郎 先生

教育は人材の育成にある。人材育成のためには、確固とした教育方針と豊かな教育経験を持つ指導者を迎えることが必要である。校長は、教育界にその人ありといわれた高島平三郎先生に懇請し、昭和元（1926）年12月28日に校長就任が内定した。この日に初代校長に就任した。これ以降、昭和20（1945）年3月に退職するまで、18年間にわたり校長の任にあたって、法華経精神にもとづく女子教育向上と充実に献身した。クラスの名称が、植物の名より付けられているのは、本学の特色のひとつである。菫・蓮・葵・藤・百合・梅・桜……。これは、優美な女性にふさわしいものにしようという考えによっている。また、草花を愛する心、自然と共に生きる仏の心からでたものであった。

スクールカラーは、紫である。校章は「下り藤」に「八咫（や

たの) 鏡 (かがみ)」を模している。紫は、武蔵野に咲き匂う藤の花を指している。優美・謙虚・品性をそなえる女性の徳をあらわすのが、「下り藤」である。八咫鏡は、明るさ、知性、真実を求めて勉学する心を示している。

昭和2(1927)年4月28日、この日は、日蓮聖人が故郷安房(千葉県南部)の清澄山頂で、初めて暁天より旭が昇るまでお題目を唱え法蓮華による社会と人間の救済を宣言した記念すべき日に当たっていた。立正高等女学校は、これを記念して、この日を創立記念日と定めた。立正高等女学校は、開校以来、多くの注目をあつめ、次第に本校女子教育への評価が高まった。昭和4(1929)年10月7日、文部省と東京府の督学官が来校して、初めての授業視察がなされた。視察科目は、裁縫の授業であった。第2回目は、翌5(1930)年11月の東京府視学官による理化科授業の視察、第3回目は昭和7(1932)年2月の数学科授業の視察であった。本校は、開校当初より生徒の健康に留意し、他校に先がけて、ベッド4台などを備える生徒の休養室を設け、校医を依頼して、身体に健康に努めた。

立正高等女学校は、年々、入学志望者が増加し、創立当初の定員500名では収容しきれなくなった。入学率は3倍以上に達した。このため、仏教精神から見て、なるべく多くの生徒に門戸を開いて入学せしめるようにしたいとの方針を決定し、生徒の定員増加を申請していたが、昭和10(1935)年3月に文部省より定員増許可を受けた。これより、15学級制により、715名の定員増となった。昭和12(1937)年、日本は全面的な日中戦争に突入した。

国民精神総動員が叫ばれ、国内には戦時色が濃くなった。

昭和16(1941)年12月8日、日本軍はハワイを空襲、東南アジアを占領して対米英戦を布告した。昭和20(1945)年3月9～10日、東京大空襲があり、12万人が死傷した。

第2代校長 堀 日正 上人

昭和20年3月31日、初代校長、高島先生が引退され、4月より堀之内妙法寺住職で理事長堀日正上人が第2代校長に就任した。この時期、本校生徒は「ごま塩弁当」を持参して将兵の苦勞を偲んだ。また、校庭に学校農園もつくられ、ナス、キュウリ、トマトなど植栽し、稲、綿も栽培した。教員の多くは応召され、生徒も勤労働員に行ったり、疎開したりした。常時1,600名在学していた生徒は、昭和20年には500名に激減していた。戦争が日増しに激しくなるなか、本校生徒も、学徒報国隊・挺身隊の一員として勤勞奉仕にあけくれた。当時、本校は軍用に使われていた。講堂は軍用飛行場の設計室になっており、屋上は高



第2代校長 堀日正上人



第3代校長 馬田即貞先生

射砲の陣地と化していた。校舎は、軍需工場に用いられた。空襲によって、雨あられのように落下する焼夷弾によって、全校舎が一瞬にして炎上した。生徒たちは、必死に消火作業にあたったが、校舎はすべて焼失した。焼けただれた校舎の土台石が剥き出しになっていた。しかし、いちめんの焼土の中で、講堂だけは焼けなかった。堂々と、焼跡にそびえ立っていた。ヒマラヤ杉も、炎にも焼けず、枝葉を繁らせていた。悲惨な戦争と重苦しい灰色の時代を過ごした生徒たちは、堂々とそびえる講堂を仰ぎみながら、明るい平和な世の中がくることを願いつづけた。昭和22（1947）年3月、教育基本法の公布にともない、学制改革が施行された。

本校は、同年4月1日、学制改革によって、東京立正中学校の認可を受けた。ついで、昭和23（1948）年3月10日に東京立正高等学校として認可された。これにより、同年3月31日をもって、立正高等女学校は東京立正高等学校になったのである。

第3代校長 馬田 即貞 先生

この学制改革を機に、本校では第2代校長、堀日正先生（昭和20（1945）年4月～22年3月在任）に代わり、昭和22年4月から第3代校長として馬田即貞先生が就任した。馬田即貞先生は、昭和24（1949）年4月8日の釈尊降誕会を期して、念願の宗教情操教育の一環である毎日20分間の瞑想を講堂で実施した。戦災によって講堂を除く全校舎が焼失した直後であり、授業はもっぱら講堂で行われた。講堂は、1階、2階、地下室などすべてが教室に使われた。講堂舞台裏の「教室」を、生徒たちは、“うなぎの寝床”と名づけた。講堂2階には座席をベニヤで仕切った”階段教室“があった。裁縫用の机の最前列は、先生の教卓に使われ、生徒たちは膝をつき合わせて勉強した。やがて、バラック建教室8、木造平屋教室10、木造2階建教室12がつくられた。また、講堂の4階と地階に8特別教室が設けられた。昭和23年11月、松楓館を竣工した。松楓館は、体育館および小講堂として活用された。ここで、ダンスなど体育の授業、クラブ活動が行われた。松楓館は、昭和39年（1964）まで存続した。昭和25年（1950）3月、本校第1期の復興校舎が完成した。当時では先駆的な近代学校建築であり、“アメリカ式校舎”と通称された。玄関から入ると、1階建の校舎が長く続いていた。校舎の南面は、通風、採光、冬季温暖に工夫をこらし、北面も光を教室に採り入れ、室内の光度を南北より調整し、廊下の騒音を遮断する画期的な設計がほどこされていた。戦災で失われた教具、教材も、年々に旧に復した。修理、改装のほか、新設されたものも少なくなかった。調理室は、新設ステンレス

8人掛けの特殊割烹調理台がセットされた。音楽室にはピアノが置かれ、物理・化学準備室、化学実験室にも試験官はじめ各種の教具、教材が整えられた。

昭和25（1950）年、本校は創立25周年を迎えた。この時にあたり、本校では「創立25周年記念誌」の刊行を定め、11月1日に発刊した。同誌には、極東国際アメリカ奉仕国理事長、杉並区長など多方面から祝辞が寄せられ、新旧教職員の寄稿が掲載されている。翌26（1951）年11月2日、創立25周年記念祝賀式典が本校講堂にて挙行された。昭和26年3月6日、堀之内学園は、財団法人より学校法人に変更、許可を受けた。この年7月20日、神奈川県葉山海岸近くに「むらさき寮」が開設された。約60坪の2階建の木造で、約50坪の庭があった。この寮で、3日～7日の日程で合宿が行われた。寮は、昭和30（1955）年までつづいた。教育課程の刷新と並行して、学校設備の整備、拡充をはかった。昭和33（1958）年、第2運動場7,263㎡の埋め立てと整地を行い、翌34（1959）年4月に高校本館鉄筋3階、一部地下、計15教室、特別教室の整備と増設を実施し、また管理系統21室が完成した。同年6月、第1運動場のテニスコート2、バレーコート3を新設・整備し、第1期の整備拡充計画を完了した。この工事期間中、高校3年生（11回生）は、男子部校舎を分校として使用した。引き続き、昭和37（1962）年より、第2期の整備拡充事業に取りかかり、実現した。その中心は、女子総合体育館の建設と中学校舎の建築であった。中学校舎として、10教室を建てた。女子総合体育館は、主体育館をはじめ卓球場、体育器具倉庫、屋上体育場兼中学校朝礼場、生徒用・職員用・来客用の各更衣室とシャワー室、浴室、体育研究室、会議室、ロビー、ギャラリー、生徒食堂と付属倉庫、水泳プールとスタンド、バトミントンコートなどを設けた近代的な総合体育館を建設した。この最新設備によって、中学・高校の設置基準を更新したのみならず、旧来を超えた規模と威容を備える、名実共に城西地区の女子校として、本校は再建事業を完遂し新体制を整えた。昭和39（1964）年、この年は10月に東海道新幹線が開業、東京オリンピックが華々しく開催された。また、第1期ベビーブームが到来した時でもあった。本校の高校在校生は、約2,600名に達した。中学生も入れると、約3,100名であった。高校は、1学年が16級、2学年は14級、3学年は14級に及んだ。1級が63名というところもあった。



第4代校長 岩本経丸先生



第5代校長 石川教統先生



第6代校長 船越公道先生

第4代校長 岩本 経丸 先生

昭和40（1965）年4月1日に岩本経丸先生が第4代校長に就任した。10月29日、学園は「東京立正創立四十周年・東京立正女子短期大学開学記念式」を講堂にて挙行了。この式典には、文部大臣代理、東京都知事代理、各界代表・日本医師会武見太朗会長、私立学校振興会理事長、東京都短期大学協会会長、日本私立中高連合会会長、全国普通科高校会長が来賓挨拶した。また、藤井教詮短大学長、岩本経丸中・高校長がそれぞれ学務報告を行った。学園は、この時を期して「東京立正創立四十周年記念誌」の編集をはかり、翌41（1966）年10月25日に、記念文集と研修要録第3号より成る記念志を刊行した。

昭和45（1970）年7月18日、突然、本校を「光化学スモッグ」が襲った。生徒は、急に気分が悪くなり、激しい咳などで次々に倒れ、20名が入院したが、まもなく退院して事なきを得た。これは、「光化学スモッグ」によるものと言われた。国民全体が初めて聞く名であった。昭和45年3月14日、日本万国博覧会が大阪で開幕した。次第に国際化の波がひろがった。

第5代校長 石川 教統 先生

昭和46（1971）年10月18日、石川教統先生が第5代校長に就任した。昭和57（1982）年4月、日蓮聖人700遠忌の記念事業として、特別教室、図書館、ホールなどが完成した。

昭和61（1986）年4月より、制服をモデルチェンジした。この制服は、大いに評判となり、制服に憧れて入学を希望するケースもみられる。石川校長先生は、文化、経済、政治のすべてが、国際化の新しい方向を求めて模索している現状であることが認識され、その認識に基づき、これからの国際社会に生きる国際センス豊かな女性を育成する教育の一環として、本校にも「生徒の海外研修」の基盤を構築した。

第6代校長 船越 公道 先生

昭和62（1987）年4月、船越公道先生が第6代校長に就任した。現在、瞑想時に使用している「御遺文抄」は船越校長先生の命を受け、平成元（1989）年2月に御遺文抄委員会が生徒にとって理解しやすい御遺文を精選・編集したものである。国際化の時代に対応して、同年7月、第1回中学3年生（必修）と希望する高校生による、イギリス、ケンブリッジ研修ホームステイが開始された。平成7（1995）年からは、第1回高校生希望者によるニュージーランド研修も開始された。船越先生は、

昭和39（1964）年に諸般の事情で手離した校外施設「むらさき寮」に代替する校外施設を提言し、これにもとづき、平成5（1993）年11月、長野県湯の丸高原に、校外林間学舎「湯の丸高原荘」が完成、平成6（1994）年9月中学1年生身延参拝・湯の丸林間教室、12月高校1年生必修のスキー教室が開かれた。湯の丸高原荘は平成27（2015）年まで続いた。日本が好景気に沸いた1990年前後、中学受験ブームが起き、本校も中学3クラス編成が数年続いた。昭和60年代、少子化社会の進行により、就学人口の減少傾向はますます顕著となった。後に本校も中学高校とも男女共学に踏み切ることとなる。平成6年文部省の高校教育課程の大幅改訂により、選択科目を導入した普通コースと英語、国語を重点とする特進コースを設けて、生徒募集が別々に行われ、入学時から教育課程が異なる。特進コースでは7時限授業、夏期特別講習等も組み入れた。平成7（1995）年8月高校2年生特進コースの湯の丸高原荘での宿泊夏期講習を開始した。

第7代校長 廣川 富男 先生

いよいよ本格的に男女共学を目指す方向でスタートした。その準備として、制服検討委員会を立ち上げ共学化・制服採択、体育館建築、講堂座席改修、男子を受け入れるためサッカー部や男子バスケットボール部などの部活動を増設した。教員は初めて受け入れる男子に対し、女子とはまた違う指導法が必要とされるかもしれないと、期待と不安の入り混じった心境であった。平成10（1998）年4月、廣川富男先生が第7代校長に就任した。私立学校の教育においては、「教育の理念」を明確に意識し、それに基づいた教育を行うことが重要である。生徒も簡潔に表された理念ならよく理解して勉学に励むと、廣川校長先生が当時の理事長駒野先生に理念の明文化を提言した。その結果「生命の尊重、慈悲・平和」が本校の理念として制定され、各教室には理事長先生直筆で「生命の尊重、慈悲・平和」の額が飾られ今日に至っている。平成12（2000）年2月岡田日歸上人記念講堂改修、平成13（2001）年8月本館改修が終わった。平成14（2002）年3月第2体育館が完成し、これまでの女子校の歩みから一歩進化させ、同年4月男女共学となったのである。クラス名は植物の名前であったものをABCとアルファベットに変更した。女子だけの学年は共学の学年を羨望の眼差しで見っていた。公立学校では平成4（1992）年から段階的に学校週5制の導入が始まった。本校も平成10年から学校5日制を導入した。強く大学進学を求める生徒も年々増え、高校生は希望者・中学生は必須として土曜日講習が実施された。



第7代校長 廣川富男先生



第8代校長 山口隆也先生

第8代校長 山口 隆也 先生

平成15（2003）年4月、山口隆也先生が第8代校長に就任した。学校週5日制を導入し、数年続いたが、平成15年4月から6日制に戻した。保護者からは土曜日に授業があると喜ばれた。山口校長先生は、入学者に対して、学校のイメージや価値観を伝えるキャッチフレーズを考えてほしいと教職員によびかけ、「生徒と先生の鼓動が響きあう、木もれ日の学園」に決まった。年1回の芸術鑑賞会は本校講堂で実施されていたが、平成16年度から、文化・芸術を鑑賞・体験することで豊かな「創造力、想像力」の育成に大きな効果があると、山口校長先生が、本格的な場所で芸術鑑賞会をすることを提案した。アバのヒット曲で描かれた劇団四季のミュージカル「マンマ・ミーア」を観劇した。プロの人達の動きや表情は素人とは全然違うものであった。個性的なキャラクター達の心情が、それこそ指先一本一本まで全身を使って表現されていて、音楽との相乗効果もあってか、舞台に釘づけになったという感想が多くの生徒からあった。平成16（2004）年7月、環境問題を考える活動の一環として、高校1年生および2年生の希望者が奥多摩の山林を訪れ、インストラクターの指導のもと、下草刈りや間伐などの森林保全活動を実習形式で行った。この行事は後に夏から冬に変更して数年続いた。



第9代校長 宮下隆先生

第9代校長 宮下 隆 先生

平成20（2008）年4月、宮下隆先生が第9代校長に就任した。体育祭や合唱コンクールや紫苑祭などの行事のたびに、男子の活気ある姿がういういしく、その新鮮な空気が学校の隅々まで行き届き、校風の変化を肌で感じる日々を迎えることとなった。宮下校長先生の提案で、平成21（2009）年7月期末考査終了後、大自然の中、共同生活を通して知的好奇心や他人を思いやる心を育むことを目的として、学園の校外施設「湯ノ丸高原荘」において高校1年生（スタンダードコース必須）の林間教室が2泊3日で実施された。1日目自然保護活動の一環として、指導員の方と一緒に下草刈りや間伐体験。2日目三方ヶ峰への登山、池の平湿原散策、湯ノ丸高原キャンプ場でカレーライス作り、夜はキャンプファイヤー、3日目は「環境問題」を考える授業。3日間を通して間伐体験をしたり、環境破壊についてのビデオを見たりして自然に対する見方が変わったという感想が生徒からあった。この行事は数年続いた。教員の授業スキル向上を目的として、年2回、担当クラスの生徒を対象に「授業アンケート」を実施。得られた結果は、教員個々の授業改善

に資するとともに、教科内での情報共有を通じて組織的な授業力の向上に取り組んだ。平成23（2011）年3月11日、本校では学年末試験の答案返却日であった。午後2時46分校舎が激しく揺れ始めた。第2体育館屋上のプールに張ってあった水が地上に零れ落ちて、体育館脇にある通路が川となった。不幸中の幸いともいうべきか、その日は午前中で終わる答案返却日であったため、大方の生徒がすでに帰宅していたのである。学校にいたのは部活動で残っていた約百名ほどであった。災害用に備えていた非常食、ガスや水道のライフラインが使用できたので、家庭科の先生方が温かいスープを作って学校に宿泊した生徒や教職員の心を温めた。保護者の迎えをひたすら待ち、帰宅できない生徒と教職員は学校に泊まった。翌日には宿泊をした生徒は全員帰宅した。本当に辛い思いをしたのは私たちではなく、津波や原発でその後長く苦しむ東北の人たちであることを忘れてはいけない日となった。

第10代校長 澤田 幸雄 先生

平成25（2013）年4月、澤田幸雄先生が第10代校長に就任した。男女協働し合って社会の仕事を担い、お互い思いやりをもって、21世紀のグローバル社会を生き抜く力を養成するための教育内容の改革を推し進めた。平成27（2015）年4月中高一貫イノベーションコースがスタートした。一期生中学2クラス。澤田校長先生はインターネットを通じてゲーム感覚で学ぶことができる対話型デジタル教材「すすら」を関東圏で最初に導入した。全校生に毎週英語と数学を宿題と課し基礎学力の定着を図った。英検や数検対策にも活用した。特にアドバンストコースの英語の授業では、生徒に「すすら」を家庭で予習させ、その単元についての「反転授業」を展開した。その様子を他校の先生方が多く見学され、「すすら勉強会」も開催した。さらに、生徒全員にタブレットを持たせ、各教室に電子黒板を設置し活発な授業を実現させ、ICT教育に力を注いだ。学習能力に優れている生徒も多くなってきたので、予備校の講師を招いて、高2高3の希望者を対象に「放課後ゼミ」を実施した。中高一貫イノベーションコース中学最終学年プログラムとして、平成30（2018）年3月、中学3年生カナダ語学研修旅行が実施された。グローバル社会の中で堂々と生きる上で大きな機会となって帰国した。澤田校長先生の命を受け、制服検討委員会によって、平成30年に制服は全面的に刷新された。いわゆるフルモデルチェンジであり、従来のデザインを一新する大きな転換であった。スタイルやセンスに対する感度が高い現代の生徒たちにとって、この新制服は好感をもって迎えられたようである。同年4月、



第10代校長 澤田幸雄先生



第11代校長 梅沢辰也先生

高校はスタンダードコース、アドバンストコースに加え、イノベーションコースを設置し、飛躍へ向かう生徒たちが入学してきた。

第11代校長 梅沢 辰也 先生

平成31(2019)年4月、梅沢辰也先生が第11代校長に就任した。

梅沢校長先生は、「時間とは命そのものである。時間の使い方はそのまま命の使い方。時間を無駄にすることは、自分の命も無駄にする。限りある命だから、一日一日を大切にしなければならない。」という観点から「チャイム」という何かの合図で始まるのではなく、自分の意志で行動できるように「ノーチャイム」制度を導入した。「ノーチャイム」に対して生徒たちから、社会に出た時のことを考えて、今のうちから時間を管理することが大切だと思うなどの感想があった。令和2(2020)年2月高校2年イノベーションコースで第1回カンボジア研修旅行が実施された。「記念すべき第1回研修旅行」は無事に終了した。

同年3月新型コロナウイルス感染拡大を受けて、3月から5月まで臨時休校となった。新学期当初、各学年の教員が、学年生徒全員分の教科書や副読本などを各家庭に発送する準備に当たった。学校再開までオンライン授業導入。通信回線設定・プリンター多用等、ICT環境の頻の活用によって各家庭に負担を掛けた。オンラインでの朝礼や授業を行われたため、生徒と意思疎通を図ることが難しかった。しかし本校では“学びの機会を促進する”一助になればと願った。首都圏の非常事態宣言が5月25日に解除されたので6月8日から分散登校、7月6日から一斉登校。学校再開にあたり、使用教室等の消毒の徹底・消毒液の設置・不織布マスク着用等の感染予防対策をとった。7月末まで1学期を延長して授業の充実を図った。2学期になって体育祭や紫苑祭は規模を縮小して実施された。コロナ禍であっても中学の宿泊行事は、全て実施したが、令和2年度沖縄修学旅行はオンライン実施に変更し、令和2・3年度のスキー教室は中止した。令和3(2021)年度よりアメリカ・イギリス・カナダ・オーストラリアの大学を対象とした「海外大学進学協定推薦制度」を導入した。この制度により日本国内にとどまらず、海外大学への進学も支援可能となった。令和4(2022)年8月20日第5回国家百年の計の会が本校で開催された。憲法についての勉強会に続き、松下政経塾出身の政治家さんと本校高校生徒が、選挙における一票の格差や平和主義の観点から核の共有や18歳選挙権などについて公開ディスカッションを実施した。

同年11月「岡田日歸上人記念講堂」が、築85年の「戦前から

残っている鉄筋コンクリート造の学校講堂」という点から評価され国の登録有形文化財（建造物）に登録された。新型コロナウイルス感染の落ち着きを受け、梅沢校長先生は英語力の向上だけでなく、多文化理解や国際感覚を養う機会として「ターム留学」の実施を打ち出した。令和4年ターム留学検討委員会が設置され、留学する生徒を選考した。令和5（2023）年1月ニュージーランドターム留学が実施され、4月中旬に大きな成果をあげて帰国した。同年8月22日「午前」は北海道根室高校と沖縄興南中学高校と本校との第一回学校間交流を開催。北方領土研究会の活動、興南アクト部の活動、本校のSDGs活動について共有し、それぞれのことを「自分事として」捉える第一歩が始まった。「午後」は第6回国家百年の計の会を開催。根室高校と本校の生徒が発表、その後松下政経塾出身の政治家との公開ディスカッションを実施した。令和6（2024）年1月第2回カンボジア研修旅行が実施。同年4月、本校は創立98年を迎えた。式後の記念講演では、フードビジネスプロデューサーおせっかい食堂経営阪田浩子先生が「チャンスの極意」について講演した。同年8月18日第7回国家百年の計の会が本校で開催された。「午前」は根室高校と興南中学高校と石川県輪島高校と本校との第二回学校間交流会を開催。それぞれの学校紹介や取組み発表を行い、共通のテーマとして「能登半島地震の現状」についてディスカッションを行った。「午後」は松下政経塾出身の政治家と本校生徒が、能登半島地震からの復興や憲法改正等について公開ディスカッションを実施した。

令和7（2025）年2月第3回カンボジア研修旅行。同年4月、本校は創立99年を迎えた。式後の記念講演では、朗読家の葉月のり子先生を招いた。先生が一方的に講演するのではなく、生徒と一緒に朗読の楽しさを表現したいという希望により夏目漱石「こころ」芥川龍之介「走れメロス」を代表生徒と一緒に朗読した。最後に講堂にいる全員で「アンパンのマーチ」を群読した。同年5月に「1年間留学」と「2ターム留学」制度を新たに導入した。同年8月24日第8回国家百年の計の会が本校で開催。中高生による「国家百年の計の発表」その後政治家とのディスカッションが行われた。

働き方改革の実効性を伴う法整備が進められ、平成31（2019）年4月1日には「働き方改革関連法」が施行されたことにより、中小企業を含むすべての事業所が課題解決への対応を迫られることとなった。本校においても、過労死や健康悪化の防止を目的とし、長時間労働の是正や労働時間の適正な管理に重点を置いた取り組みが、令和5年10月より本格的に始まった。



授業風景

③立正技芸専修女学校の独立

立正高女の附属として設けられた技芸科は、昭和3（1928）年4月に各種学校令により東京府知事の許可を受けた。その後、普通科との格差が見られるため、昭和6（1931）年3月、独立した技芸学校に改善した。「立正技芸専修女学校」という。職業指導を主眼とし、社会に働く女性になるための教育内容の充実にとりくんだ。後に、立正第一女学校と改称した。

④堀之内中学校

堀之内妙法寺の歴代住職は教育に熱意を持ち、幾多の教育機関を設立した。第31世堀日正上人は、岡田上人が立正女学校を設立したことをうけて、男子校の創設という願いを持っていた。堀日正上人は、教育の対象を男子とし、昭和16（1941）年に堀之内中学校を開校した。翌年8月、物資の乏しい中にもかかわらず、校地1,500坪に270坪の校舎を竣工した。堀日正上人は、「真に尊きものは教育、強きものは教育」とのべ、僧侶子弟だけでなく広く一般男子を対象とする夜間中学校を開校した。規模は小さかったが、初代校長は女学校校長の高島平三郎先生、のちに女学校幹事の藤井教詮先生が第2代校長に就任、女学校と合併後は馬田即貞先生が校長となった。昭和20（1945）年度旧制夜間中学の第1回の卒業生12名が感激をもって世に送られた。昭和24（1949）年度、同25（1950）年度、新制中学卒業生は153名を数えたが、これが最盛期であり、昭和26（1951）年度には中学卒業生はなく、昼間、夜間共に生徒が減少し、昭和29（1954）年度夜間部高等学校生徒21名の卒業をもって、卒業生合計632名を送り出した堀之内中学校の歴史の幕は閉じられた。



堀之内中学校校舎

① 校内外の取り組み

■ 進路指導とその実績

本校は長きにわたる女子校から転じて、平成14（2002）年に共学校として新たにスタートしました。スタンダードコース・イノベーションコース・アドバンストコースの3つのコースが設定され、それぞれの進路目標を実現すべく様々な受験対策を行ってまいりました。

模擬試験や小論文模試、講習（夏期・冬期・春期）、コラム指導、キャリアノートによる進路学習、スタディサブリ（アドバンストコース）、スタディサブリ到達度テスト（アドバンストコース）などを行っています。模擬試験と小論文模試は年に複数回実施しており、特に一般選抜での国公立難関私大合格を目指す高校3年のアドバンストコースは、模擬試験を年に7回実施しています。

また、入試で小論文を試験科目とする生徒に対しては、小論文指導を行っています。過去問を参考に類似問題に取り組み、複数回の添削指導を行うことで合格を目指します。総合型選抜や学校推薦型選抜だけでなく、近年では一般選抜においても取り入れる大学が増えている面接についても指導を行っています。複数回の面接練習を重ねることで、自信をもって本番に臨めるように指導します。

進路行事としては、各学年別の進路説明会以外にも大学進学に向けた各種イベントを行っています。大学の先生方をお招きして大学の講義を受講する高校1年生対象の大学模擬授業や、大学の入試広報担当者による高校1・2年生対象の大学ガイダンスなどを校内で実施しています。他にも、外部業者によるGMARCH・日東駒専研究会や小論文講習会、また本校を卒業した社会人による進路講演会なども行っています。この会は卒業生自身が進路先決定に至るまでの様々な経験とアドバイスを在校生たちに伝えてくれるものです。これらのイベントは、生徒たちが進路について真剣に考える大切な機会となっています。

令和2（2020）年度からは大学入試改革が行われたことで、大学入試の方法区分が一般選抜・総合型選抜・学校推薦型選抜となり、「学力の3要素」つまり「思考力・判断力・表現力」のバランスよい評価が促進され、総合型選抜・学校推薦型選抜では何らかの形で学力を問うことが必須となり、一般選抜でも学力以外の能力評価も重視されるようになってきました。高校3年間の様々な活動が進路に繋がるため、部活動・委員会活動・ボランティア活動など勉強以外の活動にも積極的に参加したり、英検や漢検、数検などの検定試験にもチャレンジして資格取得



進路指導講演会

にも励むように指導しています。また、夏休み中には大学の講義動画を視聴したり、オープンキャンパスに参加して上級学校を知ること、自分の将来についてより真剣に考えるように促しています。

本校の4年制大学進学率は、令和3（2021）年度に初めて8割を超え、令和6（2024）年度は過去最高の85.7%という結果でした。また指定校も年々増加しています。創立百周年を迎える本校は、更なる飛躍を目指して日々精進しています。より生徒の力を引き出し、より良い自己実現の道が選択できるよう、全教職員が一丸となって今後も指導してまいります。

【令和6（2024）年度 進学状況】

4年制大学	85.7%
短期大学	2.6%
専門学校	7.9%
未定・他	3.8%

【これまでの主な現役合格大学(50音順)】

青山学院大学	麻布大学	亜細亜大学
跡見学園女子大学	植草学園大学	江戸川大学
桜美林大学	大妻女子大学	嘉悦大学
学習院大学	学習院女子大学	神奈川大学
神奈川工科大学	金沢工業大学	川村学園女子大学
神田外語大学	関東学院大学	北里大学
共立女子大学	杏林大学	敬愛大学
慶應義塾大学	恵泉女学園大学	工学院大学
國學院大學	国際医療福祉大学	国士舘大学
こども教育宝仙大学	駒澤大学	駒澤女子大学
埼玉工業大学	相模女子大学	産業能率大学
実践女子大学	芝浦工業大学	十文字学園女子大学
淑徳大学	順天堂大学	松蔭大学
城西大学	城西国際大学	尚美学園大学
昭和女子大学	女子栄養大学	白梅学園大学
白百合女子大学	杉野服飾大学	駿河台大学
成蹊大学	成城大学	聖心女子大学
清泉女子大学	聖徳大学	西武文理大学
専修大学	洗足学園音楽大学	創価大学
第一工科大学	大正大学	大東文化大学
高千穂大学	宝塚大学	拓殖大学
多摩大学	玉川大学	千葉科学大学
千葉工業大学	中央大学	筑波大学
都留文科大学	帝京大学	帝京科学大学

帝京平成大学	デジタルハリウッド大学	桐蔭横浜大学
東海大学	東京有明医療大学	東京医療学院大学
東京学芸大学	東京家政大学	東京家政学院大学
東京経済大学	東京藝術大学	東京工科大学
東京工芸大学	東京国際大学	東京純心大学
東京女子大学	東京女子医科大学	東京女子体育大学
東京成徳大学	東京電機大学	東京都市大学
東京都立大学	東京農業大学	東京福祉大学
東京富士大学	東京未来大学	東京薬科大学
東京理科大学	東都大学	東洋大学
東洋英和女学院大学	東洋学園大学	獨協大学
長崎県立大学	二松学舎大学	日本大学
日本映画大学	日本経済大学	日本工業大学
日本獣医生命科学大学	日本女子大学	日本女子体育大学
日本体育大学	日本文化大学	日本薬科大学
人間総合科学大学	兵庫県立大学	福井県立大学
文化学園大学	文教大学	文京学院大学
平成国際大学	法政大学	武蔵大学
武蔵野大学	武蔵野音楽大学	武蔵野美術大学
明海大学	明治大学	明治学院大学
明星大学	目白大学	ヤマザキ動物看護大学
横浜美術大学	立教大学	立正大学
流通経済大学	和光大学	早稲田大学

(佐藤 恵美子)

■「東京立正×イノベーション」

「イノベーションコース」の名づけ親は、第10代校長澤田幸雄先生です。新設される中高一貫コースの名前についての提案を伺ったとき、時世に合っていて澤田先生らしいセンスであると思いました。同時に、「変革」と「東京立正らしさ」を融合させていかねばならないと、責任の重大さを感じたことを覚えています。

澤田先生が、校長に就任される前の平成24（2012）年、今後の新しい東京立正中学校高等学校の在り方を中堅若手の教員グループで考える会を立ち上げられ、私はその座長として話し合いを進行する役目を任され、さまざまな専門分野を持つ教員がそれぞれに研究結果を持ち寄りました。私は、家庭科の教員として、各人の生活が社会や自然環境に与える影響について教えており、ESD教育（Education for Sustainable Developmentの略で「持続可能な開発のための教育」と訳されています。）の普及に努める国連が取り組むユネスコスクールに注目しました。



福島支援活動

本校の建学以来進めてきた教育活動は、世界に通用する教育理念のもとに行われているということに改めて気付かされ、澤田校長先生の求める「世界に開かれた教育により世界に貢献する人材育成をする」というお考えに、まさに合致していると発表しました。そして、ユネスコスクールへの加盟申請書類等を多田恵理子副校長先生に翻訳していただき提出した結果、平成26(2014)年にはユネスコスクールへ加盟が認可されました。また、新設された中学イノベーションコースの主任として、新たなスタートを切りました。ひとり一台端末、インターネットを利用する学習や学習記録、校内外で利用できる安全なSNS、そのための無線LAN設備の整備、海外とインターネットを介しての交流、全員での海外研修の復活、など、他校に先駆けて取り組みました。それと同時に、第9代校長宮下隆先生が注力されていた、敷地内での畑作りを拡大し、学年の枠を超えて縦割りの班編成で、子どもたちの自主性や協働を重視した取り組みへと発展させました。令和2(2020)年には、ユネスコスクールのESD教育は、SDGs委員会の立ち上げとその活動へと発展し、その基盤となっています。

本校の「イノベーション」とは、過去を打ち消すものではなく、100年続く教育が今の言葉でどのように表現されるか、今の技術でどのように具現化していけるかを探り、新しい教育と融合させていくことだと考えています。

創立100年を迎える現在では、地元杉並の住民の皆さんをはじめ、日本各所の中高生やアジアやオセアニアの子どもたちとの交流など活動の場を広げています。その様子を見るにつけ、東京立正が常に「イノベーション」を遂げながら成長していると実感しています。

私自身がどのように東京立正中学校高等学校の教育に貢献できるのか、伝統ある講堂の床を磨きながら構想を練り、精進し続けます。

(増子 めぐみ)

■紫友会の活動

本校生徒会は「紫友会」と言われています。「紫」は謙虚で上品な徳を示しており、紫友会は、自主的機能を高め、健全な学校生活の規律を図ることを目的とし活動しています。

紫友会の組織は以下の通りです。紫友会の中心となっているのが「中央委員」です。会長、副会長、書記2名・会計2名・学年委員9名(高校は各学年2名、中学は各学年1名)、整備・風紀の正副委員長、文化・体育の正副委員長の23名から成り立っています。主に行事の企画・運営を担当し、生徒の代表とな

る立場になります。各クラス生徒の委員・係は以下の通りです。クラス委員各2名、整備委員・風紀委員各1名、ボランティア係各2名～（中学は1名～）、図書係各2名で活動しております。

紫友会が企画・運営する行事は主に、1学期のクラブ発表会、2学期の紫苑祭、3学期の送別会があります。特に紫苑祭は紫友会が主体となり、作り上げるものとなっており、テーマや制作物の決定にも関わっています。過去10年分のテーマは以下になっております。

【平成】

28年度（2016年度）追憶・前進・未来

29年度（2017年度）Together As One～心をひとつに～

30年度（2018年度）百花繚乱～思い出を形に 未来へつなぐ～

31年度（2019年度）青春輝く私たちの令和の1ページ

【令和】

元年度（2019年度）青春輝く私たちの令和の1ページ

2年度（2020年度）花鳥風月

3年度（2021年度）It's a dream world

4年度（2022年度）掴め青春

5年度（2023年度）enjoy～今しかできない青春を～

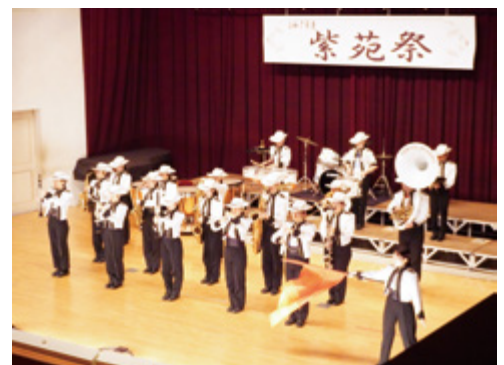
6年度（2024年度）青春謳歌～今を楽しめ～

7年度（2025年度）十人十色～個性あふれる紫苑祭～

紫苑祭は基本的には各学年で取り組む内容が決まっており、中学生は模擬店以外の展示やアトラクション、高校1年生は展示や動画上映、高校2年生はアトラクションや喫茶店、高校3年生は模擬店といった企画を行ってきました。しかし、この10年間で令和2年度～令和4年度まで新型コロナウイルスの影響により、通常開催ができなかったため、全校がクラス企画として動画上映を講堂で実施し、展示のクラスや物品販売を行うクラスのみ第2体育館で販売するといった時期がありました。ほぼ通常の形で実施できたのは令和5年度からでしたが、コロナ禍での実施の方法と以前の実施の方法とを合わせて考え、より良い方法を模索しております。本校と約半世紀ほど交流が続いている高井戸の「社会福祉法人浴風会 浴風園」の方々とは、紫苑祭の中で「浴風園の方との集い」と題して食事会や部活動発表を観ていただく機会もありましたが、コロナ禍で一時中止となり、令和7年度で再開しました。私が代表になった際はコロナの影響を受けていた時期でしたので、中央委員の生徒と試行錯誤し、それまで行っていた企画を見直して残すものと形を変えるものの選別に苦戦しました。



紫友会の面々



紫苑祭



海外研修

コロナ禍といえば、本校の地域に根ざしたボランティア活動が発展するきっかけともなりました。全校生徒から募集する「東京高円寺阿波踊り」・「子ども食堂in東京立正」・「健康とスマホのちょこっと相談会」・「堀ノ内東児童館ボランティア」などのさまざまな取り組みはSDGs活動を行う上で、地域の方々との関わりをより深めたいというテーマで進めてきたものです。例年ボランティア募集を行うとすぐに希望生徒が集まります。みんなで誰かのために取り組もう、活動をしていること自体が楽しいなど、前向きな理由で参加してくれる生徒が増えました。

紫友会が企画する行事としてあと2つ先述しました「クラブ発表会」と「送別会」があります。「クラブ発表会」は、これまでダンスドリル部・音楽部・演劇部・軽音楽部・ダンス部が参加し、1学期終業式後に講堂で行われます。各部の発表の機会として、生徒に見せる年度最初の舞台だけあって、素晴らしい盛り上がりを見せてくれます。

「送別会」では、上の部活動に吹奏楽部も加わり発表会を行い、コロナ禍からは先輩たちへのサプライズ企画として第一ラウンドで全校生徒がお見送りをするといった企画ができました。直接お祝いの言葉を言う機会となり、別れを惜しむ様子が印象的でした。

その他、紫友会では「学校PR部」という学生のための団体に所属し、学校の紹介をしたり、本校の高校説明会を生徒だけで実施する企画の中心となり活動をしたりすることで、自主的な活動が増えてきました。また、紫友会広報という部署も設け、行事の取り組みの様子を動画にまとめたり、SNSで発信したりするなどの活動もすすんで取り組んでくれるようになりました。先輩後輩の仲もよく、紫苑祭の準備などでも後輩が心配で受験勉強で忙しい高校3年生の生徒が見に来てくれることもあり、良い雰囲気代々引き継がれている様子です。学校の代表として今後も積極的に自分たちの言葉で情報を発信し、校内の課題にも対策を講じていける内外に動ける紫友会になってほしいと願っております。

(原子 桂輔)

■海外研修

本校の海外研修は、船越公道先生が昭和62（1987）年に校長に就任された際に、教育方針の1つとして「海外研修」の実施を打ち出したことで始まりました。

当時、昭和から平成へと時代が移り変わろうとしている中で、国際社会における国際交流および英語を駆使する必要性や重要性が高まっており、国際交流をはかり自己表現のツールとして

英語を扱うことができる学生を育成するために海外研修の実施が具体的に検討され始めました。日程や経費をはじめ、滞在地や時期等様々な事項が検討され、千思万考の結果、平成元(1989)年に第1回海外研修ホームステイがイギリスのケンブリッジで行われ、中高生合わせて100名以上の生徒が18日間の海外研修を体験しました。

高校生希望者対象のホームステイは、最初は中学3年生と同時期に合同の形でしたが、平成7(1995)年には中学生とは別内容のホームステイがニュージーランドのウティアングで実施され、イギリスと同じくこちらも大きな成果を上げました。その後ホームステイは参加人数の減少や費用等の面から、イギリス、ニュージーランドともに場所の見直しがされたため、一旦実施されなくなりましたが、平成12(2000)年から滞在地をオーストラリアに変更し再び実施されることとなりました。オーストラリアに変更後、10年以上海外研修は継続的に実施されてきましたが、コロナ禍の影響で令和2(2020)年から3年間の中止を余儀なくされました。海外へ行くことがままならない状況がしばらく続き、最終的に令和5(2023)年に再び海外研修が可能となりホームステイが復活し、現在に至ります。

現在は夏休み中の11日間の日程でオーストラリアでのホームステイを実施しています。オーストラリアへ約10時間のフライトを経てシドニー空港に到着した日は、シドニー市内観光を行い、オペラハウスやハーバーブリッジなどの観光地を巡ります。市内観光が終わるとシドニーから南方に車で1～2時間ほどにあるニューサウスウェールズ州のウロンゴンという都市を訪れます。ウロンゴンは人口30万人の海と山の両方に囲まれた自然豊かな都市です。ウロンゴン到着後はホームステイ先のファミリーと対面し夕食をともに過ごし、いよいよホームステイが始まります。翌日以降は現地校に赴き、授業に参加させてもらいながら様々なアクティビティを行い、現地校の生徒と海外の学校生活を体験します。また、週末は各ホームステイ先のファミリーとともに過ごし交流を深めます。

生徒たちは、最初は緊張からか、なかなか自主的に話しかけられず思うように意思疎通ができずに苦労していますが、ホストファミリーや現地校の学生や先生方の優しさに触れ、徐々に積極的になっていく姿を見せてくれます。うまく英語が喋れなくても、身振り手振りを交えて何とか自分の意思を伝えようと



海外研修

します。その過程を経て、異文化交流において最も重要なことは語学の堪能さではなく、自分自身の心を開き、他者を受け入れようとする態度と自分の意思を伝えようとする積極的な姿勢なのだという事を生徒たちは肌で感じ取っているようです。

研修最終日はホストファミリーや現地校の学生とのお別れとなりますが、毎回生徒だけでなくホストファミリーも泣いている姿を見ると、本当に充実した時間を過ごしたことが分かります。研修後の生徒にレポートを書いてもらうのですが、単純に楽しかったというような感想がある一方で、うまく話せなかった悔しさやもっと英語を勉強したいという意欲、更には海外で学びたい、働きたいなどの新たな目標を見つけたという感想も見受けられ、ホームステイでの経験が大きな刺激になっていることが窺い知れます。

また、令和7（2025）年4月には現地校の先生3名と生徒14名が本校を訪問し、日本の授業を体験したり、教室で机を合わせて一緒に昼食を食べたりと日本の学校を体験しました。これも大きな異文化交流体験の1つとなり、本校生徒のグローバルゼーションへの意識を高めるきっかけとなりました。

今後もこのホームステイを通して多くのことを学び、自らの視野をより世界へと広げる機会とする生徒が増えていくことを望みます。

（今泉 博文）



カンボジア研修

■SDGs委員会

SDGs（Sustainable Development Goals）とは、平成27（2015）年に国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」において、17の目標と169のターゲットが定められたものです。前身であるMDGs（Millennium Development Goals）は主に開発分野に関する目標として掲げられ、発展途上国に焦点を当てたものでしたが、SDGsは先進国も含んだすべての国で取り組むべき目標となっています。

本校のSDGs活動は平成27年に立ち上げられたイノベーションコースの活動とともに幅を広げてきました。平成30（2018）年に1期生が高校1年生となると、高校2年次に実施予定であったカンボジア研修の事前学習が開始されました。カンボジアという国の文化や歴史を調べることはもちろんですが、日本の課題とカンボジアの課題を比較するための企画も実施しました。それは、訪問予定であっ

たトゥールトンボン高校の生徒とオンラインミーティングを実施することで事前に交流するというものです。ミーティングを通してそれぞれの学校の紹介や国の課題について英語でプレゼンテーションを行いました。高校2年次でもこのミーティングは継続し、交流を続けてきました。その上で実施したカンボジア研修では、主に2種類の現地の方との触れ合いが目玉となりました。1つは、オンライン交流を続けてきたトゥールトンボン高校の生徒との触れ合い、もう1つは、くっくま孤児院の子ども達との触れ合いでした。くっくま孤児院とは、カンボジアの首都にある孤児院で、日本人が途中からサポートし運営を行っている場所でした。この孤児院で生活する子どもと交流することにより、日本語教師や子ども食堂について興味を持ち、自身の将来の目標となるほどの影響力がありました。1期生がカンボジア研修から帰国後、本校のSDGs活動は軌道に乗りつつある中で新型コロナウイルスの影響があり、海外の取り組みは一度中断せざるを得ませんでした。その中でも「私たちにできること」を模索し、生徒のアイデアとして令和2（2020）年の紫苑祭ではくっくま孤児院の子ども達が作成してくれたミサガを販売し、孤児院への寄付活動を行いました。

令和3（2021）年となり、コロナ禍真っ只中でSDGsに関する取り組みを考える際に、「Think globally, Act locally」といったSDGsの考え方の根本に立ち返り、「本校と地域の関わり」に注目しました。本校はボランティア活動で地域の方との交流もありましたが、地域の課題について考える機会を増やそうといったテーマで「子ども食堂」・「寺子屋」・「桜を楽しむ会（高齢者の方との交流）」などといった取り組みが一気に増えました。これらの取り組みで意識したのは、「ボランティア活動の根底にある地域の課題を学んだ上で取り組んでみよう」という部分で、地域課題の解決に挑戦する大人の姿を見て学んでほしいといった想いを込めていました。

また、これを機に地域の方々とのつながりも深まり、全校の取り組みとしても「デジタルサポーター（高齢者の方との交流）」・「東京高円寺阿波踊り」・「ウクライナ避難民支援募金活動・音楽会」・「児童館ボランティア」など多くのボランティア活動に参加するまでに至りました。特に「東京高円寺阿波踊り」では、本校卒業生から学生部代表を務める生徒や学生部に所属する生徒も増え、単発のボランティア活動だけではなく、運営側に回るようにもなりました。

その他、各学年の取り組みも継続して実施しています。令和5（2023）年から福島県の農家の課題解決と復興支援をテーマとした「甘酒制作・販売活動」を実施しています。落ちてしまった流通に乗らない果物に付加価値をつけたアップサイクル事



デジタルサポート活動



東京高円寺阿波踊りボランティア



公開討論会

業としてのこの活動には福島県の企業（株）サスアシの方々、福島県の麴店山口こうじ店の方々が関わってくださっており、総合的な探究の時間でデザインやマーケティングの勉強を行い令和5（2023）年はりんご甘酒、令和6（2024）年には桃甘酒を作りあげました。

中学生が全学年一緒にSDGsを学ぶ「中学×SDGs」も令和3（2021）年から開始し、SDGsについての調べ学習や宿泊行事に絡めた課題に取り組んだり、杉並区役所環境課の方々とコラボレーションして、地域の課題に対してできることについて提案したりと考える過程を経て、行動を起こす段階までできました。

さらに地域課題だけではなく、それぞれの学校がある地域や住んでいる地域の取り組みを共有し合い、自分事化することで課題をとともに考える目的で始まった「学校間交流」も行ってきました。北方領土の課題がある北海道の根室高校や基地問題などの課題がある沖縄県の興南高校、能登半島地震の復興について考える石川県の輪島高校と交流を行い、同年代で各地域の課題に向き合う様子を共有しました。

これらの取り組みを通して、課題を自分事とすることはもちろん、関わりのある方々の背中を見ることを通して、自分自身の進路実現にもつながる取り組みを行うコースへととなりました。

（原子 桂輔）

■「日本のことを自分事に」

～他県の学校との交流や政治家との交流～（国家百年の計の会）

毎週月曜日の1時間目は「瞑想の時間」です。この時間の中で私が話す内容は、コロナ禍になってから全く変わってしまいました。厚生労働省がホームページで公表している内容や製薬会社が発表している内容を示すことから始まりましたが、特にワクチン接種が生徒たちの年齢で実施されるようになってからは頻繁に情報を提供するようになり、生徒たちが自己責任の意味を十分理解できるように努めました。それはつまり、マスコミの発表を鵜呑みにせず各方面から情報を得る努力をすることが必要な世の中になっていると気づいたからです。そして、コロナ禍後は安全保障への注意喚起が必要になりました。ロシアとウクライナの紛争が始まり、我々も安全保障について関心を持たざるを得ない状況になったからです。北方領土の問題、尖閣諸島で起きている問題、沖縄県の現状等々です。そして政府は防衛費の増額、トマホークミサイル400発の購入や敵基地反撃への対応などを次々に公表していきました。生徒たちが何も知らないうちに世の中が危険な方向に動いている。しかし生徒たちの日々の興味関心はそこではない。ならば、本校が独自の道を

作り、政治に関心を持つ若者に育てようという志を立てたのです。ロシアと中国とアメリカという大国を意識した活動をし、世界の出来事が自分事として捉えられるようにするために考えた結果、北海道と沖縄の学校との交流ができるようにしました。この活動は現在も続いています。根室高等学校（北方領土研究会）と興南中学高等学校（興南アクト部）が本校の意思に賛同してくださり実現しています。根室高校の活動は根室市もバックアップしており、第二



公開討論会風景

次世界大戦終戦間際でのロシアの侵攻について知ることとなりました。両校とはオンラインで交流していますが、沖縄には修学旅行で行きますので、興南アクト部の皆さんが首里城の案内もしてくれます。令和6（2024）年には能登の輪島高等学校にもご参加いただき、いかに復興が進んでいないかという厳しい現状を教えていただきました。それぞれの地方との交流を始めましたが、何かをすることが出来なくてもまずは知ることから始めようと思いました。これらの活動はやがて「日本のことを自分事に」という明確な方針になりました。更に本校は、松下政経塾出身の政治家たちが集まって日本の未来についてディスカッションする「国家百年の計の会」と連携し、令和元年より会場を提供してきました。そして現役政治家（元総理大臣・衆議院・参議院・県知事・与党・野党）の方々と生徒との公開ディスカッションが令和4（2022）年度より始まり令和7（2025）年度で4回目となりました。課題点は少子化・教育・税金・憲法・災害復興・政治とメディア等々です。毎回10名程度の志ある生徒が参加を名乗り出てきてくれています。令和6（2024）年には議員会館に政治家を訪ね、議題についての事前交渉なども行いました。政治について自分の考えを言える生徒たちが多くなり、頼もしさを感じるようになりました。

高校3年生になると選挙権を得る生徒たちがいます。自分たちの代表を選び日本の未来を託すべく投票行動を起こしてほしいのです。選ばれる人になることも望んでいますが、選ぶことが出来る健全な市民となることを心より願っています。

（梅沢 辰也）

②部活動について

【高校】【中高】

■バドミントン部

【主な戦績】

- 平成6（1994）年度 関東大会団体出場（2回目）
平成7（1995）年度 関東大会団体出場（3回目）、全国高校総体出場（単、多田美帆子）
平成8（1996）年度 関東大会団体出場（4回目）
平成9（1997）年度 全国選抜予選団体3位
平成10（1998）年度 関東大会団体出場（5回目）、全国高校総体・選抜予選団体3位
平成11（1999）年度 関東大会団体出場（6回目）、全国高校総体予選団体3位
平成12年（2000）度 関東大会団体出場（7回目）
平成13年（2001）度 全国選抜予選団体3位、関東選拔出場（複、菊川・木下組）（単、菊川理沙）
平成14（2002）年度 関東大会団体出場（8回目）、全国高校総体予選団体3位
平成15（2003）年度 関東大会団体出場（9回目）ベスト8、全国選抜予選団体3位
平成16（2004）年度 関東大会都予選 準優勝、関東大会団体出場（10回目）ベスト8
平成19（2007）年度 関東大会団体出場（11回目）、全国高校総体・選抜予選団体3位、全国私学団体出場
平成20（2008）年度 関東大会団体出場（12回目）



バドミントン部

平成25（2013）年度から男子も入部することとなり、現在に至っては男女ともに同じ体育館で汗を流しています。ありがたいことに年々入部者数が増加し、令和7（2025）年度は男女全学年合わせて56名という大所帯で活動しています。皆に共通するのが「バドミントンが好き」という気持ちであり、それが大きな原動力となって、他校と練習試合や公式戦で交流を深めながら刺激を受け、反省・練習を繰り返しながら向上心を持って練習に励んでいます。9支部大会で男女同時に上位入賞を果たした際、全員で喜びを分かちあったのをよく覚えています。杉並区スポーツ祭で

は単・複で上位入賞する選手も出ています。また、外部の大会にも自ら積極的に出場し、入賞している選手もいます。試合経験を積むことで公式戦でも良い緊張感を持って戦うことができると思います。また、卒業生が何年も後輩へ教えに来てくれるのは、現役の選手たちの励みであり、喜びでもあります。

インターハイや関東大会に出場した先輩方の偉大な功績に続いていけるよう、これからも日々努力を重ねていく所存です。

(沼田 早紀)

■女子剣道部

【主な戦績】

平成10（1998）年度	第45回関東高等学校剣道大会 女子団体戦出場
平成11（1999）年度	第46回関東高等学校剣道大会 女子団体戦出場、玉竜旗高校剣道全国大会 女子団体戦出場
平成12（2000）年度	第47回関東高等学校剣道大会 女子団体戦出場
平成15（2003）年度	第50回関東高等学校剣道大会 女子団体戦出場、女子個人戦出場、玉竜旗高校剣道全国大会 女子団体戦出場
平成24（2012）年度	東京都高等学校秋季剣道大会（女子2部）優勝



女子剣道部

平成元（1989）年4月に英語科の専任教諭として奉職し、時を同じくして剣道部顧問として日々、悪戦苦闘しながら、令和7（2025）年で在職37年目になります。これも諸先輩方の御指導や歴代の部員の皆さん、応援していただいた保護者の方のおかげと日々感謝しております。

さて、この37年を振り返ると辛かったことや楽しかったことなど様々なことが思い起こされます。その中でも最も大きな出来事は、やはり、奉職してすぐに剣道部の顧問に任じられたことです。当時、僕は大学を卒業したばかりの新卒23歳で剣道の経験ありませんでしたが、女子校の女子部員相手なので、“何とかなる”と思い、安易に引き受けてしまいました。しかし、すぐに、“素人顧問”にとって、剣道とはそんなに甘い種目ではないことを痛感させられました。縁あって、当時、杉並警察で剣道助教を務めておられた田中克己先生に週に1度コーチに来ていただけるようになり、田中先生の勧めもあって、僕自身も剣道を始めることになりました。

さて、いざ始めてはみたものの、日々の授業や校務終了後の

夜8時から道場に通う毎日は想像以上に大変でした。さらに、日曜日や夏休み（冬休み・春休み）は数多くの練習試合や他県への遠征合宿などに出かけ、本当に剣道一色の毎日となりました。毎日の部活動（お稽古）の指導メニューの作成や検証だけでなく、人間力向上のために、「返事・挨拶・行動の向上」にも注力しました。悪戦苦闘の日々でしたが、山口隆也先生（第8代本校校長）や宮下隆先生（第9代本校校長）の支えもあり、また、他校の先生方や多くの剣友と出会うことで、自身の技術と指導レベルも向上し、顧問就任当時には夢にも思わなかった関東高等学校剣道大会（平成10（1998）年・11（1999）年・12（2000）年・15（2003）年）や玉竜旗高校剣道全国大会（平成11年・15年）にも出場することができました。何れの大会も思うように勝ちきれずに、惜しくも決勝トーナメントには進出することは出来ませんでした。しかし、選手たちが関東や全国の強豪チームと互角以上の戦いをするのを見ながら胸が熱くなった時の感動は今も忘れることができません。当時、“高校剣道界で無名の新興チーム”の躍進は、剣道界でも大いに注目されました。剣道専門誌（剣道日本・剣道時代）の取材や撮影依頼などが来るようになり、部員たちが緊張のあまり右往左往しながらも、何とか対応している微笑ましい姿は、今も鮮明に記憶しています。

その後は、しばらく勝てない時期が続きましたが、平成24年には高校から剣道を始めたオール初心者女子部員ばかりのチームで、8月に日本武道館で行われた東京都高等学校秋季剣道大会（2部）で優勝することもできました。初心者ばかりの女子チームだったので、日々のお稽古は勿論、練習試合や遠征でのマナーやルール・審判作法など、何も分からずじまいの“ワーワー・キャーキャー”の連続で、悪戦苦闘の日々が続きました。“失敗しては教える、教えてもまた失敗する・・・”の繰り返しで本当に苦労も多かったですが、その分、優勝の瞬間に日本武道館の大スクリーンに『優勝』という文字と部員たちの名前が大きく映し出された時の感動は今も忘れることができません。

剣道は“他人を打ち、自分も打たれる”という痛みを伴った非日常的な行為で勝敗を決する種目です。時代の移り変わりもあり、令和の現在は全国的に剣道人口も減少の一途をたどっています。本校剣道部の部員も現在は少なくなりましたが、少人数ながらも部員それぞれが、剣道のお稽古を通じて、“自分が打たれる痛みを知るが故に、日常生活で他人に対して優しくなれる人間”を大目標として、昇級・昇段の目標を達成すべく、日々稽古に励んでおります。最後になりましたが、今後とも、本校剣道部に対する温かいご支援・ご鞭撻をいただければ幸いに存じます。

（川名 実）

■高校女子バスケットボール部

私が東京立正高校に入学したきっかけは、恩師高山博先生との出会いです。公立中学校の強豪校チームにいない私にバスケットボールを本校で続けませんか？というお誘いからでした。その時、東京立正は東京都でベスト4に入る強豪校でした。経験のない私にとって練習は相当きつかったのですが、実業団との練習試合や他県の上位チームとの試合、合宿や中学生男子との練習試合などすべてが私を成長させてくれました。そして、高校3年生の関東大会では当時優勝候補と言われていた千葉県の昭和学院を破り、Aブロックの準優勝という結果を取ることができました。高校3年間は部活動一色でした。いちばんの思い出は実業団と代々木第2体育館での練習試合です。こんな素晴らしい経験も東京立正高校に入ることができたからだと感じます。また、私は中学時代から体育教師になる目標がありました。教育実習では母校でお世話になり、高校時代に習った先生方からもたくさんのことを学びながら実習生同士で過ごしたことも、思い出です。大学卒業後、恩師から声をかけていただき体育教師として母校で勤務することになりました。部活動の顧問として恩師から学んだことを活かし、携わってきました。多くの人に支えられて、関東大会出場を顧問として経験することができました。そして、気が付けば勤続25年という歳月が過ぎていました。現在は昔と違い、一つでも多く試合で勝てることを目標に、志高く指導しています。

【主な戦績】

平成13（2001）年度 関東大会出場
平成16（2004）年度 関東大会出場
平成17（2005）年度 関東大会出場

（内藤 マリコ）



高校女子バスケットボール部

■高校女子ソフトボール部

平成5年に創部以来の悲願であった東京都大会優勝とインターハイ出場を達成したソフトボール部は、その後東京の顔ともいえるチームへと成長しました。

【主な戦績】

平成6（1994）年 全国私学大会 関東大会出場
平成7（1995）年 全国私学大会 関東大会出場
平成8（1996）年 東日本大会3位 関東大会出場
平成9（1997）年 全国選抜大会 全国私学大会
関東大会インターハイ出場



高校女子ソフトボール部



高校女子ソフトボール部

『東京勢として初の関東大会優勝』

栃木県足利市で開催された第47回関東高校女子ソフトボール大会において、初戦から順調に勝ち進み決勝戦で藤岡女子（群馬）に2対1で勝利し、長い歴史のなかで初めて優勝旗を東京に持ち帰りました。この年のチームは春の全国選抜大会、夏のインターハイに出場したように実力がありました。この時の部父母会から寄贈された横断幕『叶えよう立正の夢』は令和になった現在でも大切に使われています。

平成10（1998）年 全国選抜大会出場

平成11（1999）年 関東大会 インターハイ出場

平成12（2000）年 全国選抜大会 全国私学大会
関東大会 インターハイ出場

『東京都大会完全制覇 5本の優勝旗を独占』

東京の主要大会は5つあり、春季関東予選、インターハイ予選、私学選手権、私学新人大会、秋季選抜予選新人大会です。この年のチームはこれらすべての大会優勝旗を手にする充実ぶりでした。

『全国私学大会優勝』

静岡県で行われた全国私学大会において全国の強豪をおさえ初優勝を成し遂げました。兵庫県須磨ノ浦女子との決勝戦は、最終回まで0－0の緊迫したゲームとなり最後は先に行われた全国選抜大会で敗因となる痛恨のエラーをした選手が、今回は見事にサヨナラヒットを放ち劇的な幕切れとなりました。（平成12年 富山国民体育大会3位 優勝チームのエースが金メダリストの上野投手）

平成13（2001）年 全国選抜大会出場 全国私学大会3位、
関東大会出場

平成15（2003）年 全国私学大会 インターハイ出場

『ノーシードから3年ぶりにインターハイ出場』

秋の新人戦、春季大会ともに4強入りすることさえできず苦しんできたチームが夏に底力を見せました。準決勝で藤村女子（春の全国3位）を1対0で破り決勝戦へと駒を進めました。対戦相手は2年連続インターハイ出場中の日出女子、最終回表を終えてスコアは1対3で日出リード、ここから反撃し先頭打者のヒットを皮切りに四死球と内野安打で1点差に迫り最後は満塁から右中間を破る長打が出て劇的なサヨナラゲームでインターハイ出場を決めました。

平成16（2004）年 全国選抜大会出場 全国私学大会 3 位
平成17（2005）年 全国選抜大会

『部員10名で全国選抜ベスト8』

たった2人しかいなかった3年生が下級生を引っ張りました。
初戦では優勝候補の京都西山を1対0で破り（こちらのヒット数はサヨナラヒットの1本のみ）ベスト8まで勝ち進みました。参加32チームのなかで最も少ない部員数での活躍が注目を集めました。

平成18（2006）年 全国私学大会 関東大会出場
平成19（2007）年 全国私学大会 関東大会出場（※エースで4番を務めたキャプテンは東京女子体育大学に進み、大学MVP獲得、U19の全日本チームのキャプテンとしてアジア大会で金メダルを勝ち取りました。）

平成20（2008）年 東日本大会出場
平成21（2009）年 東日本大会出場
平成22（2010）年 東日本大会優勝
平成23（2011）年 東日本大会出場権（震災のため中止）
平成25（2013）年 東日本大会 関東大会出場
平成26（2014）年 東日本大会出場
平成27（2015）年 東日本大会出場
平成28（2016）年 東日本大会出場
令和3（2021）年 東日本大会出場
令和4（2022）年 全国私学大会出場
令和6（2024）年 全国私学大会出場
令和7（2025）年 東日本大会 関東大会出場

ここには上部大会出場の記録のみが出ていますが、毎年そこにはチームがあり、そして選手がいてグラウンドで汗と涙を流してきました。多くの先輩部員たちの思いが今も受け継がれています。東京の強豪校の顔ぶれもすっかり変わり4強入りするだけでも大変ですが、『優勝』そして『インターハイ』を目指しこれからもソフトボール部は頑張ります。

（家中 太志）

■高校女子バレーボール部

【主な戦績】

関東大会（平成15（2003）年～平成30（2018）年 16年連続出場・令和3（2021）年～令和4（2022）年 2年連続出場）
全国私学大会（平成16（2004）年から通算12回出場 平成25（2013）年度 ベスト8）



高校女子バレーボール部

上記は平成13（2001）年に私が顧問に就いてからの22年間の戦績となります。関東大会は途中、出場の危ぶまれた年が何回かありました。また実際に出場を逃してしまった年もありましたが、どの年の選手たちも素晴らしい選手たちでした。そしてその選手たちを取り巻く様々な方々のおかげで、上記のような素晴らしい戦績を残すことができたと感じております。

『だれからも応援されるようなチームになろう』、『(やらされるのではなく)自分の頭で考えるバレーボールをしよう』がわれわれのモットーでした。

例年3年生が引退し、新しい代が始まったばかりの時期は、私から細かく練習メニューが与えられますが、3カ月もするとキャプテン

がほとんどの練習メニューを考える、という方式をとってきました。選手たちにとっては「言われたことだけをやっている方がラク」です。そういう意味で言えば、本校バレーボール部はキャプテンの責任が重く、それを乗り越えてどのキャプテンも大きく成長していったように思います。卒業後、大学でバレーボールを続けたあるキャプテンが、「高校時代、自主性を重んじた部活動にいられたことが今に生きている」と話していることを耳にし、私もとてもうれしかったことが思い出されます。

「大学」と言えば、私は大学とのつながりも大切にしてきました。選手たちはせっかく東京立正を選んで入学してくてくれたのですから、卒業後もバレーボールを続けたい選手に対しては全力でバックアップしてきました。日曜祝日などに校外で練習する時は、その練習相手の多くを大学にお願いしました。おかげで関東I部リーグ所属のチームを中心とした約15チームの大学との関係ができあがりました。時には「うちの大学に入ってほしい」と勧誘を受けたこともありました。大学入学後、そのチームに大きな貢献をした選手もありましたし、インカレで日本一になりMVPに選ばれた選手もいました。そして大学卒業後、長く企業チームで活躍した選手もいました。

私の指導中には都のベスト4に入ることは一度も叶いませんでしたが、そんなチームからでも、高校で選手生命を終えることなく、その先を目指す選手や、実際に活躍した選手も数多く育ってくれました。指導者冥利に尽きるできごとのひとつでした。

私は自分の指導してきたバレーボールがすべて正しいとは思っておりませんが、自分の体験してきた「財産」は自分だけの

ものにはおきたくない、という思いもありました。そこで夏休みに中学生チームを集め、「バレーボール教室」を開催したこともありました。本校の高校生に中学生を指導させながら各チームの先生方と技術、戦術を共有するといった内容で、本校の部員たちの勉強にもなり、大変有意義なものになったことを覚えています。

また、本校の選手たちには「仲間同士、どんどん教え合いなさい」と常々話してきました。「チーム内の一番下手な選手がどれくらい上手か」ということが強いチームの目安のひとつであると考えていたからです。本校バレーボール部はレギュラー、補欠の分け隔てなく、部員全員が同じ練習を行い、大会の数週間前まで正式なレギュラーを決めることはしませんでした。バレーボールはボールを持ったり投げたりせずに仲間にパスを回すという高度なテクニックを要するスポーツです。もっとも大切なことは「チームワーク」であり、チームワークを向上させるには「相手の気持ちになること」、「思いやりの心を持つこと」が必要です。

2011年の東日本大震災のあと、被災された方々に何かできないか、と思いを巡らせていた時、埼玉大学のイルミネーション・プロジェクト実行委員会から被災者を慰問するので一緒にいかがですかとお誘いを受ける機会がありました。当時、埼玉県加須市の旧騎西高校には福島県双葉町のみなさんが避難生活を送っていました。2022年4月、本校バレーボール部員は埼玉大学の学生たちと訪問し、被災者のみなさんと点灯物を作りながら終日一緒に過ごす、という経験をしてきました。プライベートなどほとんどないと言ってもいいような教室で暮らしているご老人や小さな子どもたちとの交流は何物にも代えがたい貴重な体験でした。

顧問であった22年間を振り返ると、秋田の角館南高校まで新幹線で行き、大変なおもてなしをいただいたこと、「コーチングキャラバン」で元全日本男子監督の寺廻太氏にご指導いただき、その模様がテレビ放映されたこと、本格的なビーチバレーを学ぼうと産業能率大学を訪問したこと、岡山シーガルズからのお誘いを受け、合宿をさせていただいたことなど、いろいろな思い出が甦ってきます。

私が退いた後も高校女子バレーボール部は関東大会に連続出場しております。

お世話になったバレーボール部の活躍をこれからも陰ながら応援しております。

(宇治川 雅人)



高校女子バレーボール部



高校男子バレーボール部

■高校男子バレーボール部

平成31（2019）年度に創部したまだ若い部活動です。7年間で東京都のベスト8に4回・ベスト16に13回なり、関東大会には2年連続3回出場しました。私学全国大会にも出場、ビーチバレーの関東大会では優勝1回及び国民スポーツ大会バレーボール競技（ビーチバレーボール種目）には過去に3名が東京都代表選手として選出されてい

ます。インドアとビーチの両方に力を入れている学校はまだまだ少ないためこれも東京立正の個性となっています。令和6（2024）・7（2025）年度では校長が監督を務めるという稀有な状況ともなりましたが、日々の練習時間が1時間半程度という条件の中で目的意識を持った練習に取り組み、週末の練習試合で公式試合を想定した練習を積んできた成果が出ていました。応援していただいている中学バレーの関係者の皆様、保護者の皆様、そして教室で叱咤激励をいただいている先生方にこの場をお借りして御礼申し上げます。

（梅沢 辰也）

■ダンスドリル部

前任の顧問の先生から部活動を引き継いだときは、高校3年生が2人で部活名はバトン部でした。ですが、実際にはポンをもってソングリーディングの練習をしていました。高校3年生の2人は2年生の時に他校の生徒さんと合同で大会に出場しており、新入生を勧誘して東京立正としてチームを組んで日本大会出場を目指したいという、ガッツのある生徒でした。そこへ高校1年生が3人入部してスタートしたのが、顧問になった初年度です。どこまで頑張れば予選を通過して日本大会へ出場できるのかは私より3年生と、今も東京立正の指導に携わってくださっているコーチが知っているという状況でした。高1の3人は入部していきなり6月の予選で日本大会を目指すと言われて、必死でした。「こんな練習では勝てない」という3年生と「もう辞めたい」と悩む1年生の間に挟まれ、部活にどこまで力を入れて取り組めばいいのか模索した1年目。おかげさまで、顧問1年目に日本大会（現在の全国高等学校ダンスドリル選手権）に出場が決まった時、1年生部員が「こんなにうれしい思いができるなら、もう絶対に辞めたいなんて言いません」と言いました。その言葉で、私の顧問としての迷いもなくなり、生徒が

全国に行きたいというならば全力でその夢を叶える練習をする
と心が決まりました。3年生が引退し、1年生部員3人だけで
練習し出場した3月の大会（現在のUSAナショナルズ）で、
3名がハードワーク賞という特別賞をいただきます。これが初
めての入賞です。

共学になるのを機に、部活名をバトン部からチアリーダー部
に変更しました。共学元年に入部した4人は大変な練習にも挫
けない強い人たちで、高校2年生の秋からチアダンス選手権大
会やUSAナショナルズで入賞を果たします。この年はメンバ
ーが6人。12個のボンで30個のボンと競っていくときにどんな
ことができたらいいかということを、生徒も私も考えていまし
た。大人数の振りをそろえることは難しいのですが、私たちは
人数が少ない分全員の動きが揃っていることは当たり前。1人
で3人分くらいの大きな動きをする。そして、ジャンプはとに
かく高くなど、テクニクも作品に多く入れていただきました。
簡単に振りが揃うだろうと思われてしまう分、難度が上がるよ
うに曲のスピードも速かったと思います。このようにして、東
京立正は「人数が少ないけれどすごい」と言われる作品を踊る
練習が引き継がれていきました。部員数が少ないためダンスを
やったことがない生徒も入部してすぐ6月に全国大会の予選に
出場します。1年生の未熟さを上級生がカバーして全国高等学
校ダンスドリル選手権大会には連続出場を果たしていました。
しかし、なかなか入賞することは難しく、そこから夏、秋と練
習して3月に行われるUSAナショナルズで1年生も上級生と
同じテクニクができるまでに成長するという練習を続けてい
たところ、平成17（2005）年のナショナルズで、初めて部門1
位をいただくことができました。この年のキャプテンは、ダン
ス未経験の生徒です。「目標は1位です」と言って練習し、「先
生、有言実行です」と言って卒業した本当によく努力をする生
徒でした。

とにかくうちの部は生徒に恵まれていて、夢を実現するた
めには実現するまで努力するしかないと頑張る粘り強い人たちば
かりが入部してくれています。目標を決めて、その目標に見合
った努力がないときや、チームとしての協力が見えないときに、
私は叱りました。生徒が本気で頑張る姿に対して、指導者であ
る私が手を抜いたり妥協をしたりして、生徒の目標達成を諦め
てはいけないと思わせてくれる生徒ばかりでした。部員が在籍
しない学年というのが時々あるのですが、どんなことがあつて
も絶対にあきらめないという生徒のガッツで今も部が存続して
います。平成19（2007）年、平成20（2008）年はUSAナシ
ョナルズで2年連続1位を獲得しました。その後も全国高等学校
ダンスドリル選手権や全日本チアダンス選手権、USAナシ



ダンスドリル部

ナルズ、年に3回ある全国大会に出場するチャンスを掴み、このほかにダンスドリルの新人戦、秋季大会が行われるようになりました。こちら成績上位であれば、1月に行われるウィンターカップという全国大会に出場ができます。この大会で入賞し1度目のアメリカ大会出場権を頂いたのが平成23（2011）年です。しかし、この年は3年生3名、1年生1名というメンバーであったため、アメリカ大会が行われる3月には3年生のメンバーが卒業しており、出場できませんでした。このアメリカ大会出場権を獲得した1年生部員が3年生になった時に、ダンスドリル秋季大会で部門1位だけではなく、全部門の中で1位というグランプリをいただきました。そして、アメリカに行けなかった先輩方の意思を受け継ぎ、グランプリをいただいた年に1年生だった4人が2年生になった平成26（2014）年の冬、チームとしては2度目のアメリカ大会出場権を獲得します。ロサンゼルスで本当に気持ちよく踊らせていただき、部門3位をいただいて帰国しました。この4人は本当にパワフルで、踊りで負けるのは絶対にイヤという気迫で練習にも向かってくるので、作品から出る迫力も圧倒的でした。

その後も平成29（2017）年まで全国大会に出場できましたが、入賞は難しくなりました。入賞するにはアメリカに行ったメンバーを超える力が必要であることも分かっているので、なかなかそこまでの練習ができず、毎年全国大会に行けるのは今年が最後かもしれないと思いながら練習を続けていたところ、コロナの影響で大会が中止になりました。しかし、この種目は映像審査が可能なことから、工夫をしながら様々な大会が行われ、やっと会場で全チームが揃って全国大会ができるという2022年に「映像ではなくその一瞬の本番にかけて踊りたい」というキャプテンが再び全国大会出場を掴んでくれました。彼女も芯の強いしっかりとした生徒でした。残念ながらその後3年間、全国大会出場は果たせていません。

こうして戦績を書き出していくと、勝つための部のように思われてしまうかもしれませんが、私が部活動を通して生徒に教えたことは勝つことではありません。部活動は生徒の人間性を高める教育の場だと思っているので、目標に向かって努力する力や、仲間を大事にする思いやり、支えてくれる人に感謝する気持ちです。作品には必ず人間性が反映されるので、本当に良い作品を踊るためには、自分磨きを怠ることはできません。こんな練習をしていたら部活はなくなるのかなあと考えて過ごしていたところ、令和7（2025）年に上級生がいないダンスドリル部に2人の1年生が「大会に挑戦したい」と入部してくれました。こうして頑張ってくれる生徒がいる限り、部のモットーである「全力・努力・維持・根性」という言葉を掲げて、生

徒と頑張っていこうと思っています。いつかまたアメリカで踊れる日が来ることを信じて。

(黒濱 摩弥)

■水泳部

平成8（1996）年度

【中学】 関東大会出場

【高校】 アトランタオリンピック出場、100mバタフライ4位・
200mバタフライ出場（鹿島 瞳）

全国大会団体総合準優勝、関東大会団体総合4位

平成9（1997）年度

【中学】 全国大会出場、関東大会出場

【高校】 全国大会団体総合準優勝、関東大会団体総合優勝

平成10（1998）年度

【中学】 全国大会出場

【高校】 全国大会団体総合4位

平成11（1999）年度

【中学】 全国大会出場

【高校】 国民体育大会出場、全国大会出場、関東大会出場

平成12（2000）年度

【中学】 全国大会出場

【高校】 全国大会出場、関東大会出場、
《卒業生》シドニーオリンピック出場、400m個人メ
ドレー2位・400m自由形出場（田島寧子）、100m
平泳ぎ出場・200m平泳ぎ出場（磯田順子）

平成13（2001）年度

【中学】 全国大会団体総合優勝

【高校】 全国大会出場、関東大会出場

平成14（2002）年度

【中学】 全国大会団体総合3位、関東大会出場

【高校】 全国大会出場、関東大会出場

平成15（2003）年度

【中学】 全国大会団体総合3位

【高校】 国民体育大会出場、全国大会出場、関東大会出場

平成16（2004）年度

【中学】 全国大会出場

【高校】 国民体育大会出場、全国大会出場、関東大会出場

平成17（2005）年度

【中学】 国民体育大会出場、全国大会出場

【高校】 国民体育大会出場、全国大会出場、関東大会団体総
合7位



水泳部のプール

平成18（2006）年度

【中学】 全国大会出場

【高校】 国民体育大会出場、全国大会出場、関東大会団体総合5位

平成19（2007）年度

【中学】 全国大会出場

【高校】 世界競泳出場、200m個人メドレー8位・400m個人メドレー8位（中村咲子）
国民体育大会出場、全国大会出場、関東大会団体総合5位

平成20（2008）年度

【高校】 国民体育大会出場、全国大会団体総合準優勝、関東大会団体総合準優勝

平成21（2009）年度

【高校】 国民体育大会出場、全国大会出場、関東大会団体総合3位

平成22（2010）年度

【高校】 全国大会出場、関東大会出場

平成23（2011）年度

【高校】 全国大会出場、関東大会出場

平成24（2012）年度

【高校】 全国大会出場、関東大会出場

平成25（2013）年度

【高校】 全国大会出場、関東大会出場

平成26（2014）年度

【高校】 全国大会出場、関東大会出場

平成27（2015）年度

【高校】 オープンウォータースイミングW杯香港大会出場、
全豪選手権出場（新倉みなみ）
国民体育大会出場、全国大会出場、関東大会出場

平成28（2016）年度

【高校】 全国大会出場、関東大会出場

平成29（2017）年度

【高校】 全国大会出場、関東大会出場

平成30（2018）年度

【高校】 全国大会出場、関東大会出場

令和元（2019）年度

【高校】 全国大会出場、関東大会出場

令和6（2024）年度

【高校】 全国大会出場、関東大会出場

令和7（2025）年度

【高校】 全国大会出場、関東大会出場

水泳部は、これまでに日本代表や東京都代表として活躍する選手を輩出してまいりました。平成14（2002）年の共学化以降、男子も平成17（2005）年から関東大会、翌年からは全国大会へも出場出来るようになりました。今後も活躍できるように部員一同精進致します。

（佐藤 恵美子）

■ソフトテニス部

戦績【平成7（1995）年度～】

- | | |
|--------------|--|
| 平成7（1995）年度 | 都選抜インドア大会女子団体第5位入賞、全日本私立選抜大会女子個人戦初出場（大口・大野ペア） |
| 平成8（1996）年度 | 関東大会都予選女子団体第5位入賞、関東大会団体初出場（開催地）、インターハイ予選女子団体第5位入賞、都選抜インドア大会女子団体第5位入賞、全日本私立選抜大会2年連続女子個人戦出場（新田・竹川ペア） |
| 平成9（1997）年度 | 関東大会都予選女子団体第5位入賞、インターハイ予選団体第5位入賞、全日本私立選抜大会3年連続女子個人戦出場（千見寺・竹川ペア） |
| 平成10（1998）年度 | 関東大会都予選女子団体第5位入賞、女子個人戦第5位入賞・関東大会個人初出場（千見寺・竹川ペア）、全日本私立選抜大会4年連続女子個人戦出場（松村・齋藤ペア） |
| 平成11（1999）年度 | 全日本私立選抜大会5年連続女子個人戦出場（高須・住田ペア） |
| 平成12（2000）年度 | 全日本私立選抜大会6年連続女子個人戦出場（住田・清野ペア） |
| 平成13（2001）年度 | 全日本私立選抜大会7年連続女子個人戦出場（川股・石川ペア） |
| 平成14（2002）年度 | 全日本私立選抜大会8年連続女子個人戦出場（小松・高須ペア） |
| 平成15（2003）年度 | 全日本私立選抜大会9年連続女子個人戦出場（北村・池川ペア） |



ソフトテニス部



ソフトテニス部

平成16（2004）年度	全日本私立選抜大会10年連続女子個人戦出場（福田・暮沼ペア）
平成24（2012）年度	全日本私立選抜大会11回目女子個人戦出場（横澤・児山ペア）
平成25（2013）年度	全日本私立選抜大会2年連続12回目女子個人戦出場（安部・宮島ペア）
平成26（2014）年度	東京私学部別学校対抗戦女子5部団体優勝、全日本私立選抜大会3年連続13回目女子個人戦出場（矢藤・高橋ペア）
平成27（2015）年度	全日本私立選抜大会4年連続14回目女子個人戦出場（矢藤・鍛冶ペア）
平成28（2016）年度	全日本私立選抜大会5年連続15回目女子個人戦出場（清水・中沢ペア）
平成29（2017）年度	都選抜インドア大会男子団体初出場（インドア予選ブロック優勝）、全日本私立選抜大会6年連続16回目女子個人戦出場（茂籠・嶋ペア）
平成30（2018）年度	春季大会都関東予選男子個人ベスト16・関東大会男子個人初出場（加賀・森山ペア）、東京私学第9支部大会男子団体準優勝、都選抜インドア大会男子団体2年連続出場（インドア予選ブロック優勝）、都シングルス大会男子第5位入賞（森山選手）、全日本私立選抜大会7年連続17回目女子個人戦出場（田中・益満ペア）
平成31（2019）年度	関東大会都予選男子団体ベスト16、インターハイ予選男子団体ベスト16
令和3（2021）年度	全日本私立選抜大会18回目女子個人戦出場（岡田・栗島ペア）
令和4（2022）年度	関東大会都予選男子団体ベスト16・女子団体ベスト16、インターハイ予選男子団体ベスト16・女子団体ベスト16、東京私学第9支部大会女子団体準優勝、都選抜インドア大会女子団体出場（インドア予選ブロック優勝）、全日本私立選抜大会2年連続19回目女子個人戦出場（相良・中山ペア）
令和5（2023）年度	関東大会都予選女子団体ベスト16、インターハイ予選女子団体ベスト16、城西地区大会女子個人第3位入賞（鈴木・中山ペア）、東京私学第9支部大会女子団体2年連続準優勝、東京私学新人大会女子個

人第5位入賞（小寺・中山ペア）、都選抜インドア大会女子団体2年連続出場（インドア予選ブロック優勝）、都シングルス大会女子ベスト16（小寺選手）、全日本私立選抜大会3年連続20回目女子個人戦出場（小寺・中山ペア）

令和6（2024）年度 関東大会都予選女子団体第5位入賞、インターハイ予選女子団体第5位入賞、城西地区大会女子個人第5位入賞（木村・戸上ペア）

平成元（1989）年4月に非常勤講師として奉職。同時にソフトテニス部コーチとして着任しました。故 中嶋光尚先生顧問の下、私のソフトテニス部指導者としての道程が始まります。

平成8（1996）年3月中嶋先生のご退職に伴い、講師生活7年の後に4月専任教諭として就任しました。そして、中嶋先生の後任としてソフトテニス部顧問を引き継ぎました。

正規の監督となつてすぐの5月、中学から中嶋先生と共に育ててきた選手たちに、高校から加わったメンバーのスパイスが功を奏し、「関東大会団体戦出場」を果たしました。

選手も集まり、結果を残せるようになってきました。インターハイを目指せる位置に立ち、ワンランクアップを臨むべく勝負を賭けたものの、オーバーヒートを起こしてしまいました。その気にはさせられましたが、本気にはなれず、改めて勝つことの難しさを痛感することとなりました。

その後、一時部員も減少し存続も危ぶまれるほどに陥りました。部員が一人となり、私もサッカー部の副顧問を任せられ、2足の草鞋を履くこととなりました。その一人が繋いでくれた部員のおかげで、一人増え、二人増え、中学生の部員こそ集まらなくなりましたが、その分男女の部員が集まりました。

男子部員も根付き、決勝大会へと勝ち進むようになり、男女ともに団体ベスト16に入るようになると、勢いは増し、「男子関東大会初出場」を果たしました。そしてこれからという時に「新型コロナウイルス感染症」による影響で活動がストップしました。

「コロナ禍」においても心の火は絶やすことなく、テニスコート（第1グラウンド）の整備も怠らず、ブログに上げていたら、卒業生がそれを見つけて手伝いに駆けつけてくれました。



ソフトテニス部



テニス部

これまでの指導に間違いはなかったと胸が熱くなったことを昨日のここのように感じます。

こんな状況下でも、できることをやろうと取り組み「今こそチャンスと思え」の姿勢で大会がまだ見えない中、練習に汗を流しました。

そして「2020 Tokyo Thanks Match」が8月に昭和の森テニスコートと東京立正高校を会場として大会が再開されました。ソフトテニス界でも注目され、これほど嬉しく、また感謝された大会はありません。

大会が通常開催となると、男女ともに団体ベスト16に入るようになったがコロナ前に比べると明らかに変化がありました。これまでを知らない新しい集団なのです。それならそれで、新しいものを気付き上げれば良いと取り組み、選手たちが引っ張り上げていく活動が構築され始めたのです。

24年ぶりに女子がインドア大会出場を果たしました。自分たちの取り組みがさらにやる気へと変換された時を迎えました。その代その代と、責任ある立場に立たないと気付かないところが大きいものです。「自分たちで成し遂げる」この気持ちが大切で、今、私は以前と変わらぬ「熱い火」はもっていますが、如何にして「心に灯をともしせるか」に時間を費やしています。

この世界、終わりががないので気付かぬうちに、36年が経ち（専任29年）その時が来るまで続くと思われます（今年還暦）。

（木下 道夫）

■テニス部

本校のテニス部は、運動を通して技術のみならず、心身の教育・礼の教育・奉仕の心の教育を念頭において活動して来ました。技術優先の部活動ではなく、経験歴問わず活動的な生徒を幅広くメンバーに加えた活動を行ってきた結果、下記に示すような素晴らしい戦績をあげることができました。歴代顧問は秋山淳一、村中智、小泉岳司。

各種大会成績【高校】

- 平成2（1990）年 同好会から部活動に昇格
- 平成6（1994）年 東京都高等学校私学第9支部大会優勝
- 平成7（1995）年 東京都高等学校新人テニス選手権ダブルス Best8、東京都高等学校私学第9支部大会優勝
- 平成8（1996）年 東京都高等学校テニス選手権大会団体 Best16、東京都私立高等学校テニス選手権大会団体 Best8、東京都高等学校私学第9

	支部大会準優勝
平成10（1998）年	東京都高等学校テニス選手権大会団体Best32、東京都高等学校新人テニス選手権シングルスBest16、東京都高等学校私学第9支部大会準優勝
平成11（1999）年	東京都高等学校テニス選手権大会団体Best8、東京都高等学校新人テニス選手権大会シングルスBest16・ダブルスBest16、関東選抜高校テニス大会団体Best4、東京都私立高等学校テニス選手権大会団体Best4、東京都高等学校私学第9支部大会優勝
平成12（2000）年	東京都高等学校テニス選手権大会シングルスBest16・ダブルスBest16、東京都高等学校テニス選手権大会団体Best8、東京都高等学校新人テニス選手権大会シングルスBest16・ダブルスBest16
平成13（2001）年	東京都高等学校テニス選手権大会団体5位、関東選抜高校テニス大会東京代表選考会出場（東京上位8校による団体戦）
平成14（2002）年	東京都高等学校テニス選手権大会団体5位、東京都高等学校新人テニス選手権大会シングルス3位・ダブルス3位、関東選抜高校テニス大会東京代表選考会出場（東京上位7校による団体戦）
平成15（2003）年	東京都高等学校テニス選手権大会シングルスBest16・ダブルスBest16
平成16（2004）年	全英ジュニア大会シングルス2R・ダブルス3R、全豪ジュニア大会シングルスBest16・ダブルス2R、全仏ジュニア大会ダブルスBest8、全日本選手権大会シングルスBest16・ダブルスBest8、全国高等学校テニス選手権大会団体Best16・ダブルスBest16・シングルス2R、関東高等学校テニス選手権大会団体3位・ダブルス3位・シングルスBest8、東京都高等学校テニス選手権大会団体準優勝・ダブルス準優勝・シングルス3位・男子団体Best32
平成17（2005）年	東京都高等学校テニス選手権大会男子シングルス本戦2R
平成19（2007）年	東京都高等学校私学第9支部大会男子団体3位



テニス部

各種大会成績【中学校】

- 平成5（1993）年 中学部スタート
- 平成11（1999）年 東京都中学校新人テニス選手権大会シングルス3位・5位・ダブルス優勝、関東中学校テニス選手権大会シングルス出場・ダブルス2回戦、東京都中学校私学第9支部大会第3位
- 平成12（2000）年 東京都中学校テニス選手権大会シングルス3位・ダブルス3回戦、東京都中学校テニス選手権団体3回戦、関東中学校テニス選手権大会シングルスBest16・ダブルス2回戦、東京都中学校新人テニス選手権大会2回戦
- 平成13（2001）年 東京都中学校テニス第3ブロック大会シングルス優勝・5位・ダブルス優勝、東京都中学校テニス選手権大会シングルス準優勝・ダブルス第5位、関東中学校テニス選手権大会シングルス5位・ダブルス7位、全国中学校テニス選手権大会シングルスBest16・ダブルス出場、東京都中学校テニス第3ブロック新人大会シングルス準優勝・ダブルス5位、東京都中学校新人テニス選手権大会シングルス3回戦
- 平成14（2002）年 東京都中学校第3ブロック新人大会シングルス優勝、東京都中学校テニス第3ブロック大会シングルス優勝ダブルス5位、東京都中学校テニス選手権大会シングルス出場、東京都中学校テニス第3ブロック新人大会シングルス優勝ダブルス2位、東京都中学校新人テニス選手権大会シングルスBest32
- 平成15（2003）年 東京都中学校テニス第3ブロック大会シングルス3位・ダブルス5位、東京都中学校テニス選手権大会シングルス2回戦・ダブルス出場

（小泉岳司）

■吹奏楽部（東京立正中学高等学校吹奏楽団）

東京立正中学高等学校吹奏楽団の起源、それは戦災で焼失された戦前の立派な鼓笛隊に遡ります。

昭和32（1957）年“学園の中心ともなるべき音楽母体を創りたい”第3代校長馬田即貞先生の意向により、昭和33（1958）

年4月、東京立正高校女子吹奏楽団が、初代指導者井上謹次先生により創設されました。定期演奏会を昭和39（1964）年から昭和61（1986）年まで23回開催。昭和40年代以降、NHKTV出演、大銀座祭光のパレード、杉並区や仏教関係の主催行事、その他全国ママさんバレーボール大会、出版健保組合運動会など、校内外含め年間20数回出演。その功績は素晴らしく、当時の日本における吹奏楽発展に大きく貢献されました。

井上謹次先生が退職される半年前、「稲尾先生に後を引き継いでもらいたい」という一本のお電話をいただきました。その当時の東京立正高校女子吹奏楽団は、全国の吹奏楽関係者で知らない人はいない程有名な存在であり、一種独特のサウンドを奏で、打楽器パフォーマンスにも優れ、繊細で美しい音楽を表現する、スクールバンドのお手本的存在でもありました。吹奏楽コンクールには一切出場せず、“幻の金賞校”としても知られていました。躊躇する私でしたが、井上謹次先生のお気持ちを胸に、昭和61（1986）年4月、2代目指導者として就任いたしました。

“音楽を掬えたい”“音楽の素晴らしさを伝えたい”“音楽する感動を味わわせたい”

“一度乗った船は航海が終わるまで自ら降りぬ” その思いを心の糧に今もなお部員達と共に音楽を奏でております。

就任後、校内行事の他、杉並区、中野区、警視庁、一般企業、商店街などの主催行事にて演奏。ジャパンカップバレーボール世界大会、パンパシフィック水泳世界大会、スペシャルオリンピックス大会などスポーツ大会での式典演奏を経験。

吹奏楽連盟関係では、吹奏楽コンクール、アンサンブルコンテスト、パレードコンテスト、全日本高等学校吹奏楽大会in横浜、日本管楽合奏コンテスト全国大会、ゴールデンパレードなどに参加。

メディア取材では、フジTVドキュメント番組出演、栄光出版進学通信、音楽之友社のバンドジャーナルなどで取り上げられました。

その他、新潟県苗場、長野県湯の丸、長野県白馬での夏合宿、山梨県西湖での冬合宿。

昭和、平成、令和、時が移り行く40余年の長きに渡り数え切れぬ程の様々なイベントに出演させていただき活動して参りました。



吹奏楽部



妙法寺パレード



全日本高等学校吹奏楽大会

【主なコンクール・大会】

- 東京都高等学校吹奏楽コンクール A組
平成9・16・18・23・24・25・26・30・
令和元年 金賞、平成17・19・29年 銀賞
- 東京都高等学校吹奏楽コンクール 東日本組
平成13・14・15・20・21・22・27・28・
令和3・4・5・6・7年 金賞
- 東日本学校吹奏楽大会
平成13年 優秀賞、平成15・20・21・27・28年 金賞、
平成14・22年 銀賞
- 東京都高等学校アンサンブルコンテスト
平成12～22年・24～30年・令和2～6年 金賞
- 日本管楽合奏コンテスト全国大会
平成29・30・令和元年 最優秀賞、
平成11・12・13・23・25年 優秀賞
- 全日本高等学校吹奏楽大会in横浜
平成25・26・27年 審査委員長賞
- 東京都パレードコンテスト
平成7年 金賞

【定期演奏会】

第24回	昭和62年 1 月	杉並公会堂 大ホール
第25回	昭和63年 1 月	立川市市民会館 大ホール
第26回	平成元年 1 月	新宿文化センター 大ホール
第27回	平成 2 年 1 月	立川市市民会館 大ホール
第28回	平成 3 年 1 月	練馬文化センター 大ホール
第29回	平成 4 年 1 月	武蔵野市民文化会館 大ホール
第30回	平成 5 年 1 月	武蔵野市民文化会館 大ホール
第31回	平成 6 年 1 月	府中の森芸術劇場 どりーむホール
第32回	平成 7 年 1 月	武蔵野市民文化会館 大ホール
第33回	平成 8 年 1 月	府中の森芸術劇場 どりーむホール
第34回	平成 8 年 9 月	小平市民文化会館 大ホール
第35回	平成 9 年11月	武蔵野市民文化会館 大ホール
第36回	平成10年12月	調布市グリーンホール 大ホール
第37回	平成11年12月	練馬文化センター 大ホール
第38回	平成12年12月	武蔵野市民文化会館 大ホール
第39回	平成13年12月	立川市市民会館 大ホール
第40回	平成14年12月	調布市グリーンホール 大ホール
第41回	平成15年12月	武蔵野市民文化会館 大ホール
第42回	平成16年12月	調布市グリーンホール 大ホール
第43回	平成17年12月	調布市グリーンホール 大ホール
第44回	平成18年12月	調布市グリーンホール 大ホール
第45回	平成19年12月	練馬文化センター 大ホール
第46回	平成20年12月	練馬文化センター 大ホール
第47回	平成21年12月	練馬文化センター 大ホール
第48回	平成22年12月	調布市グリーンホール 大ホール
第49回	平成23年12月	練馬文化センター 大ホール
第50回	平成24年12月	練馬文化センター 大ホール
第51回	平成25年12月	練馬文化センター 大ホール
第52回	平成26年 5 月	新宿文化センター 大ホール
第53回	平成27年 3 月	練馬文化センター 大ホール
第54回	平成28年 3 月	新宿文化センター 大ホール
第55回	平成29年 3 月	練馬文化センター 大ホール
第56回	平成30年 3 月	練馬文化センター 大ホール
第57回	平成31年 3 月	新宿文化センター 大ホール
第58回	令和 2 年 3 月	練馬文化センター 大ホール



東日本学校吹奏楽大会

※コロナ禍中止

第59回	令和3年3月	府中の森芸術劇場	どりーむホール
第60回	令和4年3月	練馬文化センター	大ホール
第61回	令和5年3月	府中の森芸術劇場	どりーむホール
第62回	令和6年3月	府中の森芸術劇場	どりーむホール
第63回	令和7年3月	練馬文化センター	大ホール
第64回	令和8年3月	練馬文化センター	大ホール

定期演奏会はクラシック、ポップス、マーチング、合唱、ミュージカル、和太鼓、更にはプロ演奏者をゲストに迎え共演するなど、様々なプログラム構成で、一年間の総決算として部員達にとって思い入れの強い、とても大切な本番です。

令和2（2020）年コロナ禍により、殆どの活動が制限され、その影響を受け、部員数も半減し長年培ってきた活動運営機能が崩壊しました。それでも毎年「部員達共々一緒に音楽を楽しみたい」との思いをモットーに部員達と努力に努力を重ね、以前の活動を更に上回るように現在も取り組んでおります。

私達には「7つの気持ち」という心の教科書があります。“あったか〜いバンド、音楽するバンド、東京立正吹奏楽団”をキャッチコピーに、これからも人間力を高め、感動的な音楽を目標に活動して参ります。

今後とも応援よろしくお願い申し上げます。

（稲尾 啓樹）



吹奏楽部定期演奏会

【中学】

■ 中学ソフトボール部

前任の顧問の先生から中学ソフトボール部を引き継いで、すでに23年が経ちました。その間、都大会・関東大会で10度の優勝を経験させていただき、5度の全国大会出場、令和5（2023）年には全国大会第3位になることもできました。このことは選手の頑張りはもちろんのこと東京立正中学ソフトボール部を信頼して預けていただいた保護者の皆さん、そしてなによりも学園の理解があつてのことだと改めて実感しております。この場をお借りして御礼申し上げます。

中学ソフトボール部のモットーは「優勝するのにふさわしいチームになる」です。プレーを磨いて日本一を目指すのはもちろん、人としても磨きをかけて誰からも応援されるチームを目指しています。技のみを追求して勝つのではなく、技に心が備わったチーム、優勝した時に、すべての人たちが心から拍手を送ってくれるチームこそ学生チームの目指すべき理想像だと考えているからです。また、部活動だけでなく、勉強の方も手を抜かず精一杯努力するよう指導しています。得意、不得意は誰にでもあります。苦手なことから逃げ出さず、自ら工夫し克服しようとするのを勉強の中から学ぶことができるからです。

就任当初は、東京都で優勝し全国大会に出場することが目標でしたが、現在では「日本一」になることを明確に意識し、そのための練習を限られた場所・時間を有効に使って、日々考えながら取り組んでいます。その甲斐あってか、近年では5年連続で全国大会に出場させていただき、その中には関東大会優勝、全国大会第3位となるなど着実にその目標に近づいているように感じています。近い将来、「日本一の東京立正」のご報告ができますよう今後とも精進して参ります。

中学ソフトボール部の戦績【平成7（1995）年度～】

平成9（1997）年度 夏季東京都大会優勝、関東大会第3位
 平成10（1998）年度 夏季東京都大会準優勝、関東大会第3位、
 東京都秋季新人大会第3位
 平成12（2000）年度 夏季東京都大会準優勝、東京都秋季新人大会優勝、関東選抜大会第3位



中学ソフトボール部

平成13（2001）年度	夏季東京都大会優勝、関東大会第3位
平成14（2002）年度	夏季東京都大会優勝、関東大会優勝、全国中学校体育大会第3位、東京都秋季新人大会優勝、関東選抜大会優勝
平成15（2003）年度	春季東京都大会第3位、夏季東京都大会優勝、関東大会ベスト8
平成17（2005）年度	春季東京都大会準優勝、東京都秋季新人大会第3位
平成18（2006）年度	春季東京都大会第3位、夏季東京都大会優勝、関東大会ベスト8、東京都秋季新人大会準優勝
平成19（2007）年度	春季東京都大会第3位
平成20（2008）年度	春季東京都大会第3位、東京都秋季新人大会準優勝
平成21（2009）年度	夏季東京都大会第3位
平成31（2019）年度	東京都春季東京都大会第3位、夏季東京都大会第3位、東京都秋季新人大会第3位
令和3（2021）年度	春季東京都大会準優勝、夏季東京都大会第3位、全日本中学生大会ベスト32、東京都秋季新人大会優勝、関東選抜大会優勝
令和4（2022）年度	春季東京都大会優勝、夏季東京都大会準優勝、関東大会準優勝、全国中学校体育大会ベスト16、東京都秋季新人大会優勝、関東選抜大会優勝
令和5（2023）年度	春季東京都大会優勝、夏季東京都大会準優勝、関東大会優勝、全国中学校体育大会第3位、東京都秋季新人大会第3位
令和6（2024）年度	春季東京都大会準優勝、夏季東京都大会第3位、全日本中学生大会ベスト32、東京都秋季新人大会第3位
令和7（2025）年度	春季東京都大会準優勝、夏季東京都大会第3位、全日本中学生大会ベスト16、東京都秋季新人大会第3位

（内山 満雄）

■中学女子バレーボール部

「あと一步」は100周年に

平成11（1990）年代中学バレーボール界は、東京では「文京学院、共栄学園、順心女子学園」。大阪では「四天王寺」。岡山では「就実」といった名門校が6年間の一貫指導を部活動でも実践し中高ともに全国優勝を目指す流れが生まれていました。

平成11（1999）年に西森源太先生から「東京立正も中高一貫の強化をする」ということで私の中学校バレーボールの指導が始まり、現在に至ります。

発足当初は都内のどんな地域にも熱心な指導で定評のある公立中学校が多くあり、わざわざ地元を離れ「東京立正中学でバレーボールがしたい」という小学生

はおらず、選手6人を集めることに四苦八苦しました。なんとか集まってくれた7人で活動をスタートさせました。第1体育館しかなかったため活動のほとんどは高校生が練習している片隅や舞台でパスをする程度でした。サーブを打つのは昼休み。そんなでしたから杉並区で優勝するのに2年かかりました。ただ、このスタートチームが3年生の夏を迎え東京都で7位ながら関東大会初出場を成し遂げてくれました。こうなりますと、遊びに毛の生えた程度の練習しかなかった集団が変わり始めます。

「自分たちも関東大会へ。」さらには「全国大会に出場したい」という声が聞かれるようになりますと、何もかもが好循環。学校の共学化に伴い第2体育館が完成します。練習環境も整うと「東京立正中学でバレーボールがしたい。」という選手も増えました。本校を希望する選手の特徴は身長が高くないという理由で名門校に誘われなかったけれど、レシーブが上手いことでした。おのずと戦うスタイルが固まり、堅守から「技あり」の工夫した攻撃が本校のバレースタイルとなり都内では「立正バレー」なんて言葉も生まれるくらいでした。平成15（2003）年に全国大会初出場を果たし、翌年は関東大会準優勝。全国大会3位という成績を収めることができました。これ以降令和7（2025）年までに関東大会16回出場（準優勝3回。3位2回）全国大会12回出場を果たしました。特筆すべきは「100周年」を翌年に控えた令和7年の夏の戦いです。関東大会では不本意な5位という結果に終わってしまいました。かろうじて得た全国大会の出場権でしたが、この悔しさがばねとなりました。予選を勝ち



中学女子バレーボール部

抜き、決勝トーナメントは2回戦では「九州」チャンピオンを倒しました。準々決勝は「東北」準決勝では「関東」チャンピオンをストレートで倒しました。そして本校初の決勝進出を果たしました。

対戦相手は大会記録となる「6連覇」を狙う強豪「金蘭会中学校」です。舞台が大きくなればなるほど力を発揮する相手に対し本校は緊張もあり、本来の力が出せないまま第1セットを失います。第2セットも序盤は自分たちのバレーボールをさせてもらえません。しかし、本校の粘り強いレシーブから流れが変わりました。拾われることから相手のスパイクのミスが始めます。要所ではブロックも決まりだし中盤で逆転。16対14とリードを奪います。ここからは両校のエースが打ち合い、一進一退の攻防が続きました。先にマッチポイントを握られてしまいました。本校のエースが意地をみせ23対24。「あと1点」でジューズ。フルセットに持ち込める流れとなりましたが、最後は相手のエースの渾身の力を込めたスパイクが本校のコートに突き刺さりました。

「あと一步で日本一」本当に悔しい敗戦となりました。しかし、この一步先に進めば何が待っているのかはつかめたようです。また、この一步進むことが、どれだけ大変なのかもわかったようです。100周年の夏に、この一步先にあるものをつかみ取りに行きます。

(加藤 啓吾)



中学女子バレーボール部

Ⅲ 東京立正短期大学の誕生とあゆみ

堀之内学園
東京立正の100年

The 100th Anniversary of TOKYO RISSHO

東京立正短期大学の誕生



初代学長 藤井教詮先生

① 東京立正女子短期大学の設立

東京立正女子短期大学は、昭和41（1966）年1月25日に、文部省（当時）の設立許可を受けた。東京立正創立40周年記念事業として、学園創立当初からの悲願であった短期大学を設立したのである。

設立にあたっては短期大学設置基準を満たすため、堀之内妙法寺が1,866㎡の土地を堀之内学園に寄付し、3,600㎡の土地を運動場用地に60年間無償貸与した。

設立準備には、東京立正中学高等学校長（当時）の岩本経丸先生、中尾堯先生、小林幹男先生らが尽力された。文部省技術教育課、東京都学事部第2課より事前指導を受け、昭和40（1965）年9月30日に申請書を提出し、都内短期大学の先頭を切って昭和41（1966）年1月25日に認可されたのであった。

昭和41（1966）年4月15日、初の入学式が講堂で挙行され、92名が入学した。教職員は、藤井教詮学長、岩本経丸学監をはじめ専任教員は17名、客員教授3名、兼任講師28名、助手1名、職員8名であった。

② 校舎

設立にあたって建設された校舎は現在も使用しているが、教室配置は現在とは若干異なっていた。150人規模の講義室2つと小さな語学教室6が4階に、図書館とLL教室、タイプ室が5階に、茶道教室、生活科学実験室、学生ホールなどが1階に、その他の教室が3階に配置されていた。正面玄関および事務所は2階に置かれ、スロープと車寄せが2階正面玄関に接続していた。

この教室配置は、情報化社会の進展に伴い、平成5（1993）年に大幅に変更されている。5階にあった図書館が1階に移動するとともに従来のLL教室、タイプ室が電子タイプ室、パソコン室に改装された。併せて学生ロッカー室も5階に設けられた。

③ カリキュラム

本学では、現代社会に有為な女性を育成するため、英米語学科を置きそのもとに秘書コース、教職コース、教養コースの3コースが配置された。昭和46（1971）年には観光コースが新設され、4コースとなったが、昭和63（1988）年には全コースで教職課程を履修できるようになったため教職コースが廃止されたので再び3コース制となっている。

なお、昭和45（1970）年度生は英米語学科秘書科・教職科・教養科、また昭和46（1971）年度生から昭和50（1975）年度生

までは、英米語学科秘書科・教職科・教養科・観光科とされていた。

また、意外に思われるかもしれないが、当時は名称に「仏教」を冠した授業は存在しなかった。昭和55（1980）年代には「宗教思想」、平成2（1990）年代には「比較宗教学」という授業が開設されていたが、設立当初のカリキュラムにはそのような授業は見当たらない。現在に比べて、宗教行事への参加を始め、短大全体が仏教の教えに基づいて運営されていたということもあり、敢えて授業に組み込む必要性がなかったという側面もあったのであろう。なお、現在の私立大学には建学の精神を学生に周知させることが求められるようになっており、本学では「仏教と文化」という授業を開設し、それに対応している。

成績評価は、現在では5段階評価の大学が多数を占めるようになっているが、本学は開学以来現在まで一貫して4段階評価である。なお、開学当初は、優、良、可、不可の表記であったが、1980年代からは、A、B、C、Fの記号表記に変更し、この表記は現在まで変わらない。ただし当時は、90～100点がAとされており、現在の80～100点がAという基準より若干厳しかったことが分かる。

①秘書コース

『70年』によると、秘書コースは、情報化・国際化が進む中でさまざまな事務処理能力を習得し、OA時代にふさわしいバイリンガル・セクレタリーをめざすとされている。「キーボーディング」「ワード・プロセッシング」「ビジネス・イングリッシュ」などの科目が配置されており、英検、秘書検定に加え英文タイプライター検定をめざしていた。『70年』は平成8（1996）年に刊行されているので、本学設立の昭和41（1966）年当時と比べると情報化社会に対応した先端の学びが行なわれていたことがわかる。

②教養コース

教養コースは、グローバルな視野を身につけ世界を舞台に活躍する女性を育成するとされている。「アメリカ事情」「イギリス事情」「イギリス民俗」「特殊講読（英米文学）」などの科目が配置されており、英語力の向上に加え英米の生活様式・習俗・芸術などを幅広く学べるようになっていた。

③観光コース

観光コースは、コミュニケーションをキーワードに、国際化時代の観光事業に携わる国際派女性の育成を目指すとしており、「観光事情」「観光実務」「観光英語」などの科目が配置されており、旅行業務取扱主任者試験（現国内旅行業務取扱管理者）合格に向けて学習するカリキュラムであった。



教育・保育理念碑



当初の短大入口付

4 校歌

設立時点では本学に校歌がなかった。そこで昭和58（1983）年、石川教張先生が校歌作成を提案され、直ちに校歌制定推進委員会（山田田津子、紙谷成廣、杉江つま、石川教張各先生）を設け、校歌作成に着手した。

校歌制定においては、建学の精神と短大の教育方針を表現しうる作詞者、作曲者に依頼するとの方針のもと、谷川俊太郎氏に作詞を、服部克久氏に作曲を依頼したところ快諾を得ることができた。

昭和60（1985）年1月には谷川俊太郎氏が本学を訪れ、教職員および学生代表と懇談し、9月には作詞が送られてきた。作詞には「英語教育に力を入れられていると思いますので、一、二節とも英語で始めてみました。いささか従来の校歌詞とは異なりますが、それは私の貴校への思い入れとお考えいただいても良いかと思います」と添書されていた。10月には服部克久氏が本学を訪れ、卒業式までに作曲することやコーラス入りレコーディングをすることなどを打ち合わせ、紫友会役員とも懇談した。

こうして昭和61（1986）年1月に作曲が完成し、2月に服部氏自らピアノを演奏してレコーディングが行われ、3月の卒業式、4月の入学式で、歌唱指導を受けたのちに初めて学生によって歌われたのであった。さらに11月、谷川俊太郎、服部克久両氏を招いて、来賓、関係者列席のもと校歌発表会が講堂において盛大に開かれた。奇しくも創立20周年を期して校歌が作られたこととなる。

5 親睦旅行

本学では、年に一度、一泊二日の親睦旅行を実施していた。親睦旅行一覧を見ると、昭和51（1976）年に朝霧高原、白糸の滝で開始され、昭和53（1978）年には身延山、朝霧高原となっており、当初は日蓮宗総本山身延山久遠寺を訪れるものであったと考えられる。その後レジャー的な要素が強くなり、昭和55（1980）年、昭和56（1981）年は、行川アイランド、マザー牧場となっており千葉県方面に出かけていたが、昭和57（1982）年から昭和61（1986）年は一転して、白樺湖、霧ヶ峰、諏訪大社など長野県方面に変わっている。平成3（1991）年からは、スポーツで汗をかくことで親睦を図るプログラムが加えられていった。

いずれにせよ、名所旧跡を訪ね文化的知識を深めるとともに、豪華ホテルに宿泊しその土地の名産品を味わうことで、学生た



親睦旅行

ちはこの旅行を十分に堪能している。夜には親睦会と称して歌や踊りを楽しんだ年もあり、その年ごとにさまざまなエピソードがあった。平成4（1992）年には一泊旅行とは別に東京湾クルーズと港ヨコハマ中国料理フルコースが開催されており、まさにバブル景気を象徴する様相であった。

⑥自治会活動(紫友会、専門委員会、クラブ・同好会)

①紫友会

本学は小規模であっても自治会活動は活発であった。紫友会では、学内の活性化を目指し、文化祭、体育祭やダンスパーティーなどの大きなイベントを企画し実施している。学内外の活動を通して、学生相互および学生と教職員のコミュニケーションを図り、学生生活が充実したものとなるよう、代々の役員たちがリーダーシップを発揮し、活動していた。

②文化祭

文化祭は「WISTERIA FESTIVAL」という名称で、クラス・クラブによる研究発表や模擬店を中心に、2日間にわたって盛大に行われていた。平成22（2010）年頃に廃止されたが、それまではミスコンが盛大に行われていた。内容や審査員を検討したりクラス応援団を作ったりしていたとのことであり、まさに隔世の感がある。また、芸能人を呼んでのコンサートやトークショー、学外でのダンスパーティー（後夜祭）なども行われており、予算のやりくりが大変であったとの記録も残されている。

③球技大会・体育祭

毎年、春の行事として「球技大会」（バレー、バスケ、卓球等）が行われ、思いっきりスポーツを楽しんでいた。また、昭和53（1978）年から昭和59（1984）年まではより規模の大きい体育祭も開催されていた。体育祭の目玉は各クラスの創作ダンスと応援合戦であった。

現在は学生個々の嗜好性の多様化に伴いスポーツ大会も廃止されてしまったが、クラス・ゼミ活動の活発さは受け継がれており、各イベントや学習発表会にクラス・ゼミ単位で参加している。

⑦海外研修

海外研修は、本学の教育理念に基づき、学生が国際的な感覚を体得するとともに豊かな人格形成の一助となることを目的に実施されてきた。現在でも海外研修は実施されているが、参加学生は毎年数名で時にはゼロの年もある。これに比して当時は、



かつての体育祭風景



学生寮

学内に海外研修旅行委員会が設置され指導・引率体制が確立されており、多くの学生が参加していた。

アメリカコースは、ロサンゼルスやサンフランシスコなど西海岸の都市を中心に訪れており、ディズニーランドやハリウッドなどに加え、ダウントウンや学生街も訪問していた。海外研修は、英語が得意な学生だけでなく、不得意な学生も英語の勉強に打ち込む良い機会になったようである。意外だったのは、アメリカの人は礼儀正しく日本とはずいぶん違うと思った、との感想が残されていることである。格差が広がり混沌としている現在とは異なり、少なくとも表面的には中流層が大きかった「古き良きアメリカ」がまだ存在した時代だったのであろう。

ヨーロッパコースは、イギリスやフランスを訪問しており、伝統と芸術に触れることを重視していた。イギリスではチューグ様式の古い木骨づくりの家が建つ街並みを歩いたり、世界最大の博物館である大英博物館を見学したりしていた。フランスでは、ベルサイユ宮殿やルーブル美術館などを見学していた。学生たちは、これらの都市を訪問することで、言葉はもちろん食事、交通、感覚、生活習慣などあらゆるものが国によって異なっていることを学ぶ貴重な体験となっていた。

学生に貴重な経験をもたらした海外研修であるが、このような組織的な取り組みは、1990年代後半に廃止されることとなった。

8 学生寮

現在では廃止されてしまったが、本学には昭和44（1969）年から昭和63（1988）年まで学生寮が設置されていた。現在は、本学が提携する学生会館（本学だけでなく都内の大学に通う学生が入居できる施設）が都内にいくつかあるため、本学独自の学生寮は役割を終えたと考えられるが、当時は極めて重要な存在であった。

昭和44（1969）年に近隣民家に間借りする形で学生寮を開設し、昭和45（1970）年から昭和56（1981）年までは木造校舎を生活学寮に改装して使用していた。昭和57（1982）年には新たな寮が建設されたが、収容人数は34名と旧寮の半分以上に縮小している。以下、『70年』より寮生活を綴った記述を抜粋（一部編集）して紹介する。

静かな学内の一角に、落ち着いた雰囲気建物が昭和56（1981）年に完成した。地方出身者を中心に、1室2名で楽しい共同生活の場となっており、自主性の養成も目指して当番制も実施していた。中でも夕食の共同炊事ではそれぞれが腕を競ったものである。

9 就職・進学

①就職

卒業生の70%が就職を希望し、就職率は希望者の80%近い実績をあげている。また、進学希望は10%未満であり、3割以上の学生がその他の進路を選択していた。当時の社会状況を考えると、花嫁修業をして結婚し専業主婦になるという進路選択もあったものと考えられる。

なお、就職先企業としては、都市銀行や大手証券会社などの名前も見られた。就職を希望する学生には、年6回以上の就職指導、面接試験の対策として、マナー講習会・卒業生との懇談会・個人面談・職業適性テストなどを実施しており、きめ細かな指導が行われていた。就職資料室では、企業別ファイル・卒業生の企業受験報告書・就職試験問題集・就職雑誌などあらゆる資料が自由に閲覧できるようになっていた。アプリやWEBサイトを使った就活が主流になっている現在では、企業別ファイルなどは撤去されており、当時の就活の仕方はずいぶん異なっていたのであろう。とはいえ、きめ細かな指導という伝統は現在まで引き継がれている。

平成5（1993）年頃の就職先を業種別で見ると、商社とサービス業の割合が大きく、両者を合わせると50%以上となっている。現在は、小売がそれなりに多いが当時の分類には小売・卸売という業種がないので、おそらく商社に含まれていると思われる。そうであるなら、就職の傾向は現在とそれほど変わらないものとも考えられる。

②進学

1割弱の学生が進学を希望しているとされているが、具体的な記述は駒澤大学に進学した学生の記述があるだけで、記録上は進学指導の内容や具体的にどのような進学先があるのかなどは不明である。当該学生の記述を転記しておく。

「短大からの進路に4年制大学も考えては？」

私は、4年制大学の3年次に編入しました。現在「米文学史ゼミ」に入って勉強していますが、短大の「英米文学概論」などの授業が、大変に役立っています。短大の科目登録にあたっては、編入単位認定で、認められる科目と認められない科目があるので、十分注意して下さい。」

現在では、全体の1割強の学生が進学を希望しており、都内短大では随一の進学実績を誇るようになっているが、当時から熱心な進学指導が行われていたのであろう。

（※本節は、『堀之内学園 東京立正の70年』より抜粋したものに加筆・修正したものである。また、必要な場合には同書の略表記として『70年』を使用している。）

短期大学の改組と 現代コミュニケーション学科

『堀之内学園 東京立正の70年』が公刊された平成8（1996）年ころ、東京立正女子短期大学は英米語学科として円熟期を迎えていた。英語を軸に秘書、観光などの知識と技能を身につける多彩な授業が配置され、アメリカ研修旅行やスキー合宿など学外でも積極的に学ぶことができるカリキュラムであった。

しかしこれは嵐の前の静けさに過ぎないで、21世紀に入ると、短期大学はまさに激動の時代を迎えるのであった。ここでは、この激動の歴史と今を綴ることとしたい。

①短期大学の改組の歩み

本学の改組は平成13（2001）年度から開始された。その必要性は1990年代後半から認識されている。この時期、18歳人口の減少と短大離れが始まり、全国的に短大進学者が減少していった。本学もこの時期急速に入学者が減少し、平成11（1999）年度には入学者が定員割れし、平成12（2000）年度には収容定員も割り込むようになった。こうした状況に対し、学内では英米語学科を時代に合わせて改組することが議論されるようになったのである。実際の改組に向けて学内には2つのチームが作られ、コミュニケーションを中心とする学科に改組することが概ね合意されるに至ったが、英語を中心とするのか、思い切って英語中心から離れるのかについては、なお意見が分かれていた。

（入学者数の推移（入学定員100名））

平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
149	113	95	66	42	69	75	67

①42名ショック

（平成13(2001)年度）

学内に衝撃が走ったのは、入学者が42名という開学以来最低の人数にとどまった平成13（2001）年度である。なおこの数字は、開学以来最低というだけでなく、その後令和8（2026）年度までの歩みの中でも最低の数字である。平成13（2001）年度は「英語コミュニケーション学科」としてスタートした年であったが、その結果が42名であり、やはり英語を中心とする学科では学生を集めることが難しいとの結論に至り、平成14（2002）年度には「現代コミュニケーション学科」と再度名称が変更された。英語コミュニケーション学科はわずか1年間の命だったのである。

②現代コミュニケーション学科発足

(平成14(2002)年度)

現代コミュニケーション学科には、ビジネス情報コース、心理カウンセリングコース、観光メディアコース、英語コミュニケーションコースの4コースが配置され、いずれもコミュニケーションを基礎とするカリキュラムが編成された。同時に留学生の募集を開始し、多彩な学生を受け入れるようになった。当初は我々の対応が慣れていないこともあり、行方不明になってしまう留学生もいたが、今では多文化共生を考える上でも留学生はなくてはならない存在となっている。

③共学化および子どもコミュニケーションコースの発足

(平成17(2005)年度)

改組によって入学者数は増加したものの依然として定員未充足の状態が続いた。そこで平成17(2005)年度、現代コミュニケーション学科に子どもコミュニケーションコースが追加され、保育士養成課程が発足した。同時に共学化が始まったが、これは東京立正高校が平成14(2002)年度から共学化したことを受けた措置という側面もあった。実はこの年の1年間だけは、専攻を分けることなくコースを追加したのみだったため、2年次には、保育士を目指す学生もビジネス系など4コースのゼミを選択することもできた。逆に、4コースに所属する学生が保育系のゼミを選択することもできた。全く違う職業をめざす学生がゼミ内に混在することで、むしろ活発な議論が行われ、学生間の交流も盛んであった。

④幼児教育専攻発足

(平成18(2006)年度)

平成18(2006)年度には、現代コミュニケーション学科の下に、幼児教育専攻と現代コミュニケーション専攻の2専攻を置くこととなり、子どもコースと他コースは全く別のカリキュラムとなった。幼児教育専攻には教職課程が置かれ、保育士資格に加えて幼稚園教諭二種免許も取得できるようになった。一方、現代コミュニケーション専攻では英語コミュニケーションコースを廃止し、ビジネスコース、観光コース、心理コースの3コース制に変更されたため、かろうじて残っていた英語の名称が最終的に消えることとなった。これらの専攻、コースの改革により、入学者数は徐々に増加し、平成24(2012)年度に入学定員を充足するに至った。



ピアノ授業風景

(入学者数の推移)

	平成17 年度	平成18 年度	平成19 年度	平成20 年度	平成21 年度	平成22 年度	平成23 年度	平成24 年度
現代コミュニケーション専攻	80	64	57	49	67	45	53	50
幼児教育専攻	16	26	28	32	24	27	43	54
合計	96	90	85	81	91	72	96	104

※平成17年度の幼児教育専攻の欄は子どもコースの人数。また、平成18年度、平成19年度の2年間に限り、入学定員は80名（現代コミュニケーション専攻50名、幼児教育専攻30名）だったので、この2年間も入学定員を満たしていることとなる。

⑤現代コミュニケーション専攻・コア制の失敗 (平成22(2010)年度)

平成24（2012）年度に入学定員を充足しているが、平成22（2010）年度のように入学者数が急減した年もある。実はこれには本学の大失敗があった。このころ、短期大学に多様な学生が入学するようになるとともに、各コースに配当された必修科目の単位を取ることができず卒業が危うくなるという例が見られるようになった。また、特定のコースではなく他コースの授業も履修したいという希望が出されるようになった。こうした流れを受けて、多様な履修モデルを示して所属コースを超えて履修できるようカリキュラムが全面的に改定された。それに伴い、コース制という名称はふさわしくないということとなり、ビジネスコア、心理コア、観光コアという名称に変更された。

ところがこれが大失敗であった。コースという誰にでも分かりやすい名称と異なり、コアと言われても何のことか理解してもらえなかったのである。平成22（2010）年度の現代コミュニケーション専攻の入学者は前年度から22名減の45名にとどまり、平成13（2001）年度の42名ショック以来の衝撃をもたらした。そのため、平成23（2011）年度から再びコース制に戻し現在に至っている。もちろん名称は元に戻したが、多様な履修ができるカリキュラムは活かしており、その後も毎年のようにカリキュラム改革を行っている。

この時期、他の短期大学でもモデル制、ユニット制などさまざまな試みがなされており、本学でも何かやらねばという雰囲気流されてしまったが、きちんと考えて行動しないとイケないという反省事例になったのである。

⑥幼児教育専攻の二年制への移行 (平成24(2012)年度)

平成17（2005）年度の子どもコミュニケーションコース開設

以来、保育士養成課程は三年制であったが、平成24（2012）年度から二年制に変更された。

実は、子どもコミュニケーションコースを申請した時、すでに本学の希望は二年制であった。しかし、当時の厚労省の方針で二年制の新設は認められなかったため、やむなく三年制で開始することとなったのである。ところが平成22（2010）年頃、厚労省が保育士養成課程は二年制を基本とする、と言い出したのである。我々は、びっくりして厚労省に問い合わせた。厚労省の回答は、保育士養成課程の基本が二年制であることは元からの方針であり三年制を強制した事実もない、というものであった。正直言って納得いく回答ではなかったが、早速二年制に改組することとした。

平成24（2012）年度を最後に、改組せず現在に至っているの
で、以下に入学人数のみ掲載する。

（入学者数の推移）

	平成25 年度	平成26 年度	平成27 年度	平成28 年度	平成29 年度	平成30 年度	平成31 年度
現代コミュニケーション専攻	59	49	57	59	82	75	92
幼児教育専攻	69	39	72	63	37	54	37
合計	128	88	129	122	119	129	129

	令和2 年度	令和3 年度	令和4 年度	令和5 年度	令和6 年度	令和7 年度	令和8 年度
現代コミュニケーション専攻	87	71	65	52	54	57	55
幼児教育専攻	42	40	20	28	14	14	27
合計	129	111	85	80	68	71	82

②東日本大震災復興支援ボランティア

平成23（2011）年3月11日、福島、宮城、岩手を中心に東日本全体に大地震が発生した。都内でもガソリンや食料品が不足したり、計画停電が実施されたりして混乱していたが、津波を受けた青森から茨城にかけての被害は甚大であった。春休み中で帰省している学生もあり、ただちに安否確認を行った結果、全員の無事を確認した。また、本学の建物にも被害はなかった。とりあえずほっとした矢先、4月の入学予定者の一人が福島で亡くなったとの報告が入り、学内は大きな衝撃と悲しみに包まれることとなった。

この年の卒業式は中止となり、学生と再会したのは4月にな



東日本大震災ボランティア



東日本大震災ボランティア

ってからである。

前期授業は、列車の間引き運転があったので、始業時間を9時20分に遅らせて対応した。また、登校できない学生への配慮として、WEBサイト上に授業ごとのページを作り授業内容や学習ポイントをまとめた情報をアップすることとした。令和2(2020)年度の新型コロナウイルス感染症蔓延時にもICTを利用した学習環境をいち早く構築したが、この時期から素早く対応していたのである。

4月の段階において、本学では、被災地、被災者に対する支援をしたいとの機運はあったものの、年度初めの忙しい時期であり、杉並区の南相馬支援活動への協力や義捐金を集める活動にとどまっていた。そんな折、学生から被災地ボランティアに行きたいとの強い要望が出された。被災地ではホテルなども再開しておらず、交通機関も限られる状況であったため、実施に慎重な意見もあったが、坂輪学長が「学生の安全を最優先することを条件に実施する」と決断した。この決定がなされると、堀之内妙法寺、同窓会、父母の会、学園本部、教職員組合、学生・教職員から、金品および物資提供の申し出があった。多くの方々の協力があって実施できたと改めて感謝申し上げるとともに、それだけ本学ボランティアへの期待が高かったのだと思い返している。

仙台市の本山孝勝寺の谷川海雅貫首からお寺の会館を宿泊場所として提供していただけることとなり、近隣地域の社会福祉協議会やボランティアセンターを直接訪ねて調整を重ねた結果、最終的に東松島市にボランティアに入ることを決定した。

これらの準備を経て、6月13日(月)から5日間のボランティアを実施することができた。学生29名が参加したことが記録されているが、本学の規模を考えるとずいぶん多くの学生が参加したこととなる。出発後しばらくはチャーターしたバスで学生たちは和気あいあいとおしゃべりしていたが、名取市の被災現場を通りかかると車内の空気が一変した。住宅があったであろう場所が土台を残して津波に流され、がれきが散乱していたのである。全員が息をのみ言葉を発する者は一人もいなかった。

ボランティアの主な内容は、家屋の中に流れ込んだ土砂(ヘドロ)の撤去と片付けであった。連日、東松島市の小学校に設けられたセンターに集合し、担当者からの指示に従ってグループごとに分かれ作業を行った。淡々とした作業であったが、時には住民から被災時のことをお聞きしたり、背丈以上の所まで津波が来た跡が残っていたりして、改めて被害の大きさを思い知らされた。その一方で、ボランティアには私たち以外にも多くの方が参加しており、中にはアフリカから来たという方もいて、まさに世界中の人たちが少しでも力になりたいと協力して

いる姿を知ることができた。

そして、直接のボランティアだけでなく、お寺に残って食事の準備をしたり、洗濯、掃除、弁当を作ったりした班もあり、各自が自らに課せられた任務をきちんと理解し一丸となって活動したからこそ、けが人を出すこともなく無事にやり切ることができたと考えている。学生の底力を感じた一週間であった。

なお、大規模なボランティアは平成23（2011）年だけだが、復興支援として、平成24（2012）年にも東松島市、平成25（2013）年、平成26（2014）年には岩手県大槌町で小規模なボランティアを実施している。

③ コロナ禍の経験

新型コロナウイルス感染症は、令和元（2019）年末に海外で徐々に蔓延し、令和2（2020）年に入ると国内でも広がりを見せてきた。それでも2月頃までは、ここまで猛威を振るい短大にも大きな影響を及ぼすとは思っていなかった。ところが3月になると状況が一気に変わっていった。感染者数が等比級数的に増えていき不要不急の外出自粛が要請されるようになったのである。この影響は生活のあらゆる所にまで及んだが、教育機関も例外ではなかった。この経験は、単なる感染対策、予防対策にとどまることなく、授業形態や学習成果の測定自体を根本から見直すことにもつながった。文科省からの通知も、当初は緊急措置としてオンライン授業を認めるものだったが、後には対面授業を基本としつつ、場面に応じて積極的にオンライン授業を活用するよう求めるものとなっていった。この経験および経験から得たことを簡単に記載してみる。

① 卒業式の分散実施・入学式の中止

3月15日の卒業式直前まで、我々は卒業식을通常どおり講堂で実施することとしていた。これは学生側からも卒業式を実施してほしいという強い要望が出ていたためでもある。しかし事態は我々の予測をはるかに超える規模と速さで進んでいたのである。2月28日には北海道で外出自粛要請が出され、東京都からは出ていなかったものの（都の外出自粛要請は3月25日）、皆が集まる場を持つことの危険性について議論されるようになり、断腸の思いで全員が一堂に介する卒業式中止を決定した。これに代わり、各教室にゼミごとに集まって卒業式を行うこととしたので、何とか卒業式自体の中止は避けることができた。一方、入学式の時には東京都から不要不急の外出自粛要請が出ており、式そのものを中止せざるを得なかった。

② 4月から開講できるのか？ 緊迫した学内

入学式もその後のオリエンテーションもやらないまま授業を



コロナ禍の分散卒業式



コロナで学習発表会

始めることができるのか。いや、何としてでも開講しなければならない。学内には危機管理委員会が作られ、情報収集から具体的対策まで連日議論がつづいた。しかも議論を続けるだけでなく日々刻々と変わる情勢に対応して行動していかなければならない。幸いなことに、平成27（2015）年度からOffice365（WEB授業、課題提示・回収、小テスト実施などオンライン授業に必要な機能が備わっている）の運用を始めており、平成29（2017）年度からは教務システム（WEBシラバス、WEB履修登録、各種のお知らせ機能などを含む）の運用を開始していた。もっとも、これらをオンライン授業としては活用していなかったため、大急ぎでオンライン授業の規則を作り、学生・教職員に周知して、4月13日から授業を開始することができた。多くの大学はゴールデンウィーク明けからの授業開始だったので、全国的に見ても素早く対応することができたといえよう。

③6月からリアルタイム配信開始

5月には学生のオンライン環境調査が終わりリアルタイムで受講できることが分かったため、6月1日から、授業をオンデマンドとリアルタイム配信を併用することとした。しかしこれも一大事であった。上述したように、オンライン授業のソフトウェア環境は整っていたものの、学内から授業を配信するハードウェア環境がなかったのである。しかもこの時期、パソコンもWEBカメラも品薄で、通常のルートでは入手困難な状況であった。そこで秋葉原の路地裏を血眼になって歩き回り、何とか機材を取りそろえることができた。こうして、都内の短大としてはいち早く、授業配信を開始することができたのである。

④一部対面授業再開(10月)

後期には早くも対面授業を再開した。当時はやった言葉である三密（密閉、密集、密接）を避けるため、現代コミュニケーション専攻、幼児教育専攻で一週ずつ交互に登校することとし、登校しない週はオンラインで受講するという形態をとったので、対面授業を半分再開したというのが正確な表現である。今では考えられないが、この時期、学生・教職員ともに毎朝検温し記録を付け学校に提出するという形をとっていた。

⑤学習発表会開催

対面授業を再開したものの、コロナが不安な学生は登校せず自宅で受講してもよいこととしていたため、多くの学生は登校せず、浴衣でい、文化祭などのイベントも相次いで中止となり、キャンパスは閑散としたままであった。このままでは学生も何のために短大に入学したのか分からなくなってしまう。そこで、現代コミュニケーション専攻では学習発表会を中止しないことを決定し、クラス・ゼミの活動も再開されたのである。

⑥平常時の体制に移行

令和3（2021）年度になるとワクチン接種も進み、1年間かけてほぼ平常時の体制に戻すことができた。それでも、ワクチン開発とウイルス変異のいたちごっこが続き、波状的に大流行が繰り返されたため、毎日が緊張の連続であった。毎日都内の感染状況をチェックし、感染拡大に際しては学生の安全確保を第一に考えて授業を全面オンラインに切り替えた時もあった。

令和4（2022）年度は最初から通常の体制でスタートすることができた。この年からは、コロナ禍で構築したオンラインの仕組みを緊急措置ではなく積極的に活用する試みも始められた。現在では、休講時の補講や小テスト、リアクションペーパーなど、さまざまな場面で活用されるようになっている。

今思い起こすと、なぜあそこまで力が出たのかと思うほど、とにかく必死で駆け回っていたが、おそらく、一日でも早く学生が顔を合わせられる環境を作りたいとの強い思いがあったからであろう。

4 学外学習の展開

コミュニケーションを基本とする学科に改組されると、学生が短大に求めることも、本学が学生に提供することも根本から変化してきた。コミュニケーションを理解したりコミュニケーション能力を身につけたりするためには、従来の講義型の授業だけでなく、自ら課題を発見し協同で解決策を探る、いわゆるPBL（プロブレム・ベースド・ラーニングあるいはプロジェクト・ベースド・ラーニング）が求められるようになり、本学のカリキュラムも根本から見直すことが必要となった。そこで、毎年のようにカリキュラム改革が行われるようになり、授業形態も多様になっていった。しかも、単に新たな形を取り入れるだけでなく、とにかく授業を楽しくしようと学生・教職員みなで考え積極的に実践していったのである。紙幅の都合で全ての取り組みには触れられないため、特に心に残っているいくつかの取り組みを記載したい。

①アクティブ・ラーニング・ウィーク（平成23（2011）年度～）

アクティブ・ラーニング・ウィーク（オフキャンパスアクティビティ、セルフ・マネジメント・ウィークと呼称された時期もある）とは、11月に1週間にわたって通常授業を休講し一斉に校外授業を行う企画であり、主に現代コミュニケーション専攻の学生が取り組んでいる。各教員が自分の専門性を活かした校外授業を企画し、学生は自分が希望する企画に参加する、という形をとっている。

令和2（2020）年度はコロナ禍でやむなく中止したが、令和



アクティブラーニング（貨幣博物館見学）



沖縄戦跡ツアー



韓国短期留学

3（2021）年度には復活し、現在まで毎年取り組まれている。

②アクティブ・ラーニング・デイ(平成23(2011)年度～)

名称が上記と紛らわしいが、これはゼミ企画のことであり、学生自身が校外授業を企画しゼミごとに取り組むというものである。平成22（2010）年度までは劇団四季などのミュージカルを見る観劇会が実施されていたが、平成23（2011）年度からは、ゼミやクラスごとに自分たちでテーマを決めて企画・実施することとなった。ちなみに、テーマパークなど、娯楽のみが目的の企画だと学校から予算がつかないため、学生はいろいろと頭を捻って、いかに自分たちの企画が教育的効果があるかを力説していた。実際のところ、遊びを勉強に見せかけるということだが、それを考えること自体も学習であり、遊びの中からもさまざまな発見があるため、各企画の許可率は高かったと記憶している。

アクティブ・ラーニング・デイは、ゼミ活動の活性化や学生間の交流にも寄与したが、コロナ禍で中止されて以来、予算措置がなされず消滅してしまった。なお、令和7（2025）年度から再びゼミ・クラスへの予算付けがなされるようになっており、アクティブ・ラーニング・デイの復活も待望される。

③沖縄戦跡ツアー

平成24（2012）年度から現在まで、課題発見・解決型授業の一環として沖縄戦跡ツアーが実施されている。3泊4日の日程で、前半の2日間に沖縄中部から南部にかけての戦跡を回り、後半2日間は自由行動である。沖縄戦跡ツアーを実現するにあたっては、前年度の被災地ボランティアの経験が重要な役割を果たした。それまでも沖縄に学生を連れていきたいという思いが述べられたことがあったが、学生の安全面への配慮から賛同を得ることができなかった。しかし、4泊5日の被災地ボランティアを実現したことで、学生の責任感や実行力が認識されるに至った。そして沖縄戦跡ツアー実施が大学当局より許可され、毎年9月に実施されている。

④海外研修

英米語学科だった時代は、全学的に海外研修を実施していたようだが、改組後はそのような取り組みは消滅していた。また、東京都私立短期大学協会が都内の短期大学を取りまとめて語学留学を実施していたものの、参加者が減少しこれも消滅してしまった。それでも毎年のように留学したいという希望者がいたため、留学を企画している業者と協力して海外研修を実施している。

また、平成29（2017）年には、韓国の大学と協定を結び、韓国への留学を開始した。当初は夏休みの3週間ないし2週間であったが、令和5（2023）年度からは半期（実質4ヶ月弱）の

留学を実施している。ペジェ大学では、語学研修に加え、韓国文化に触れるさまざまなイベントを準備しており、学生はこれらに参加したり週末には街に遊びに行ったりして、充実した留学生活を送っている。

⑤ちいさな音楽会

幼児教育専攻発足に伴い、実際に保育園児と接するさまざまなイベントを開催してきた。当初は松ノ木保育園の協力を得て、A live（アライブ）という名称で保育園において園児と手遊びをしたり絵本の読み聞かせをしたりしていたが、次第に会場が本学に移っていき、平成30（2018）年度に東京立正保育園が開設すると、園児を招いて一緒に歌ったり手遊びをしたりする「ちいさな音楽会」として定着することとなった。

⑥地域連携

本学は当然ながら妙法寺との関りは元々強いものがあつたが、現在は妙法寺門前商店会、和田商店会と協定を結び、さまざまなイベントにおいて、時には企画段階から参加している。杉並区のボランティアセンターとも連携しており、学生たちは区内のさまざまなイベントにボランティアとして参加している。また、杉並区内にある5大学でコンソーシアムを作っており、現在は学生が中心となり「杉キャン」という広報誌を一緒に作っている。



ちいさなおんがくかい

5 学習発表会

①スピーチコンテスト

かつては都内に英語系の短期大学が多く存在しており、東京都私立短期大学協会が英語スピーチコンテストを主催していた。本学でも平成3（1991）年度からこれに参加することとし、学内で英語スピーチコンテストを行い、代表者が東短協スピーチコンテストに出場するという形が定着した。しかし、2000年代に入ると英語系の短期大学の数が徐々に減っていき、本学も英語からコミュニケーション全般へと軸足を移していったため、学内のスピーチコンテストは日本語が中心となっていった。

②学習発表会始まる(平成22(2010)年度)

この年から、スピーチコンテストは1年生のみとし、2年生および専攻科生はグループごとに学習成果を発表することとした。学習発表会は、1年間の学習の集大成として、幼児教育専攻では学年ごと、現代コミュニケーション専攻においてはクラスやゼミ単位で取り組む企画となった。一方東短協の英語スピーチコンテストは平成24（2012）年度を最後に廃止されてしまった。これに合わせたわけではないが、本学の学習発表会でもスピーチコンテストを最終的に廃止し、1年生もクラス単位で研究成果を発表する形となり現在を迎えている。



学習発表会

③コロナ禍でも中断しなかった唯一の企画

なお、学習発表会はコロナ禍でも開催しており、スピーチコンテストの時代から一度も途切れたことのない唯一の企画となっている。現在は、幼児教育専攻では東京立正保育園の子どもたちを招いて歌や手遊びを披露している。現代コミュニケーション専攻ではクラスやゼミ単位のチームで研究成果を競っており、綿密なデータを示すチームもあれば、映像を使ったり劇を取り入れたり、中にはその場で客席にアンケートを取るなど双方向性を意識した発表を行うチームもある。投票によって優秀賞を選んでおり、学習発表会は、今では毎年盛り上がる企画として定着している。

⑥さまざまなイベント

①文化祭

文化祭は毎年9月あるいは10月に実施している。中学・高校と同日に開催する年もあれば別日に開催する年もある。東京立正中学・高校では「紫苑祭」というが、短大の文化祭には「藤祭 Wisteria Festival」という名称がある。しかし、現在ではその名称はあまり使われておらず、一般的な文化祭という名称で呼ばれている。内容的には、クラス・ゼミ単位で模擬店を出したり、最近では舞台・ミュージカルなどで活躍している小此木 麻里さんのライブなども開催され、多くの聴衆を集めている。

②浴衣でい♡りったん夏祭り

広報部が中心となって企画している珍しいイベント。留学生が日本文化に触れる機会になればと始めたイベントで、浴衣を着て1日を過ごす（授業も浴衣で受講）。現在は、放課後に模擬店が出たり、東京立正保育園の子どもたちを招き子ども広場を開催したりしている。最後は花火大会で締めるが、夏至に近い日に開催しているので明るい時間に花火をしているのがわが短大独特の伝統である。

③スポーツ大会・スポーツデイ

紫友会（学生自治会）主催の企画で、年によって種目や規模は一定ではない。かつては、全クラス参加の大イベントであったが、スポーツは楽しんでこそ意味があるので、現在は希望者のみの参加という形が定着している。近年は、障がい者スポーツに挑戦したり、小さな教室でも楽しめるスポーツを実施したりと、独自の進化を遂げている。浴衣でい♡りったんスポーツデイといい、本学のユニークな企画として定着している。

④ハロウィンパーティー、クリスマスパーティー

これらは紫友会が企画して実施しており、年によって開催の有無がある。クリスマスパーティーはずいぶん以前から実施さ



浴衣でい

れており、ハロウィンパーティーもそれに引き続いて開催されている。クリスマスもハロウィンも元をたどればキリスト教のお祭り。現代においては教義を超えて一般化しているとはいえ、やはり本学で実施することはどうなのか、若干の不安もあったが、平成29（2017）年、山田教周理事長（堀之内妙法寺山主）が短大の授業を視察された際に思い切って、短大でクリスマスパーティーを開催することについて聞いてみたことがあった。理事長は迷うことなく、「どうぞやってください。我が家でもやっていますよ。」と答えられた。あまりにあっけない答えに多少拍子抜けしたのも事実だが、山田理事長の懐の深さを感じた一コマであった。

⑤親睦旅行・サマーキャンプ

これは令和元（2019）年度を最後になくなってしまったイベントである。毎年、1年生が参加する1泊旅行があり、親睦旅行と呼ばれていた時期もあればサマーキャンプと呼ばれていた時期もあった。平成26（2014）年度までは湯の丸山荘を宿泊場所にしていたが、実施時期は年によって異なっていた。平成21（2009）年度のように入学式直後にオリエンテーションを兼ねて実施したこともあったがこれは例外であり、平成22（2010）年度頃までは、5月下旬の開催が多かった。その後しだいに6月末から7月初めに実施されるようになり、サマーキャンプという名称が定着していった。内容も、体育館を借りてスポーツ大会を実施したり、富岡製糸場を見学したりしたこともあったが、1日目は池の平湿原散策、2日目は軽井沢のアウトレットでショッピングという形に落ち着いていった。

サマーキャンプは短大の一大イベントであったが、令和2（2020）年度にコロナ禍で中止されるとその後も復活することなく現在を迎えている。

7 入学式と卒業式

入学式と卒業式は、学生にとって特に重要な行事であろう。それだけに、どのような行事にするのか熱心に議論した時期もあったが、結局、昔ながらのスタイルのままで行こうということになり、現在まで引き継がれている。それでも、教員の席が壇上になったり学生と同じ場所になったり、学生の全員の名前を呼ぶようになったりと少しずつ変化している。入学式で学生が一番驚くのは、なんといっても壇上に鎮座する仏像であろう。しかも、式開始と同時に幕が開き、突然登場するのである。仏教系の学校では普通の光景ともいえるが、新入生諸君には新鮮な驚きではないだろうか。



ハロウィンパーティー



入学式



謝恩会

卒業式の後には謝恩会（令和7（2025）年度からは卒業パーティー）を行っている。謝恩会は紫友会主催なので、開催場所はその時の学生の希望によって決めている。過去には学食で開催したり新宿のホテルで開催したりした時もあったが、ここ10年ほどは東京ディズニーランド隣接のホテルオークラ東京ベイで開催している。

平成23（2011）年の卒業式は震災による計画停電などの影響で、令和2（2020）年の卒業式はコロナ禍の影響で、それぞれゼミごとに教室で実施しており、また、令和2（2020）年の入学式も同様の理由で中止となっている。

8 短大の施設・設備

①学生ホール

学生ホールの竣工は平成14（2002）年となっている。本学の玄関の位置は現在も変わらないが、それまでは玄関まで車寄せのスロープが作られていた。これを撤去し学生ホールが作られたのである。学生ホールの完成により、空きコマや昼食時の居場所ができ、自治会室やサークル室も確保された。その一方で、玄関までは階段を上ることが必要となった。バリアフリー化は徐々に進められてはいるが、肝心の玄関部分はバリアフリー化が進まず、エレベーターを使用するために迂回せざるを得ないことになっている。

②幼児教育専攻設置に伴う改築

本学の校舎は、昭和41（1966）年に開学して以来60年間建て替えていないが、教室配置は頻繁に変化している。中でも大きな変化は、幼児教育専攻設置に伴う調理室、音楽室の設置と304教室のスタジオ化である。調理室は、もともと学生ロッカー室、音楽室はLL教室、304教室は就活の面接などを練習する部屋であった。

これらの改築によって保育士や幼稚園教諭を養成するための施設・設備は整ったが、その分全体的に手狭になったのも事実である。そこで、401教室、407教室を拡張し、元々コの字型だった廊下を、現在Iの字型に変更している。

③学内のICT環境整備

小規模短大としては比較的早くからICT環境整備が進められている。5階にパソコンルームが設置されており、平成16（2004）年、平成26（2014）年、令和6（2024）年とちょうど10年おきに設置しているパソコンを新型のものに更新している。パソコンの進化の速度はずっと早いので、実際には旧型パソコンをギリギリまで使い続けてきたというのが実情であったが、令和6（2024）年に同窓会からの寄付により最新のものに更新するこ



スタジオ

とができた。改めて感謝したい。

全学のWi-Fi環境整備も平成23（2011）年なので比較的早い方と言えよう。ネットワーク回線の増強も計画的に行っており、前述のとおりコロナ禍での授業配信にも素早く対応することができた。ちなみにAIの普及により現在はかつてないほど帯域を使うようになっているため、近年中のさらなる回線強化が必須と思われる。

④図書館

図書館は広いとはいえず蔵書の数も限られているが良書がそろっている。とはいえ、英米語学科を改組し、本学に進学する学生も変わってきた当初は、学生のニーズに合っていないのではないかと感じることも多々あった。しかし、2010年代になると、学生のニーズに合うような本がどんどん入ようになってきた。また、学生の選書ツアーが毎年開催されるようになり、学生自身が図書館に入りたい本を書店に行って選定することも増えていった。また、グループ学習室ができたのもこの頃である。図書館の文献を持ち込みながらグループで議論したり資料を作成したりするスペースである。今後もどのような進化を遂げるのか、楽しい図書館である。

⑤アクティブ・ラーニングに適した教室改造

現在ではグループワークやプレゼンなど、教室で行う授業にもさまざまな形態が見られるようになっている。そこで教室も双方向性を意識した形に徐々に変化している。かつて大教室は固定式の机と椅子であったが、現在は全面固定式という教室はなくなり前半分の什器は可動式となっている。中小の教室も、重たい机や椅子を徐々に軽いものに入れ替えている。中には302教室のように教室の後ろにもモニターを付け、どこを向いても映像資料を見られるようにアクティブラーニングを意識して設計したところもある。また、黒板も徐々にホワイトボードに置き換えており、現在では黒板が残っているのは301教室のみである。

ほかにも、昔の図面を見ると2階の配置も違っていたようであるし、おそらく16mmの映写機を置いたであろう穴をふさいだ跡があったりと、まだまだ興味は尽きないが、経緯は謎のままにしておきたい。

⑨歴代の学長たち

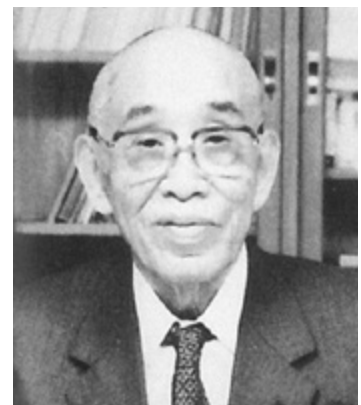
前学長北川前肇先生は現学園常務理事、清水海隆先生は現学長なので、それ以外の歴代学長について簡単に思い出を記してみたい。



第2代学長 岩本経丸先生



第3代学長 庄司寿完先生



第4代学長 石川教統先生



第5代学長 藤田教忠先生



第6代学長 藤井教正先生



第7代学長 坂輪宣敬先生



第8代学長 工藤教和先生

①藤井教正先生

(第6代学長・平成3(1991)～平成20(2008)年度)

藤井先生は、実に20年近くにわたって学長を務められた方で、短大が順調な時も苦難に陥ったときも経験されている。戦争経験者であるが、戦後の血のメーデー事件（昭和27（1952）年）の時も参加していたという闘士でもあった。それだけに、短大が苦しい時も労働組合と本音で話し合っていたことを今でも覚えている。

藤井先生で印象に残っていることは、失礼ながらいつもボロボロの軽自動車で出校されていたことである。教職員の中では、さすがお坊さんは物欲からも解放されているんだなあ、との感想も聞かれており、煩惱にまみれたわが身を見直す契機にもなったそうである。

②坂輪宣敬先生

(第7代学長・平成21(2009)～平成26(2014)年度)

とにかく謙虚で優しい方だった。仏教美術の権威でテレビなどにもたびたび登場していたが、権威を振りかざすこともなく、何か起しても独断で決めることはなく教職員一人ひとりに耳を傾けていたのが印象的である。この時期、前述のように短大では改組が繰り返されており短大の将来像について激論があったが、坂輪先生は自らの意見を言われることは少なかった。また、特定の人の意見に与するということも少なかった。常に全員に目を配りなるべく多くの意見を取り入れるよう配慮されていた。それだけに、おそらく相当神経をすり減らされたのではないかと今でも申し訳なく思っている。

③工藤教和先生

(第8代学長・平成27(2015)～平成30(2018)年度)

宗門関係者ではない唯一の学長である。専攻分野は経済学であり、明治期産業革命遺産の世界遺産登録においては有識者会議の座長を務めるなど、多方面にわたって活躍されていた。感覚的な判断を嫌う方で、議論においては常にデータによる裏付けを求められ、いいかげんな意見を聞いたたびに、「そのエビデンスは何ですか」とおっしゃっていた。議論の仕方や物事の進め方について鍛えられた教職員も多かったようである。

工藤先生で印象に残っていることは、オープンキャンパス時に高校生に対して「東京立正短期大学は日本のケンブリッジである」と説明されていたことである。工藤先生は過去にイギリスのケンブリッジで研究・教育に携わったことがあり、短大のアットホームな雰囲気がケンブリッジとよく似ているとのことであった。

IV 東京立正保育園の誕生とあゆみ

堀之内学園
東京立正の100年

子ども達の 輝く明日の為に

東京立正保育園は、平成30（2018）年4月、学校法人堀之内学園の建学の精神である法華經の教えに基づき、「生命の尊重・慈悲・平和」という人類普遍の価値を根幹に据えて開園しました。本年度で8年目を迎えます。

保育園の設立には、二つの大きな目的がありました。一つは、すでに設置されていた東京立正短期大学との連携です。同短大では保育・幼児教育を志す学生が多く学んでおり、机上の学びだけでなく、実際に子どもと触れ合う「生きた学び」の機会を提供したいという願いがありました。実習先としての役割はもちろん、卒業後の就職支援も視野に入れ、卒業生が保育士として長く社会に貢献出来るよう、親身なサポートを行うことを目指しました。もう一つは、地域の待機児童問題への対応です。共働き世帯の増加により保育所へのニーズが高まる中、この地域には保育施設が不足しておりました。こうした社会的背景も踏まえ、理事会での検討を重ねた結果、開園が決定されました。

開園までには約5年を要しましたが、最終的に、和田堀公園を目の前に望む自然豊かな土地に、子どもたちがのびのびと遊べる環境が整い「東京立正保育園」が誕生しました。

保育園は開園以来、仏教の教えを賜り、一人ひとりの命を大切にし、その子らしさが輝くように導くこと、そして保護者の皆様が安心して大切なお子さんを預けられる、笑顔あふれるあたたかい保育園を目指してまいりました。とりわけ「食育」には力を入れて、赤ちゃんが初めて口にする食事こそ、最も良質であるべきとの考えから、給食は全て国産の食材と調味料を使用し、化学調味料は一切使って

いません。安心・安全で心のこもった食事を通じて健康な体を育み、野菜の栽培や調理活動、先生や友達と一緒に楽しく食卓を囲むことで、心豊かに成長する事を大きな柱としてきました。

また、東京立正短期大学との連携では、園見学やふれあい保育、実習、ボランティア活動などを通じて、保育の学びと現場が繋がる機会を積極的に設け、短大の「浴衣でい（夏まつり）」には園児と保護者が参加し、保育園と短大との一体感が生まれています。そのほか、中高等学校との協力による施設の活用や、妙法寺様での「花まつり」



への参加、和太鼓や習字の練習の機会など、多方面にわたるご支援もいただいております。地域との繋がりも大切にしており、松ノ木中学校の「ふれあいコンサート」では5歳児が和太鼓とソーラン節を披露、老人ホームでは4歳児がパラバルーンで演技を行い、多くの方に喜びと感動を届けています。妙法寺様を会場とした地域イベント「みんなあつまれ」は年間通して開催し、また今年度からは卒園児が再び保育園を訪れる取り組みなど、地域に根差した活動も広がりを見せています。

子どもたちは、こうした豊かな環境の中で、思いやりと意欲にあふれ、日々笑顔いっぱいに過ごしています。小さな虫や自然物に対しても優しさを持ち、冬眠を迎えるトカゲに「自然に返してあげよう」「春にまた会おうね」と語りかける子どもたちの姿には、慈しみの心が育っていることを実感します。

この恵まれた大地と多くの支えの中で東京立正保育園の子ども達はのびのびと遊んで、笑って、友達と共に、今という時間を思いっきり楽しんでいます。どうか100周年を契機して、これからも子どもたちが仏教の教えに根ざした保育を通じて、慈悲の心と広い視野を持ち、日本、そして世界の平和に貢献できる大人へと成長していくことを心から願い、楽しみにしております。





Ⅳ 保育園の誕生とあゆみ





V

建学の精神

— 人の心のうちに塔を建てよう —

堀之内学園
東京立正の100年

The 100th Anniversary of TOKYO RISSHO

建学の精神と校名「立正」



岡田日歸上人肖像

堀之内学園は、昭和元（1926）年12月28日に、文部省より「立正高等女学校」設置の許可を得、翌昭和2（1927）年4月28日に創立記念式典を挙行了ことに始まります。それ故、4月28日をもって、本学園の創立記念日としています。この立正高等女学校の創立を発願されたのが、日蓮宗本山堀之内妙法寺の第30世岡田日歸上人です。

女学校創立当時、日蓮宗の諸寺院では開祖である日蓮聖人の第650遠忌を昭和6（1931）年を迎えるにあたり、その記念事業が計画されようとしていました。堀之内妙法寺でも記念事業として境内の一隅に五重塔を建立する検討が始まっていました。この計画立案に対し、岡田日歸上人は人材育成の重要性を深く認識され、「人の心のうちに塔を建てよう」と提唱され、当時わが国でもようやく関心の高まりを見せてきた高等女学校の創立に着手され、初代校主（現在の理事長）として、昭和2（1927）年度の立正高等女学校の創立を迎えたのです。

この学園創立の意図を基として、堀之内学園では東京立正短期大学、東京立正中学高等学校、東京立正保育園のすべてを網羅した「堀之内学園教育綱領」において、以下のように「建学の精神」を定めています。

『建学の精神』

本学園の創立者である堀之内妙法寺第三十世岡田日歸上人は、日蓮聖人六百五十遠忌にあたり、境内に五重塔を建てようという話が持ち上がったとき、五重塔を建てるよりも「人の心のうちに塔を建てよう」と提唱され、次代をになう青少年を育てる母親を育成するために立正高等女学校を設立された。こうした経緯から、**本学園では「人の心のうちに塔を建てよう」を建学の精神とする。**

ここで定められる「建学の精神」とは、学校を設立するにあたって、「どのような教育を行いたいか」「どのような人材を育成したいか」という、それぞれの学校の創立者の理念を基とした教育の指針となるものです。一般には、「私学の創設者が、学校開設にあたって、どのような人材を育成したいかなどの理念や気概、願いをうたいあげたもの」（日本私立学校振興・共済事業団）と定義されています。

それでは、本学園の建学の精神である「人の心のうちに塔を建てよう」とは、どのような意味を持ち、どのような理念をもって人材の育成をしようとしているのでしょうか。それを端的に表すものが、創立時の女学校の名称「立正高等女学校」、そして現在の各校・施設名称の「東京立正…」に含まれている「立正」という言葉なのです。ちなみに大正15（1926）年の発起人

会では、「立正、梅檀、浄徳、和雅、豊多摩、堀之内」などの名称が提案され、その中から「立正」という名称が選ばれ、「立正高等女学校」という名称に決定されたのです。

この「立正」という名称は、今から700年余程前の鎌倉時代に活躍した宗教家である日蓮聖人（生没1222-1282）の著した『立正安国論』に由来しています。『立正安国論』の執筆は文応元（1260）年のことですが、その直前の正嘉元（1257）年には鎌倉大地震、正嘉元（1257）年から同3（1259）年にかけては大飢饉、その他さまざまな天変地異が起こり、被害は物的・人的ともにはなはだしく大きなものとなり、人々は生活に対する不安から精神状態も不安定になっていた時代です。このような時代に著された『立正安国論』の冒頭において、日蓮聖人は天に起こる異変・地上に起こる災い・飢饉・疾病がひろく広がり、人々や動物たちの命が脅かされている様子を次のように記しておられます。

『立正安国論』（冒頭）

「旅客来って嘆いて曰わく、近年より近日に至るまで、天変地天・飢饉疫癘、あまねく天下に満ち、広く地上に迸る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩既に大半に超え、悲しまざるの族あえて一人も無し。…」

この有名な文章で始まる『立正安国論』は、日蓮聖人が39歳の時、鎌倉幕府の前執権北条時頼（ほうじょうときより）へ意見書として提出されたものです。大地震などの自然の災害や疫病の流行、飢饉による食糧不足など、生活のはなはだしく苦しい時代における北条幕府のあり方を提案した意見書です。その内容は自然災害や他国からの侵略などの困難の原因の追求を幕府に求め、「法華経」の教えに基づいた政治をおこなうように、幕府を諫めたものとなっています。それ故に、『立正安国論』という題名は、「正しい教えを打ち立てて、国土を安らかにするための論文」ということになります。したがって、本学園が「立正」という名を校名に用いたことには、「正しいこと」をしっかりと見定め、確立させ、それを基とした学園生活・社会生活を送ることのできる人材を育てる教育を行っていこうという誓願・決意が込められているのです。

それでは、何を「正」とするのか、「正しいこと」とは何かということが重要になってきます。わたしたちは、人それぞれ立場や考え・理想によって「正」とするものは異なっており、



「立正安国」額



日蓮聖人(高橋由一画)

また同じ人でも、時・場合・状況等によって、「正」とすることが変わってくる場合もあるからです。むしろ、「正しいこと」の判断は、絶対的なものとは限らず、相対的で柔軟性のあるものでなければならないのかもしれませんが、しかし、その一方で、普遍的で、いつ・いかなる場合でも変わらない「正しいもの」の存在もあります。それ故に、「正しい法（教え）」を学び、身につけ、そしてそこから社会の平安・安寧をもたらそうとする人材は大切であり、そのような人材を輩出する教育への誓いが、私たちの「立正」という校名にあらわされているのです。

さて、日蓮聖人がよりどころとされた「正しい法」とは『法華經』という仏教經典に示された教えのことです。この仏典はインドの聖典語であるサンスクリット語からいくどか漢訳されていますが、日蓮聖人がよりどころとされたのは鳩摩羅什三藏（4-5世紀）によって漢訳された『妙法蓮華經』を指しています。（鳩摩羅什は、多くの重要な仏典をサンスクリット語から漢語に訳した法師として知られています。）

ところで、『法華經』をはじめとする釈尊（お釈迦さま）の教えは「經典」という形で現在まで伝えられています。それらは「八万四千の法門」と称されるほど、非常に多く存在していますが、その中で、釈尊が入滅される前、最後の8年間で説いたのが『法華經』であると信じられています。したがって、釈尊が悟ったこと、体得したこと、人々に伝えたいことなどの集大成の教えが『法華經』であるとされているのです。釈尊は『法華經』以外の經典について次のように記しています

「それまでに（法華經を語る以前に）いろいろなことを人々に伝えてきた。しかし、それは相手が受け入れやすいように、わかりやすいように、話をする相手の人柄、境遇を見て話をしているから矛盾していることを話すこともあった」という、対機說法（「教えをきく人の能力・素質にふさわしく方を説くこと」『広辞苑』第七版・岩波書店）による教えであると述べています。

また、『法華經』そのものの中に、「『法華經』は多くの教えの中で最もすぐれたものである」「諸々の教えの中で第一である」などという記述が繰り返し述べられているように、「八万四千の法門」の中でも『法華經』の優位性は広く認められていたのです。この『法華經』の教えをよりどころとして、日蓮聖人は『立正安国論』を記されたのです。

それでは『法華經』が最もすぐれた仏典であるとされる理由はどのような点なのでしょう。そこには、他の經典にはない2つの特徴があります。

第1には、「すべてのものは、だれでもが仏となることができる」という平等性を説いていることです。そして、だれも分け隔てなく、仏となることのできる可能性、性質をもっているという

ことは、すべての者は、仏のもつ知恵と慈悲の心を本質的に有していることを示しています。この心を「仏性」といいます。それ故、私たちはみな仏性をもっていることを自覚する必要があります。すべての人に宿っている精神 その尊さ、尊厳を有していることを良くわきまえること、さらに、自身だけではなく、他のものの仏性も尊ぶこと、それは、人間として生存していることの根源的な価値となるのです。

第2には、「久遠^{くおんじつじょう}実成」です。すなわち、釈尊はみずからの生命の永遠性を明かされ、「久遠」（永遠の過去）に「実成」（実に成仏）していたと説かれていることです。私たちは、釈尊がこの世に生まれ、苦行や禅定の修行を経て悟りを開き、長期にわたる布教活動の末、80年で生涯を終えた、と考えていますが、実は、久遠の過去に仏となって存在しており、また、この世から姿を亡くしても、まだ現在も生き続けている、つまり、「釈尊は常に世の中に存在している」ということを意味しています。悟りの境地を得たのが30歳のころ、それから40年間ほど多くの経典を説いて、最後に『法華経』を説かれますが、『法華経』には、「釈尊は永遠の過去から、この世界で仏法を説き続けた、この世に生まれて悟りを開いたのは人々に教えを知らせるための方便であった」ということが説かれています。釈尊はいかなる時代においても、常に私たちを教化して見守っておられ、また見守って下さるのです。



日蓮聖人「三大誓願」碑

教育理念としての 「生命の尊重、慈悲・平和」と教育目的



教育理念碑

「堀之内学園教育綱領」には「建学の精神」に引き続いて、次のように「教育目的」が掲げられています。

『教育目的』

本学園は、法華經の精神に基礎をおく「生命の尊重、慈悲・平和」を教育理念とする。さらには日本国憲法および教育基本法および児童福祉法を柱として全人格教育を行い、現代に有為な人間を育成することを目的とする。

本学園では「建学の精神」である「人の心のうちに塔を建てよう」をより一層具体化した教育の目標として、(1)生命の尊重、(2)慈悲・平和を掲げています。校庭の石碑をはじめ、各教室にも理事長の揮毫による「生命の尊重 慈悲 平和」の額が掲げられ、本学園に集うすべてのものが、日々目にすることができます。これは、それらの精神を一人ひとりが体得し、学園を巣立った後においても活かされ、心の支えとなるようにとの願いがこめられているのです。では、それらはどのような意味を表しているのでしょうか。

【生命の尊重】

これは、あらゆるいのちを尊び、お互いを尊重しあうことで、『法華經』で説かれた平等の思想、すべての人が仏になることができる本性（仏性）をもっているという考えに基づくものです。この考え方が人間としての「尊厳」を重んじる倫理観となるのです。

そもそも人間は、性格、思想、など、それぞれ異なった特徴を有していますが、そのことによって差別がおこることがなく、それらの特徴を超越した個人の人格を含め、各人の生命の尊さを認めあうことの重要性が掲げられているのです。

【慈悲・平和】

慈悲の心は、仏さまの心であり、仏教の核心にある価値と捉えることができます。古来、この慈悲を言い表す語として「拔苦与楽」ということばが大切にされてきました。「仏・菩薩が衆生の苦しみを取り除き、人々に安楽を与えること。慈悲のこと」（『広辞苑』第七版）という意味です。この「苦しみを取り除き」が「慈」、「安楽を与える」が「悲」にあたります。

釈尊は生涯を通じて慈悲の心を人々に授けられました。他人を大切に思う気持ちの根底には、「生命の尊重」と同じく、他のいのちを尊ぶ心があります。また、慈悲は「無償」の行為です。「無償」とは、「報酬のないこと」ですので、自分の他人に対する思い、その行動には見返りを求めないことが大切なので

す。利害得失を考えず、他者の喜びも苦しみも自己のことのようにとらえる慈悲の実践は、自己を精神的に向上させることにつながります。

そして、大切なことは、「智慧」を身につけることです。「智慧」は、仏教の考え方の中では「慈悲」と双璧をなす大切な概念と言えます。なぜなら、「慈悲」を実践するためには、「智慧」を働かせなければならないからです。「智慧」は、仏教のことばとしては、「真理を明らかにし、悟りを開く働き」であり、一般的には「物事の理を悟り、適切に処理する能力」という意味です（『広辞苑』）。さまざまな分野、教科の「知識」を幅広く身につけ、「智慧」を働かせて、豊富な知識を活用させ、正しい判断を行い、問題を解決し、自己の向上を目指していく、さらには、世の中の平和のために活かすことができる能力を身につける、そのようなことが大切であり、目指されているのです。^{かたよ}偏った知識は、一面的なものの見方を助長し、これによって判断を誤ってしまうおそれがあります。他を思いやる「慈悲」の心が言動にあらわれるときに必要なことが「智慧」の働きなのです。

まさに、紀元前5-6世紀にインドにお生まれになられた釈尊が悟りを開いて体得した教えが、「仏さまの教え」として、『法華経』を通して、約2500年を経た今の世にも脈々として生き続けており、『法華経』に説かれる人として生きていく上での普遍的な教えが、今、わたしたち「立正」の教育の根幹となっていることが理解できるのです。

短大の「七仏通誡偈」



しよあくまくさ
諸悪莫作 (諸々の悪はなすことなかれ)



しゆぜん ぶぎょう
修善奉行 (諸々の善を奉行せよ)

教育目標と保育目標



「生命の尊重、慈悲・平和」色紙

「堀之内学園教育綱領」には、「建学の精神」の下での「教育の目標」と「保育の目標」がそれぞれ次のように示されています。

《教育の目標》

◆学生および生徒の教育指導

本学園の教育指導は、社会の平安と人間の幸福を樹立する「立正安国」の精神に基礎を置く。学生生徒は真理を探究し、正義を愛し、心身ともに健康で個性豊かな人格の形成をはかり、さらに平和な世界の建設に貢献し得る教養と技能とを身につけることを目標とする。

◆学生および生徒の生活指導

本学園の生活指導は、報恩感謝のこころをはぐくみ、いかなる困難にもくじけることなく目標の実現に向かって志をつらぬき、明るく、淨く、前向きに生き、人格の向上に努めることに基礎を置く。学生・生徒の指導にあたっては、人間相互の敬愛と感謝の心を養い、協力と奉仕による行動の実践をはかる。これによって、現代に有為な人間としての好ましい基本態度と行動様式を身につけることを目標とする。この目標の達成に向けて、次に掲げる「三つの誓い」を提唱し、これにもとづいて指導していく。

「三つの誓い（努力目標）」

一、どんな困難にもくじけず、自分を高め、心をみがき、個性を伸ばすために、すすんで勉学の道に励みます。

一、喜びも悩みも分かちあい、学びあい、助け合い、信じあい、明るく楽しい学園生活をおくるよう努めます。

一、命を尊び、自然の恵みに感謝し、すべての人の幸せと安らかで平和な社会の実現に尽くします。

《保育の目標》

◆本学園の保育園は、「生命の尊重、慈悲・平和」の理念の下、“命の大切さを知り、からだを育て気力の充実した子ども”、“生活する力を育て、自己コントロールができる子ども”、“体験を言葉に換える創造力、表現力が豊かな子ども”の育成を保育目標とし、その達成のために保護者とともに支援する。

このように各設置校ならびに保育園において、「建学の精神“人の心のうちに塔を建てよう”」をより具体化したな目標が掲げられています。そしてこれらの目標の達成が、教職員、学生・生徒に求められ、かつそれぞれがその達成にむけて努力しているのです。

本学園では、建学の精神に基づいて行われている宗教行事として、「花祭り」・「降誕会」・「お会式」・「慰霊祭」を行っております。どの行事も、私たちを活かしてくれる存在に対する報恩感謝の法要であり、本学園に集うすべての人々がこれらの宗教行事を通して本学園の「建学の精神」を再確認する契機となっているのです。

【花まつり】

「花まつり」は、約2500年前の釈尊しやくたんの降誕（誕生）を祝う行事です。生徒たちが持ち寄った生花はなみどうで花御堂を作る伝統が守り続けられています。そして花御堂の中に釈尊の誕生仏を安置し、釈尊降誕の時、天の龍が甘露かんろの雨を降らせたという言い伝えにならって、甘茶をそそぎ、釈尊の遺徳に感謝します。



花まつり

【降誕会】

「降誕会」は、日蓮聖人の誕生を祝う行事です。日蓮聖人は貞応元じょうおう（1222）年2月、安房国（千葉県）小湊で誕生されました。「降誕歌」を斉唱し誕生を祝います。「降誕歌」の歌詞には「七百年のその昔、貞応元年如月」に誕生されたとあります。この「降誕歌」は学園設立の頃に作成されたもので、現在まで歌い継がれているのです。

【お会式】

「会式」とは「法会の儀式」という言葉の略ですので、他の宗派でも用いられる言葉ですが、現在では「お会式」といえば、弘安5（1282）年、61歳で入滅された日蓮聖人のご命日に、聖人の遺徳に感謝して行われる法会の事となっています。江戸時代の俳諧や浮世草子などに、盛大で生活に溶け込んでいる行事の様子が描かれています。

【慰霊祭】

「慰霊祭」は、本学園の創立者である岡田日歸上人のご命日にあわせて、学園関係の物故者の慰霊を行う儀式です。物故された方々に支えられて現在の学園が存在していることに思いをはせ、物故者のご冥福を祈るとともに感謝の意を表する行事となっています。



VI 堀之内の思い出

堀之内学園
東京立正の100年



ヒマラヤ杉(2代目)

●東京立正短期大学の思い出

東京立正短期大学同窓会 会長 鈴木 雪枝

正門の前には一本の大きなヒマラヤ杉があります。この大きなヒマラヤ杉に見守られながら、中学・高校・短期大学と八年間の学生生活を送りました。

1966年に短期大学が創立され、私は第4回生として入学しました。全国から集まった学友と共に新しい校舎で授業を受け、休み時間には屋上で過ごすこともありました。

当時の短期大学には、秘書コース・教職コース・教養コースの三つのコースがありました。私は秘書コースを選び、そこで英文タイプと出会いました。自宅で練習用に使用していたのは、オリベッティというメーカーの「レッテラブラック」というタイプライターでした。現在ではヴィンテージのタイプライターとして扱われています。

秘書コースの担任教授は井口美登利先生で、その授業は「スパルタ」で有名でした。今でもその厳しさは語り草になっています。授業内容はタイピング、ファイリング、語学、第二外国語、体育、一般教養など多岐にわたっていました。

一方、キャンパスライフでは、学園祭やダンスパーティー、コーラスコンクールなどの催しもあり、楽しい思い出となっています。

卒業後の就職先は、一部上場企業がほとんどでした。秘書コースで習得したタイピングやファイリングの技術がそのまま仕事に役立ち、大変嬉しく思ったことを今も覚えています。

その後、時代の流れとともに、東京立正女子短期大学は男女共学の東京立正短期大学へと校名を改めました。

現在、私は恩師の井口美登利先生から生前に託された思いを受け、短期大学同窓会の会長を務めています。同期の学友や後輩たちに支えられながら、井口先生の思いを継承し、後輩の学生たちの支援に尽力しています。キャンパスに響く若いエネルギーに励まされつつ、少しでも学生たちの力になれるよう、同窓会活動にみんなで取り組んでいければと願っています。

●100周年記念号によせて

堀之内学園評議員 飯田 宮子

「思い出を振り返り」

堀之内学園創立100周年を迎え、心よりお祝い申し上げます。

私は学園創立40周年記念事業として設置された東京立正女子短期大学に、昭和61（1986）年4月1日に教員として入職し、平成30（2018）年3月31日に定年退職するまでの32年間奉職いたしました。その後平成31（2019）年より学園の評議員をさせていただき現在に至っております。

入職以来、学園とのご縁は今年で40年になりますが、今振り返りますと、あっという間の出来事だったように思われます。特に平成13（2001）年から平成26（2014）年にかけて、学生数の急激な減少による危機的状況乗り越えるため、教職員一丸となり、短期大学存続の変革に取り組みました。英米語学科を英語コミュニケーション学科に名称変更し、さらに現代コミュニケーション学科へ改組、ビジネス情報・英語コミュニケーション・観光メディア・心理カウンセリングの各コースの充実と開設、男女共学化を経て、『東京立正短期大学』に改称、現代コミュニケーション学科に保育士養成課程を導入し、専攻科を置きました。現代コミュニケーション学科に現代コミュニケーション専攻（ビジネス・観光・心理）の3コースと幼児教育専攻の2専攻を設置いたしました。幼児教育専攻（保育士養成課程）を2年制化に変更し、さらに児童厚生員養成課程を設置するなど、できうる限り門戸を広げて入学者確保に努めました。

当時、東京立正女子短期大学時代の英米語学科の卒業生から電話をもらい、「先生、私たちが学んだ学科やコースはどこに行ってしまったのでしょうか？」という質問を受けました。それほどまでに目まぐるしく変化した教育内容に対応するため、教職員全員試行錯誤を重ねながら変革に取り組んだ日々を、今でも鮮明に思い出します。

令和7（2025）年3月14日付けの一般財団法人大学・短期大学基準協会による東京立正短期大学令和6年度の認証評価は、短期大学基準を満たし「適格」とであるという審査結果を得ています。特に、「建学の精神」「内部質保証（教職員全員が、教育や研究、組織運営、施設の状況を継続的に点検・評価し、質の保証に取り組んでいること）」「教育課程」「学生支援」の各項目について、特に優れていると評価されております。今後どのような困難が訪れようとも、必ず乗り越えていけると信じております。



飯田宮子先生



短大校歌楽譜 (現在)

「お世話になった先生方」

私の東京立正女子短大ヒストリーは、第3代学長・庄司寿完先生の面接から始まりました。鋭い鷹の眼を持つ先生は、「学生の迷惑になる休講はしないでください」とおっしゃいました。以来、私は休まない教員として勤め、「飯田さんは風邪もひかないんですね」と、他の先生方から皮肉交じりに言われたことがあります。それは庄司先生との約束を守り続けた結果でした。

第4代学長・石川教統先生は、日本風景の水墨画がお上手で、東京立正中学校・高等学校の校長を退任後、短大学長になりました。先生は英語スピーチコンテストの発展に尽力されました。

第5代学長・藤田教忠先生には、専任教員全員で鎌倉のお寺にご挨拶に伺い、名利を拝見した後、鳩サブレーとさつま揚げを鎌倉みやげにいただきました。

第6代学長・藤井教正先生は袈裟姿で帆の付いた大きなジープを運転し、颯爽と学校に登校されていた姿を思い出します。5階図書館から1階図書館への大移動と改修、短大校舎の耐震工事、現代コミュニケーション学科への改組、保育士養成課程の導入等、様々な変革は藤井先生によって成し遂げられました。ここに藤井先生の行動力に敬意を表します。

第7代学長・坂輪宣敬先生は、地域に開かれた公開講座の中でも人気のある仏教講座を担当し、多くの参加者を集めました。仏教美術を通して「仏の教え」を説かれ、もの静かなたたずまいの中に強い精神力を感じさせる先生でした。

第8代学長・工藤教和先生は、軍艦島の世界遺産など明治日本の産業革命の意義について語られ、常にエビデンスの重要性を強調されていました。

入職から退職までの32年間にわたり合計6名の学長先生にお世話になりました。

学長先生の他にも思い出に残る先生方がおります。山辺教英理事と藤森嘉子理事です。私にとって理事の先生方は遠い存在でしたが、先生方の力強い指導力が感じられる場面を真近に目にしました。ある日のこと、事務所前を通りかかると、大きな声が学長室から聞こえてきました。誰の声なのかを事務の方に聞いてみると、山辺理事が藤井学長を叱咤激励されているとのことでした。話の内容までは詳しくわかりませんでしたが、真摯に向き合われている山辺先生の強い気持ちに心打たれました。

また毎年行われる慰霊祭の時には、藤森理事が心に響く歯切れの良い口調でお話をして下さり、堀之内学園の歴史と意義が良く理解できました。遠くから見えていた一教員の私ですが、奉職するなかで大きな励みとなり、身の引き締まる体験でした。

最後になりましたが、事務所で世話になりました方々を紹介します。入職時、私は一般教養科目の心理学の授業を大教室で講義をしていた時、前から2列目ぐらいに座っていたおさげ髪の女学生が、現在広報部を担当する三富有美子さんです。すでに退職され、短大創立時から活躍されていた教務部担当の辻井由里子さん、LL教室のアシスタントをしていらっしゃる高橋郁子さん、そして学生部担当の和田園さん、鳥羽信也総務部長の下で仕事に従事されていたのは、現在学内運営を取りまとめ、事務組織を支えている事務長の笹森千沙子さんです。

理事の先生方、学長の先生方、教員の先生方、事務の方々の教育力が一体となり、学生たちに安心感を与え、自尊心を高め、お互いに尊重する心を育んだことを誇りに思います。ここに先生方一人ひとりに、事務の方一人ひとりに深く感謝申し上げます。

「校歌誕生」

「この学校に校歌がないのはおかしいと思わない？」という石川教張先生の発案を受け、東京立正短大の校歌は短期大学設立20年目、昭和61（1986）年に誕生しました。作詞は詩人・谷川俊太郎氏、作曲は服部克久氏が手掛け、建学の精神を見事に謳った素晴らしい校歌が誕生し、入学式と卒業式には毎年全員で大切に歌われ続けています。

「緑に囲まれたキャンパス」

わが東京立正短期大学の魅力は、広々とした緑に囲まれたキャンパスです。5階の研究室から見えるグラウンドは大都會の学校とは思えないぐらいに自然に恵まれ、鳥の声や夏の夕方には虫の声まで聞こえました。時にバルコニーにカマキリの姿をおみうけしたこともあります。重厚な鉄の扉に囲まれた研究室とは異なり、風通しが良い贅沢な空間で教育活動を送れたことは、私にとって大きな幸せでした。テラス脇の非常階段に座って語り合う学生たちの姿は、今でもほほえましい記憶として残っています。

この美しい自然環境と心のこもった教育環境が、学生の心身の発達を支え、建学の精神である「学生の心のうちに塔を建てる」ことを、これからも実践していくことを願っております。



善福寺川沿いの森



三國隆子先生

●思い出の記

短大教員OG 三國 隆子

私が東京立正短期大学現代コミュニケーション学科幼児教育専攻に着任した平成19（2007）年は、平成17（2005）年に短大男女共学化、平成18（2006）年に幼児教育専攻設置の流れで、短大で保育者養成がスタートしたばかりの時期でした。私は発達心理学の授業を中心に担当しつつ、実習担当として幼稚園、保育所、施設に学生たちを実習生として送り出す、という大きな課題にまず取り組む必要がありました。保育者養成校としてまだほとんど知られていなかったため、実習先を探す時に「東京立正？どこにある学校ですか？」とよく聞かれました。保育所にお電話した後、「学生をよろしくお願いします」という内容の手紙を書いて、とにかく実習を引き受けてくださる園を探すのに必死だったことを覚えています。そこから少しずつ、少しずつ、最初は「卒園児しか受け入れません」とおっしゃっていた保育所が、学生が実習した翌年には「卒園児でなくても東京立正さんならいいですよ」と受け入れてくださるようになりました。5、6年ほどが過ぎた頃には、学生の実習巡回に行くと卒業生がその幼稚園や保育所に幼稚園教諭や保育士として働いていて、実習生を受け入れる先輩保育者としての役割を果たすようになり、保育者養成校の東京立正としても徐々に認識されるようになっていきました。学生の実習巡回に行って卒業生にも会えること、それが何より嬉しく、「つながり」をひしひしと感ずることができました。

平成30（2018）年の東京立正保育園設立は、当時の保育所不足の社会課題へ貢献するという大きな意義がありました。杉並区でも保育所不足の課題がありました。そして、もう一つ、学園内に保育所があることによって、保育者養成の教育にとって「座学の学び」と、子どもと実際に関わる「実践の学び」の両軸でより質の高い保育者養成ができる、という大きな意義がありました。設立に向けては、構想に5、6年ほど時間を要し、設立に向けて動き出してから、保育園舎の設計、保育内容や保育目標の考案、保育士採用、近隣へのご挨拶、杉並区との相談など、様々なお立場の方々と連携しながら進め、開園を迎えることができました。近隣のお宅に1軒1軒訪問してご挨拶をした際「毎年、短大の公開講座の演奏会をととても楽しみにしているんですよ。保育園設立、頑張ってくださいね。応援しています。」「子どもの声は元気になれるから迷惑ではないですよ」といった温かいお言葉をたくさん頂戴しました。これまでの堀之内学園と地域の方々との「つながり」があったおかげだと思

っております。多くの方々のお力添えやつながりのおかげで東京立正保育園を設立することができたことは、とてもありがたいことだったと思います。



保育園の七夕



第6代校長 船越公道先生

①歴代校長先生

●「思い出すままに」

第6代校長 船越 公道

先ず初めに、先の大戦でアメリカのB29の空襲を受け、講堂を残し全焼。諸先輩先生方のご尽力により、幾多の困難を乗り越えて、創立百周年を迎え、今日の隆盛をみていることは、誠に喜ばしいことと存じます。現在存命の元校長としては、93歳と最年長ですので、多くの皆さんがご存じないことを思い出すまま述べてみたいと思います。教育学部卒業後の私としては、教職以外に就く考えは全くありませんでした。しかし、都の公立中の採用試験当日、運の悪いことに（これが人生の岐路に）高熱のため諦めざるを得ませんでした。以前同窓会紙でも述べましたが、私が大学を卒業した昭和29年は、就職難でした。後で知ったことですが、母がお祖師様（妙法寺）に日参し、私の職が決まるよう祈ってくれたそうです。そして、採用されたのが本校。不思議な縁を感じつつ、「自分はここに骨を埋めよう」と誓ったものでした。当時の校舎は、アメリカの指導？で北側からの光を採り入れるという、独得の型式でした。現在の鉄筋校舎が建てられたのは、ずっと後の昭和43年でした。その建築期間、高校11回生は、現在妙法寺の駐車場になっている、旧男子部校舎で1年を過ごしました。

11回生は今でもそのことを懐かしんでいるそうです。話を戻し、就任の年4年生（高1）の漢文を担当しました。その校舎は現在の第2グラウンドとの境にあった、まことに粗末な木造で、当時22歳の若さだった私の声が大きく、隣のクラスで、宗教の授業をされていた、馬田即貞第三代校長先生が、しばし授業を中止されて、私の声を聞いておられたというエピソードもありました。現在の図書室とは、較べものにならない、“図書小屋”も同じ並びにありました。現在の短大校舎の一部分に、松風館という建物がありました。班活動（当時は部ではなく班でした。）バトミントンは天井が低く、対外試合で、シャトルを高く打つ習慣がなく不思議がられたそうです。現在は立派な体育館ができ、多くの部が成果を挙げていますが、ここには昔花壇があり女子校らしい雰囲気醸していたものです。（私の退任後は、第2体育館も建設され、プールは屋上に移されたそうです。）B29の空襲で校舎が全焼したことは、冒頭で述べましたが、残った講堂の中で、何組かの授業が行われたそうです。

“教育は死なず”の精神を、先輩諸先生が示されたものを、心からの敬意を表します。

関連しますが、第1グラウンドの南側に、大きな樹木があり

ましたが、その幹の西側の半分が、校舎の焼ける熱を受け焦げていました。これには“よく頑張ってくれた”と思います。

話は前後しますが、テレビが放映された頃家庭ではまだ求められず、街頭テレビが盛んでした。現在の正面玄関の前の店でも、設置され見せてくださったことがあり、夕刻になると、焼け残った昔の校門の柱に上ったりして、大勢の方が集まりましたが、懐かしい思い出です。

時代はずっと後になりますが、学園として林間の寮を求めたことがありました。今ではスキー場になっている、湯の丸高原です。私は1～2クラス収容のこじんまりしたものを考えていましたが、非常に立派な施設になりました。しかし維持費だけで、莫大なものとなり、現在は学園の手を離れています。その頃からでしょか、都立高校が充実、学費も私立に較べ、軽負担という利点もあり、大方の私立の生徒数は漸減、生き残る方策が必要不可欠なものとなってきました。さまざまな意見の中、私は女子校だった本校を「共学」へという大改革をしました。これが、私の置き土産となったわけですが、後に実現し、現在の隆盛をみていることは、まことに嬉しい限りです。以上昔のことですので、記憶違いやら、時代の前後が錯綜するやら、書き残しもあるやら、恥じ入るばかりですが、何卒ご容赦賜りますようお願い申し上げます。百周年は一つの節目です。次の百年に向かって、「生徒と共に学ぶ」という教育の原点を心に、教職員の皆様の一層のご精進を期待して筆を置きます。

●「4つの目標」

第7代校長 廣川 富男

私が奉職するきっかけとなったのは、東京立正に勤めている友人を訪ねた際に五代校長の石川教統校長先生に次年度から勤めることを強く誘われたという出会いとご縁があったからでした。校長職に関しては、60歳の頃にその任につく要請を受けこれも何かのご縁と思いお引き受けすることにしたのです。そして私は以下のような4つの目標をたてました。

「4つの目標」

1. 中継ぎとして
2. 講堂改修
3. 男女共学
4. 教育理念

1. 中継ぎとして

私の後を誰が継ぐのかという前提に立ち、5年で身を引くことを決意していました。5年でできなければ何年やってもできないという考え方をしていたからです。後継者には教頭の山口



第7代校長 廣川富男先生

隆也先生をと考えました。宗門の先生でなくてよいのかとも思いましたが、宗門の先生はまだお若かったので無理だと判断しました。また、本校で育った先生を校長にという考えがありましたから山口先生に引き継ぐことを決めました。

2. 講堂改修

講堂の改修を手掛けました。金額を示して何ができるかを大手3社の建設会社でコンペをしてもらいました。講堂のことで東京都に相談しましたが、歴史ある建物ですから昭和12（1937）年当時のスタイルを崩さず、原型を壊さないで何ができるかという改修としました。図面はそもそもありましたからそれに関する費用はかからずに、よりよい改修にすることができました。

3. 男女共学

時代の流れとして共学化がやむを得ない状況でした。心配していた同窓会からの反発はなく、生徒も父母の会も大賛成でした。とはいっても、現場で女子教育に尽力してきた先生方からは、70年以上の女子教育としての実績があるのになぜ共学化なのだというご意見もいただきました。女子教育の実績とは何を意味するのでしょうか。例えば掃除の場面とします。ちゃんとやっておきなさいと言って、終わったら点検するということに納得するのが男子であり、逆に見に行くと信用していないと思われる。ところが女子の場合は、あとで見に行くと行ったら職員室の前で待っていたりする。このやりかたでは女子は納得しませんし、さらには先生も一緒にやりましようとなるのです。そのうえで、このような男女の違いをカリキュラムとしてどうするのかということになりました。まずは入学試験の受験基準は男子を2ランク上げました。これを女尊男卑だとも言われました。共学化初年度は男子受験生100名以上が不合格になりました。全ての学校にお詫びに行きましたが、男子を入れたから学校が乱れたとなればこの先100年の失敗になると譲れなかったのです。これは私だけの問題ではなかったからです。また授業においては、理工系・数学・理科の単位を増やすことにしましたが、女子と男子で同じにすることはできませんでした。

4. 教育理念

進路指導部長だった時代のことです。進路先の面接試験を受けてきた生徒の報告の中で「どんな学校ですか？」という質問に対して、ちゃんと答えられなかったと泣いて帰ってくる生徒がたくさんいたのです。生徒たちは、教室に掲げてある日蓮上人の教えを答えたのですが、それを具体的に教えてほしいと言われてもどう答えてよいかが分からなかったのです。これではだめだと思い、生徒たちが日常の言葉で表現できるようにすることを決めたのです。それから日蓮宗の勉強を始めました。今成先生のお父様の本も読みましたし、法政大学の宗教学の公開

講座も履修しました。そして第六代理事長駒野日法上人のご判断をいただき「生命の尊重、慈悲・平和」が理事会に提案されることとなり、満場一致で承認されるに至ったのです。このあたりの事情を後に校長をされた山口隆也先生や宮下隆先生はよくご存じです。

私は、65歳で退職しましたが、63歳からこの3月まで25年間やっていたことがあります。それはこどもと関わることです。東京都や杉並区に相談してNPO法人を立ち上げました。特定非営利活動法人「子ども理科教育振興会」の理事長廣川富男として活動をつづけました。これへの参加は保護者同伴としました。なぜかと言うと、けんかやけがをすることなく、無事にさよならできないならやらない方がよいと決めていたからです。現在までに、15000人のこども（15000人の親）と共に、飛行機を作ったり万華鏡（オリジナル）を作ったりして楽しくこどもたちと関わることができました。それもこれも東京立正とのご縁の賜物だと感謝しております。

●第8代校長 山口隆也先生の思い出

残念ながら故人となられましたので、当時教頭を務めておりました宮下が故人を偲び往時を振り返ってみたいと思います。

山口先生は平成15（2003）年から平成20（2008）年まで5年間校長を勤められました。その穏やかな人格と親しみのある接し方で生徒の人気ナンバーワンでした。キャッチフレーズ「先生と生徒の鼓動が響き合う木漏れ日の学園」の通り、緑に囲まれた静かな環境の中で明るく素直な生徒が育っていました。

先生は瞑想後の「校長講話」は全校生に向けての「私の唯一の授業」と力を入れておられました。その博識を基とする格調高い講話は私達教員にとっても大いに示唆に富むものでした。特に芸術面には精通し美術、音楽等多岐にわたり解説していただきました。「芸術鑑賞」では本校講堂で日本フィルコンサートを催されたことが印象深く思い出されます。また、学生時代、日本画壇の登龍門といわれる「行動展」に入選するほどの力量を持ちながら、教職に専念する為絵筆を手にはされませんでした。退職後溜まっていたモチーフが堰を切った様に溢れ、次々と出展入選されました。入選作「仏」を生前よりお願いして寄贈いただき第一体育館地下（食堂手前）に展示しております。

また先生は永年にわたり水泳部顧問として選手の発掘育成に尽力してこられました。その結果毎年の様に全国中学、全国高校総体に出場する強豪校となりました。中でもオリンピック選手3名も輩出し、田島寧子選手はシドニーオリンピック個人メ



第8代校長 山口隆也先生



第9代校長 宮下隆先生

ドレーで見事銀メダルに輝きました。

(宮下 隆)

●「思い出」

第9代校長 宮下 隆

私が校長を仰せつかったのは平成20（2008）年。いきなり文科省に呼び出され、いかにして学園財政を立て直すか問われました。共学化により生徒数が持ち直したものの少子化の波は学園の財政をジリジリと追い込んでおりました。いかにして生徒数を増やし、学園財政を立て直すか随分と頭を悩ませました。

私学間では生き残りをかけ熾烈な戦いが始まっていました。大学進学やスポーツで特化する学校。中には校名も変えて新しい学園としてスタートする学校もありました。元より浅学非才の身であれば一気挽回の策略は思いつきません。学業の王道「授業改革」から手を付けることにしました。毎日の大部分を占める「授業」が判らない、つまらないのでは学校生活が楽しいはずありません。お互いの授業を見て研鑽し合う「公開授業」の強化はもちろん、教員評価には絶対に使わない自己の授業改善にだけを目的とするという約束で「生徒による授業評価」を導入させていただきました。

合わせて当時はやりの「満足度調査」を実施いたしました。卒業時の「この学校に来て良かった」「まあ良かった」の合計はご祝儀評価含みで70%。在校生全体＜学校満足度＞は55%しかありませんでした。これではこの学校が選ばれる訳がありません。

「授業」「進路指導」「生活指導」「行事」「部活動」と分野ごとに5ヵ年計画を立ててもらい、毎年満足度調査を実施し、振り返っていただきました。その結果5年後の満足度は卒業生が70%から86%へ、在校生は55%から69%へと大幅に改善されました。生徒の出席は約30%が皆勤、40%が精勤を達成しました。自分で挨拶ができていると思う生徒は90%に達しました。初期の目標＜明るく楽しい学園生活＞が実現しつつあると感じました。これは生徒の努力はもちろんのこと先生方が危機感を持って毎日切磋琢磨されたお蔭と感謝に絶えません。

このように生徒の満足度が高まると在校生が後輩の中学生に「この学校楽しいよ」と誘い、ご父母も「面倒見いいわよ」と宣伝していただけるのでしょうか、高校説明会の参加総数は毎年増え続け5年間で2倍の人数に達しました。それに連れ入学者数も回復して参りました。当然学園財政も徐々に好転し5年間で帳尻が合うまでになりました。

私が本校教育の特色として位置づけ、また学園財政負担軽減

の為に尽力した活動に「湯の丸高原荘」の利用があります。約30年前に長野県湯の丸に巨額の資金を費やして建てられた高原荘は他に類を見ない120名収容の立派な建物です。ただ1800mの高所にある為、床暖房等の維持費が相当かかります。当時、中学生の林間学校・高校生のスキー教室に利用されていましたが、費用対効果では毎年大赤字で財政を圧迫しておりました。この建物は教育施設として許可が降りた物で、営業も売却もできません。それならば環境教育の場として特化し、利用回数も増やして赤字の軽減に努めようと考え「高校生林間学校」を企画実施しました。

1日目は、湯の丸山の天然記念物「レンゲツツジ」保善の為に雑木伐採体験。

2日目は、山登り。高山植物の女王「コマクサ」に出合い池の平湿原の木道を歩く。下山すると昼は飯盒炊さん、夜はキャンプファイヤーを楽しみます。

3日目は、環境問題学習会。ビデオを参考に討論します。

他校に見られない自校教育施設として定着しておりましたが赤字は続き、その後手放されたことは残念に思います。

私事で恐縮ですが、この度「PEACE BOAT 地球一周の船旅」に参加して来ました。ノーベル平和賞の「ヒバクシャ」の方「ICAN」の方も乗船し、ニューヨークで国連に「核兵器廃絶」を訴えてきました。一方ガザやウクライナの戦地で救援活動をしている方が乗船して来て惨状を報告しました。地球は戦禍が増々広がっています。本校教育理念「生命の尊重、慈悲・平和」が広がっていくことを祈っています。

●「魅力ある学校づくりに向けた6年間」

第10代校長 澤田 幸雄

創立100周年誠にありがとうございます。私は第10代校長として平成25（2013）年4月に就任しました。学園としては学内教員からではなく外部の人材を採用したのは初めてであったとのことでした。第9代校長の宮下 隆先生からは私学として東京立正の建学の精神「五重塔を建てるよりも学校をつくって人の心のうちに塔を建てよう」、理念「生命の尊重、慈悲・平和」の内容をしっかりと理解し、その実現に向けること、学校の雰囲気大切に教職員との良好な人間関係を行うよう望まれました。

新校長として新たなミッションとして「グローバル化に対応できる心豊かな人材を育てる」と決め、21世紀型スキルの実現として、1：思いやりの精神、2：主体性・積極性・チャレンジ精神、3：語学力・コミュニケーション能力、4：協調性・柔軟性、5：論理性と情報編集能力（思考力・判断力・表現力）、



第10代校長 澤田幸雄先生

6：異文化理解と日本人としてのアイデンティティーをまとめ教職員、生徒たちに明記し、実行するよう指導しました。

私はこのミッションとスキルの実現に向け魅力ある新たなシステム（ICT教育、英語教育と国際教育、学力向上と大学進学、中高一貫教育）を設置し、6年間、校長として東京立正の良さを充実してきました。これらの実現に向けては学校法人の山田教周理事長、青木康國前常務理事をはじめとした理事の方々の積極的な理解と支援があつてのことでした。

ICT教育は当時の他校ではあまり運営されていなかったため、他校の先生方が多数本校を見学にきました。本校では積極的に活用するために生徒一人ひとりにタブレットを利用させインターネット環境のeラーニングで英語、数学の基礎学力向上を目指しました。さらに部活動で大会等に参加し学校に来て授業を受けることが出来ない生徒でもインターネットを利用し、いつでもどこでも学習出来る環境を作りました。また中学校の教室に電子黒板を設置し、利用することで授業内容をこれまで以上に興味深く学ぶ生徒たちが増えました。

英語教育ではフィリピン講師とのオンラインマンツーマン英会話や集中英語プログラム（中学1～3年：プレゼン中心）に加え、日常の授業やeラーニングを介して英語の4技能の実現を目指しました。さらに国際教育ではすでに設置されていたオーストラリア夏期交流プログラム（中学1年～高校3年・希望制）に加えてカンボジア研修（高校2年イノベーションコース全員）、中学3年カナダ研修（全員→現在は国内の英語研修）そして校内での英語ダンスプログラムの実施などオンライン英会話等での学びを積極的に利用させました。

学力向上と大学進学に向けては6年間の中で国の流れが大きく変わりました。平成29（2017）年以降、文部科学省から中高の新学習指導要項の告示があり、学力の考え方が変わりました。新たな学力では「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習に取り組む態度」の3要素が示されました。その実現に向け本校では知識・技能の問題については授業・eラーニング・外部模擬試験などを活用したPDCA（計画・実行・評価・改善）サイクルで学力向上を目指し主体的に学ぶ姿勢の実現に努力しました。また「思考力・判断力・表現力」の向上に向けては課題解決型の活動（現在は探究分野です）や部活動を含めた日常の活動内容をポートフォリオ（活動記録）に記入することで自分自身の考えや体験の結果等を記入させました。これは文部科学省が進めていた高大接続改革（学力の3要素を多面的・総合的に評価するとともに大学が求める学生像と高校生が求める学びたい内容がお互いにリンクすることを重視しています）のなかで高校生はポートフォリオの内容をまとめ、考え

を明確にし、大学のアドミッションポリシー（求める学習像等）の内容を比較することが重要になりました。また大学入試システムの改革もあり、その一つである受験方法の仕方が代わりました。これまでの「AO入試（一部の大学で学力を問わない入試）」から「総合型選抜（小論文、面接試験、プレゼンテーション、共通テスト等のいずれかを課す）」に変わりました。本校の大学入試では「学校推薦型選抜（指定校・公募型推薦）」と「総合型選抜」での合格者が多い傾向があり、今後も高校入学者が大学進学を考えるのであれば3年後の自分はどのような大学に進みたいかを早めにはっきりすることが重要であると感じていました。

中高一貫教育ではこれまでの東京立正では中学3年間のカリキュラムのみで、主に部活動中心の児童の確保が重視されていました。そこで一般児童の確保も重視することと魅力ある体制を実現するために中高一貫6年間カリキュラムを創り、平成27（2015）年4月に中高一貫イノベーションコースを設置することになりました。課題解決型学習、ICT教育（eラーニング、電子黒板授業など）、英語教育（オンラインマンツーマン英会話、集中英語プログラムなど）そして国際教育（中3カナダ研修旅行、高2カンボジア研修）などを実施しました。

平成31（2019）年3月私は退職し、次期校長として梅沢辰也先生を理事会に紹介させていただき、第11代校長に決定されました。梅沢先生は東京立正の魅力をさらに拡大し、現在に至りました。これからも東京立正がますます発展することを心から念じております。

●「理念の具現化」

第11代校長 梅沢 辰也

この度は創立百周年おめでとうございます。今日に至るまで学園を支え伝統を継承されてこられた関係者の皆様に心より御礼を申し上げます。

私は平成31（2019）年の平成が令和に代わる年に校長に就任しました。外部からの校長ということでしたので、まずは現状を知りたいと思い、就任前の二ヶ月間で全教職員と面談し、先生方が大切にしていることや課題と考えていることの理解に努めました。そして最も重要なことは、日蓮聖人が掲げられた「立正安国」の精神、そして本校の建学の精神「人の心に塔を建てる」及び教育理念「生命の尊重、慈悲・平和」という普遍的な理念を理解し、それを具現化するということでした。そのために如何にするかを考えた結果、5つの教育目標を立てることにしました。それが、「全員レギュラー・文部両道・挑戦と失敗・



第11代校長 梅沢辰也先生

なぜの追求・教室から世界を変える」です。

初年度に行ったのがチャイムの廃止でした。時間とはすなわち命と考えているからです。日々の大切な命を、チャイムという合図で反応するようにはしたくなかったのです。何時何分からできるできないという判断をする時間にしてほしかったのです。クラスメイトと先生とが共有する命なのですから。

そして同年度の3学期（令和2（2020）年1月）に新型コロナウイルス感染症の流行が始まりました。高校卒業式は実施できたものの、その後はコロナ対応へと移行せざるを得なくなり、やがて緊急事態宣言の発令となりました。5月末の解除に至るまでどれだけの時間をオンライン会議に費やしたか分かりません。後になってみれば、だからこそ先生方の本気の視点をたくさん手に入れることができたのです。6月から分散登校が始まりましたが、より早い段階で部活動を再開しました。通常通りにはできないものの、できる限りの学校運営に努めていきました。世の中では、この間にICT教育が普及し進歩したと大きめに取り上げられていましたが、本校は独自路線で際立っていたと自覚しています。それは、私たち自身で「なぜ」を追求し、生徒の生命を尊重するということを貫いたということです。つまり規則正しい日常生活を送ることこそが、自己免疫力を高めることであり病気になりにくくなるというシンプルな結論でした。睡眠時間と食事のリズムを整え、日光に当たり友達と会い、学校で勉強し放課後は短時間で好きな部活動を行い、行事も実施するということです。これは東京都の感染者数が激増した時期であっても同様とし、常に「生命の尊重、慈悲・平和」を念頭に置いていました。この「なぜ」はやがて安全保障を課題とし、政治家を巻き込んだ活動へと進化していくことになります。また北海道根室高等学校と沖縄興南中学高等学校との交流にも発展し、アメリカ・中国・ロシアといった大国を意識することを始めました。

同時に、自己肯定感が低いと言われる日本人の若者が果敢に「挑戦と失敗」に立ち向かい、更には日本のことを知ることが出来るようにという機会を海外に多数求めました。すでにあったオーストラリア夏季サマープログラムとカンボジアSDGs研修。新たに設けたニュージーランドへのターム留学（三ヶ月・半年）および1年間留学とカナダへの1年間留学。そして海外大学進学協定校推薦制度などです。親元を離れ日本を飛び出し、海外から日本を客観的に見ることができる経験です。日本の良さや疑問点などが浮き彫りになってくるのです。現在中高在籍者数合計780人の内100名を超える生徒が本校の海外プログラムの経験者となっていることが意識の高さを物語っています。

そして身近な地域での活動もとても重要です。日本を語るに

しても世界を語るにしても、地元地域での具体的な活動をぬきにしては何も始まらないからです。「教室から世界を変える」とするならば、小さな一歩はここからです。本校では、イノベーションコースや紫友会及びSDGs委員会が中心となってその役割を果たしています。こども食堂・寺子屋・高齢者デジタルサポーター・桜を楽しむ会・児童館サポート・東京高円寺阿波踊りボランティア等々は一年中行われていますし、イノベーションコースでは福島県の農場や糶屋と連携し「甘酒プロジェクト」を行っています。廃棄果実を甘酒にして販売するのです。これは授業であり事業でもあります。

また、部活動の活発さは本校の伝統であり「文部両道」は大切な活動指針となっています。分散登校時から部活動を再開したほど、教育活動に締める重要度が大きいのです。中学の女子バレー部とソフトボール部は全国大会出場常連校です。近年男子バレー部が都大会の常連校になってきました。高校では男女バレーボール部が関東大会の出場や男子ビーチバレーで国民スポーツ大会の東京代表に選出されています。水泳部も毎年のように関東大会や全国大会に出場しています。ソフトボール部も関東大会や全国大会に出場。吹奏楽部は東京都のコンクールで金賞を受賞しており、全国大会へ挑戦しているところです。運動部も文化部も顧問の先生方のご指導の下、それぞれの目標に向かって活動しているところが本校らしい面白さであり財産なのです。また、勉強の一つの成果としての大学合格に関しては、昨今は総合型選抜入試の成績が上昇してきました。高校時代3年間を一生懸命汗かいてきた生徒たち、多岐にわたるボランティア活動で社会貢献してきた生徒たち、海外にチャレンジしてきた生徒たち、日本のことを自分事として活動してきた生徒たちが自分のストーリーを基にして進学を決めていくのです。もちろん今までと同様に、一般入試で3学期に勝負をかける生徒たちも最後まで頭に汗をかいて頑張っています。

そして、これら在学中の学校生活を通して「全員レギュラー」の精神で「誰か・どこか・何か」を照らすことができる人になって欲しいのです。自分だからこその場所を見つけられることが出来るのが東京立正です。体育祭は誰一人手を抜く者がおらず、みんな真剣でキラキラの笑顔とキラキラの涙を見ることができます。紫苑祭は意見を出し合い、ぶつかりながらも協力し、創意工夫のワクワクを作り上げていきます。合唱コンクールのハーモニーは心の琴線に触れ涙腺が脆くなってしまう。自分の人生の主演は自分であり、誰かが代役を務めてくれることもありません。一人々



さまざまなトロフィーと盾



真柄恒夫先生

がかけがえのない自分であるという自覚を持つことができる「場」でありたいのです。次の100年に向けて、世の中はさらにAIが発達し、個別最適化が求められるようになるでしょう。だからこそ、人間としての本質的な部分である「人の心に塔を建てる」「生命の尊重、慈悲・平和」を希求する学校であり続けてほしいと心から願っています。

②お世話になった先生

●「教壇に立ち続けて一百周年に寄せる回顧と祈り」

真柄 恒夫

東京立正中学高等学校、創立百周年おめでとうございます。微力ではありましたが、非常勤講師、副担任、担任、学年主任、進路指導部長、教頭、副校長と多岐にわたる職務を担ってきました。また、現在も卓球部顧問として部活動に関わり、生徒と一緒に汗を流す日々を送っています。昭和58（1983）年4月に数学の非常勤講師として東京立正に奉職してから長い年月が過ぎました。その間たくさんの方々との出会いがありました。楽しかったことが真っ先に思い出されますが、悲しいことも辛いことも多くありました。たくさんの思い出が蘇ってきます。これまで本校に携わって来られた多くの教職員や卒業生や家族に支えられ43年間勤務しました。

授業においては、生徒との対話を重視し、全員が参加する授業を信条として、チョーク1本で生徒と真剣勝負をし、時には親父ジャグで教室に笑いをもたらすこともありました。中でも印象深いのは、教職27年目に担任を務めた特進クラスです。このクラスとは、高校1年から3年までの3年間を共に過ごしました。学習面では、英語を担当する先生の提案で、授業の他に朝学習を課すなど徹底した取り組みを行いました。高校1年では、「英単語ターゲット1900」を用いて単語を10回ずつ書く、その翌日単語テストが行われ、合格点に達するまで追試。職員室隣のワープロ室が放課後追試の生徒でいっぱいになることもありました。高校2年では、「英文標準問題精講」を用いた長文読解。高校3年では、「英熟語ターゲット1000」を用いて、熟語を10回ずつ書く、その翌日熟語小テストを行いました。3年間英語を担当してくださった先生から厳しく指導して頂き、生徒は確実に力をつけていきました。夏には湯ノ丸高原ホテルで3泊4日の勉強合宿を実施。朝から夜遅くまで勉強漬けの生活の中で、普段はほとんど勉強しない生徒が「先生、こんなたくさん勉強したのは初めて。真剣にやれば楽しいね」と笑顔で話してくれました。私はこの言葉に尽きると思いました。教師

の喜びを味わった瞬間でした。生徒たちの気質も私にあっていて、自分はいきいきと毎日を送れました。また、保護者との信頼関係を構築する目的として、クラス通信「かがやき」を毎月発行しました。学校行事に全力で取り組むクラスであり、特に合唱コンクールは記憶に残る出来事でありました。クラスには幸いにも音楽部に所属する生徒が数名いました。この生徒が合唱コンクール実行委員となりました。当時シューマン没後200年という節目にちなみ「流浪の民」を選曲。この曲は独唱部分を含む合唱曲としてシューマンが作曲しました。本格的に動きだしたのは、2学期中間考査後。実行委員は、はやく歌詞を覚えてもらおうと楽譜を印刷し、パート別練習用CDを制作、昼休みには指揮者や伴奏者は音楽室で練習を重ねました。クラスの団結力は目を見張るものがあり、生徒たちはお互いに励まし合いながら一つ音楽をつくり上げていきました。本番、講堂の舞台に立った生徒たちは、最初はやや緊張した面持ちでしたが、歌い進めるうちに声がまとまり、場内の観衆を魅了する歌声に変わりました。何と言っても曲の見せ場は、独唱する4人が前に出て唄う場面です。人の心にしみ入る豊かな声は、講堂の隅から隅まで響き渡りました。歌が終わったとき拍手の多さを私は今でも覚えています。みんなの心もチームワークも素晴らしい魅力的な合唱でした。いままで、私が聴いた中で一番のできでした。私は目頭が熱くなりました。そして、結果発表。「優秀賞、5年F組」その瞬間、生徒たちは全員立ち上がり歓声をあげていました。表彰式で頂いた賞状を掲げ、ステージに上がり模範合唱を披露し、その姿に職員室の同僚から「オペラを観ているようだ」「これぞ特進」などの称賛の声をいただきました。この記念すべき年にシューマンの曲で優勝できたことは二重の喜び。前年の合唱曲「決意」に続き、2連覇。講堂の2階席には多くの保護者が来場してくださり、その拍手と涙が、生徒たちの努力の結晶を讃えていました。しかし、その感動の記憶からまもない3月11日（金）、本校は学年末考査の答案返却日。午後2時46分校舎が激しく揺れ始めました。甚大な被害を及ぼした東日本大震災です。不幸中の幸いともいうべきか、その日は午前中で終わる日であったため、クラスの殆どの生徒が帰宅しました。部活動で残っていた生徒も、保護者の迎えで無事に帰宅しました。数日経っても東京ではスーパーやコンビニで食品や日用品の品薄が続き、本当に辛い思いをしたのは、津波や原発で苦しむ東北の人たちでした。人生最大の衝撃的な体験をしました。

高校3年生の体育祭もまた、特筆すべき思い出です。当時関東甲信越地方で、例年より17日早い梅雨入りや台風の影響で2回も延期されました。6月1日（水）の平日によく実施。

この体育祭でクラスの団結力・真面目に競技に取り組む姿勢・絆の深さを全校生にアピールできました。クラスの生徒たちは、入場行進、女子100m競走、障害物競走は昨年度の点数を上回りました。はらはらドキドキしたムカデ競争（1位）や騎馬戦（2位）、全員リレーは安定した強さで（1位）午後の決勝進出を決めました。午前終了時で総合得点が2位のクラスに1点差をつけ115点でトップ。総合優勝の行方は午後の競技の点数次第。昨年は午前終了時総合得点1位でしたが、午後得点を重ねることが出来ず失速。今年こそ、この高い壁を越えられるかどうか生徒たちも分かっていました。午後1種目の男子の短距離走で得点し、続く教職員ゲームでは完敗（ゴメンナサイ）。この時点で総合2位。続く全員リレーの決勝では、ひとりひとりバトンに思いを込め次の走者につなぐ姿は最高にカッコ良かったです。クラス一丸となって取り組んだりレーはブッチギリの速さで1位。気迫の走りで昨年のリベンジを果たしました。泣いても笑ってもあと残すところ1種目。全員リレーの直後、休む間もなく10人11脚が開始。練習時には上手いかなかった男子（2位）、女子は攻める気持ちを貫いて（1位）、さらに得点を伸ばし、総合優勝を引き寄せました。最後の種目10人11脚で総合優勝を決めました。総合得点145点。2位のクラスに17点差を付け、クラスそして私にとっても教員生活29年目で掴んだ念願の初優勝。この体育祭を通して、朝や昼練習を重ね、真面目に取り組む姿勢が他のクラスより強かったから優勝できたのです。生徒たちは、このような地道な努力と強い意志から生まれることを学びました。心身ともにこの1年間で成長しました。3学期の始業式には、年内入試で合格した女子生徒全員が一つひとつ心を込めて縫い上げた「合格お守り」を、これから一般受験に臨む仲間一人ひとりに手渡し、クラス全員で現役合格を誓い合いました。3年間で共に過ごした仲間との絆は想像をはるかに超える深さでした。

今思いますと、クラスには、紫友会会長、数名の部活動の部長、バドミントン部に所属し関東大会に出場・水泳部に所属し関東大会やインターハイに出場した運動能力に優れた女子生徒など、本校を牽引する存在が多数いました。卒業後も、高校1年生次から国立大学志望の夢が叶って愛媛大学工学部に合格した人、法政大学に入学し応援部に入部して神宮球場で六大学野球の応援に力を入れた人、東洋大学卒業後横浜市立大学大学院に進学した理系女、公立小学校教諭、大学に通いながら外部の合唱団の所属し国内や海外での公演、大学卒業後も公務員として仕事をしながら合唱を続けスペインでのコンクールに参加するなどし、その後突然方針転換し現在は台湾の報道機関で働いている人など、多方面で教え子たちが活躍していることを誇り

に思います。特進の担任に選んでいただき、明るく素直な生徒たちと出会い、共に過ごした時間は、自分の教員人生においてかけがえのない宝です。

今回、百年史編纂に携わせて頂いたことは東京立正を深く知る良い機会となりました。昭和、平成、そして令和と元号が変わり、戦中戦後の激動の時代を経て長い歴史を刻んできました。百年という長い歳月を思うとき、歴史の重みを感じるとともに、記念すべき節目の年に立ち会うことが出来た喜びを感じました。また、気候変動や自然災害の激化、臨時休校を余儀なくされた新型コロナウイルス感染拡大など、長い教員生活で想像もしていなかった事態が起きましたが、本校が今日あるのも数多くの方々のご苦勞やご支援、ご尽力のお陰であることを忘れてはいけません。次の百年に向けて、これまで培われた伝統を守りつつ、新しい時代に即した教育の充実を図り、より良い学校へと進化していくことを強く願います。今後も東京立正のさらなる発展を心より祈念し、静かに見守っていきたいです。

●「思い出」

横澤 武

学校法人堀之内学園が創立100周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。この記念すべき節目に教員として寄稿できることを大変光榮に思います。

私が奉職したのは、38年前の平成元（1989）年4月です。大学を卒業し22歳で勤めましたが、その当時はまだ女子校でした。クラスに46人の女子生徒が居る教室に、毎日ドキドキしながら授業に行っていたことを思い出します。

初担任は、2年目の2学期からご退職された先生の後任として高校2年生のクラスを担当しました。初めての担任となったことで生徒たちとどのように関わっていくか試行錯誤の毎日でしたが、自分が思い描いたようにはいかず悪戦苦闘しました。

そのようなときご相談にのっていただいたのが、社会科の教科主任であった藤井教戒先生でした。勤め始めたときから授業や生徒指導でも苦戦していた私に、親身になってご指導くださいました。また僧籍でもあった先生は、夏のお盆の時期に千葉県のお寺に連れて行ってくださったり、お会式の万灯練供養と一緒に参加させていただいたり、公私ともにお世話になりました。そのおかげで様々な視点や見地を得て、教員としての幅も広がりました。藤井先生から教わったことは教員生活に長く生き続けています。

平成24（2012）年から学年主任を拝命しました。今まで他人事のように感じていた学年主任でしたが、実際にその職に就



横澤武先生



宇治川雅人先生

くと、考えていたイメージとは全く違うことを痛感させられました。自分の連絡や判断ミスで学年全体が方向を見失ってしまう可能性をはらむという重要な職務でした。クラス担任の先生、副担任の先生の協力なくしては運営が不可能であることを学びました。幸いなことに、任期中は先生方のご協力に支えられ無事に4年間を過ごすことができました。皆様に感謝申し上げます。

平成28年からは教務部長の職を仰せつかりました。校務分掌で長い期間教務を担当してきましたが、その力をつけてくださったのは、第7代校長廣川富男先生です。先生が教務部長でいらっしゃったときに、教務のノウハウを一からご指導いただきました。今ではパソコンで行う時間割作成を当時は手作業で行っており、春休みにはそのお手伝いをさせていただいたことが懐かしく思い出されます。先生から「教務は学校教育の中心であり、下手なカリキュラムは学校を潰す」と教えていただいたことを肝に銘じて、教務部長としての職責を果たしてまいりました。その中で、Classiを活用した新教務システムへの移行と、令和4（2022）年度からの高校学習指導要領改訂が全面的に実施となることに伴う新カリキュラム改定に着手しました。旧カリキュラムで定評のあった自由選択制を継承しつつ、「総合的な探究の時間」を正規の時間割内に組み込むことにより、新学習指導要領の3本柱を重視しながらも、将来の受験や進路に対応できるものとなりました。

令和3（2021）年より教頭の重職を仰せつかりました。コロナ禍ということもあり、授業・学校行事・感染対策と多くの課題を抱えながらのスタートとなりましたが、「学校の活動は絶対止めない」という第11代校長梅沢辰也先生の方針のもと進んでまいりました。教頭職となり感じることは、社会に求められる学校教育や、これから将来に向けて我校のあるべき姿や組織のあり方などが気にかかるようになったことです。

創立100年の歴史を誇る本校ですが、これからは次の100年に向けて、さらに発展していくことを願っています。本校で教壇に立つことができたこと、先生方、生徒たちと出会えたことに心から感謝しています。

●「東京立正の思い出」

宇治川 雅人

今私の目の前には42冊の教務手帳が積み重ねられています。42年の歴史がここにあります。創立100周年を迎える年が私の現役最後の年となります。感激もひとしおです。

今だに忘れることのできない東京立正の最初の記憶、それは2階の教室から見た第1グラウンドの雪景色です。とても幻想的

な景色に心を打たれました。冬が来るたびに雪が積もってくれないかと、毎年秘かに期待してきたものでした。

当時の校舎はどこもかしこも天井が高く、とても開放的でした。床はすべて木でできており、歩けばキーとかギシギシ鳴っていました。定期試験中はその音がやけに大きく響くので、気を使って机間巡視したことが思い出されます。机やいすもすべて木製。職員室のわれわれの机もとても重たい木製の机でした。講堂のいすも木製で、生徒たちは音を立てないように気を使って座面の上げ下げをしていたものでした。

講堂の奥には古い校舎が立っており、その向こうにはプールがありました。プールの真ん中は飛び込み用のためなのか、底が深くなっていました。また第一体育館にも吊り輪の跡が残っているなど、昭和39（1964）年東京オリンピックの練習会場跡が色々と残されておりました。

そんな古き良き時代の東京立正でしたが、新しいことに目を向けすぐに取りかかる、というのも本校の特徴のひとつだったように思います。

一時女子校の制服がブームになった時代がありましたが、本校のグリーンのブレザーも当時世間の注目を浴び、テレビで取り上げられました。

もうひとつはホームステイです。平成元（1989）年に第1回ケンブリッジホームステイが行われました。約2年間の準備期間を経ての実施でしたが、中学3年生全員を連れて行くという、大変画期的な一大イベントでした。私も第3回の時に引率しました。7月24日から8月11日までの19日間の旅。中学生79名、高校生希望者30名の計109名という大所帯。始めにパリに2泊した後ロンドンへ移動、そしてバスでケンブリッジへ。そこから約2週間のホームステイが始まります。中には路線バスを使って登校してくる生徒もいましたが、大人たちの心配も無用。毎日元気にやってくる生徒たちの姿には頼もしささえ感じられました。またニュートンが実際に勉強していたという教室やシェイクスピアの生誕地を訪れたことは今でもよく覚えています。個人的にはKazuo Ishiguroの名作『日の名残り』を読了したことが今でも良い思い出になっています。2週間というのは短いようでとても長く、生徒たちにとってホストファミリーとの別れの悲しみやさびしさはとても深いものでした。

その後私は平成7（1995）年にニュージーランド（高校生希望者）、そして平成9（1997）年には2度目のケンブリッジホームステイの引率をしました。この三度のホームステイを通して、「外国に行くならその国の都会ではなく田舎に行くべきだ。田舎に行くことで、その国の本当の姿を知ることができる」ということを学んだのでした。



川名実先生

42年間の思い出はあまりにも数多く、お話ししたいことはきりがありません。

長年に渡りご指導してくださいました先生方や職員の方々、そして何よりも、楽しい日々をともに過ごさせてくれた生徒の皆様に厚く御礼いたします。

これからも未来を見つめ、他の先駆けとなる学校であってほしいと願っております。

●「思い出」

川名 実

平成元（1989）年4月に英語科の専任教諭として奉職し以来、今年で教員生活37年目を迎えております。これも諸先輩方及び職場の同僚の先生方の御指導や歴代の生徒の皆さん、支えていただいた保護者の方々のおかげと日々感謝しております。

さて、この37年を振り返ると辛かったことや楽しかったことなど様々なことが思い起こされます。奉職当時は女子校で、クラスの名前も現在の様なA・B・C…ではなく、『堇・蓮・葵・藤・蔦・菊・蘭・百合…』といった花の名前でした。共学育ちの僕にとっては、自身の幼稚園時代以来の花の名前のクラス名は新鮮なものでした。

教員生活1年目は6年生（高校3年生）の学年付きに配属されました。学年主任は竹部先生（音楽科）でした。何も分からない僕に、母親のように教員のイロハを優しく教えて下さりました。その中でも、特に記憶に残っているのが「花まつり」です。ご存知のように、4月初めの本校の大事な宗教行事ですが、大学新卒の23歳の僕は全く宗教には無縁・無知で、「花まつり」の何たるかが分からず、竹部先生に『どこに遠足に行くのですか』と聞いてしまいました。先生に『あなた、何を言ってるの…、違うわよ…』と本当にびっくりした甲高いお声とお顔で教えていただきました。以来、現在まで37年間、毎年4月の花まつりを迎えると、1年目のあの時を懐かしく思い出しております。

2年目以降は担任・授業担当・生活指導・剣道部顧問として生徒たちと向かい合う毎日でした。担任としては、“クラス全員皆勤リレー”や“学校で1番良い挨拶”など、日々の生活に目標が持てるような様々な取り組みをしてきました。悪戦苦闘の毎日でしたが、成果はあったと思います。また、“何かしらの形で少しでもクラス全員の活躍を記事にする”を目的に、クラス通信『花丸』を創刊しました。クラス全員の記事のために、出欠席・行事・成績・委員や係の取り組み・掃除中の様子etc、毎日、生徒たちの良いところをキャッチするためにアンテナを張り巡らして、生徒たちの様子を観察することは、大変

でもありましたが、とてもやり甲斐もありました。現在も継続して取り組んでおります。

授業担当としては、“少しでも分かりやすく印象に残る授業”を心がけ、尽力してまいりました。奉職当時は空き時間に、先輩方や年齢の近い教員の授業を毎日のように見学に行き、終業後に様々なご指導をいただきました。時には、授業の在り方について激論を交わしたこともありましたが、その1つ1つが今の自分にとって大きな財産となっております。

生活指導としては、“校則の徹底”と“生徒（保護者）たちの現状”に悩む日々でした。少子化による生徒減、女子校から共学への変化、さらには、僕たちが中学・高校の時代とは多くの価値観が変化していく中で、『生徒・保護者から納得される指導』が求められるようになり、悪戦苦闘の毎日は現在まで続いております。

校務分掌以外では、教職員組合加入が大きな出来事でした。様々ないささつがあり、加入することとなりましたが、自分の視野と見識を大きく広げることができました。この経験は教員生活の中で大きな財産となっています。当時の本校は“不当人事”“専任教諭の1年契約”など、今の時代でいう「ブラック的な要素」が多々ありました。教職員組合に加入し、執行部として団体交渉では、“労働者としての教員の権利”や“持ち時間数”、“学校長の任期”などの職場の労働環境改善に対して、微力ながら1つ1つの改善に努めてきました。

今年、創立100周年を迎えた本校は、これから150周年、200周年に向けて、歩みを続けていきます。生徒にとっては、「学びを深められる学校」、教職員にとっては「働き甲斐のある学校」として、本校がますます発展していくことを心より願っております。

●「ご縁で結ばれた東京立正と私」

鈴木 知子

昭和17（1942）年、私の祖父母は当時10歳の息子（父の兄）を亡くしお寺を探していたところ、福相寺に行きついたそうです。私も幼い頃からお寺にお参りに行くと、必ず隣接する「おそっさま」にも連れられて行きました。特に“3の付く日”の縁日は楽しみだったのですが、山門の大きな仁王様が怖くて祖母にしがみついていたことを覚えています。今考えれば、その頃から妙法寺との不思議なご縁があったのだと思います。

本校との出会いは、大学4年時の教育実習です。小学校の恩師が船越公道元校長先生をご紹介くださり、受け入れていただきました。女子校、木の床、紺色の制服の時代です。恩師から



鈴木知子先生

は「“心の教育”を大切にしている学校だから、音楽教育にも通ずるところがたくさんある」と言われました。指導教官はクラスが廣川富男元校長先生、教科は前任である竹部比佐先生でした。また、井上謹次先生の魅力的な授業も見学させていただきました。その実習の経験が私の教員としての礎になっています。卒業後はピアノを自宅や音楽教室で教えていたのですが、ある時、船越先生から講師としてのお話をいただきました。校歌や聖歌をしっかりと歌わせたい、という学校の意向で「音楽」が高校1年生で必修になったからです。それから2年間講師として勤め、竹部先生のご退職に伴い専任として迎えていただきました。平成2（1990）年のことです。竹部先生にはその後も長年に渡り、公私共に大変お世話になりました。勉強熱心で、ピンク色の洋服が似合う笑顔が素敵な先生でした。先生と毎日のように、音楽準備室でミルクと砂糖たっぷりの珈琲を飲みながら、さまざまなことをご指導いただき語り合った時間は、私の宝物です。音楽準備室には先生から譲り受けたレコード、楽譜、資料が今でも本棚に多く残っており、先生と過ごした日々が昨日のことのようによみがえってきます。また、先生から引き継いだ音楽部では、「歌うこと」の素晴らしさを再認識しました。そして、先生の素敵な歌声も忘れられません。

初めての担任は中学1年蓮組、先輩の先生方にご指導いただきながら私の教員生活が始まりました。身延や千葉での研修旅行では日蓮聖人について深く知ることができ、中学3年生で訪れたイギリス、ケンブリッジでの語学研修も貴重な体験でした。生徒が通った学校、石造りの教会、広い緑の芝生、市場、美術館、現地で観たミュージカルなど、大変印象に残っています。その後、2度の出産、育児休暇を経て復職しました。

女子校から共学になり、1年目は高校1年生の担任でした。初めは、それまでにない雰囲気戸惑うことも多く、別の学校に勤めたような気がしました。修学旅行で訪れた沖縄では、自然の豊かさに触れると共に、暗い壕で涙しながら繋いだ手の温もりから戦争の無益さ、平和の尊さを改めて考えさせられました。共学になって23年経った今では、様々な活動を通してより活気溢れる学校となりました。その間、東日本大震災も経験しましたが、一番辛かったのは5年前の新型コロナウイルス感染症で休校せざるを得なかった時です。先の見えない不安と恐怖を抱えた毎日でした。学校が再開しても授業では歌うことすらできず、とても悩みました。また、生徒たちのことを想うと心が痛む日々でした。そして、どれだけ“普通の生活”がありがたいことなのかを身を持って考えさせられました。私は瞑想時のご遺文抄によるお話を長年、自分への励ましや戒めとしてメモしていますが、そのような時にもちょっとした言葉が心の支

えになっていたことは間違いありません。

聖歌隊は私が専任になって間もなく発足しました。女子のガウンは生徒や伊勢丹のデザイナーと試行錯誤しながら作り、それから30年以上、今でも大切に使っています。校内での宗教行事などはもちろん、日蓮宗立教開宗750年慶讃埼玉大会や妙法寺祖師堂落慶法要においても、聖歌隊として参加させていただきました。現在では、100名以上もの生徒が聖歌隊員として活動しています。また、本校の三大大行事の一つである合唱コンクールも今年で第44回を迎え、毎年講堂いっぱい美しい「心のハーモニー」を響かせています。これからも情操教育である「音楽」を様々な形で生徒と共に学び、その素晴らしさ、魅力、感動を伝えていきたいです。

ご縁あって本校に導かれ35年、充実した幸せな日々でした。先生方はもちろん、生徒（卒業生）や保護者の皆様など、多くの方と出会い支えられながら本校に勤められたことに、感謝の気持ちでいっぱいです。私自身がこの東京立正に育てられたのです。そして、この先の新しい時代に、どのような姿で東京立正として発展していくのかを楽しみにしております。最後になりましたが、学園の益々の発展をお祈り申し上げます。

●「思い出」

仁平井 美枝

創立100周年を迎える堀之内学園に奉職して37年。職場結婚を機に前任校を退職し、学生時代の友人からお誘いを受けた学校が東京立正です。当時の教頭先生が友人の父であり、校長先生も近隣の小学校に勤務する義父とのつながりがありました。そのご縁で今日まで長くお世話になっております。人生上貴重な経験を積めたのは東京立正のおかげです。ここで学び得たことや思い出は枚挙にいとまがありません。それでもやはり公私ともに「温かさ」が第一に挙げられます。

学校行事の代休には、先輩方から登山やスキーに誘われました。若手の教員は、先輩の運転するマイクロバスに乗り込み、車中で多くのことを学ばせていただいたのです。厳しい指導もありましたが、すべて後輩を思っていること。かけがえのないひとときだったと懐かしく思い出します。

また、人生の転機を迎えたのも東京立正でした。奉職して10年余り経たとき配偶者に先立たれたのです。長きにわたり励まし支え続けてくださった先輩方、同僚や事務の方々。当時8歳だった娘も、その方たちに見守られる中で成長しました。

若かりしときは、指導を模索し眠れない日もありました。暗いトンネルから出ることができないような感覚。焦りと不安。



仁平井美枝先生



小泉岳司先生

試行錯誤しながら立ち直れたのは先輩方の「アドバイス」があったからです。決して長くない、説明もない、一言ささやいて立ち去る。そのさりげなさに何とも言えない温かさを感じました。そして、その言葉たちは後になればなるほど深みを増し、人生の指針にまでなってくれています。

「誠実は貴きものの一位なり」

「むらさき」に寄稿された心に残る句です。祖母から教わったという句を毎年卒業生に贈り、この句の通りを実践される憧れの先輩でした。17音に込められたおばあさまの深い愛情とそれをしかと受け止められる先輩。そのご関係が目標となりました。

生徒のブレザーにボタンをつけていたとき、「生徒につけて、それを見守ることが本当の教育だ。手をかけるのではなく目をかけなさい。」と教えてくださった当時の校長先生。以来、この指導法は自身の軸となっています。

後輩からも学ぶ日々。「生徒と接する時間は限られている。貴重な数年間に自分が何をどれだけ与えられるか。」この信念で指導にあたっている後輩。主役は常に「生徒」。真摯に向き合う姿に心打たれ、年齢や経験のみが重要なのではないと自身の意識の低さを再認識し、見習う毎日です。

そして、今まで出会ってきた数えきれないほどの生徒たちに心から「ありがとう」。

たくさんの思い出と感動を与えられました。これからも感謝の気持ちが積み重ねられていくに違いありません。皆さんが本当のしあわせをつかめるよう心から願っています。

「ご縁」を大切にする学校に勤務できたこと、そして苦楽を共にしている家族のような先生方や事務の方、あちらへ逝かれた諸先輩方。感謝する方々が多く存在することをただただありがたく思います。退職するまで残り少ない日々ですが、報恩の真を尽くしていきたいと考えている昨今です。

●「私にとっての東京立正」

小泉 岳司

・東京立正との出会い

中学3年のとき、外部模試会場が東京立正高等学校で、それが初めての出会いでした。西館2階からの景色は、今とほとんど変わっていません。小学校時代は、妙法寺の縁日が楽しみで、毎月13日と23日が待ち遠しかったのを覚えています。その妙法寺が、岡田日歸上人の墓所であると知ったのは、昭和61（1986）年でした。この学校に着任した年のことです。

非常勤講師を3年、その後専任教諭となりました。当時6名が専任教諭として採用されましたが、同期入社で令和7（2025）

年現在でも在職しているのは、多田先生、今成先生、仁平井先生です。最初に授業を持った生徒は、斬新な第二代目の制服を纏っており、3・6年生だけ一代目の制服でした。現在四代目の制服ですが、全世代の制服の生徒に対して授業をしたのは、真柄先生、宇治川先生、現在では非常勤講師の宮崎先生、篠宮先生、今成先生、鈴木愛子先生と私だけです。

・当時の学び舎

奉職当時の施設は、第二体育館の場所に、短大の学生会館と旧中学校舎およびプールがあり、プールは中央が水深2.2mありました。その一帯は、プールの更衣室も含めて、とにかく陽が落ちると暗くて怖かったのを覚えています。教室では、冬になるとガスストーブの奪い合いがおき、後ろの壁に掛けたコートの中に隠れて授業を受ける生徒がいたほど1教室に生徒がひしめいていました。知っている範囲では、堇・蓮・葵・藤・蔦・菊・蘭・百合そして梅までありました。

・実は担任経験が少ない

担任は6年4回、5年5回、4年5回、3年1回、2年2回、1年2回を経験。副担任は3回、学年主任3回、募集広報部長7年目で現在に至っています。初担任は中2でした。理由は、前年に授業担当した中1との相性良しと判断していただいたようです。当時は3年の修学旅行はイギリスでした。このまま持ち上がってイギリス確定と信じていたのですが、翌年は4年の担任になりました。その次の年も4年担任で、その学年を持ち上がって卒業まで延べ5年間担任しました。結局イギリスの年だけ外されたわけですが、このことだけは今でも根に持っています。

・テニスが生活の一部になった

ほぼ同期の秋山先生（英語科）とともに、当時の同好会からテニス部へと昇格させたのが、テニスとの付き合いの始まりでした。優れた選手と巡り会い、中学と高校の両方で全国大会に行くことができました。プロ選手も輩出しました。印象に残っているのは、中学の全国大会が広島で行われた平成13（2001）年8月のことです。初日から終日中雨天で、インドアコートで朝9時よりシングルス1・2回戦をし、ダブルスは午後6時開始でした。ひたすら雨を眺めながら待ち続けた大会でした。実は、その年高2の担任をしており、修学旅行が本校初の沖縄の予定でした。が、9.11のテロ直後で空路を回避し、新幹線で行く広島となりました。1年に2回も広島に行くとは予想していませんでしたが、おかげで開園間もないUSJに行けたのは、雨をひたすら耐えたご褒美だと思っています。現在は中体連テニス第3ブロックの代表を仰せつかっておりますが、そこでの交流は、公私ともに大切なつながりとなっています。



家中太志先生

・校務分掌について

紫友会の委員長を5年経験しましたが、それを含め、のべ20年以上紫友会に所属しました。紫苑祭の期間は、毎日遅くまで生徒と準備しました。学年主任は平成28年から3年間経験。スキー教室のインフルエンザ大流行事件や沖縄のホテルにスーツを忘れて、次の宿泊先に届けてもらったことなど、濃い3年間でした。学年主任後は、のべ20年所属している募集広報部の部長を仰せつかりました。その部長職も今年で7年目に突入しました。この部署では、学校を背負う自負と個の考えについての葛藤、営業でしか経験できない辛い部分、その反面、学外との交流関係を拡大する楽しさを経験しています。

・杉並区は特別

最後に、生まれも育ちも杉並区和田の私にとって、隣町の東京立正と妙法寺とのご縁は、本当に希有なことであり、これからもずっと杉並区で生活していく愛着を与えてくれました。このことに感謝し、今後も杉並区で生活しながら、微力ながら恩返しできればとても幸いです。

●「思い出」

家中 太志

平成4（1992）年から東京立正にお世話になりました。思い出せることを気ままに書いてみます。

【女子高時代の生徒たちの印象】

心が温かくやさしい、頑張り屋さんが多い、行事での集中力がすごい、お嬢様タイプより男子顔負けのたくましさがあるなどでした。クラス名も堇、蓮、葵、藤、蔦、菊、蘭、百合と女子高らしいものでした。おもしろいことに毎年人は違うのにいつの間にか堇タイプや蓮タイプ（どちらも担任は大変だけれども楽しい）のクラスになっていくのです。初めて体育祭を見たときは先ず生徒のパワーとスピードに圧倒され、学年ダンスや高3花笠音頭の浴衣姿に魅了されました。伝統的に部活動が盛んで放課後になると教室の顔とはまた違うキリっとした表情に変わりました。ソフト顔、バレー顔、バスケット顔と呼ばれていました。（笑）

【男女共学当時】

70年以上続いた女子高に男子が加わりました。当時は今に比べやんちゃな男子が多かったように思います。振り返ってみると私はさぞ厳しい体育教師だったのではないのでしょうか。不満を覚えた人もいるかもしれませんね。「長く続いてきた東京立正の良き情操教育を守らなくてはならない」、「男らしさとは何かをわかってほしい」この2つの信念をもって男子生徒と接し

ていました。私なりに一生懸命でした。わかってください。

【四季を感じられる学園】

都心からほど近い場所でありながら自然豊かな東京立正が大好きでした。季節ごとにいろいろな顔を見せてくれます。春は第1グラウンドを囲むように咲く満開の桜、夏は我々を見守るように上手に日陰をつくってくれるヒマラヤ杉や校舎まわりの濃い緑、秋は講堂下で鮮やかな赤を見せてくれる紅葉と一面を黄色にする第2グラウンドの銀杏、冬の晴れた朝には西館3階から立派な富士山を見ることができます。そして玄関前には元国語教諭の伊藤先生を偲んで植えられた梅（思いのまま）があります。「先生、今年も紅白の花を思いのままに咲かせていましたよ。」

【思い出の先生方】

たくさんの先生方にお世話になりそして思い出をいただきました。有難うございました。今回は4名の先輩の先生についてお話しさせていただきます。

《船越 公道 先生》

当時の校長先生で私を東京立正に呼んでくださいました。報連相を徹底的に叩き込まれました。ソフトボール部をつくられた先生で「2位、3位の賞状は余るほどある。とにかく優勝を勝ち取る姿が見たい。」が口ぐせでした。初優勝を遂げた瞬間に先生が飛び上がって万歳をされた姿は一番の思い出です。

《西森 源太 先生》

体育科の先輩であり教頭先生でした。若い私が生徒指導でトラブルを起こしたときに「熱い心をもって指導するのはいいが、厳しく叱るだけの信頼関係を生徒と築けているのか。」のお言葉をいただきました。30年たった今でも肝に銘じております。

《中嶋 光尚 先生》

体育科の先輩で皆から『ナカジィ』と呼ばれ親しまれていました。髪の毛はほとんどなくなっていました。昔はさぞ男前であつたろうお顔で、にこりと笑ったときに何とも言えない味のある表情になったり、なにかにつけて涙もろいのも印象的でした。いつも現場目線でやさしいお言葉をかけていただきましたね。

《宮下 隆 先生》

第一印象は口数が少なく怖そうな人でした。学校業務では各分野で活躍され、労働組合の委員長として職員給与を改善された人でもありました。後に校長を務められ生徒減で学校経営が苦しくなった時に入学者を増やし建て直ちに尽力されました。その時に若い教職員に言われたお言葉「厳しいことは言うが、そのかわりちゃんと飯は食わせる。」に痛く感激したことを覚えています。学校のさまざまなことに精通され、先生はまさに『Mr.東京立正』でした。



中山美帆先生

【未来に向けて】

世の中の変化にともなって、さまざまなことが変化していくことは定説であり必要なことです。学校も変化していかななくてはなりません。しかし、昔と変わらず良いものを残すことも大切ではないでしょうか。学校とは、現在の生徒・保護者・教職員はもちろんですが、多くの卒業生やその学校の歴史を育んでこられた先生方の思いを土台にして成り立っているものです。私は東京にたくさんある私立学校を見ると、その学校が持っていた良い『らしさ』は今も受け継がれているのかに注目しています。時代に翻弄され、『らしさ』が消滅してしまっている学校、伝統に加えバージョンアップした『らしさ』をつくりはじめている学校。わが東京立正も次の100年に向けた『東京立正らしさ』が期待されています。

●「思い出の記」

中山 美帆

東京立正での私の思い出には、いつも生徒と一緒にいます。彼らも今では立派に社会人になり、世の中に貢献していたり、子育てに追われたり、今だに惑い悩む学生もいます。どの生徒との思い出も、私の心の宝物です。

初めて本校に赴任した時は、女子校時代で、中学に配属になりました。各学年3クラス、エアコンも無い離れの校舎で、暑い夏の日には生徒が猫のようにぐったりして授業を受けていたのを思い出します。そんな生徒の一人が、おしゃれなカフェの店員さんになっていました。立派なお母さんになった彼女と、思い出話に花が咲きました。

高校の担任となった時は、クラスの名前がお花だった時代です。学年にはAコースとBコースがあり、Aコースは元気でいたずら好き、Bコースはよく勉強するクラスでした。「薫組は可愛いお花で、どうして私はお花じゃない薫組なの」と生徒に言われ、閉口したのを覚えています。

当時、私はバトン部の顧問でした。ダンスなど全くの専門外で、四苦八苦してビデオで研究したものでした。体育祭で中学生のポンポンを使ったソングリーダーを披露したのは、ちょっと恥ずかしい思い出です。その後部員の一人が、ディズニースリゾートホテルで挙式をし、駆り出された私は部員との再会を果たし、楽しい思いをさせていただきました。

そして本校も男女共学になり、大学進学にも変化が起こります。他教科の先生方と協力し、必死に勉強を教えた時代を過ごせたことも、幸せな思い出です。手当などいらない、長期休暇中に講習を、と3教科揃って燃えたものでした。次には勉強合

宿を、という話もち上がり、先生方とプランを練り、当時長野県の湯ノ丸にあった本校の山荘に特進クラスを連れて行きました。ここでは冬にスキー教室をしていましたが、夏には景色も大きく変わります。天然記念物の蝶や植物を見かけ、美味しい空気を吸い、涼しい気候の中で朝から夜中まで勉強をしました。ある朝生徒が、「先生！窓の外に〇〇君が来てるよ！」と言うので、「…〇〇君はここにいるよ？」と返したものの、みんなで窓から外を覗くと、そこには可愛い狐がちょこんと座っていました。「ほら、似てるでしょ？」全員で大笑いでした。お昼休みには外を散歩し、近くのお店でコケモモやブルーベリーがたくさんあったソフトクリームを、生徒達とほおばりました。夜は遅くまで食堂で自習をしましたが、食欲旺盛だった私のクラスは、「先生、おなかがすいて、力が出ない…」と言いつきました。それを聞いた管理人さんの和田さんが、「ごはんだけならあるよ」と申し出て下さいました。女の子たちと一緒に塩むすびを山ほどつくりましたが、クラス全員でぺろっと平らげてしまいました。その時の女の子たちは、今でも仲が良く、大人になってもお付き合いが続いているようです。

それからはICTの波が押し寄せ、タブレット準備や検定対策、オンライン英会話導入、またコロナ対策にも苦戦しました。そして夏休みに進路の書類を抱えて日々職員室に通いつめ、私の方が降参したくなった生徒達など、まだまだ思い出話には枚挙に暇がありません。これからも時代や世の中の状況が変化し、人々の価値観が多様化していても、生徒達に伝えたい「本当に大切なこと」は、いつまでも変わらないと信じます。苦勞があっても、面倒見の良さが東京立正流。そして、本校で様々なことを経験した生徒達が、学んだことを糧として、幸せに人生を歩んでいくことを願う気持ちも変わりません。これからも東京立正の発展をお祈りしつつ、生徒達が卒業後も母校に顔を出した際には、学生時代と同様に、お隣の八百屋さんとお喋りするような幸せが続くことを願っています。



桜花爛漫の中高校舎

③ 諸団体の方々

● 思い出

東京立正同窓会 会長 井上 照美

私は昭和41（1966）年4月に入学しました。私の出た市立の中学校はその当時体育館やプールはありませんでしたので、東京立正の第一印象は設備の整った学校だなあと思いました。女子吹奏楽部の演奏を聴いたのも初めてだったので感動しました。私たちの学年は1クラス約45名の12クラスあり（600人）、教室はぎゅうぎゅう詰めでした。

部活はバレーボール部に入りました。1年生の時には70名位入部しましたが2年生になったら10人ぐらいしか残りませんでした。夏の合宿は学校で教室に布団を引いて寝ました。合宿中練習試合に行き負けてしまい学校までマラソンで帰ったときはへとへとでしたが、先輩の作ってくれた夕食がすごく美味しかったのを覚えています。1週間の合宿をよく頑張ったと思います。バレーボールが6人制にかわり9人制最後の東京都の試合では優勝しました。

授業では倫理社会で初めて仏教の原点に触れましたが大変分かりやすかったです。礼法の授業は、もう少し真面目にやれば良かったと社会に出てから分かりました。学校に食堂ができ、メニューにラーメンがありましたが1日何食か決まっているので早めに教室を抜け出し並んで食べられた時は幸せでした。体育祭では、授業中に自分たちで縫った浴衣を着て花笠音頭・豊年万作音頭を踊りました。今でもこれは続いています。修学旅行は山口県と北九州に寝台列車で行きました。山口県は秋吉台と秋芳洞に行きました。秋吉台は大きな石灰岩大地が広がっていましたし、秋芳洞は長い年月をかけて水と石灰岩がおりなす自然の芸術が大きく綺麗で感動しました。関門トンネルは歩いて渡ったのですが、カメラマンの人が「中は水族館みたいに魚がたくさん見られる」と言ったので期待して歩いたのですがだまされました（笑）。九州は福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、宮崎県を巡りました。水前寺公園はきれいでした。高崎山のサル、グラバー邸、大浦天主堂、青島の海の洗濯岩も行きました。長崎原爆祈念館では展示されていた遺品や写真を見ました。阿蘇、草千里ではバスから降りて散策をしましたが、その時担任の先生の靴の踵がはがれてパカパカになっているのを見て皆で大笑いしてしまいました。バスガイドさんが「阿蘇は朝霧～ゆうべは夜霧よ～♪♪」と歌ってくれたのを今でも覚えています。帰る日には、ホームを走りながら手を振ってさよならしたくらい優しい方でした。

部活の帰り高円寺駅のガード下にある甘味所で先生に見つかってしまいましたが優しく諭されたことや、下校時に私の2～3m先は雨が降っているのにそのすぐ後ろは晴れて影ができていて新高円寺駅まで雨にぬれずに帰れたという不思議な経験も楽しい思い出です。また、ハッキリとは覚えていないのですが、学期ごとに講堂で映画鑑賞がありとても楽しみでした。覚えている映画の題名は「風と共に去りぬ・ロミオとジュリエット・クレオパトラ・ベンハー・王様と私・紀ノ川」などで、映画館で見ているようでした。今から56年前なので記憶違いもあるかもしれませんが良い思い出です。当時の校長先生岩本経丸先生で、入学した昭和41（1966）年にはビートルズが来日し、卒業した昭和44（1969）年にはアポロ11号が月面着陸したというような時代でした。

令和6（2024）年6月に43年ぶりのクラス会を開きました。会った途端に即18才に戻り、愛称で呼び合い、内藤利治先生をはじめ皆様ととてもお元気で感激しました。あっという間の楽しい一時を過ごすことができました。

◆東京立正高等学校同窓会発足経緯

昭和6（1931）年3月 立正高等女学校第1回卒業生49名。名称を「立正蓮会」とし会長は母校の校長に、理事は4名の先生にお願いした。

昭和6年4月18日 馬田即貞校長が住職を務める東京芝三田の蓮乗寺にて第1回総会が行われた。この時、立正第一女学校（旧立正技芸専修女学校）の同窓会名称を「小百合会」として独自に設立。

昭和11（1936）年5月16日 「立正蓮会」と「小百合会」を合併、「立正同窓会」と改称。この後毎年4月29日に総会を開催して会員の親睦をはかり、年一回の「会報」発行を決めた。

◆同窓会から学園への寄贈

- 日歸上人報恩記念講堂（現講堂）の建設に当たり建設資金の一部とグランドピアノ1台
- 講堂階段手摺
- 共学化に伴う洗面所改修
- 一階西側洗面所改修
- 食堂テーブル椅子セット
- 創立百周年記念として第一体育館の空調設備



立正高等女学校第1回卒業生



同窓会総会

◆理事・監事

令和7（2025）年現在理事11名と監事2名で、創立百周年を迎えるまで同メンバーで同窓会を運営いたします。

〈理事〉

小畑敏、鈴木純子（11回生）、三浦喜美代（12回生）、浅野康子（15回生）、松本晴美、斎藤寿江、池内ひとみ（20回生）、井上照美、鈴木雪枝、山岸多恵子（21回生）、柳渕優子（37回生）

〈監事〉

市川和子、浦川治美（21回生）

●「思い出」

東京立正中学高等学校後援会 会長 小畑 敏

創立百周年おめでとうございます。

顧みますれば、私が東京立正中学校の門を入ってから、もう百年も経とうとしているのです。その間、色々なことがありましたが、今となっては大切な懐かしい思い出ばかりでございます。

学校に入学する前に校舎他を、先生にご案内いただきました。白いアメリカンスタイルの、とても素敵で校舎でした。校舎の窓の下には運動場グラウンドに向かって斜めに青々とした芝が生えていて、初めての景色でしたので、大感激したことを覚えております。

現在では、その制度は、すっかり無くなっていますが、中学1年生には優秀な先輩のお姉様方が、各級に一人ずつ付き添って、瞑想の時間等で静かに講堂へ向かう時は必ずお世話をしてくださいました。

私は入学してからもの凄いショックだったことが有りました。私たち中1生徒は、憧れのアメリカン校舎に入れるものだばかり思っておりましたが、実は現在の短大の方にあった、木造の古色蒼然とした古めかしい教室が与えられたのです。廊下等も、気を付けて歩かないと踏み抜けてしまう状態でした。隣には空いている教室が在り、小学生気分の抜けてない私達は、休み時間にそこで、おままごと等をやっていて、「貴女たちはもう小学生ではないのですよ」と担任の今成元昭先生にいつも注意をされておりました。

「憂き事の尚この上に積れかし。限りある身の力試めさん。」宗教の時間に元校長馬田即貞先生からお習いした日蓮聖人の歌です。私と妹は、家で話をする時は親しみを込めて「即貞ちゃん」とお呼びしておりました。学校の廊下等でお会いすると必ず笑顔で通り過ぎてゆかれました。

高3の時は、本校だけでは校舎が足りず、妙法寺様の現在の駐車場あたりに在った男子部の木造の二階建の校舎が、私達の

終（つい）の住（すみか）になりました。お礼法や、音楽の授業等、どうしても、本校でなければダメなものが有り、こちらの分校から、あの坂道を往復したことは大変なものでした。

あの当時はまだお若かった元校長船越公道先生が、家庭科の大坂令子先生を、ご自分の自転車の荷台にお乗せになり、エッチラ、オッチラと往復なさってました。大変なことだったと思います。あの当時は、本校のそばにテイチクレコード会社の吹き込み所が在り、時のスター石原裕次郎さんが、会社の玄関近くの空地で良くキャッチボールをなさってました。私は時々足を止めてそれを見とれていました。彼は私に気付くと手を止めて、これから学校？と声をかけて下さいました。噂の通り格好いい方でした。早世されて残念なことでした。我、母校が未来永劫に栄えますようにと願います。

●「その先の100年へ」

東京立正中学高等学校父母の会 会長 奈良 貴子

温かな生命の息吹を感じる4月、学校創立100周年を迎えられましたこと心よりお慶び申し上げます。

立正高等女学校は『五重の塔を建てるよりも、学校をつくって人間の塔を建てよう』という誓願と決意のもと女子教育に力を注ぐべく昭和元（1926）年、岡田日歸上人が設立した学校だと聞いています。

近年学校は平成14（2002）年に共学化、平成27（2015）年に中高一貫クラスのイノベーションコースの新設などの変化を辿り現在に至ります。

長女が中学校に入学した平成27年は一貫クラスのスタートとともに、近隣校に先駆けいち早く電子黒板を導入し、当時はまだ耳にしたことがなかったSDGsへの取り組みなど、まさにこれからの時代の人材育成や地球規模での環境保護、グローバル化を考えた試みを示してくださった革命的な年だったと感じています。

イノベーションクラスではコロナ前までではありますが中学3年時にカナダのオレンジビルでのホームステイを経験しました。現地の一般家庭からジュニアハイスクールへの通学、あちらの家族と過ごす休日、大学やナイアガラの滝の見学など8日間を過ごしました。

高校ではカンボジア研修（3年間の中断を経て2024年から再開）。日本人が運営や支援を行っているくっくま孤児院での交流は、幼い子どもたちと楽しめるよう多くの準備をして臨みました。また、キリング・フィールド訪問、マングローブの植樹など17歳の多感な時期にクラスメイトとともに貴重な体験をす

ることができたのではないのでしょうか。

高校のアドバンストやスタンダードクラスの沖縄修学旅行も、紫友会が中心となり首里城が消失してしまった年にはいち早く募金を持って訪ねるなど、そのとき高校生にできる最大限のことを考えて行動していました。

常に先を見て変化していく東京立正の教育は、大学や実社会に出てから役に立つことが多く、卒業生は母校の取り組みがいかに時代を先読みしていたかを感じるようです。

わたくしの在任中（平成31（2019）年～令和7（2025）年）は新型コロナウイルスの流行で世界中がパニックになった時期もありました。学校も例外ではなく分散登校、時短授業、黙食などの対策をせざるを得ませんでした。

それでも東京立正は歩みを止めず、体育祭や修学旅行などは「開催するためにはどうしたら良いか」を前提に先生方がご尽力くださり生徒も共に考え実行しました。

こういった取り組みは文字通り生きた授業であり、先生方はこの先を生き抜く知恵と力を教示してくださったと感謝しております。

父母の会の活動も毎年のように変更を余儀なくされ、紫苑祭参加や研修もそのときの仲間と知恵を出し合い担当教諭にアドバイスをいただき一步ずつ次へ繋いでまいりました。一度途絶えた父母の会研修旅行は、令和4（2022）年に再開する際には校外研修と改め、妙法寺の皆さまのご協力のもと妙法寺見学会となり現在も継続しています。このように仲間と考え作り出し

ていく経験はわたくしたち保護者にも財産となりました。

『人間の塔を建てよう』とは一朝一夕でできることではありません。しかし先輩方が築いた礎に努力と研鑽を重ねることで、わたくしたちはこれからも心の塔を揺るがぬものに成長させていけるのではないかと思います。

最後になりましたが、不思議なご縁に導かれ100年の長い歴史のなか我が家は一男三女が11年、一人ひとりの在学期間にするとのべ21年分の濃い時間を東京立正で過ごしました。父母の会の活動を通じ、わたくし自身も成長する機会をいただきました。

これからの100年も東京立正中学高等学校がさらに時代の先へ歩みを続けていくことを願いお祝いの言葉とさせていただきます。



父母の会研修会

●「ごあいさつ」

東京立正中学・高等学校紫友会 会長 松村 蒼己

東京立正中学・高等学校は創立百周年となりました。百周年という長い歴史の間に、東京立正で過ごした学生の様々な日々があります。私たちが関わることはこの中でたった3年という短い間です。その積み重ねが100年という歴史につながると考えると、改めてこれまでの歴史の重さを感じます。

生徒会の活動としては学校行事の運営や学校説明会のサポート、学校生活の豊かさの向上を中心に取り組んでいます。私たちはこの3年間で新入生から最高学年までの学校生活を豊かにできたのではないかと考えています。

数年前まではコロナ禍に見舞われた学校生活になり、多くの制限下で過ごすこととなりました。例えば、紫苑祭で模擬店の出店規制や、アトラクションでの接触禁止のため、動画上映や展示のみにした代もあると伺いました。ここ数年で制限のない紫苑祭に戻すことができたり、後夜祭を復活させることができたりしたことで、青春を謳歌できるような機会が増やせたと感じています。

学校生活でも感染防止のために教室内のゴミ箱撤廃など当たり前にあったものがなくなる生活を強いられました。コロナ禍を経て、それ以降は先生方と相談しながら過ごしやすい学校生活に向け様々なことを再開してきました。例えばゴミ箱設置再開にあたり、校内美化月間を設けることで、紫友会と整備委員が協力してルールの徹底に努めました。他にも紫友会の四役でアンケートを取ったり、周りの意見を聞いた上で中身に関する意見をお伝えし、食品自販機を導入したり、自販機の中身を入れ替えていただいたりしました。その結果、橘ルームの生徒の利用が増え、学校全体の交流の場としてもより活用してくれるようになりました。これらは全校生徒の代表である私たち紫友会で企画したことで、今後の学校のための道筋を示すことにもなったと思います。

広報活動としては、学校のInstagramやX（旧Twitter）の投稿で、学校の近況を生徒目線でアピールしたり、学校PR部（生徒のみで運営している団体）で本校の学校紹介を行ったりと「紫友会広報」の部署にも力を入れ始めました。

これらのように、先輩方がコロナ以前まで築き上げてくださったものに、私たちの新しいアイデアを混ぜ、全校生徒がよりよい学校生活を送ることができるように尽力してきました。本校が掲げている「全員レギュラー」を胸に刻み、東京立正を全校で盛り上げ更なる発展をしていけるように後輩にバトンを受け継いでいきたいと思っています。

東京立正保育園のみなさん



しか組

①保護者のみなさん

●「思い出の記」

はと組 込山 澤 保護者

学校法人堀之内学園創立100周年記念誌に、保育園保護者として寄稿する機会を賜り、大変光栄に存じます。

思い起こせば、平成30（2018）年に東京立正保育園が開園され、堀之内学園の精神である「生命の尊重・慈悲・平和」の理念のもとに展開される保育環境で、我が子がどのように成長するのか、期待に胸を膨らませていました。

新設園ではありましたが、先生方が一丸となって、保育環境を整えることはもちろん、様々な行事を企画してくださったことで、毎日楽しそうに通園する我が子の姿を見て、本当にこの園を選んで良かったと実感したことを覚えています。

日常生活では、自らの足で歩いていけるよう、生活する力を身に付けるとともに、集団の中で育ちあう関係づくりから“思いやりの心”も育んでくださいました。

我が家は兄妹でお世話になりましたが、堀之内学園の理念に基づいた保育園で過ごした日々は、大切な思い出として、子どもたちの心に刻み込まれています。

最後に、歴代の先生方、職員の皆様へ厚くお礼を申し上げるとともに、学校法人堀之内学園のさらなる発展を心よりお祈り申し上げます。

●「思い出の記」

しか組 栗山 丈 保護者

新しくできた保育園で、子どもも親も先生たちも、毎日が“はじめて”の連続でした。園児が少なかった初年度、長男は1年限りの「幻のペンギン組」に所属。先生たちは手探りの中で工夫を重ね、行事もどんどん増えていきました。

「命をいただく会」「秋刀魚を焼く会」「流しそうめん」などの食育イベントは、長男も次男も毎年楽しみにしていた大好きな時間。卒園した長男は今でも「保育園のラーメンが一番おいしい」と話しています。

この園でのたくさんの“はじめて”が、子どもたちの心と体を大きく育ててくれました。次男の卒園まで残り2年を切り、私自身も通えなくなる日が近づいていることに、すでに少し寂しさを感じています。

これからもこの場所が、笑顔と成長にあふれる園であり続けますように。

●「思い出の記」

こうま組 新藤 瑚斗羽 保護者

7年前、東京立正保育園が新設された際に息子は1歳児クラスに入園しました。当時は、まさに区内で待機児童が問題になっていた時期で、近隣の保育園には0歳で入れることができませんでした。

そんな中、近隣に保育園ができると聞き、開設を楽しみにしていました。東京立正が保育園を開設するのは初めてということで、どんな理念を持った園なのか、どんな先生たちが集まるのか、期待がありつつ、系列園もない全くの新設の園に大事な子を預ける不安もありました。事前に電話で問い合わせをしたほどです。

いざ、入園をすると、新しく清潔感のある室内、魅力的な給食、先生方は年齢層も幅広く、どの先生も非常に熱心で子供たちに全力で向き合ってくださいました。（東京立正短期大学をご卒業された先生たちも多くいらっしゃった印象です。）

息子は卒園までお世話なり、いまは娘が入園してお世話になっています。毎日、仕事に子育てに目を白黒させながら駆け抜ける日々ですが、先生たちがいらっしゃることで安心して子供を預けられ、いつも気持ちよく迎えてくださるので仕事から切り替えるホッとする場になっています。

100周年おめでとうございます。今後益々のご発展をお祈り申し上げます。

●「思い出の記」

りす組 菅谷 侑未 保護者

このたびは、創立100周年、誠におめでとうございます。

私の長女は、保育園が開園した年に第1期生として入園しました。新しい園舎、新しい先生方、何もかもが初めて尽くしで、保護者としても不安と期待が入り混じっていたのを覚えています。少しずつ園の雰囲気にも慣れ、元気に登園するようになった姿は、今でも鮮明に思い出されます。先生方の温かいご指導のおかげで、集団生活の中で思いやりや自主性を身につけ、卒園時には大きく成長した姿を見せてくれました。そして現在は、次女が同じ保育園に通っています。園での毎日は、笑顔と安心にあふれ、家族にとってかけがえのない場所となっています。100年という長い歴史の節目に立ち会えることを嬉しく思うとともに、これからも地域に根ざした温かな保育が続いていくことを願っています。



こうま組



りす組



はと組

●「思い出の記」

はと組 徳永 翔 保護者

平成30（2018）年4月の入園以来、我が家は東京立正保育園とともに歩んでまいりましたが、令和8（2026）年3月の弟の卒園をもって一区切りとなります。長年お世話になった保育園に通えなくなることを思うと寂しさを覚えると同時に、これまでの月日がいかに貴重であったかを実感しております。

開園以来、兄弟ともに多くの愛情と支えをいただきながら、毎日を安心して過ごすことができました。特に病気を抱える弟には、日々の医療的ケアを丁寧に行ってください、家族一同、心より感謝しております。

先生方は子どもたち一人ひとりに寄り添い、どんなときも温かく見守ってくださいました。また、共に過ごしたお友達やその保護者の皆さまからも、多くの励ましや優しさをいただき、支え合うことの大切さを学ばせていただきました。

東京立正保育園は、我が家にとってかけがえのない場所です。感謝の気持ちを込めて、今後のご発展をお祈り申し上げます。

●「思い出の記」

はと組 本間 日那太 保護者

学校法人堀之内学園の創立100周年、心よりお祝い申し上げます。

東京立正保育園が開園した初年度より、子供を通わせ、姉弟2人が8年間にわたりお世話になってきました。

初めて長女が登園した日、新築の木の香りが残る明るい園舎に、ドキドキとワクワクが入り混じっていたことを今でも鮮明に覚えています。

保護者運営委員として園に関わる機会にも恵まれ、学園理事や先生方とともに、子どもたちの成長と幸せについて考える貴重な経験ができました。

学園の教育理念である「生命の尊重 慈悲・平和」のもと、子どもたちが日々の生活の中で、他者を思いやる心や命の大切さを学んでいることを実感しています。

先生方の温かくユーモラスな保育と、一人ひとりが輝く行事を通じて、子どもたちの成長に感動する場面が幾度もありました。

東京立正保育園での時間は、私たち家族にとってかけがえのない宝物です。今後も学園と保育園が地域に根ざし、次世代を育む場として末永く発展していくことを心より願っております。

●「思い出の記」

はと組 國岡 省吾 保護者

現在小学2年生の息子は、東京立正保育園の卒園児です。息子が入園したのは1歳で、保育園もまだ開園して間もない頃でしたが、先生方に不慣れな様子は一切なく、満面の笑みで温かく迎え入れてくださり、不安でいっぱいの私達の気が、一気に晴れたことを記憶しています。

送迎で保育園に行けば、先生方は必ず笑顔で挨拶してくださり、担任でない先生や調理の先生、園長先生までもが、息子の名前を覚えてくださっている、そんなアットホームな環境で、息子はのびのびと過ごすことができました。

入園時、親から離れようとしなかった息子が、小学生になり、保育園の先生にランドセル姿を見せたいと親を置き去りにして保育園に向かう様子を見て、息子にとって、いかに居心地の良い場所であったかは言うまでもありません。

息子は、小学1年生の通知表で、怪我をした同級生を介抱する心優しい子と評価してもらいましたが、これは、慈悲の心を保育園で学んだ結果であり、改めて、東京立正保育園で良かったと感じました。



第六期生卒園記念の大作



保育室

②職員のみなさん

●「思い出の記」

保育士 鵜飼 結花

保育の道を目指したいと思い、東京立正短期大学に入学しました。アットホームな雰囲気の中、実践的な学びや子どもの生命を尊重し、一人ひとりに寄り添う保育を学びました。就職活動中に東京立正保育園が開園すると知り、この雰囲気の中で保育がしたいと思いました。8年前、初めてのことに緊張しながら開園準備を先輩方と行い、一緒に創り上げていく難しさや楽しさを経験できたことが貴重な時間だったと感じます。初年度は1歳児の担任をさせていただき、子ども達も私自身も1年目。初めて親元を離れて生活する子ども達が安心して楽しく過ごせるようにと担任側は連携を取って毎日試行錯誤しながら、保育をしてきたことが、鮮明に思い出されます。これからも子ども達の気持ちに寄り添いながら楽しく過ごしていきたいです。又、子ども達は短期大学との交流を楽しみにしており、学生にとっても学びの場となるため今後も続けていき、短大から一緒に働く仲間ができると嬉しいです。創立100周年、今後の更なるご発展をお祈りいたします

●「思い出の記」

保育士 関根 琴

高校生からこの学園に通い、短大2年生の時に「保育園」が新しくできることを知りました。設立したらここで働きたいという思いが実現し、社会人一年目で初めての、3歳児クラスを一人で受け持ちました。何もかもが手探りで、戸惑いや不安でいっぱいの中、毎日奮闘して働いていました。新設園ということもあり、職員で決めていくこと、協力して作り上げていくことがとても多く、職員で何度も話し合いを重ねましたが、考えたことが成功すると、今までに味わったことのない、達成感を味わえたことを、今でも強く覚えています。また働く中で悩むことも沢山ありますが、高校・短大時代に先生方から教えていただいた、子どもに寄り添う温かい心や、学生時代に経験、体験したことが私の一部となり、今現在も、保育者としてこの園で働き続け、子ども達に関わることが出来ています。百周年という節目に、私がこの学園の一員として関われることに、感謝の気持ちでいっぱいです。

●「思い出の記」

保育士 大高 明日香

学園創立100周年、心よりお祝い申し上げます。私は東京立正保育園の開園当初から勤務していますが、園舎には何もない状態からのスタートでした。初めての入園式では、当日の朝まで飾り付けの準備に追われ、職員みんなでバタバタと準備をしたことを今でも鮮明に覚えています。開園後も、「あれがない」「これも必要だった」と、慌てて買い出しに出かける日々。何もかもが手探りで大変な毎日でしたが、子どもたちの笑顔や仲間存在に支えられながら、少しずつ園がかたちになっていく喜びを感じてきました。そんな歩みの一つひとつが、今の園、そして学園の歴史の一部になっていることを、誇りに思っています。これからも子どもたちの成長を支える場として、学園がますます発展されることを心より願っております。

●「思い出の記」

調理師 吉田 由紀江

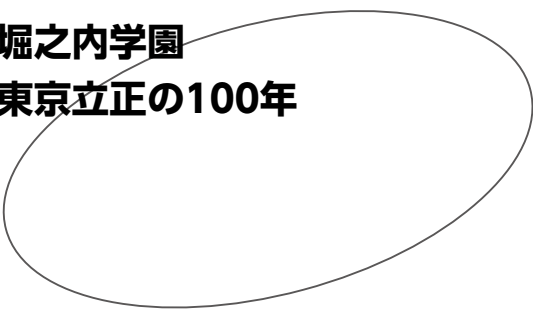
創立100周年、心よりお祝い申し上げます。職員の一人として関わることができ、大変光栄に思います。保育園開園時、調理師としてお声がけいただきましたが、当時の本職はフランス料理であり、一度はお断りしました。しかし、食育にこだわった自園給食を実現したいという熱意に心を動かされ、子を持つ親としても多くのビジョンが浮かび、共に歩む決意を固めました。開園当初は手探りでしたが、子どもたちにおいしく安心・安全な給食を届けるため、チームで挑んできました。栄養士と共に食育活動を企画し、焼き場や流しそうめん台を自作するなど試行錯誤も重ねてきました。共に奮闘した先生方は、今やかけがえのない戦友です。今後も園の理念を胸に、「保育園の味」を守りながら、地域に愛される園であり続けたいと思います。



調理室



堀之内学園
東京立正の100年



堀之内学園史

大正15年＝昭和元年（1926）

- 4. 20 第1回女学校設立発起人会を堀之内妙法寺にて開く
- 5. 12 女学校の校地を選定する
- 7. 3 校名「立正」と決定する
- 10. 10 設立委員会、初年度生徒募集要項と技芸科併置を決める
- 12. 7 校舎建設地鎮祭を修す
- 12. 28 立正高女、設立認可をうける
岡田日歸、初代校主となる（～昭和6、11、15まで在任）。高島平三郎、初代校長となる「紫」創刊される。

昭和2年（1927）

- 3. 10 校舎本館完成する
- 4. 1 高島平三郎、初代校長に就任する（20、3、31まで在任）
- 4. 8 立正高女、開校。始業式をあげる
- 4. 28 創立記念式典をあげる。この日を創立記念日と定める

昭和3年（1928）

- 2. 16 宗祖降誕記念の聖劇・童話劇を上演する
- 4. 9 園芸部、学校園に草花を栽培する
- 4. 28 創立記念祝賀会を開く。田中智学「立正の意義」を講演
- 4. 立正高女附属技芸科、各種学校令により設立認可をうける
- 10. 2 御真影下賜される

昭和4年（1929）

- 10. 7 文部省・東京府督学官、本校の裁縫授業を視察する
- 10. 28 財団募金を設立する
- 11. 26 高松宮妃にコスモスを献上、高松宮より下賜金をうける
- 11. 26 高女生徒3名、国際連盟主催の世界的国際心助成に関する課題論文に当選する

昭和5年（1930）

- 2. 16 第4回創立記念学芸大会を開く。聖劇「虚空蔵菩薩」を上演する
- 4. 8 花まつりを修す。村雲尼公日浄臨席する
- 6. 身延山修学旅行を挙げる
- 10. 17 宗祖650遠忌記念法要と講演・演劇・童話舞踏会を開く
- 11. 6 東京府視学官、理化学授業を視察する
- 11. 18 宗祖650遠忌記念運動会を行う。陸軍戸山学

日本と世界の動き

大正15年＝昭和元年（1926）

- 1. 24 山田耕作の日本交響楽協会、第1回演奏会でベートーベン「英雄」を演奏
- 8. 29 人見絹枝、第2回万国女子オリンピックで個人最優秀賞となる
- 12. 25 大正天皇崩御、摂政裕仁即位、昭和と改元

昭和2年（1927）

- 3. 15 金融恐慌おこる
- 7. 10 岩波文庫発刊
- 7. 24 芥川龍之介自死

昭和3年（1928）

- 2. 20 初の普通選挙実施（女性に選挙権なし）
- 5. 3 済南にて日本軍と北伐軍衝突
- 6. 4 張作霖爆殺事件おこる
- 11. 3 ラジオ放送開始
- 11. 10 天皇即位大礼挙行

昭和4年（1929）

- 7. 1 学生・生徒の思想調査・指導のため、文部省に学生部を設ける
- 8. 19 ドイツのツェッペリン飛行船来る
- 9. 10 文部省、各学校に国体明徴を訓令
- 10. 14 世界大恐慌はじまる

昭和5年（1930）

- 4. 20 東京市電争議
- 9. 10 米価大暴落、農村飢餓広がる
- 11. 14 浜口首相、東京駅で狙撃される
- 12. 11 文部省、初の私立大学総長・学長協議会を開く。
学生思想問題を協議

昭和6年（1931）

- 1. 10 文部省、中学令施行規制を改正、柔剣道などを必修とする
- 9. 16 満州事変おこる
- 10. 29 アメリカ大リーグチーム来日
- 12. 13 犬養毅内閣成立

昭和7年（1932）

- 1. 2 上海事変おこる
- 3. 1 満州国建国宣言
- 5. 14 チャップリン来日
- 5. 15 陸軍将校。犬養首相を射殺（5.15事件）
- 7. 27 文部省、農漁村の欠食児童20万人と発表
- 12. 16 日本橋白木屋火災

昭和8年（1933）

- 1. 30 ヒトラー、ドイツ首相となる

堀之内学園史

校軍楽隊、応援演奏する
『立正大師鑑仰録』を刊行する

昭和6年（1931）

- 1. 30 岡田日歸、身延山久遠寺82世法主となる
- 3. 3 立正高女附属技芸科を立正技芸専修学校と改称する。後、立正第一女学校と改める。
- 3. 24 立正高女、第1回卒業式をあげる
- 4. 18 同窓会、第1回総会を東京三田蓮乗寺にて開く。出席23名。立正蓮会と命名する
- 4. 21 御真影を奉迎する
- 5. 30 教職員の修養を目的に、立正修養会を設立する
- 7. 1 妙法寺31世堀日正、第2代理事長に就任する（昭和32.1.24まで在任）
- 8. 庭球部、全日本女子庭球選手権大会に代表を送る
- 10. 1 本校生徒、宮城前広場に整列し「立正」勅額奉迎式典に参加する
- 10. 17 勅額降賜記念体育大会を挙げる
- 11. 15 創立者岡田日歸寂（68）
- 12. 8 岡田日歸本葬儀、身延山にて修される。本校生徒代表大塚操、記念講堂建設など5項目を霊前に誓う

昭和7年（1932）

- 2. 14 立正大師降誕奉祝の学芸会を開く。聖劇「伊豆法難」を上演する
- 2. 13 立正母の会設立される
- 2. 東京府視学官、数学科授業を視察する
- 5. 27 海軍記念日に当たり、国防献金花の日会を挙げる
- 7. 28 山岳部、初めて八ヶ岳登山を行う
- 10. 15 記念講堂建設バザー大会を開く。1万5000名余参会する
- 10. 16 秋季運動会を挙げる
- 11. 15 本校慰霊祭を堀之内妙法寺にて修す。これより11月15日を学園慰霊祭の日と定め本校講堂にて修す。

昭和8年（1933）

- 2. 16 本校生徒による遠山潮徳作「涕淚石」の朗読東京中央放送局より放送される

昭和9年（1934）

- 2. 11 皇太子誕生学芸会を開く
- 5. 27 海軍記念日に当り、戦没者に弔意を捧げる運動をはじめる

日本と世界の動き

- 3. 27 国際連盟脱退詔書発行する
- 4. 22 滝川事件おこる
- 7. 8 文部省、「非常時と国民の覚悟」を学校に配布
- 12. 23 皇太子明仁誕生

昭和9年（1934）

- 4. 3 二重橋前で全国小学校教員精神作興大会を挙げる
- 4. 21 渋谷駅前にハチ公銅像建つ
- 6. 1 文部省、思想局を設置
- 8. 2 ヒトラー、総統となる

昭和10年（1935）

- 2. 18 天皇機関説問題おこる
- 4. 1 青年学校令（10月より全国に設置）
- 9. 1 中国共産党、抗日救国宣言
- 11. 26 日本ペンクラブ結成

昭和11年（1936）

- 2. 26 青年将校、斉藤内相・高橋蔵相らを射殺（2.26事件）
- 11. 7 国会議事堂完成
- 11. 25 日独防共協定調印

昭和12年（1937）

- 7. 7 盧溝橋で日中両軍衝突、日中戦争はじまる
- 10. 12 国民精神総動員中央連盟結成
- 12. 13 南京大虐殺事件おこる

昭和13年（1938）

- 1. 13 杉本良吉・岡田嘉子、ソ連に亡命
- 3. 19 日本軍、徐州占領
- 4. 1 国民総動員法公布
- 10. 27 日本軍、武漢三鎮占領

昭和14年（1939）

- 1. 15 横綱双葉山の連勝69で終わる
- 3. 26 藤原歌劇団、カルメン初演
- 3. 30 文部省、大学の軍事教練必修を通達
- 5. 11 ノモンハン事件おこる
- 8. 23 独ソ不可侵条約調印
- 10. 20 物価統制令実施

昭和15年（1940）

- 4. 24 米、味噌、塩、砂糖などのキップ制採用
- 6. 14 ドイツ軍、パリ入城
- 9. 23 日本軍、北部仏印進駐
- 9. 27 日独伊3国同盟成立
- 10. 12 大政翼賛会発足
- 11. 10 紀元2600年式典挙げる

- 7.18 「立正時報」を刊行する
- 7. 全校生徒、夏休みに心身鍛錬の美化作業を行う
- 7. 身延山麓修養会をはじめる
- 10.28 神武東遷2600年記念第8回体育大会、卒業生木下喜代子操縦の飛行機上空飛ぶ
- 11. 5 村雲尼公日浄来校し、天皇下賜の蔬菜を分与する

昭和10年（1935）

- 3. 4 財団法人、堀之内学園、認可を受ける

昭和11年（1936）

- 1.30 記念講堂の設計成る
- 2.16 同窓会、立正音楽映画の集いを明治神宮外苑青山会館にて開く。1000名余参加、グランドピアノを寄贈する
- 5.16 立正高女、立正第一女学校卒業生、合同して立正同窓会を結成する
- 5. 三浦海岸修学旅行を挙げる
- 11.29 音楽部生徒30名の合唱、四谷文子（教諭、声楽家）指揮のもと、JOAK「学生、青年の音楽」の時間で放送される

昭和12年（1937）

- 4. 1 この年度より定期考査実施を決める
- 4.11 第2回音楽・舞踊・映画の集いを開く
- 4.26 臨時保証人会を開く。講堂の備品寄付の件を話合う。母の会、講堂内部設備費1万2000円の納付を引き受ける
- 4.28 記念講堂、第1期工事竣工し開堂式をあげる
- 7.29 夏期修養会を身延山にて開く

昭和13年（1938）

- 4. 1 この年度より第4学年は、進学・就職・家庭の3部制となる
- 5. 関西修学旅行を挙げる
- 10. 1 文部省、外務省主催の日独伊親善図画展に、本校生徒、絵画部の城戸幸子「人形」にて入選する
- 10. 1 立正音楽会、講堂にて開かれる。立正バンド部演奏。同部はついで明治神宮競技場の東西陸上競技大会に出場する
- 10.27 立正バンド部、武漢陥落に際し、愛国行進曲、立正行進曲を演奏し明治神宮に参拝する
- 11. 5 立正体育大会を挙げる
- 11. 8 立正バンド部、第3回連合女子音楽会・「五万人の合唱」に参加する

昭和16年（1941）

- 1. 16 大日本青少年団結成
- 4. 1 小学校を国民学校と改称
- 4.13 日ソ中立条約調印
- 4.25 国民精神総動員本部結成、ぜいたく禁止を推進
- 6.22 独ソ戦開始
- 7.23 日本軍、南部仏印に進駐
- 8. 8 文部省、中等学校以上の学校報国団再編成を指令
- 10.18 東条英機首相就任
- 12. 8 日本軍、ハワイを急襲、日米開戦

昭和17年（1942）

- 1. 1 食糧の通帳配給実施
- 1. 2 日本軍、マニラ占領
- 2.15 日本軍、シンガポール占領
- 6. 5 ミッドウェー海戦
- 10.26 ガダルカナル島攻防めぐり、南太平洋海戦

昭和18年（1943）

- 1.13 ジャズのレコード廃止
- 2. 7 日本軍、ガダルカナル島で敗退
- 5.29 アッツ島日本軍全滅
- 6.25 学徒動員体制確立要綱を決定
- 7.30 女子学徒動員決定
- 12. 1 第1回学徒兵入隊
- 12.14 徴兵年令1年引下げ

昭和19年（1944）

- 1.26 疎開命令を発令
- 6.30 大都市の学童疎開決定
- 7. 7 サイパン島の日本軍全滅
- 8.10 グアム島の日本軍全滅
- 8.25 パリのドイツ軍降伏
- 11.24 サイパン島基地よりB29、東京に来襲

昭和20年（1945）

- 2. 4 ヤルタ会談
- 3. 6 国民総動員令公布
- 3. 9 B29、東京大空襲
- 5. 7 ドイツ降伏
- 5.25 B29、東京を空襲
- 6.18 沖縄地上戦、ひめゆり部隊など女子生徒集団自決
- 8. 6 広島に原爆投下される
- 8. 9 長崎に原爆投下される
- 8.15 日本、無条件降伏

堀之内学園史

昭和14年（1939）

1. 16 第1回耐寒訓練をはじめる（15日間）
2. 11 全生徒、宮城に向けて紀元節奉祝大行進を行う
4. 本校生徒、財団法人慈厚会より奨学金を支給される
4. 堀日正理事長、校旗を交付する
7. 6 本校生徒、新宿伊勢丹にて開かれた女学生自由画展覧会に21名入選する
10. 5 立正体育大会を挙行する
11. 本部排球部、関東女学校連盟主催の排球大会に優勝する

昭和15年（1940）

1. 25 第2次生徒定員増の認可を受ける
2. 11 本校生徒、宮城に向けて紀元2600年奉祝大行進を行う
3. 本科5年、立正国際倶楽部員平沢富貴枝宛のフランス少女の手紙、読売新聞に報道される
3. 13 記念講堂、第2期工事の竣工成る
4. 1 立正高女の進学、就職、家庭の3部制、今年度より廃止する
4. 排球部、東京府主催の排球大会に優勝する
6. 卓球部吉田貞子、関東女子中学校卓球大会にて準決勝に進出する
7. 千葉県上総湊に校地約300坪を購入、水泳部合宿用の寮に使う
8. 書道部、上野美術館にて開かれた大日本書道展にて東京府知事賞など44名が入選する
10. 25 紫友会、「創立十五周年記念誌」を刊行する

昭和16年（1941）

3. 堀之内夜間中学、創立委員を選び、設立趣意書を作成、高島平三郎の校長推載を決める
4. 堀之内夜間中学、入学者60名にて授業を開始する
5. 日光方面の修学旅行を行う

昭和17年（1942）

6. 20 堀之内夜間中学、第1期校舎の一部を竣工する
8. 17 堀之内夜間中学、第1期工事成り落慶式をあげる
11. 9 立正高女報国団、武運長久祈禱会を堀之内妙法寺にて修す

昭和19年（1944）

2. 17 4年生20名、日本無線株式会社に入隊する

日本と世界の動き

10. 24 国際連合結成

昭和21年（1946）

1. 1 天皇神格化を否定
2. 29 アメリカ映画「キューリー夫人」「春の序曲」封切
4. 10 新選挙法による初の総選挙。女性選挙権行使、女性議員39名当選
5. 1 メーデー復活
10. 8 教育勅語拝読廃止
11. 3 日本国憲法公布

昭和22年（1947）

3. 9 戦後初の国際婦人デー
3. 31 教育基本法公布、6、3、3制実施
5. 3 日本国憲法施行
6. 3 学校における宮城遥拝廃止
8. 9 古橋広之進、水泳400mで世界新
11. 25 第1回共同募金開始
12. 12 児童福祉法公布

昭和23年（1948）

1. 二重橋開放の一般参賀、2日間で13万人
1. 30 ガンジー暗殺される
6. 13 太宰治入水自殺
6. 23 関東の大学、高専24校、教育復興デモ
7. 15 教育委員会法公布
7. 20 国民の祝日に関する法律公布
9. 15 主婦連合会結成

昭和24年（1949）

4. 20 第1回世界平和擁護大会開催
5. 24 満年令採用決める
10. 1 中華人民共和国設立
10. 20 きけわだつみの声出版
11. 3 湯川秀樹、ノーベル物理学賞を受賞
11. 27 新聞の夕刊復活
12. 1 お年玉つき葉書初発行

昭和25年（1950）

6. 25 朝鮮戦争おこる
7. 11 日本労働組合総連合結成
8. 14 学校給食の完全実施を発表
9. 10 映画「羅生門」ベニス映画祭でグランプリ受賞

昭和26年（1951）

1. 3 NHK、紅白歌合戦を放送
5. 5 児童憲章制定
6. 21 日本、ユネスコに加盟

堀之内学園史

(20,2,16まで)。海軍航空機搭載の無線機を制作する

- 4. 堀之内夜間中学、堀之内中学と改称、藤井教諭、校長となる

- 6. 高女5年生全員約300名、日本無線中島飛行機に報国隊として入隊。

4年生全員、3年生の一部は昭和飛行機に入隊する

八洲光学の“学校工場”開設される

昭和20年（1945）

- 4. 1 堀之内妙法寺31世堀日正、第2代校長に就任する（昭和22,3,31まで在任）

- 4. 日本無線工場疎開に伴い、5年生6名長野県上田工場に転勤する（終戦後に自主解散）

- 5.25 空襲により、全校舎焼失する。講堂のみ焼け残る。

講堂を守るため、教員、生徒、ホースで消火作業する。校庭の一面に焼夷弾突き刺さる

昭和21年（1946）

- 2.15 初代校長高島平三郎没（82）

昭和22年（1947）

- 4. 1 学制改革により、東京立正中学校認可される馬田即貞、校長となる（昭和40,3,1まで在任）堀之内中学校認可される

- 4. 8 馬田即貞校長、釈尊降誕会を期し、講堂での瞑想をはじめ

昭和23年（1948）

- 3.10 学制改革により東京立正高等学校認可される。馬田即貞、第3代校長に就任する。（40,3,1まで在任）

- 3.31 新制立正中学校第1回卒業式（253名）をあげる。

立正高等女学校、学制改革により廃止となる。堀之内高等学校認可される

- 11. 松楓館竣工成る（昭和39年まで存続）

- 10.19 日ソ国交回復共同宣言

昭和24年（1949）

- 3.26 新制東京立正高校、第1回卒業式（24名）をあげる。

旧制立正高女、第19回卒業式（195名）をあげる。（最後の卒業式となる）

- 4. 1 法人合併により、堀之内学園中学校は東京立正中学校男子部、堀之内高校は東京立正高校電子部と成る。

日本と世界の動き

- 9. 8 サンフランシスコ平和条約、日米安全保障条約調印

昭和27年（1952）

- 4. 9 「木星号」三原山に墜落

- 4.10 NHK「君の名は」放送開始

- 5. 1 メーデー事件おこる

- 5.19 白井義男、ボクシング世界フライ級で日本人初のチャンピオンとなる

- 7. 1 羽田空港、アメリカより返還される

- 7.19 ヘルシンキオリンピックに戦後日本初参加

昭和28年（1953）

- 2. 1 NHK、テレビ本放送を開始

- 3. 5 スターリン死去

- 4. 5 日本婦人団体連合会結成

- 7.27 朝鮮休戦協定調印

- 11.25 クリスマン、ディオール ファッションショー開かれる

昭和29年（1954）

- 2. 1 高教組、教育2法反対声明

- 3. 1 第5福竜丸、アメリカのビキニ水爆実験に被災

- 4.28 文部省、学習指導要領の大綱、中学校に道徳倫理の単元設置の計画資料を配布

- 5. 1 放射雨の恐怖広がる

- 5. 9 原水爆禁止署名運動杉並協議会結成

- 6. 3 学校給食法公布

- 9.26 洞爺丸、北海道函館港外で暴風雨のための転覆

昭和30年（1955）

- 5. 8 砂川基地反対運動始まる

- 6. 7 第1回母親大会開く

- 8. 6 第1回原水爆禁止世界大会開く

- 11.15 保守合同

昭和31年（1956）

- 5.24 売春防止法公布（32、4、1施行）

- 9.28 文部省、初の全国学力調査実施

- 10. 1 新教育委員会法施行

- 10.19 日ソ国交回復共同宣言

- 12.23 石橋湛山内閣成立

昭和32年（1957）

- 2.25 岸内閣成立

- 7. 3 文相、小中学校に道義に関する独立教科設置を表明

- 10.14 ソ連、人工衛星スプートニク打ち上げ成功

堀之内学園史

校長馬田即貞、主事小原正泰就任する

昭和25年（1950）

- 3. 第1期校舎竣工する
- 10. 2 国連軍に生徒手づくりの慰問人形と慰問文を送り、アメリカ赤十字奉仕団H・Lシエンウェイ理事より感謝状をうける
- 11. 1 『創立25周年記念誌』を刊行する
- 11. 2 創立25周年記念祝賀式を挙げる

昭和26年（1951）

- 3. 6 学校法人・堀之内学園、認可を受ける
- 7. 20 葉山「むらさき寮」開寮する

昭和28年（1953）

- 4. 1 教諭・石川教統、東京立正中高校男子部の主事となる

昭和29年（1954）

- 8. 1 第1回教養講座を開く

昭和30年（1955）

- 3. 31 東京立正中学・高校男子部廃校する

昭和31年（1956）

- 3. 25 本校生徒、不慮事故死の幼児慰霊祭に参列奉仕する

昭和32年（1957）

- 6. 25 映画教育、講堂にてはじまる
- 11. 24 第2代理事長、堀日正寂（85）
- 12. 24 妙法寺32世・大塚教律、第3代理事長となる
- 4. （昭和40.7.28まで在任）

昭和33年（1958）

- 4. 新校舎完成までの間、高校3年生東京立正高校男子部校舎を分校として使用する
- 体育祭、第2グラウンドで挙げる

昭和34年（1959）

鉄筋3階建本館完成する

昭和35年（1960）

- 9. 1 授業料、事務所窓口に納入となる
- 10. 1 馬田即貞校長、東京都教育功労賞を受賞

昭和37年（1962）

総合体育館、プール、東校舎完成する

昭和39年（1964）

- 3. 1 本校体育館、東京オリンピックのフェンシング練習会場となる
- 第1期ベビーブームにより、高校在校生約2600名となる。
- 1年16、2年14、3年14級、1級60名余、中学生を含む全校生徒3100名水泳部、全国高

日本と世界の動き

- 11. 20 日教組、勤務評定講義集会
- 12. 28 NHK・NTV、カラーテレビ実験放送開始

昭和33年（1958）

- 3. 18 文部省、小中学校道徳教育の実施要綱通達
- 8. 2 小松川女高生殺し事件
- 9. 16 総評、日教組、勤評反対全国統一行動
- 11. 27 皇太子明仁、正田美智子の婚約発表
- 12. 1 1万円札発行
- 12. 23 東京タワー完成式

昭和34年（1959）

- 1. 2 カストロ、キューバ革命
- 1. 10 NHK教育テレビ開局
- 3. 20 チベット暴動
- 4. 10 皇太子、正田美智子結婚式、パレード
- 4. 15 安保改定阻止統一行動
- 5. 1 防衛2法案強行採決
- 8. 29 三池炭鉱争議
- 9. 26 伊勢湾台風
- 9. 30 中ソ対立激化

昭和35年（1960）

- 5. 26 安保阻止国民会議、第16次統一行動、17万人国会包囲
- 6. 15 安保阻止統一行動に全国で500万人参加。全学連主流派、国会突入
- 6. 18 新安保条約自然設立
- 10. 12 浅沼稻次郎社会党委員長刺殺される
- 11. 8 ケネディ、アメリカ大統領に選ばれる
- 12. 27 池田内閣、所得倍増計画を決定

昭和36年（1961）

- 6. 3 政暴法強行採決
- 9. 1 室戸台風襲う
- 10. 26 文部省、中学2、3年生に全国一斉学力テスト実施

昭和37年（1962）

- 2. 20 アメリカ、初の人工衛星フレッドシップ号打上げ
- 3. 31 義務教育諸学校教科書無償法公布
- 4. 1 5年生高等専門学校発足
- 5. 3 三河島事故
- 10. 22 キューバ危機

昭和38年（1963）

- 6. 14 小さな親切運動本部設立
- 6. 16 ソ連衛星船ウォーストーク6号打上げ、初の女性宇宙飛行士搭乘

校総体に出場する

昭和40年（1965）

- 3. 1 第3代校長馬田即貞寂（78）
- 3.14 馬田即貞校長学園葬を修す
- 4. 1 岩本経丸、第4代校長に就任する（～昭和46.10.17まで在任）
- 7.28 妙法寺33世、小林教明、第4代理事長となる（昭和51.3.17まで在任）
- 9.25 東京立正女子短大の設立認可を申請する
水泳部、全国高校総体で5位になる

昭和41年（1966）

- 1.25 東京立正女子短大、英米語学科（秘書・教職・教養3コース）の設立認可をうける。
初代学長藤井教詮、学監岩本経丸就任する
- 4.15 短大、第1回入学式（92名）を挙げる
- 10.25 『東京立正創立四十周年記念誌』を刊行する
- 10.29 東京立正中学校・高校創立40周年、短大開学記念の祝賀会を挙げる
水泳部、全国高校総体・全国中学大会に出場する

昭和42年（1967）

馬田即貞奨学会を設立する
水泳部、全国高校総体、全国中学大会に出場する

昭和43年（1968）

私学10支部、9支部に変更される
水泳部、全国高校総体に出場する
本校住所、杉並区堀ノ内1-338より堀ノ内2-41-15に変わる

昭和44年（1969）

- 7.12 第3代理事長、大塚教偉寂（75）
水泳部、全国高校総体に出場する

昭和45年（1970）

- 7.18 本校第2グラウンドで光化学スモッグ発生、被害を受ける
水泳部、全国高校総体に出場する
- 11.18 岩本経丸校長叙勲（勲4等瑞宝章）祝賀会を開く

昭和46年（1971）

- 4. 1 短大、英米語学科内に観光コースを新設する
- 9.30 第2グラウンド約2分の1売却する
- 10.17 岩本経丸校長退任する
- 10.18 石川教統、第5代中高校長に就任する（～昭和62.3.31まで在任）

- 8.14 部分核実験停止条約調印
- 11.22 ケネディ米大統領暗殺事件おこる

昭和39年（1964）

- 6.16 新潟地震
- 7. 1 母子福祉法施行
- 8. 2 アメリカ、トンキン湾爆撃
- 9. 5 名神高速道路開通
- 10. 1 東海道新幹線開業
- 10.10 東京オリンピック開催（～10.24）

昭和40年（1965）

- 1.11 「期待される人間像」中間発表
- 6.12 教科書検定違憲訴訟
- 6.22 日韓基本条約調印
- 11.10 中国文化大革命おこる

昭和41年（1966）

- 2. 4 全日空機、羽田沖に墜落（連続飛行機事故つづく）
- 6.25 敬老の日、体育の日、建国記念日新設
- 10.31 中教審、「後期中等教育の拡充整備について」答申

昭和42年（1967）

- 6.17 中国初の水爆実験
- 8. 8 ASEAN結成宣言
- 9. 1 四日市公害訴訟おこす
- 12.31 テレビ受信契約約2000万台突破

昭和43年（1968）

- 4. 4 キング牧師暗殺
- 5.10 パリの学生、パリ大文学部閉鎖に抗議デモ
- 6.26 小笠原諸島日本に復帰
- 9.26 政府、水俣病を公害病と認定
- 12.10 3億円強盗事件おこる
- 12.29 東大紛争により入試中止

昭和44年（1969）

- 1.10 東大安田講堂事件
- 4.28 沖縄デー
- 5.26 東名高速開通
- 7.21 ミアポロ11号、月面到着
- 8. 3 大学運営臨時措置法可決
- 10.21 国際反戦デー

昭和45年（1970）

- 3.14 日本万国博、大阪にて開会
- 3.31 よど号事件
- 5.31 ペルー大地震
- 8. 2 銀座で歩行者天国スタート

堀之内学園史

10.18 岩本経丸、第2代短大学長に就任する

昭和47年（1972）

5.12 妙法寺、旛檀寮落慶式をあげる

11. 2 中高生徒、第1回全校遠足を行う

昭和48年（1973）

4. 8 高校宗教倫理集『太陽と蓮華のように』刊行する

10.19 庄司寿完、短大学長代行となる

昭和49年（1974）

2. 1 庄司寿完、第3代短大学長に就任する

12.24 教諭、芳賀和美手づくりの「学校だより」創刊する

昭和50年（1975）

5.15 短大、球技大会（バケット、バレーボール、卓球）を開く

10. 1 中高、任意による傷害保険に加入する

昭和51年（1976）

中中学園祭にて、聖劇「日蓮」復活上映する

3.17 第4代理事長、小林教明寂（74）

3.25 妙法寺34世、茂田井教亨、第5代理事長となる（昭和59.5.25まで在任）

6.17 短大、新入生親睦旅行（朝霧高原）を挙行する（～18）

6.27 中高1学期の体育祭を挙行する

11. 8 中高、茂田井教亨理事長、第1回の宗教講話を行う

11.28 短大、第1回海外研修（ヨーロッパ・ロンドン・パリ）を実施する

昭和52年（1977）

9.22 高2、この年より山陰、九州方面修学旅行を実施する水泳部、全国高校総体に出場、これ以降、連続して出場する

昭和53年（1978）

6. 6 短大、球技大会を体育祭に変更して挙行する

昭和55年（1980）

5.25 中高、体育祭を第1グラウンドで挙行する

10.31 中高父母の会、日蓮聖人700遠忌記念バザーを学園祭で実施、特別教室音楽室にグラウンドピアノを寄贈する

昭和57年（1982）

4. 1 新生活学寮、第1期生入寮

日蓮聖人700遠忌記念、特別教室棟完成する

10.20 石川教統校長、東京都教育功労賞受賞祝賀会を開く

日本と世界の動き

11.25 三島由紀夫割腹事件

昭和46年（1971）

2.22 成田空港建設工事第1回強制代執行

4.17 名古屋で世界卓球大会

6.17 ワシントンで沖縄返還協定調印式

7. 1 環境庁発足

昭和47年（1972）

2. 3 札幌冬季オリンピック

2.17 連合赤軍事件発覚

2.21 ニクソン訪中

9.29 日中国交共同声明

10.28 パンダ2頭上野動物園に着く

昭和48年（1973）

1.27 ベトナム和平協定調印

5.17 ウォーターゲート事件公聴会はじまる

10. 6 第4次中東戦争おこる

昭和49年（1974）

4.11 春闘最大のゼネスト

4.20 日中航空協定調印

8.30 三菱重工ビル爆破事件

10. 7 サリドマイド訴訟和解成立

昭和50年（1975）

3.10 山陽新幹線、岡山・博多間開業

4.30 南ベトナムのサイゴン政権降伏

5. 7 エリザベス女王来日

5.16 日本女子登山隊、女性初のエベレスト登頂に成功

6.18 初の国際婦人年世界会議、メキシコシティで開催

7.18 米ソ宇宙船ドッキングに成功

7.20 沖縄海洋博開幕

昭和51年（1976）

2. 4 米上院公聴会でロッキード事件疑惑

7.20 米バイキング1号、火星軟着陸に成功

7.27 田中角栄首相、ロッキード事件で逮捕

9. 9 毛沢東死去

10.12 中国で5人組逮捕

11.16 天皇在位50年記念式典

昭和52年（1977）

5. 2 海洋2法成立、200カイリ宣言

7. 1 気象衛星ひまわり打上げ

9. 3 王貞治、ホームラン世界新記録

9.28 日本赤軍、日航機ハイジャック

昭和53年（1978）

昭和58年（1983）

- 5. 10 初代学長・藤井教詮寂（92）
- 6. 18 藤井教詮先生学園葬を修す

昭和59年（1984）

- 6. 19 妙法寺35世駒野教格、第6代理事長となる（～平成16.3.31まで在任）

昭和61年（1986）

- 4. 1 中高新入生の制服モデルチェンジする
- 4. 30 八王子校地を取得する（6年6月売却）
- 5. 31 石川教統校長叙勲（勲4等瑞宝章）祝賀会を開く
- 11. 11 短大、作詞谷川俊太郎、作曲服部勝久両氏を招き校歌完成発表会を開く

昭和62年（1987）

- 4. 1 舩越公道、第6代校長に就任する（～平成10.3.31まで在任）
- 4. 1 石川教統、第4代短大学長に就任する
- 6. 4 第2代学長、第4代校長・岩本経丸寂
- 10. 24 短大、第1回英語スピーチコンテストをはじめる

昭和63年（1988）

- 1. 30 中高同窓会、講師佐々木芳子講師（電通営業企画局参事・東京造形大学講師）により、「らしさとは何か」について研修会を開く
- 3. 25 短大、教職コースを教職課程に変更する
- 10. 25 短大、第2回英語スピーチコンテストを開く

昭和64年＝平成元年（1989）

- 1. 25 中高父母の会、山本東次郎協力のもと杉並能楽堂で狂言を鑑賞する
- 4. 1 藤田教忠、第5代短大学長に就任する
- 7. 2 第1回中学3年生ホームステイ（イギリス、ケンブリッジ）を開始する
- 10. 14 短大、第3回英語スピーチコンテストを開く

平成2年（1990）

- 1. 24 中高父母の会、古橋広之進（日本水泳連盟会長）講師より「最近の青少年について」研修会を開く
- 2. 16 中高父母の会、聖歌隊着用ガウンを寄贈する
- 3. 24 ソフトボール部全国選抜大会出場
- 4. 1 藤井教正、学長代行となる
- 10. 21 短大、第4回英語スピーチコンテストを開く

平成3年（1991）

- 4. 1 藤井教正、第6代短大学長に就任する
- 10. 9 短大学生、第17回東短協スピーチコンテス

- 5. 20 新東京国際空港開港
- 8. 12 日中平和友好条約調印
- 10. 31 円高、戦後最高（1ドル＝175円50銭）
- 12. 14 ダグラス社の航空機不正支払いアメリカで問題化

昭和54年（1979）

- 1. 1 米中国交正常化
- 3. 14 グラマン航空機疑惑で日商岩井幹部逮捕
- 5. 4 サッチャー英首相となる
- 6. 6 元号法成立
- 6. 28 東京サミット
- 10. 26 朴韓国大統領暗殺される

昭和55年（1980）

- 3. 13 国会、ソ連のアフガニスタン撤退、北方領土返還促進を決議
- 5. 24 JOC、モスクワオリンピック不参加決定
- 6. 12 大平首相、総選挙中に死去
- 9. 9 イラン・イラク戦争はじまる
- 11. 29 国会開設90周年記念式典

昭和56年（1981）

- 1. 22 警察庁、校内暴力対策会議
- 2. 7 北方領土の日開く
- 4. 22 マザーテレサ来日
- 7. 9 文部省、高校教科書、「現代社会」検定で自衛隊合法明記を要求
- 11. 27 行政改革関連特例法成立

昭和57年（1982）

- 1. 26 ロッキード事件全日空ルート判決
- 2. 9 日航機、羽田空港着陸寸前で墜落
- 6. 7 国連軍縮特別集会
- 8. 10 老人保健法成立
- 11. 15 上越新幹線、大宮・新潟間開業

昭和58年（1983）

- 1. 18 中曽根訪米、レーガンと会談。日米運命共同体を声明
- 1. 26 ロッキード事件丸紅ルート判決で田中元首相有罪
- 5. 26 日本海中部地震
- 6. 13 戸塚ヨットスクール校長、スパルタ教育で逮捕
- 7. 15 死刑囚再審「免田事件」で無罪判決
- 10. 14 東北大で初の体外受精児誕生

昭和59年（1984）

- 1. 26 中曽根首相、戦後政治の総決算を表明

堀之内学園史

- トに参加する
- 10.19 短大、第5回英語スピーチコンテストを開く
11. 1 短大新図書館を開館する
- 平成4年（1992）**
2. 6 中高正面玄関に父母の会寄贈のお雛様を飾る
- 10.31 短大、第6回英語スピーチコンテストを開く
11. 6 短大学生、東短協スピーチコンテストに参加する
- 平成5年（1993）**
4. 1 短大、情報処理科目を開講する
6. 1 6年度高校受験推薦制度はじまる
長野県、湯ノ丸高原に校外林間学舎「湯の丸高原荘」完成する
8. 1 ソフトボール部全国高校総体出場ベスト8
- 8.31 荻窪校地を取得する
10. 1 船越公道校長、東京都教育功労賞を受賞する
- 11.17 本校講堂にて芸術鑑賞会を開く、パリ「木の十字架少年団」公演する
水泳部、全国高校総体で3位となる
- 12.16 長野県、湯の丸高原に校外林間学舎「湯の丸高原荘」竣工式をあける
- 平成6年（1994）**
4. 1 短大、新カリキュラムを実施、新タイプ室3階移動、LL教室5階に改装移動し設置する
高校、特進コース、一般コースを設ける
本館普通教室にエアコンを設置する
- 6.11 短大、櫻井賢樹（国立国際医療センター室長）、根岸昌功（都立駒込病院感染症科医長）両講師によりエイズについて公開講演会を開く
9. 6 中1、第1回身延山参拝・湯の丸林間教室を開く
水泳部、全国高校総体で準優勝する
10. 4 第2グラウンド隣接地を荻窪グラウンドと交換取得する
11. 5 短大学生、第20回東短協スピーチコンテストに参加する
- 12.15 短大、第8回英語スピーチコンテストを開く
- 12.24 高1必修の、湯の丸高原荘におけるスキー教室をはじめる
- 平成7年（1995）**
8. 5 バドミントン部全国高校総体出場
- 3.18 高校生の希望者によるニュージーランドホームステイ研修を開始する

日本と世界の動き

- 2.12 植村直巳、マッキンリー登頂後に行方不明
- 3.16 カネミ由症事件、国の責任と判決
- 3.18 江崎グリコ事件
8. 8 臨時教育審議会設置法公布
11. 1 日銀、新札発行
- 昭和60年（1985）**
- 2.13 新風俗風営業法施行
4. 1 NTT民営で開業
6. 1 男女雇用機会均等法公布
- 8.12 日航機、群馬県御巣鷹山に墜落、死者520人
- 8.15 中曽根首相以下閣僚、靖国神社に公式参拝
9. 5 文部省、入学式・卒業式での「日の丸」「君が代」徹底を教育委員会に通知
- 昭和61年（1986）**
2. 1 中野区の中学校、いじめ苦で自殺
- 2.26 フィリピン、アキノ大統領就任
- 4.26 チェルノブイリ原子力発電所大事故
- 4.29 天皇在位50周年式典
5. 4 東京サミット
- 10.28 国鉄民営化法案可決
- 昭和62年（1987）**
4. 1 国鉄分割民営化JR6社発足
6. 9 リゾート法公布
- 10.26 沖縄国体「日の丸」「君が代」反対の声あがる
- 11.13 文部省、高校社会科を「地歴」「公民」に分割決定
- 昭和63年（1988）**
- 3.13 青函トンネル開業
- 3.17 東京ドーム落成
4. 1 マル優廃止
- 4.10 瀬戸大橋開通
- 4.14 アフガニスタン、ソ連と平和合意
- 6.18 リクルート事件おこる
- 6.20 牛肉、オレンジ自由化、日米交渉妥結
- 9.17 ソウル五輪
- 昭和64年＝平成元年（1989）**
1. 7 昭和天皇崩御、皇太子即位、平成に改元
- 2.15 ソ連軍、アフガニスタンより撤退
- 2.24 大喪の礼
4. 1 消費税3%実施
6. 4 天安門事件
11. 9 ベルリンの壁崩壊
- 11.13 初の生体肝移植手術

堀之内学園史

- 8.25 高2特進コースの湯の丸高原荘での宿泊夏期講習を行う（～31）
- 9. 1 短大、180名収容の大教室を3階に設ける
- 9. 6 高2修学旅行、この年より九州2班に分れて実施する
- 11.17 講堂にて、芸術鑑賞会、藤原歌劇団公園する
- 11.18 短大学生、第21回東短協スピーチコンテストに参加する
- 12.15 短大、第9回英語スピーチコンテストを開く
水泳部、全国高校総体に総合第5位となる

平成8年（1996）

- 2.18 水泳部 鹿島 瞳が短水路日本新記録を樹立
- 4.28 創立70周年記念式典
- 8. アトランタオリンピック 鹿島 瞳が水泳
100m、200mバタフライ出場
水泳部 全国大会準優勝
- 9. 水泳部、全国高校総体に出場
- 10. 2 劇団「人間座」による山月記を芸術鑑賞会として実施する
- 11. 釈迦立像を講堂に迎え仏像開眼供養を催す

平成9年（1997）

- 4. 短水路世界選手権（スウェーデン） 鹿島 瞳 200mバタフライ第2位、
- 5. 東アジア競技大会（韓国） 田島寧子 200m400m個人メドレー第1位、磯田順子100m平泳ぎ第2位
- 6. 高校ソフトボール部 東京都代表として大会史上初の関東大会初優勝
- 8. 高校ソフトボール部全国総合体育大会に出場しベスト8（第5位）入賞
- 10. 1 立正大学との教育提携を締結
- 10.21 東京吹奏楽団による演奏を芸術鑑賞会として鑑賞する

平成10年（1998）

- 4. 1 第七代校長に廣川富男が就任（～平成15.3.31まで在任）
- 7. 水泳部 世界選手権大会（オーストラリア）で田島寧子が400m個人メドレーで銅メダル獲得
- 8.12 ドリルダンス部が日本大会に出場
- 12. 水泳部 田島寧子・磯田順子がアジア大会に出場

平成11年（1999）

- 4. 短大、教養コースを英米文化コースに改称

日本と世界の動き

- 11.15 坂本弁護士一家失踪事件

平成2年（1990）

- 2.11 南アフリカ、マンデラ28年ぶりに釈放
- 4. 1 大阪で花と緑の博覧会
- 6. 9 '89年平均出生率1.59人、過去最低
- 6.12 ロシア、主権宣言
- 7. 6 神戸の県立高校で校門圧死事件
- 8. 2 イラク・クウェート侵攻
- 9. 2 子どもの権利条約発効
- 11.12 天皇即位大礼

平成3年（1991）

- 1.24 政府、湾岸戦争で1兆2000億円援助
- 5. 8 消費税法改正、育児休業法、暴力団対策法成立
- 5. 1 雲仙普賢岳噴火で土石流発生
- 7.11 佐川急便事件
- 11.28 日蓮正宗大石寺、創価学会を破門
- 12. 3 PKO協力法案可決
- 12.19 公立学校月1回の土曜休日決定

平成4年（1992）

- 1. 7 WHO、エイズレポート発表
- 3. 1 暴力団対策法施行
- 3. 3 旧ユーゴスラビア内戦深刻化
- 5. 1 国家公務員週休2日制実施
- 6. 9 PKO法案、参院で可決
- 10.12 埼玉県教委、高校入試使用の業者テストによる偏差値ストップ

平成5年（1993）

- 2.22 文部省、業者テスト排除を通知
- 6. 9 皇太子結婚
- 6.26 雲仙普賢岳火砕流発生
- 7.12 北海道南西沖大地震
- 8.17 円高1ドル100円40銭、戦後最高値
- 10. 3 ロシア市街戦

平成6年（1994）

- 1.17 ロスアンゼルス大地震
- 1.29 政治改革関連法案成立
- 6.23 村山連立内閣発足
- 7. 8 初の女性宇宙飛行士向井千秋宇宙へ
- 9. 4 関西国際空港開港
- 11. 5 文部省、今春大卒就職率70%、過去最低と発表

平成7年（1995）

- 1.17 阪神大震災、被害甚大

堀之内学園史

- 8. 1 高校ソフトボール部全国総合体育大会に出場
- 10.24 女流和太鼓「婢弥鼓」による演奏を芸術鑑賞会として実施する

平成12年（2000）

- 4. 短大、秘書コースをビジネス・情報コースに改称
- 5.11 第5代理事長、茂田井教亨寂（95）
- 5.30 第4代学長、第5代校長・石川教統寂
- 9. パンパンフィック選手権大会（シドニー）女子400メートル個人メドレーで田島寧子が銀メダルを獲得
岡田日歸記念講堂の改修工事
- 10.23 劇団笑う猫 制作のアフリカの音楽「魂の鼓動」を芸術鑑賞会として実施する
- 12. 中学ソフトボール部 オーストラリア遠征
- 8. 高校ソフトボール部、高校水泳部 全国総合体育大会に出場

平成13年（2001）

- 4. 東京立正女子短期大学 英語コミュニケーション学科に改称
第二体育館建設にともなう地鎮祭が行う
- 8.21 中学水泳部 全国大会（鳥取県）で初の総合優勝
- 10.18 中野日本閣にて中学水泳部全国大会優勝報告会を行う

平成14年（2002）

- 4. 東京立正女子短期大学 現代コミュニケーション学科に改組する
ビジネス情報コース・英語コミュニケーションコース・観光メディアコース・心理カウンセリングコース開設
短期大学校舎耐震工事、玄関前スロープを解体し2階建ての「学生ホール」を新たに建設
- 4. 1 中高男女共学スタート
本館改築、第二体育館新築完成し竣工祝賀の会を催す
- 8.20 中学ソフトボール部全国大会（滋賀県）で第三位となる
- 8.21 中学水泳部 全国大会（大阪府）総合第三位となる
- 11. 8 仏教主義学校連盟弁論大会にて及川恵美が第二位となる

平成15年（2003）

- 2. 8 第3代学長・庄司寿完寂

日本と世界の動き

- 3.20 地下鉄サリン事件。オウム真理教の凶悪犯罪次々に摘発
- 5.15 中国核実験再開
- 5.16 オウム真理教麻原彰晃、殺人罪で逮捕
- 6. 5 介護休業法成立
- 9. 4 沖縄で米兵の少女暴行事件
- 9. 5 フランス核実験強行
- 11. 4 イスラエル、ラビン首相暗殺
- 11.10 宗教法人法改正案、衆院で可決

平成8年（1996）

平成9年（1997）

平成10年（1998）

平成11年（1999）

- 1. 1 欧州経済通貨同盟が発足単一通貨ユーロ誕生
- 5. 1 瀬戸内しまなみ海道開通
- 7.18 世界人口60億人突破
- 10. 1 茨城県東海村放射能漏れ事故発生
- 10.29 新紙幣2000円札発表

平成12年（2000）

- 1. 1 2000年問題、各地で盛大に年越しカウントダウン
- 2.15 スペースシャトル「エンデバー」毛利衛さん2度目の搭乗
- 3.31 北海道有珠山22年ぶりに火山活動で噴火
- 8.29 伊豆諸島三宅島の噴火で児童らが島外避難
- 9.15 オーストラリアのシドニーで第27回オリンピック開幕
- 10.11 筑波大学名誉教授白川英樹さんノーベル化学賞受賞
- 11. 2 ISS計画で宇宙船ソユーズがステーション本体とドッキングに成功
- 11.19 大リーグ「ICHRO」誕生、シアトルマリナーズと契約
- 11.30 琉球王国グスクおよび関連遺産群が世界遺産として登録される

平成13年（2001）

- 3.13 ユニバーサルスタジオジャパンが開業
- 8.29 次期主力ロケットH2A1号機が打上に成功
- 9. 4 ディズニーシーがオープン
- 9.11 米中心部に同時多発テロが発生
- 9.30 ベルリンマラソンで高橋尚子選手が女子として2時間20分をきる快挙達成
- 12. 1 雅子さま女兒「敬宮愛子内親王」を出産

平成14年（2002）

堀之内学園史

4. 1 第八代校長に山口隆也が就任（～平成20.3.31まで在任）
- 5.25 高校テニス部 インターハイ（長崎県）に初出場しベスト8となる
- 7.28 高校ソフトボール部 インターハイ（長崎県）に出場
8. 8 中学バレーボール部 全国大会（神奈川県）に初出場
- 9.13 水泳部 人見志乃が国民体育大会において200m平泳ぎで優勝

平成16年（2004）

- 1.26 テニス部 瀬間友里加が全豪オープンジュニア大会（メルボルン）に出場しベスト16位となる
芸術鑑賞会 劇団四季ミュージカル「マンマ・ミーア」を鑑賞する
- 6.28 テニス部 瀬間友里加がウインブルドン・ジュニア大会に出場
- 7.19 チアリーダー部 日本大会へ出場
7. 森づくりフォーラム指導による森林ボランティア（奥多摩町）で下草刈りを実施

平成17年（2005）

4. 1 東京立正短期大学共学スタート
現代コミュニケーション学科に保育士養成課程を追加、専攻科 現代コミュニケーション専攻を設置
6. 芸術鑑賞会 劇団四季ミュージカル「キャッツ」を鑑賞する

平成18年（2006）

3. チアリーダー部 USAナショナルズ高校生ポンポン部門ファイナル第一位を獲得
4. 現代コミュニケーション学科に現代コミュニケーション専攻と幼児教育専攻の2選考を設置
ビジネス情報コースを観光コースに、観光メディアコースを観光コースに、心理カウンセリングコースを心理コースに改称
6. 芸術鑑賞会 オペラ「カプアレリア・ルスティカーナ」（高校）、劇団四季ミュージカル「ライオンキング」（中学）を鑑賞する
8. 高校水泳部 男女初のインターハイ出場
10. 国民体育大会（兵庫県）に高校ソフトボール部 原野愛美、高校水泳部 中村咲子、阪井菜穂子が代表選手として出場

日本と世界の動き

1. 1 ユーロ流通
- 2.17 宮崎駿監督「千と千鶴の神隠し」がベルリン国際映画祭で金熊賞に選出
- 9.17 日朝首脳が初会談
- 12.19 米大リーグニューヨークヤンキースが松井秀喜と契約合意

平成15年（2003）

2. 1 冬期アジア大会が青森県で史上最多29か国の参加で開催
- 4.14 日・米・英など六か国はヒトゲノム解析完了の共同宣言
- 5.21 平等院阿弥陀像50年ぶりにお色直しされる
- 7.24 世界水泳選手権で北島康介選手が200m平泳ぎで世界新記録
- 8.25 住基ネット本格運用開始

平成16年（2004）

7. 1 世界遺産に「紀伊山地の霊場と参詣道」がみとめられる
- 8.14 第28回夏季五輪アテネ大会が開幕
10. 4 シアトルマリナーズイチロー外野手がメジャー新記録262安打達成
- 12.26 インドスマトラ沖で大地震と津波が発生

平成17年（2005）

- 2.17 中部国際空港「セントレア」が愛知県常滑市に開港
- 2.27 世界最長の東北新幹線八甲田トンネルが貫通
- 4.25 兵庫県のJR福知山線で脱線事故
- 7.22 日本人の平均寿命が過去最高を更新
8. 9 野口聡一さんらが搭乗したスペースシャトル「ディスカバリー」が無事帰還
- 10.14 郵政民営化法案が成立
- 12.13 本田技研工業が人間型ロボット「ASIMO」を公開
- 12.16 政府は出生率1.29人の日本を少子化白書で「超少子化国」と定義

平成18年（2006）

- 2.20 平成大合併で全国市町村数が3200から1998となった
- 2.23 米アップルのネット楽曲販売が10億曲を達成
4. 7 日本人口が年間で初の自然減となったことが人口動態統計で判明
7. 3 サッカー日本代表中田英寿選手が現役を引退発表
- 8.24 太陽系における8つの惑星の新しい定義の決

堀之内学園史

11. 3 第6代理事長、駒野日法寂（71）

平成19年（2007）

6. 芸術鑑賞会 日本フィルハーモニー交響楽団「室内アンサンブル」を鑑賞する

11.13 仏教主義連盟弁論大会で有村壮登が第三位となる

9. サッカー部 年森勝哉が国民体育大会（秋田県）の東京都代表選手として出場
高校水泳部 小口綾乃が国民体育大会（秋田県）の少年少女Bの400m自由形で優勝

平成20年（2008）

4. 1 第九代校長に宮下 隆が就任（～平成25.3.31まで在任）
短大専攻科 現代コミュニケーション専攻を幼児教育専攻に改組

6. 芸術鑑賞会 劇団四季ミュージカル「ウィキッド」を鑑賞する

7.29 チアリーダー部 ミスダンスドリルチーム日本大会に出場し、ボンボンスモール部門編成で第三位入賞

8.17 高校水泳部 インターハイで団体総合第二位となる

11.28 仏教主義連盟弁論大会で北山優衣が第二位となる

平成21年（2009）

4. 坂輪宣敬、第7代短期大学長に就任

4.21 第6代学長・藤井教正寂

6. 芸術鑑賞会 帝国劇場ミュージカル「ミー&マイガール」を鑑賞する
スクールカウンセラー坪井美智子先生を講師に父母の会主催の研修会をおこなう

8. 高校バレーボール部 コーチングキャラバンで寺廻太氏の熱血指導を受ける

10.10 吹奏楽部 東日本学校吹奏楽大会（札幌市）に東京都代表として出場し銀賞となる

平成22年（2010）

4. 1 第九支部（杉並・中野 私立19校）の支部長校となる

6. 芸術鑑賞会 帝国劇場ミュージカル「キャンディード」を鑑賞する

平成23年（2011）

3.11 東北地方太平洋沖地震の余震により、部活動等で登校していた生徒が帰宅困難となる
体育館が生徒の緊急宿泊場所となる

日本と世界の動き

議案が可決

平成19年（2007）

1. 21 宮崎県知事選で元タレントのそのまんま東氏が無所属新人で当選

5. 20 石川遼選手が日本男子ゴルフツアー史上最年少で優勝

10. 1 郵政事業の民営化により「日本郵政」が誕生

平成20年（2008）

3. 11 日本初の有人施設・日本実験棟「きぼう」打上げ成功

3. 20 フィギュアスケート世界選手権（スウェーデン）で浅田真央選手が初優勝

7. 17 日米通算201勝を挙げた野茂英雄投手が現役引退を発表

8. 8 第29回夏季五輪北京大会が史上最多204か国参加で開幕

11. 28 裁判員候補者へ通知書送付、国民司法参加の新制度が本格化

12. 23 東京タワー開業半世紀で誕生日会

平成21年（2009）

1. 20 オバマ新大統領が第44代大統領に就任

2. 22 第81回米アカデミー賞 滝田洋二郎監督「おくりびと」が外国語映画賞加藤久仁生監督「つみきのいえ」が短編アニメーション賞に輝いた

2. 27 厚生労働省の調査結果で「非正規」失業、15万7000人となった

5. 19 新型インフルエンザ、世界で感染拡大

6. 25 米ポップ界のスーパースター、マイケルジャクソンが死去

7. 18 年齢制限を撤廃する改正臓器移植法が、参院本会議で可決

9. 14 米大リーグマリナーズのイチロー選手がメジャー史上初、9年連続200安打達成

平成22年（2010）

1. 1 「平城遷都」1300年祭開幕

3. 26 子ども手当法が成立

5. 1 上海国際博覧会が万博史上最多246か国の参加で開催

5. 28 米アップル社、iPadの日本国内販売を開始

6. 13 小惑星探査機「はやぶさ」地球帰還

10. 21 羽田空港、新国際線ターミナル開業

11. 13 アジア太平洋経済協力会議（APEC）が横浜市で開催

堀之内学園史

- 5.10 第5代学長・藤田教忠寂
- 6. 芸術鑑賞会 シルク・ドゥ・ソレイユ「クーザ」を鑑賞する

平成24年（2012）

- 4. 短大 幼児教育専攻（保育士養成課程）を3年制から2年制に変更
- 8. 高校水泳部 池邊有里奈が800m自由形でインターハイ出場（新潟県）

平成25年（2013）

- 4. 1 第十代校長に澤田幸雄が就任（～平成31.3.31まで在任）

平成26年（2014）

- 3.17 第7代理事長、嶋田日新寂（83）
- 3. 國學院大學との高大連携協定を締結
- 4. 短大、児童厚生養成課程を設置
- 4. 6 第8代校長山口隆也没
- 4. 1 チアリーダー部 ミスダンスドリルチームインターナショナルUSA大会（ロサンゼルス）に出場
高校1年アドバンストコースに「反転授業」を導入
eラーニング「すらら」の活用を開始
- 7. 「ザ・ヤングアメリカンズ」に中学1年から高校3年までの希望生徒が参加

平成27年（2015）

- 1.22 ユネスコスクールに加盟
- 4. 工藤教和、第8代短期大学長に就任
- 4. 1 中高一貫イノベーションコーススタート
授業・学校支援サービス「Classi」を導入
中学男子バレーボール部発足
- 7. 「ザ・ヤングアメリカンズ」に中学1年・高校1年が全員参加
中学1年生にインターネット Skypeを活用した個別英会話を導入

平成28年（2016）

- 4.28 学園創立90周年
東京立正短期大学 創立50周年
- 9. 6 水泳部 新倉みなみがオープンウォータースイミング日本代表となり5km競泳で第二位となる
- 11. 生徒主体の授業「アクティブラーニング」の研究を開始

平成29年（2017）

- 8.18 水泳部 インターハイ（宮崎県）に出場し尾

日本と世界の動き

- 12. 4 東北新幹線が全線開業（東京～新青森3時間20分）

平成23年（2011）

- 2. 21 東京都上野動物園に中国から貸与されたジャイアントパンダ2頭（リーリーとシンシン）が到着
- 3. 11 「東北地方太平洋沖地震」（M9.0）が三陸沖で発生し、巨大津波による甚大な被害
東京電力福島第一原発、大震災で事故続発、政府は初の原子力緊急事態宣言
- 3. 12 九州新幹線が全線開業（新青森～鹿児島中央間約2000キロ）
- 7. 17 なでしこジャパン、第6回女子ワールドカップドイツ大会で世界一となる
- 7. 24 テレビ番組のアナログ放送が終了し、デジタル放送へ移行

平成24年（2012）

- 5. 21 金環日食が広域で観測、平安時代以来932年ぶり
- 5. 22 世界一の電波塔、東京スカイツリーが開業
- 9. 11 政府は尖閣諸島の3島について地権者と売買契約を締結し、国有化した
- 10. 8 2012年ノーベル生理学賞・医学賞を山中伸弥（京都大教授）とジョンガードン博士（英国人科学者）の2人が共同受賞

平成25年（2013）

- 4. 16 プロ野球元監督の長嶋茂雄氏と大リーグで活躍した松井秀喜氏に国民栄誉賞授与を決定
- 6. 22 富士山・三保松原の世界文化遺産登録が決定
- 9. 14 JAXAが新型の固体燃料ロケット「イプシロン」の打上に成功
- 12. 5 南アフリカでアパルトヘイト政策と闘ったネルソン・マンデラ元大統領が死去した

平成26年（2014）

- 1. 22 楽天の田中将大投手が米大リーグヤンキースと契約に合意
- 2. 15 関東地方で記録的な大雪となった
- 3. 7 高さ300mの日本一の超高層ビル「あべのハルカス」が全面開業
- 4. 1 消費税率が5%から8%に上がった（1997年以來の増税）
- 6. 12 国際自然保護連合は、ニホンウナギを絶滅危惧種に指定
- 6. 21 「富岡製糸場と絹産業遺産群」（群馬県）の世

堀之内学園史

崎健太が400m自由形で第3位となる

- 8.22 中学バレーボール部 全国大会（宮崎県）に出場

平成30年（2018）

4. 1 東京立正保育園開園
石田幸子、初代 保育園園長に就任（～R5.3.31まで）
高校一年生入学時にタブレットを全員に提供
6. 芸術鑑賞会 帝国劇場ミュージカル「モーツァルト」を鑑賞する

平成31年＝令和元年（2019）

4. 1 北川前肇、第9代短期大学長に就任（～R5.3.31まで）
第十一代校長に梅沢辰也が就任（～現在に至る）
6. 芸術鑑賞会 新国立劇場演劇 生田斗真主演の「オレスティア」を鑑賞する

令和2年（2020）

4. 新型コロナウィル感染拡大防止により、新学期より自宅でのオンライン学習となる
5. 分散登校での学習を開始する
6. 通常登校を開始する
7. 短大 サマーキャンプを中止
- 8.24 例年より早く、授業時間確保のため2学期始業式を行う
9. 中学1年身延参拝旅行、中学2年関西修学旅行は新型コロナウィルス感染対策を行ったうえで実施
体育祭と紫友祭を規模縮小で実施
短大 文化祭をオンライン抽選会として実施

令和3年（2021）

2. 短大、本館屋上のシンボル（モニュメント）修繕工事
6. 芸術鑑賞会 日生劇場オペラ「ラ・ボエーム」を鑑賞する
- 7.14 高校男子バレーボール部 ジュニアビーチバレーボール日本大会に
（柳田凌志・加藤健祐・佐藤駿斗）が出場
10. 1 北川前肇、常務理事に就任（～現在に至る）

令和4年（2022）

- 1.25 令和3年度 高校2年生修学旅行が3月に延期となる
4. ニュージーランドターム留学制度（3ヶ月）を開始

日本と世界の動き

界遺産登録が決定

7. 1 政府は、集団自衛権の行使を容認するための憲法解釈変更を閣議決定
8. 19 映画「アナと雪の女王」が大ヒット

平成27年（2015）

平成28年（2016）

6. 19 選挙権年齢を20歳から18歳以上に引き下げる改正公職選挙法が施行

平成29年（2017）

4. 10 女子フィギュアスケート浅田真央選手が現役引退を表明
7. 7 国連本部で開かれた「核兵器禁止条約制定」に向けた交渉は賛成多数で採択された

平成30年（2018）

2. 9 第23回冬季オリンピック平昌大会が開幕フィギュアスケート男子で羽生結弦選手が連覇
6. 13 成人年齢を20歳から18歳に引き下げる改正民法が成立
9. 6 北海道胆振地方中東部を震源とする地震が発生
11. 13 大リーグエンゼルスの大谷翔平選手がリーグ新人王を獲得

平成31年＝令和元年（2019）

4. 1 平成に代わる新たな元号「令和」と決定
5. 1 新天皇陛下が第126代天皇に即位
6. 28 G20大阪サミット開催、日本が初の議長国となる
7. 18 京都伏見区のアニメーション制作会社「京都アニメーション」で放火事件が発生
10. 1 消費税率が8パーセントから10パーセントに引き上げられた
10. 22 天皇陛下の「即位礼正殿の儀」が皇室・宮殿で行われる
10. 31 沖縄県那覇市の「首里城」から出火、正殿などが焼失

令和2年（2020）

1. 16 厚生労働省が中国湖北省武漢市から帰国した30代男性から新型コロナウイルスの陽性反応がでたことを発表
2. 3 新型コロナウイルスが船内感染した「ダイヤモンドプリンセス号」の横浜港への入港を許可、検疫を開始
2. 27 安倍首相は新型コロナウイルス対策として、全国すべての小中高を3月2日から春休みまで

堀之内学園史

第1期生は高校1年生11名が参加

短大 全面的に対面授業を実施

6. 芸術鑑賞会 劇団四季ミュージカル「アラジン」を鑑賞する
7. ダンスドリル部 全国大会に出場
8. 短大、403教室の改修、学生ホール前花壇の改修
9. 短大 文化祭を3年ぶりに実施
10. 岡田日歸上人記念講堂 国の有形文化財（建造物）に登録

令和5年（2023）

3. 短大、304教室の改修
4. 清水海隆、第10代短期大学長に就任（～現在に至る）
4. 1 西 貴子、第2代保育園園長に就任（～現在に至る）
6. 芸術鑑賞会 新国立劇場バレエ「白鳥の湖」を鑑賞する
7. 学校間交流プロジェクトで北海道根室高等学校、沖縄県興南中学高等学校と交流を開始
8. 短期大学校舎の外壁塗装工事
現役政治家と高校生のトークセッションを実施
8. 中学ソフトボール部全国大会（香川県）で第3位となる
中学バレーボール部 全国大会（愛媛県）に出場
オーストラリアホームステイを4年ぶりに実施
12. 100周年記念ロゴマークを披露する

令和6年（2024）

6. 芸術鑑賞会 帝国劇場ミュージカル「ハリーポッター」を鑑賞する
7. 学校間交流プロジェクトに能登の輪島高等学校が加わり実施
水泳部 鈴木彪翔が全国総合体育大会、全国JOCジュニアオリンピックカップに出場
9. 14 高校男子バレーボール部 井上郁実が国民スポーツ大会（佐賀県）の東京都代表として選出

令和7年（2025）

4. ニュージーランドターム留学制度（3ヶ月）に2ターム（6か月）と1年間を追加
5. 短期大学校舎屋上ベランダの防水塗装工事

日本と世界の動き

臨時休校を要請

3. 24 7月に開幕予定の東京オリンピック・パラリンピックの延期を決定
7. 16 将棋の藤井颯太七段が最年少17歳11ヶ月で初タイトル獲得

令和3年（2021）

2. 17 新型コロナワクチン接種が国内ではじまった
7. 23 第23回夏季オリンピック東京大会の開幕式が新国立競技場で行われた

令和4年（2022）

4. 1 改正民法施行で成人年齢が20歳から18歳に下げられた
5. 15 沖縄の日本本土復帰50周年記念式典がおこなわれた
7. 8 安倍元首相が奈良市で応援演説中に銃撃され死去

令和5年（2023）

2. 21 2017年に上野動物園で誕生したジャイアントパンダ「シャンシャン」が中国に返還された
5. 8 新型コロナウイルスの感染法上位置づけが第2類から第5類へ移行
8. 26 世界陸上選手権大会の女子やり投げで北口榛花選手が金メダル獲得

令和6年（2024）

1. 1 石川県能登地方を震源とする M7.6の大地震が発生
2. 17 JAXA がH3ロケット試験機2号の打上に成功
7. 3 新紙幣が20年ぶりにデザイン変更となった
9. 2 気象庁は2024年の夏の全国平均気温が平年と比べ7.6度高く、1898年以降最も暑い夏となったことを発表

令和7年（2025）

1. 17 淡路阪神大震災から30年を迎え、兵庫県神戸市中央区で追悼式典が行われた
4. 13 大阪・関西万博が大阪市此花区の夢洲で開催された
7. 19 米大リーグイチロー選手が日本人初の殿堂入り

堀之内学園史

6. 芸術鑑賞会 青年劇場の演劇「いきたい場所をどうぞ」を鑑賞する
8. 岡田日歸上人記念講堂の整備事業を開始
中学女子バレーボール部 全国大会（長崎県）へ出場し準優勝
中学ソフトボール部 全国大会（大阪府）へ出場
9. カナダへの1年間留学制度を開始

日本と世界の動き

歴代理事長

初代	岡田 日歸上人	昭和元年12月28日～ 昭和6年11月15日
第二代	堀 日正上人	昭和6年7月1日～ 昭和32年11月24日
第三代	大塚 日大上人	昭和32年12月14日～ 昭和42年7月28日
第四代	小林 日誓上人	昭和42年7月28日～ 昭和51年3月17日
第五代	茂田井教亨上人	昭和51年5月25日～ 昭和59年5月25日
第六代	駒野 日法上人	昭和61年3月4日～ 平成16年3月31日
第七代	嶋田 日新上人	平成16年4月1日～ 平成26年3月31日
第八代	山田 日潮上人	平成26年4月1日～ 現在に至る

歴代学長

初代	藤井 教詮	昭和41年1月～ 昭和46年3月31日
第二代	岩本 経丸	昭和46年4月1日～ 昭和49年3月31日
第三代	庄司 寿完	昭和49年2月～ 昭和62年3月31日
第四代	石川 教統	昭和62年4月1日～ 平成元年3月31日
第五代	藤田 教忠	平成元年4月1日～ 平成3年3月31日
第六代	藤井 教正	平成3年4月1日～ 平成21年3月31日
第七代	坂輪 宣敬	平成21年4月1日～ 平成27年3月31日
第八代	工藤 教和	平成27年4月1日～ 平成31年3月31日
第九代	北川 前肇	平成31年4月1日～ 令和5年3月31日
第十代	清水 海隆	令和5年4月1日～ 現在に至る

歴代校長

初代	高嶋平三郎	昭和2年4月8日～ 昭和20年3月31日
第二代	堀 日正上人	昭和20年4月8日～ 昭和22年3月31日
第三代	馬田 即貞 (中学) (高校)	昭和22年4月1日～ 昭和40年3月1日 昭和23年3月16日～ 昭和40年3月1日
第四代	岩本 経丸	昭和40年4月1日～ 昭和46年10月5日
第五代	石川 教統	昭和46年10月8日～ 昭和62年3月31日
第六代	舩越 公道	昭和62年4月1日～ 平成10年3月31日
第七代	廣川 富男	平成10年4月1日～ 平成15年3月31日
第八代	山口 隆也	平成15年4月1日～ 平成20年3月31日
第九代	宮下 隆	平成20年4月1日～ 平成25年3月31日
第十代	澤田 幸雄	平成25年4月1日～ 平成31年3月31日
第十一代	梅沢 辰也	平成31年4月1日～ 現在に至る

歴代園長

初代	石田 幸子	平成30年4月1日～ 令和5年3月31日
第二代	西 貴子	令和5年4月1日～ 現在に至る

中学・高等学校教職員一覧

高島平三郎	S.2.4.8	校長	
岡 教逐	〃	教頭	
藤井 教詮	〃	幹事	
馬田 即貞	〃	幹事	
遠山 潮徳	〃	教諭	
木内 打魚	〃	〃	
渡邊 光徳	〃	〃	
藤田みつゑ	〃	〃	
松井かつ子	〃	〃	(旧 飯田)
岩本 翠	〃	〃	(旧 宮川)
大槻 徳子	〃	〃	
平田 貞子	〃	〃	
原 きみ恵	〃	〃	
塩塚 虎吉	〃	書記	
柴田 光子	S.3.4.8	教諭	
山田 経	〃	〃	
末永 かう	S.3.11.7	〃	
岡島 千代	S.4.4.7	〃	
野尻 八重	S.4.6.18	〃	
長坂 てる	S.4.9.6	〃	
西 周子	〃	〃	
藤谷みさお	S.4.9.13	〃	
笠間 トキ	S.5.1.17	〃	
藤田 志寿	S.5.4.5	〃	
粕谷 せき	〃	〃	(旧 古山)
佐合りつゑ	S.5.4.7	〃	
三谷 兵八	S.6.1.8	〃	
藤田 静子	S.6.2.10	〃	
塩沢 登以	S.6.4.6	〃	
小池賢三郎	〃	〃	
平城 徹子	〃	〃	
小澤 キ又	〃	〃	
藤本善四郎	〃	〃	
原島 照	S.6.4.6	職員	
宇部 妙子	〃	〃	
佐藤 金治	S.7.4.6	教諭	
四家 文子	〃	〃	
土肥やす江	〃	〃	
澤井やす越	S.7.1.11	〃	
高橋 重子	S.7.4.	職員	
山田 治子	S.7.5.16	教諭	
近藤 シゲ	S.8.4.1	〃	
斉藤 晴子	〃	〃	
相澤 よし	S.8.4.8	職員	

大島喜美代		職員
富永 親徳	S.9.4.1	教諭
澤 はる	S.9.4.29	〃
谷 アサコ	S.10.4.1	〃
中根喜の江	〃	〃
林 千枝子	〃	職員
山邊 教英	S.10.9.7	主事
鈴木 和子	S.11.4.1	職員
塚野 墨	〃	教諭
池田 イ子	S.12.4.6	〃
奥村 歓静	S.13.4.4	〃
西尾 喜美	S.13.9.5	〃
大島 継治	S.14.4.4	〃
熊倉登美子	〃	〃
橋本 行只	S.15.1.27	〃
種田美也子	〃	〃
稲葉 可吉	〃	〃
國芳 君子	〃	〃
岩尾 覚	〃	〃
堀田タマヂ	〃	職員
岩村 満	S.15.4.1	〃
若松ジュン子	S.15.4.4	教諭
星野 正之	S.15.6.1	〃
鹿島田恵子	S.15.9.2	〃
板澤三重子	〃	〃
大湯 則子	S.15.10.7	〃
松島 友次	S.15.12.2	〃
吉村 勇	S.16.4.1	〃
堀内トクイ	〃	〃
仁科 信子	〃	〃
清水 速女	〃	〃
野辺行十郎	S.16.4.4	〃
長谷川恵美子	〃	〃
大平 瑞恵	S.16.4.5	〃
藤井 一郎	S.16.4.26	〃
小越美恵子	S.16.9.1	〃
堀 浪次郎	S.16.9.1	職員
相沢寿美子	S.16.10.15	教諭
荒川キミエ	S.17.1.8	〃
赤山 暉樹	S.17.4.1	〃
玉木 文讓	〃	〃
渡辺 千代	〃	〃
吉田 安子	〃	〃
藤枝 文子	〃	〃

永瀬 房子	S.17.4.1	教諭	岡島 政一	S.23.4.5	職員	
土蔵 清子	S.17.5.11	〃	原田 剛介	〃	〃	
瀧井 チヨ	S.17.10.12	〃	中沢ミナ子	〃	〃	
小川ツヤ子	S.17.9.26	職員	岡部 房子	〃	〃	
海老原みち	S.17.11.1	教諭	数井 繁子	〃	〃	
大塚 哲子	S.17.12.1	〃	太田 勲	〃	〃	
三橋 棟城	S.18.4.1	〃	大阪 令子	S.23.5.1	〃	
高木幾三郎	〃	〃	廣瀬 貞見	S.23.9.7	〃	
川上 静子	〃	〃	竹村 生江	S.23.10.12	〃	(旧 平野)
小野田智子	〃	〃	芳賀 和美	S.24.4.5	〃	
梶 富貴子	〃	〃	野村 美代	〃	〃	
宮本 澄枝	〃	〃	染矢 陽	〃	〃	
角田 甲子	〃	〃	高瀬千恵子	〃	〃	(鈴木 改)
黒田 操	S.18.5.15	〃	小原 正泰	〃	〃	男子部
長 亮明	S.18.8.1	〃	茂田井教亨	〃	〃	〃
小野八重三郎	S.19.4.1	〃	石川 教統	〃	〃	〃
杉本 富子	〃	〃	遠藤 博	〃	〃	〃
窪田 豊子	〃	〃	駒野修三郎	〃	〃	〃
吉岡みどり	〃	〃	清水 良雄	〃	〃	〃
岩野 恵子	〃	〃	白井 明	〃	〃	〃
田中 久子	〃	〃	服部 陽一	〃	〃	〃
早川 教宏	S.19.6.1	職員、教諭	柳町 好弘	〃	〃	〃
船崎万寿子	S.20.3.26	教諭	高瀬 経久	〃	〃	〃
阪井 正行	S.21.2.4	〃	福田 靖夫	〃	〃	〃
矢野美登塁	S.21.4.1	〃	角田 堯栄	〃	〃	〃
北見 はる	〃	〃	綿谷 ヒサ	〃	職員	〃 (江刺 改)
稻垣 末武	S.21.4.12	〃	堀 教通	〃	〃	〃
今 栄雄	S.21.8.21	〃	酒見 充	〃	教諭	〃
安井 良雄	〃	〃	米田 多け	S.24.4.5	職員	
阪田 セツ	S.22.1.8	〃	金子 光男	S.24.4.14	〃	
大阪 貞慎	〃	〃	小佐原 恒	S.24.4.15	〃	
神達 喬純	〃	〃	玉木 貞譲	S.24.4.21	職員	男子部
福永 和子	S.22.4.1	〃	郷原 義久	S.24.4.30	教諭	〃
市川ミツ子	〃	〃	福原 栄一	S.24.6.6	〃	
橋本れい子	S.22.4.7	〃	大塚 道雄	S.24.8.27	〃	男子部
御供 豊	S.22.4.15	〃	滋田 勝見	〃	〃	〃
丹羽 菊枝	S.22.4.25	〃	加藤 馨	S.25.1.24	〃	〃
河野 岬	S.22.4.30	〃	古川 吉重	S.25.2.1	〃	
横山 瀧	S.22.5.1	〃	穂積タツエ	〃	〃	
神達 章子	S.22.5.5	〃	金子 光男	〃	〃	
中村 隆	S.22.8.21	〃	花本 初子	S.25.4.3	〃	
山口 繁	S.22.10.6	〃	有田 辰男	〃	〃	
遠山登志子	S.22.12.13	職員	井上 一	〃	〃	
今成 元昭	S.23.4.5	〃	笠井 寛	〃	〃	

中学・高等学校教職員一覧

赤川 堅蔵	S.25.4.3	教諭	
稲葉 和義	S.25.4.6	〃	
坂東 義教	S.25.4.24	〃	
土持 繁雄	S.25.8.21	〃	
澤中 節子	S.25.10.11	〃	
田辺 寿照	S.26.1.8	職員	男子
米沢 隆	S.26.4.3	教諭	
鈴木 こと	〃	〃	
川崎 静子	〃	〃	
大谷 旦	〃	〃	
丸 和夫	〃	〃	
岡崎 武司	〃	〃	
福寿 幸男	〃	〃	
島田 悦子	〃	〃	
榎本 敬子	〃	〃	
森 時人	〃	〃	
小倉 玄次	〃	〃	
佐藤 卓弥	S.26.4.7	〃	男子
綿本 友枝	S.26.4.11	〃	
田中 照子	S.26.4.16	〃	
塩田 武	S.26.10.4	〃	
遠山 博子	S.26.12.1	職員	
直村 静	S.27.1.9	教諭	
田村 泉	S.27.4.3	〃	
小林 見寿	〃	〃	
川端 祐輝	〃	〃	
笹部 達雄	S.27.4.4	〃	
井上 千歳	S.27.4.3	〃	
庄林満智子	S.27.4.4	〃	
時酒 満康	S.27.4.10	〃	男子部
荒川 好一	S.27.4.11	〃	
石川 洋子	S.27.4.21	〃	
後藤 五郎	S.27.5.6	〃	
高崎哲夫哉	S.27.5.9	〃	男子
原田 勉	S.27.5.27	〃	〃
森 ミキ	〃	〃	
長嶋 安男	S.27.9.22	〃	
佐藤信一郎	S.27.10.30	〃	男子
秋元武三郎	S.27.11.13	〃	〃
澤近 駿三	S.27.12.1	〃	〃
尾崎 明雄	S.28.2.2	〃	
竹越 紀子	S.28.4.10	〃	
犬伏 恵美	〃	〃	
鍋木由一郎	〃	〃	
浦上 義夫	S.28.4.20	書記	
長谷 恭助	S.28.4.18	教諭	
吉池 伸光	S.28.4.20	〃	
金井 ひで	〃	〃	
衣斐 博	〃	〃	
梅谷 昇	S.28.9.1	〃	
栃木 芳春	S.28.9.5	〃	
貝塚 邦	S.28.9.15	〃	
安食 正夫	S.29.4.1	〃	
岡本 和子	〃	〃	
柳沢 妥江	〃	〃	
窪田 恒治	〃	〃	
小川 光雄	S.29.4.8	〃	男子
舩越 公道	S.29.4.17	〃	
大野 君江	S.29.4.8	職員	
小倉 和代	S.29.6.1	職員	(旧 森下)
久喜寿之助	〃	職員	
佐藤 稔	S.29.9.25	教諭	
高田 毅夫	S.29.10.1	〃	
吉田 一夫	〃	〃	
土屋明四郎	S.29.11.1	〃	
森 ます子	〃	職員	
原田 和子	S.29.12.6	教諭	
田中真智子	S.30.4.1	〃	
斉藤依久子	〃	〃	
片野 卓	〃	〃	
宮川 龍也	S.30.5.1	〃	
徳江 宏	〃	〃	
宮下 淳久	S.31.4.1	〃	
太田 英子	〃	〃	
大越 礼子	〃	〃	
村松 孝治	S.31.11.1	職員	
石川 教統	S.32.4.1	教諭	
三宅 忠義	〃	〃	
矢崎 和代	〃	〃	
芦澤 昭夫	〃	〃	
中嶋 光尚	〃	〃	
正崎 睦美	〃	〃	(旧 岩田)
本郷 逕子	〃	〃	
金子 尚子	〃	〃	
福山 武勇	〃	職員	
坂井 ミホ	〃	教諭	
葛西 貴子	〃	〃	
長谷川浩美	〃	〃	

川植 昭子	S.32.10.31	教諭	
井上 謹次	〃	〃	
大越 礼子	〃	〃	
松浦 信雄	S.32.11.1	職員	
松浦たつ子	〃	〃	
佐々木重次郎	S.33.4.1	職員	
蜂谷 豊子	〃	〃	
田川アヤ子	〃	〃	
笹川 吉昭	〃	〃	
中村 匡男	〃	〃	(旧 小田川)
遠藤 悦子	〃	〃	(旧 赤松)
森田 頼子	〃	〃	
宮奈 栄	〃	〃	
梁瀬恵美子	〃	職員	
前田 翠	〃	〃	
秋葉キヨイ	〃	〃	
関 典子	S.33.10.1	〃	
井上 誠男	〃	教諭	
辻 功	〃	〃	
宮武夫美代	〃	〃	
平原 光雄	〃	〃	
高橋 俊昭	〃	〃	
榊田 裕巳	〃	〃	
名和千枝子	S.34.4.1	〃	
橋本 慶子	S.34.5.1	〃	
大貫 勝寿	〃	〃	
藍 安子	〃	〃	(旧 満田)
鯛谷 隆	〃	〃	
宇田川佳津子	S.34.6.1	職員	
高橋一二三	S.35.4.1	教諭	
江畑 浩二	〃	〃	
波多野 久	〃	〃	
山本 旬子	〃	〃	(旧 横塚)
山永 晶子	〃	〃	
中川百合恵	〃	〃	
小泉 明子	〃	職員	
佐藤 豊子	S.35.6.1	職員	
木場田マン	〃	〃	(旧 久子)
竹部 比佐	〃	教諭	
坂口 信子	S.35.9.1	〃	(旧 小林)
小野田ミチ子	S.36.4.1	〃	(旧 関)
高橋 美智	〃	〃	
住田 貞子	〃	〃	(旧 安藤)
吉武 保孝	〃	〃	

青山千紗子	S.36.4.1	教諭	
田中 信孝	〃	〃	
金井 秀	S.36.6.1	教諭、職員	
大津山国夫	〃	教諭	
篠 弥生	〃	職員	
秋山 武史	S.36.9.1	教諭	
中島 良子	S.36.10.1	〃	
秋谷テル子	S.36.12.1	職員	
木塚 昇治	〃	教諭	
中川 敦子	S.37.5.2	〃	
成沢 栄寿	〃	〃	
小林 良子	〃	〃	
宮田 尚	〃	〃	
伊藤 美子	〃	〃	
川崎多余子	〃	〃	
中野 幸一	〃	〃	
尾形 正矩	〃	〃	
山口 潮文	〃	職員	
免取慎一郎	S.37.6.18	教諭	
脇田 孝二	S.37.9.1	〃	
崎山 直	S.37.9.15	〃	
伴野 悦子	S.38.4.1	〃	
村川真知子	〃	〃	
西岡 澄子	〃	〃	
多田 恵子	〃	〃	
大山 和子	〃	〃	
奥野 和子	〃	〃	(旧 佐藤)
冲山 晴子	〃	〃	(旧 神谷)
内藤 利治	〃	〃	
岡田 幸子	〃	〃	
高坂 英子	〃	職員	
池田 晴美	〃	〃	
佐藤 稔	〃	教諭	
浅野 康子	S.38.4.15	職員	
福井 汐	S.38.4.20	教諭	
久松 千里	〃	〃	
小竹森保子	〃	〃	
遠藤 和子	〃	〃	
市城 直悦	S.39.4.1	〃	
小川 道也	〃	〃	
黒川 玲子	〃	〃	(旧 神宮)
岩松 真弓	〃	〃	
斉藤 恒	〃	〃	
佐藤 勲	〃	〃	

中学・高等学校教職員一覧

林 葉子	S.39.4.1	教諭	(旧 益山)
氏原 仁子	〃	〃	
山本智恵子	〃	〃	
中上 明子	〃	〃	(旧 関)
奥村 貴栄	〃	〃	
鬼原 郁枝	〃	〃	
小高芙美子	〃	〃	
平山 鈴子	S.39.10.1	〃	
池内 和子	S.39.11.10	〃	
岩本 経丸	S.31.4.1	〃	
山本 迎	〃	〃	
高木 裕子	〃	〃	
山口 隆也	〃	〃	
佐藤 宏美	〃	〃	(旧 望月)
山屋 瑛夫	〃	〃	
唐沢 邦子	〃	〃	
豊田かつ子	〃	〃	
黄 秋葉	〃	職員	
川崎 隆子	〃	〃	
根本 栄三	S.40.5.5	教諭	
岸 暁	〃	〃	
小泉あや子	〃	職員	
山岡多津子	S.40.5.6	〃	
徳永 幸子	S.40.10.1	〃	(旧 竹ノ内)
喜多川妙子	S.40.11.1	教諭	(旧 中原)
黒沢志津子	S.41.4.1	職員	
須藤 聡子	〃	〃	
岡庭真由美	S.42.4.1	〃	
物部 清三	S.42.5.1	教諭	
久保川きよ子	S.43.4.1	〃	
遠藤 良宏	S.43.10.1	〃	
小林恵美子	S.44.4.1	職員	
加藤 仁	S.46.4.1	教諭	
内野美津子	S.46.5.1	職員	
大滝 敏子	S.46.6.1	〃	
西森 源太	S.47.4.1	教諭	
廣川 富男	〃	〃	
高山 博	〃	〃	
永井 ヒサ	S.48.4.1	職員	
石橋千之助	S.48.5.1	〃	
岩谷 礼子	S.49.4.1	教諭	(旧 石沢)
浅野 正彦	〃	〃	
安江 裕子	〃	〃	(旧 福田)
平野裕美子	〃	〃	(旧 磯部)

本間 信雄	S.49.4.1	教諭	
宮下 隆	〃	〃	
上田 正敏	〃	職員	
船倉 美子	S.50.4.1	教諭	
原田 律子	S.51.4.1	〃	(旧 安倍)
田中真佐美	〃	〃	
今田 静子	〃	〃	
駒野 教洋	S.52.4.1	職員	
柿川 教男	S.53.4.1	教諭	
佐藤千賀子	S.55.4.1	職員	
穴戸恵美子	〃	〃	
鈴木みゆき	S.56.4.1	〃	
田島 京子	〃	〃	(旧 佐藤)
藤井 教戒	S.57.4.1	教諭	
楠原 節子	S.58.4.1	〃	
久保なをみ	〃	職員	
関根美知子	〃	教諭	
今井シヅ子	S.59.4.1	職員	
宇治川雅人	〃	教諭	
篠宮 敬子	〃	〃	
真柄 恒夫	〃	〃	
源田 雅明	S.60.4.1	〃	
鈴木 愛子	〃	〃	
和田 敏男	〃	職員	
島崎 美樹	S.60.9.1	〃	
稲尾 啓樹	S.61.4.1	教諭	
窪岡 克彦	〃	職員	
福井 雅江	S.62.4.1	教諭	
石川 伸也	〃	〃	
坂本 弓子	S.63.4.1	〃	
重枝佳理子	〃	〃	
藤井まり子	〃	〃	(旧 田村)
吉田 浩美	〃	〃	
川名 実	H.1.4.1	〃	
戸田 誠	〃	職員	
横澤 武	〃	教諭	
秋山 淳一	H.2.4.1	〃	
川辺 智仁	〃	職員	
鈴木 知子	〃	教諭	
高橋 真一	〃	〃	
天野 秀子	H.3.4.1	〃	
今成 元信	〃	〃	
小泉 岳司	〃	〃	
和気 百合	〃	〃	

多田恵理子	H.3.4.1	教諭
仁平井美枝	〃	〃
家中 太志	H.4.4.1	〃
岡村 ゆり	〃	〃
堀 恵美子	〃	〃
村田 隆一	〃	〃
伊藤真理子	H.5.4.1	〃
田子 卓子	〃	〃
中山 美帆	〃	〃
長谷川幸子	〃	〃
高橋久美子	H.6.4.1	〃 (旧 木村)
北島美弥子	H.7.4.1	〃
木下 道夫	〃	〃
福井 迪憲	H.7.12.1	職員
佐藤恵美子	H.8.4.1	教諭
黒濱 摩弥	H.10.4.1	〃
大槻 和宏	H.11.4.1	〃
内藤マリコ	〃	〃
加藤 啓吾	〃	〃
長谷川幸子	〃	教諭・司書
増子めぐみ	H.14.4.1	教諭
高松 寿郎	H.14.4.1	教諭
益田 春樹	〃	〃
村中 智	〃	〃
内山 満雄	H.15.4.1	〃
中澤 哲也	〃	〃
森信 亮一	H.16.4.1	〃
川邊 智仁	〃	職員
窪岡 淳一	H.17.4.1	〃
林 良枝	〃	〃
櫻井めぐみ	H.18.4.1	〃
溝口 勉	H.19.1.1	〃
原 剛史	H.19.4.1	教諭
門間 隆弘	〃	〃
武見 潮裕	〃	法人職員
清水 洋行	H.20.4.1	教諭
岩田 聡	H.22.4.1	〃
櫻井 尚司	H.22.4.24	職員
安原 正樹	H.24.4.1	教諭
大福 陽子	〃	養護教諭
沼田 早紀	H.25.4.1	教諭
森 茂	〃	職員
吉岡貴久子	〃	〃
原子 桂輔	H.26.4.1	教諭

今泉 博文	H.26.4.1	教諭
永島 謙一	〃	〃
富川 愛美	〃	養護教諭
坂野 靖	〃	職員
長谷川和己	H.27.4.1	教諭
佐藤 倫実	〃	〃
須永 悟	H.28.4.1	〃
清野慎太郎	〃	〃
水谷 鮎実	〃	〃
中丸 直也	〃	〃
乗附 良季	H.29.4.1	〃
朝烏いづみ	H.30.4.1	〃
長沼 陽香	〃	〃
高崎 和美	H.31.4.1	〃
二ッ森将真	〃	〃
小泉 卓	〃	職員 (ICT)
深田とし子	R.2.4.1	教諭
泉 智也	〃	〃
伴 亜弥菜	〃	〃
岩見 果歩	R.2.4.1	〃
峯尾 友輔	〃	〃
飯塚日向子	〃	職員 (司書)
佐藤 啓輔	R.3.4.1	教諭
乗川 岳	〃	〃
尾上 牧子	R.4.4.1	職員 (司書)
土井 武徳	R.4.9.1	職員
亀井 弥生	〃	〃
松本 和也	R.5.4.1	教諭
荒屋 陽子	R.6.4.1	〃
平澤 凌大	〃	〃
鈴木 瑠晟	〃	〃
金澤 央江	R.6.9.1	職員
金子真理子	R.7.4.1	教諭

短期大学教職員一覧

藤井 教詮	S41.4.1	学長	河井 芳文	S41.5.1	専任教員
岩本 経丸	S46.10.18	〃	田所南美子	S41.8.1	〃
庄司 寿完	S50.2.1	〃	串田志都子	S42.4.1	〃
石川 教統	S62.4.1	〃	平松 時賢	〃	〃
藤田 教忠	H元.4.1	〃	和田 忠蔵	〃	〃
藤井 教正	H3.3.30	〃	田島富美江	〃	〃
坂輪 宣敬	H21.4.1	〃	緑川 貞男	S44.4.1	〃
工藤 教和	H27.4.1	〃	黒田満里子	〃	〃
北川 前肇	H31.4.1	〃	古澤 常雄	S45.4.1	〃
清水 海隆	R5.4.1	〃	田所 政江	S46.4.1	〃
東 浩一郎	H14.4.1	教授	岡本 天晴	〃	〃
飯田 俊明	H17.4.1	〃	鍾 清漢	〃	〃
松本 明香	H18.4.1	〃	深沢 俊雄	S47.4.1	〃
有泉 正二	H22.4.1	〃	新川 靖子	〃	〃
前嶋 元	H27.4.1	〃	中村 弘道	〃	〃
鈴木 健史	H29.4.1	准教授	佐藤 秀一	S50.4.1	〃
横尾 瑞恵	H30.4.1	〃	紙谷 威廣	〃	〃
森田 ゆい	H31.4.1	〃	蔭山 友行	S51.4.1	〃
中山 恵	R6.4.1	〃	山田田津子	S53.4.1	〃
福田 綾	H30.4.1	講師	杉江 つま	〃	〃
新居 直美	R6.4.1	〃	杉本 豊久	S53.5.1	〃
倉持こころ	R3.4.1	助教	堀 教通	S55.4.1	〃
国分千沙子	S60.4.1	総務部	石川 教張	〃	〃
三富有美子	S63.4.1	広報部	桜井真理子	S61.4.1	〃
佐々木正人	H.3.4.1	企画運営	飯田 宮子	〃	〃
棟久 由佳	H20.9.1	教務部	中岡 典子	H2.4.1	〃
橋本知佳子	R2.4.1	学生部	鈴木 順子	〃	〃
山村砂栄子	R4.4.1	総務部	西脇 哲夫	H3.4.1	〃
米津 瑞穂	〃	図書館	伊原 睦子	〃	〃
中泉 友恵	〃	教務部	奥坊 光子	H5.4.1	〃
岩本 経丸	S41.4.1	専任教員	池田 祥子	H17.4.1	〃
大崎 隆	〃	〃	野田 淳子	〃	〃
山邊 吉也	〃	〃	三國 隆子	H19.4.1	〃
志賀 三重	〃	〃	原子 純	〃	〃
藤本 萬治	〃	〃	金 玟志	〃	〃
庄司 寿完	〃	〃	染山 教潤	〃	〃
近藤久美子	〃	〃	粕谷 亘正	H21.4.1	〃
中尾 堯	〃	〃	大竹 倫代	H22.4.1	〃
土居 淑子	〃	〃	池田 三鈴	H23.4.1	〃
小林 幹男	〃	〃	大浦 賢治	H23.4.1	〃
井口美登利	〃	〃	内田 智宏	H24.4.1	〃
太田 禎子	S41.4.1	〃	内田 裕子	H25.4.1	〃
ムーア和子	〃	〃	高林穂津美	〃	〃
神辺 靖光	S41.5.1	〃	奥泉 敦司	〃	〃

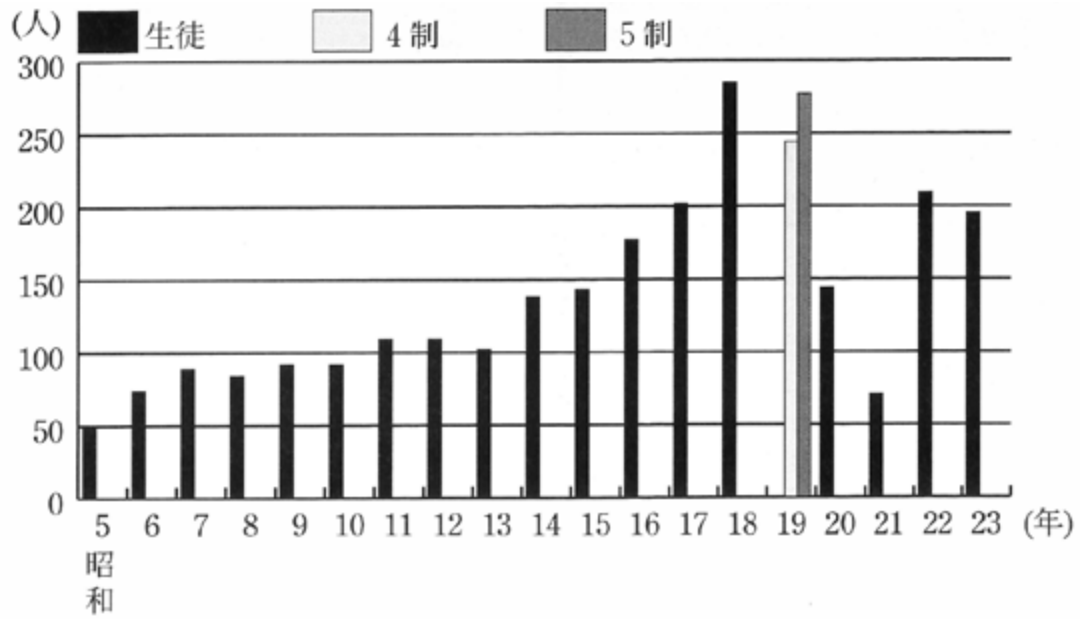
中島 智	H26.4.1	専任教員
池田 幸代	H27.4.1	〃
高橋 汐子	〃	〃
澁谷美枝子	H27.9.1	〃
須藤 麻紀	H30.4.1	〃
吉田 絢奈	〃	〃
福田 篤子	H31.4.1	〃
佐藤 要市	S41.4.1	職員
木原 通勝	〃	〃
辻井由里子	〃	〃
柴 佳子	〃	〃
兵庫谷 實	S41.5.1	〃
志村 龍雄	S41.10.1	〃
中山美津子	S42.4.1	〃
佐藤 稔	〃	〃
難波 幸子	〃	〃
高橋 郁子	S42.5.1	〃
淵上 雅子	S43.4.1	〃
横山 勝枝	〃	〃
長谷川三枝子	S44.4.1	〃
高野美代子	〃	〃
山辺 ハナ	S45.4.1	〃
福里 俊子	S46.4.1	〃
山本千恵子	〃	〃
尾形 和枝	S47.3.1	〃
関根美知子	〃	〃
江波 輝子	〃	〃
勝谷まり子	〃	〃
阿部かよ子	S48.3.1	〃
吉野 陽子	〃	〃
高野 節子	S49.4.1	〃
中村佳代子	S49.3.5	〃
堀 美代子	S50.4.1	〃
和田 園	S51.4.1.	〃
城取 寿子	S54.4.1	〃
鳥羽 信也	S54.4.6	〃
中川 匡子	S56.4.1	〃
工藤美登利	S56.4.1	〃
小林 豊子	S57.4.1	〃
武山 精志	〃	〃
小林 祐子	S58.4.1	〃
衣斐 博	S61.6.9	〃
中濃 哲夫	S63.4.1	〃
木下 幸子	H元.4.4	〃

荒井 壩	H元.4.20	職員
南波佐間名美	H2.8.1	〃
酒井 恭子	H2.8.20	〃
土岐 隆	H2.10.1	〃
池谷 要	H3.5.1	〃
黒崎 正範	H3.5.21	〃
中村 洋子	H3.9.1	〃
佐藤 正	H3.10.14	〃
国分 洋	H4.1.1	〃
梅寿 利朗	H4.4.1	〃
福岡 昌之	H8.4.1	〃
高橋こずえ	H8.4.1	〃
田代 安奈	H9.5.1	〃
鈴木 澄子	H9.10.1	〃
榮山 容子	H14.9.1	〃
西森 源太	H15.4.1	〃
宮崎 俊平	H18.4.1	〃
水藤 祥子	H26.4.1	〃
山下 晃嗣	H28.9.1	〃
山口 道義	H31.4.1	〃

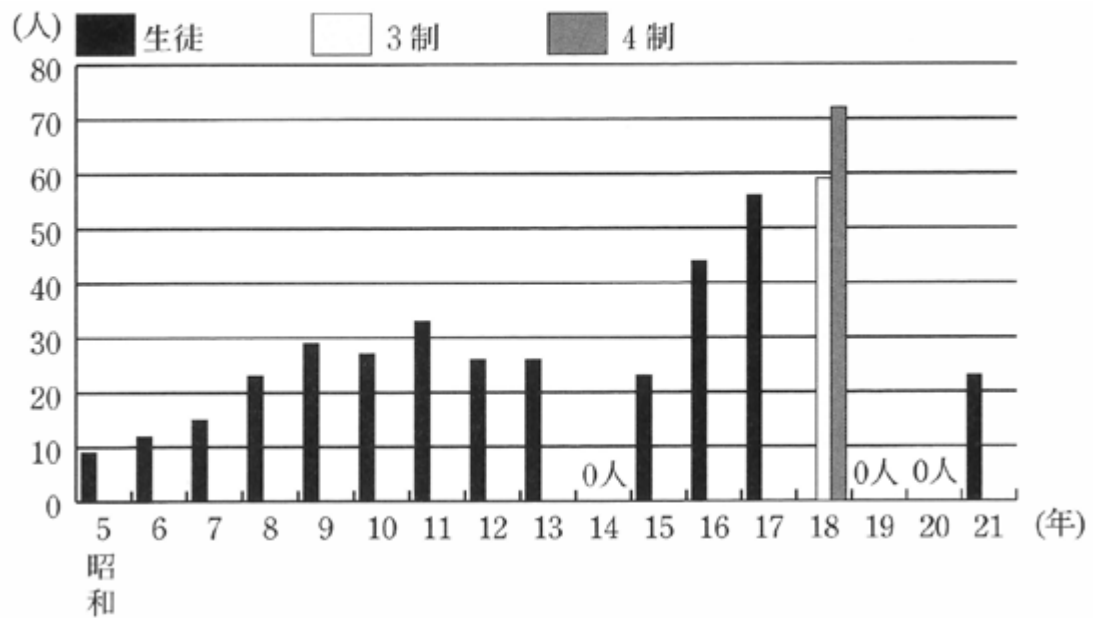
卒業生職員

淵上 雅子	S43.4.1
高野美代子	S44.4.1
長谷川三枝子	〃
山本千恵子	S46.4.1
福里 俊子	〃
尾形 和枝	S47.3.1
関根美知子	〃
江波 輝子	〃
勝谷まり子	〃
阿部かよ子	S48.3.1
吉野 陽子	〃
蓮見 節子	S49.4.1
中村佳代子	S49.3.5
堀 美代子	S50.4.1
和田 園	S51.4.1
城取 寿子	S54.4.1
中川 匡子	S56.4.1
工藤美登利	〃
小林 祐子	S58.4.1
笹森千沙子	S60.4.1
大石有美子	S63.4.1

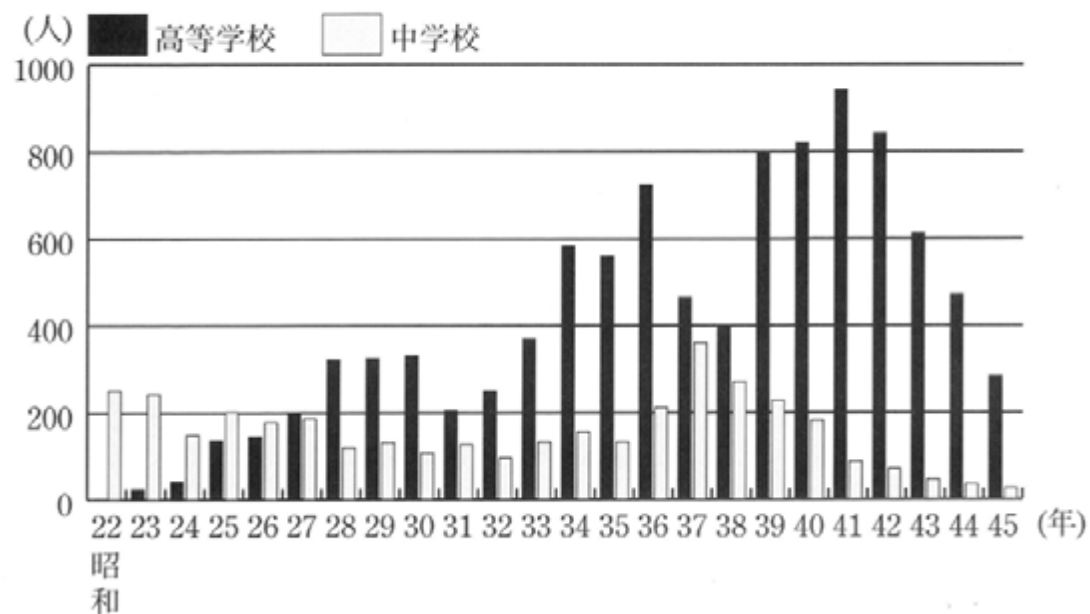
立正高等女学校



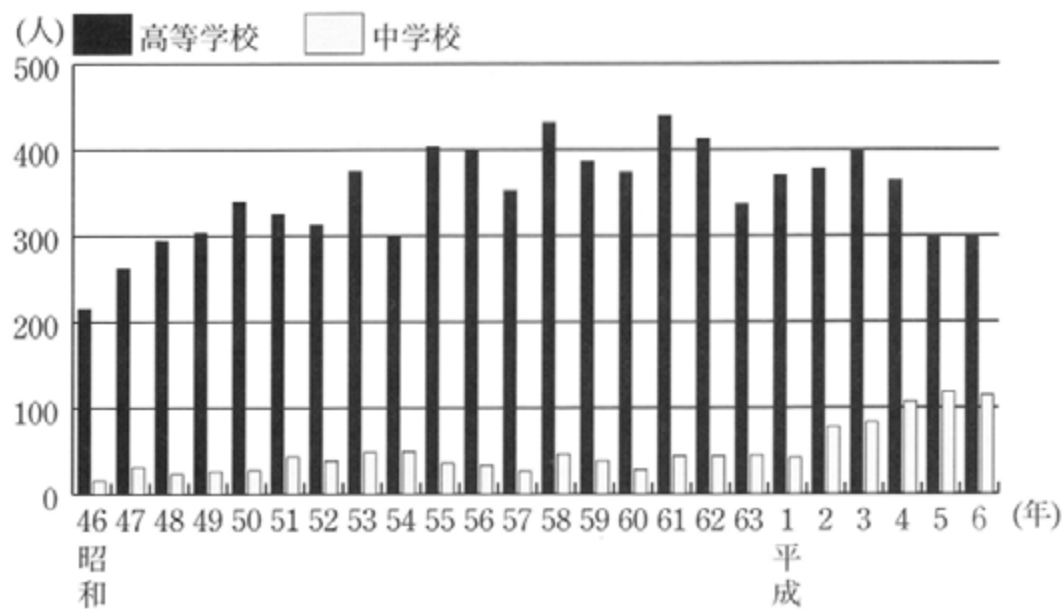
立正技芸専修女学校



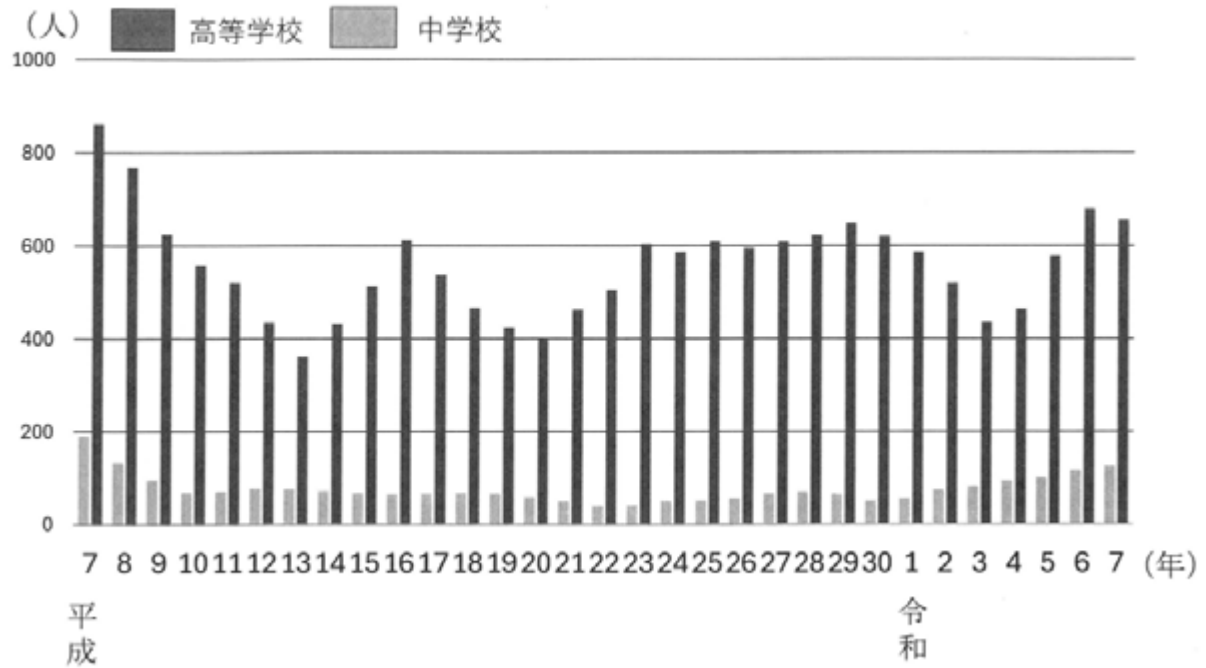
東京立正高等学校・東京立正中学校(1)



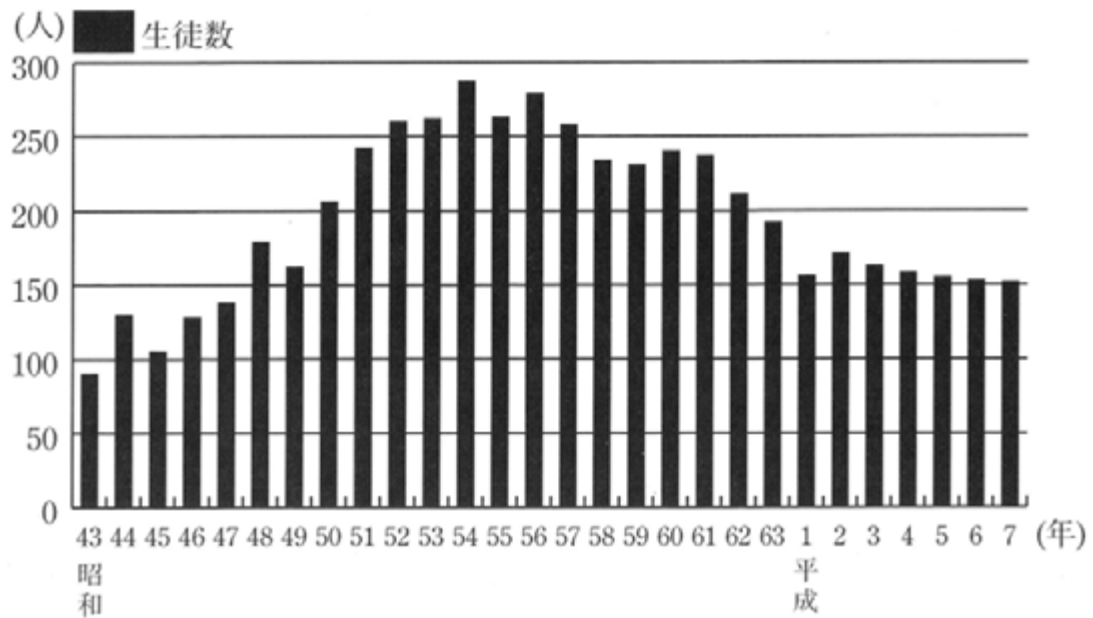
東京立正高等学校・東京立正中学校(2)



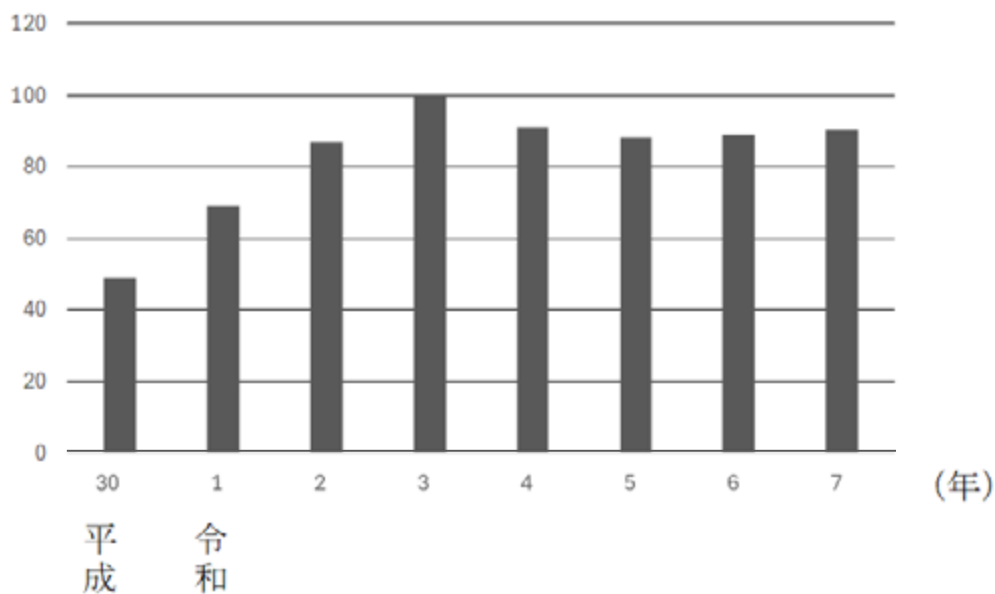
東京立正高等学校・東京立正中学校(3)



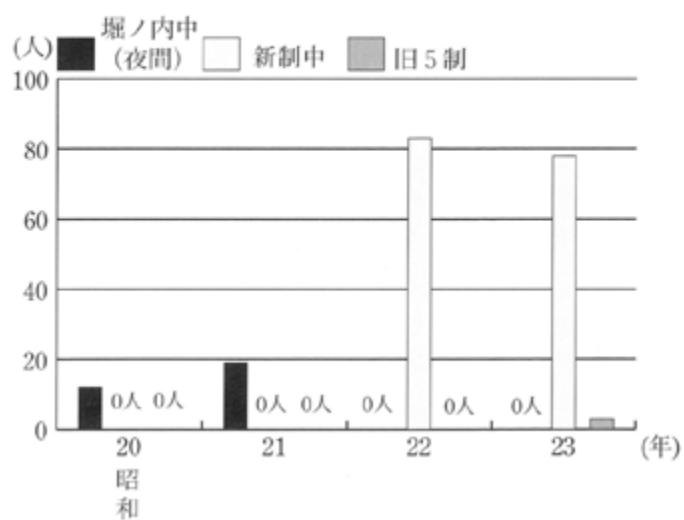
東京立正女子短期大学
東京立正短期大学



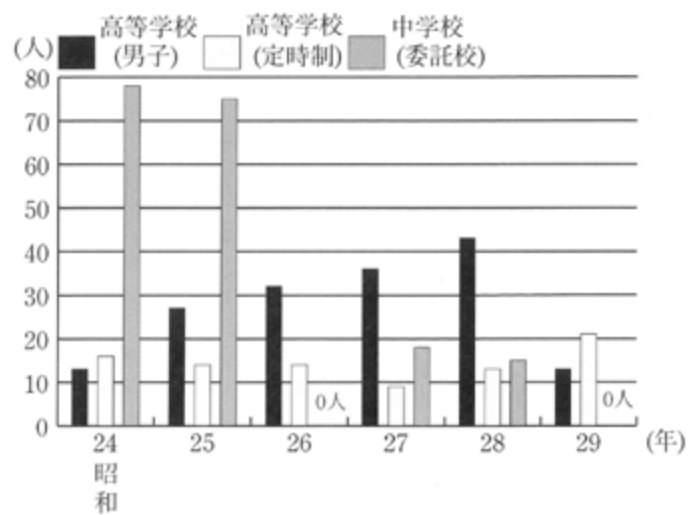
東京立正保育園



堀ノ内中学校・新制中学校・旧5年制中学校
(男子)



東京立正高等学校 (男子)
東京立正高等学校 (定時制)
東京立正中学校 (男子・委託校)



編集後記

『堀之内学園 東京立正の100年』をお届けいたします。堀之内学園創立100周年という節目にあたり、この記念誌を無事に発行できたことを、心よりうれしく思うとともに、本誌の編集・執筆にご尽力をいただきました多くの方々に対しまして、甚深の謝意を表します。

本誌の編集にあたっては、30年前の平成8年にまとめられた『東京立正の70年』（編集主幹・石川教張）の体裁を継承するとともに、その内容の多くを抄録させていただきました。また、古くは昭和15年、創立当時の関係者の多くがご存命中に紫友会編集部より発行された『創立十五周年記念誌』（発行人・馬田即貞）が大きな力となりました。これらの記念誌に収録されている文章を今一度精読する中で、堀之内学園の創立ならびに継続に尽力された多くの先達のご苦勞を改めて痛感いたしました。

本誌が、今後も引き続く少子化の波の中で、本学園の教育・保育が永続するための一助となることを願い編集後記といたします。

（編集委員長・清水 海隆）

「堀之内学園 東京立正の100年」編集委員会

委員長 清水 海隆（短大学長）

委 員 梅沢 辰也（中学高校校長） 真柄 恒夫（副校長）

横澤 武（教頭） 今成 元信

仁平井美枝 沼田 早紀

加藤 啓吾 中澤 哲也

原子 佳輔 荒屋 陽子

土井 武憲（事務長） 東 浩一郎（学科長）

有泉 正二（専攻課程長） 前嶋 元（専攻課程長）

笹森千沙子（事務長） 三富有美子

西 貴子（保育園長） 市川 由紀（主任）

100周年ロゴ 根津桜太郎（令和5年度東京立正高等学校卒業）

堀之内学園

東京立正の100年

発行日 令和8（2026）年4月28日

発行人 学校法人堀之内学園理事長 山田教周

編集 「堀之内学園 東京立正の100年」編集委員会

発行所 学校法人 堀之内学園

住 所 東京都杉並区堀ノ内2-41-15

電 話 03-3312-1101（法人本部）

